

生活復興調査

調査結果報告書

平成 17 年度

兵 庫 県

はじめに

この報告書は、阪神・淡路大震災からの10年目にあたる平成17年1月に実施した生活復興調査の結果をまとめたものである。この調査は、わが国の防災にとって新しい課題である復興過程について科学的に調査し、次の災害に備えることを目的としている。巨大な都市災害から立ち直ろうと努力してきた被災地の人々の努力を、生活復興の過程を中心に、その実態を継続的な調査によって明らかにしてきた。

幸いにも、震災復興に関して、こうした科学的な調査を継続的に実施することの重要性を兵庫県が認識した結果、この調査は、まず平成11年2月に、財団法人阪神・淡路大震災記念協会からの委託を受け、「震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査」として実施した。そして、隔年3回にわたる「生活復興調査」として、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部総括部復興企画課からの委託事業である第1回目を平成13年1月に、第2回目を平成15年1月に実施し、今回は、兵庫県県土整備部住宅復興局復興推進課からの委託事業として、震災10年目の平成17年1月に最終回の調査を実施した。

まったく同じ災害は二度と起きることはないだろう。しかし、阪神・淡路大震災からの生活復興に際して被災地の人々がとった行動は、次の災害場面でも、また別な形で発現するはずである。さらに、阪神・淡路大震災の教訓は、今後も活かすことが可能である。とくに、今回の調査では、調査時点で被災地の人々がいかに生活復興感を科学的に測定することに主眼をおき、その規定因として「すまい」「人と人とのつながり」「まち」「そなえ」「こころとからだ」「くらしむき」「行政とのかかわり」という生活再建の7要素のかかわりについて分析した。さらに、今回の調査では、これまでの調査を継続し、平成13年から17年にかけての変化を追跡するとともに、新たに生活復興の基底になる生活再建過程について検討を行った。

本調査の実施にあたっては、調査の企画と実施を京都大学防災研究所巨大災害研究センターが担当したが、調査設計から最終報告書の作成までの全過程を、同志社大学立木茂雄教授、奈良女子大学大学院野田隆教授、京都大学防災研究所矢守克也助教授、京都大学防災研究所牧紀男助教授、防災科学技術研究所地震防災フロンティア研究センター堀江啓研究員、名古屋大学災害対策室木村玲欧助手、京都大学防災研究所巨大災害研究センター田村圭子研究員からなるチームを編成して活動してきた。調査の実査は、今回もハイパーリサーチ株式会社の浦田康幸さんに全面的にご協力いただいた。

また、兵庫県復興推進課の松久士朗氏の忍耐強い全面的なご協力がなければ、この調査が実施できなかったことを記して、謝意を表したい。

被災者の生活復興に関する知見を、兵庫県において復興10年に至るまで継続的に収集・蓄積し、次世代に向かって発信することができた。こうした地道な努力の積み重ねが、今後の大規模災害からの減災・復興対策の一助となることを切に願う。

平成18年3月

京都大学防災研究所 教授
林 春男

目 次

調査概要

第 1 章 調査のフレーム	
1．調査目的	1
2．調査概要	1
3．回収状況及び回答者特性	5
4．被害実態	8
5．検定結果	10
第 2 章 調査結果のポイント	11

調査結果（2005 年調査）

第 1 部 平成 17 年 1 月時点での復興のようす

第 1 章 都市の再建	
1．すまいの再建	19
2．まちの再建	38
第 2 章 経済の再建	
1．くらしむきの変化（家計簿調査）	43
2．震災による仕事への影響	55
第 3 章 生活の再建	
1．生活復興カレンダー	61
2．震災体験に対する意識	64
3．こころとからだの変化	65
4．つながりの変化	70
5．行政とのかかわり	80
第 4 章 将来の災害に対するそなえ意識の変化	
1．被害の予測	83
2．自助・共助・公助への態度	89

第2部 生活復興感

第1章	生活復興感尺度の結果	96
第2章	生活復興感を規定する生活再建課題	
	1. すまい	100
	2. 人と人とのつながり	102
	3. まち	106
	4. そなえ	108
	5. ところとからだ	109
	6. 暮らしむき	110
	7. 行政とのかかわり	111
第3章	地域や職業による生活復興感の違い	
	1. 地域による違い	113
	2. 職業による違い	114

第3部 統合的な生活復興モデル(2005年モデル)の構築

1. 生活復興過程要因の分析	115
2. 生活復興過程要因と生活復興感との関係	121
3. 統合的な生活復興モデルの構築	125
4. 生活復興支援施策のあり方への提案	132

パネル調査結果(2001年・2003年・2005年調査)

第1章	パネル調査の目的	135
第2章	分析の方法	136
第3章	分析結果	138

基礎資料

1. 質問文及び単純集計	153
2. 用語説明	211

調査概要 編

第1章 調査のフレーム

1. 調査目的

本調査は、阪神・淡路大震災復興フォローアップの一環として、被災地の住民を対象に継続的な定点観測を行い、被災地の生活復興の実態を明らかにするとともに、復興施策が個人や世帯の生活に与える影響等を分析することを目的としたものである。

2. 調査概要

調査企画・実施	：兵庫県、京都大学防災研究所
調査地域	：神戸市全域、神戸市以外の兵庫県南部地震震度7地域及び都市ガス供給停止地域
調査対象者	：上記地域在住の成人男女
調査法	：層化2段抽出法（330地点 各地点10名）
標本抽出	：住民基本台帳からの確率比例抽出 （2001年、2003年調査との重複者はない）
調査数	：3,300名 （調査地域内総人口2,530,672人<平成12年国勢調査>の0.13%）
調査方法	：郵送自記入・郵送回収方式
調査実施期間	：平成17年1月14日調査票発送開始、同年2月4日有効回収締切 注）回収状況・回答者特性は「3. 回収状況及び回答者特性」を参照

1) 調査手法

調査地域は、神戸市全域と、被害が甚大であった兵庫県南部地震震度7地域及び都市ガス供給停止地域（参考1）である。

神戸市、尼崎市、明石市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、猪名川町、津名町、淡路町、北淡町、一宮町、東浦町
（8市6町、市町名は震災当時の名称）

調査法は層化2段抽出法を用いた。具体的には、調査地域から無作為に330地点を抽出し、次に各地点の住民基本台帳から、1世帯から1人が抽出されるように、10人ずつ確率比例抽出を行った。また男女比がほぼ同じになるように、各世帯から個人を抽出した。このような方法で、3,300人を調査対象者として決定した。

調査方法は、郵送自記入・郵送回収方式である。

調査期間は、2005年1月14日に調査票発送を開始し、2月4日に回収を締め切った。なお、2005年1月下旬時点で質問紙が回収されていない全調査対象者に対し、ハガキによる督促を行った。

(参考1) 都市ガス供給停止地域(兵庫県のみ)

神戸市の一部

東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区の全域

須磨区のうちつぎの地域を除く全域

(除かれる地域:高倉台、横尾団地、名谷団地、落合団地、白川台、
緑ヶ丘、友が丘、神の谷、若草町)

垂水区のうち神和台を除く地域

西区のうち西神ニュータウン、西神南ニュータウン、学園都市などを除く南部地域、

北区のうち唐櫃台団地、有野台団地、東有野台、花山台、東大池団地、
西大池団地、南五葉、大池見山台

芦屋市の全域

伊丹市の一部(中野西、池尻)

川西市、伊丹市の各一部(各市のうち国道176号線以北)

宝塚市の一部(国道176号線以南および武庫川以西)

西宮市のうち山口町、すみれ台、北六甲台を除く全域

明石市のうち明石川以東の全域

猪名川町の全域

尼崎市の一部(立花町、大西町、尾浜町、三反田町、築地本町、築地中通、
築地北浜、築地南浜地区、東本町、南塚口、常松)

2) 主な調査内容

前々回調査(2001年調査)

2001年調査では、被災者の生活復興に対する認識(生活復興感)を、日々の生活の充実度、現在の生活の満足度、1年後の生活の見通しで測った。震災によって大きな変容を迫られた社会の中で、市民がさまざまな生活の変化にうまく適応して生活に満足を得ることが、すなわち生活復興であると考えたからである。さらに、この生活復興感を規定する要因について、「すまい、人と人とのつながり、まち、こころとからだ、そなえ、くらしむき、行政とのかかわり」の生活再建課題7要素を仮説として用いて、生活復興感との関連を検証し、「生活復興感を規定する要因モデル」を構築した。(参考文献4)参照)

前回調査(2003年調査)

2003年調査では、被災地に暮らす一人ひとりの生活復興がどこまで進んだのか、被災者自身はそれをどのように認識しているのかといった点を中心に、震災後の時間経過の移り変わりを考慮(参考2)しながら、1)被害の状況、2)避難場所と期間、3)家族関係に関する意識の変化、4)人間関係の変化、5)市民意識の変化、6)現在のこころとからだの適応度、7)仕事の変化および現在の家計簿、8)現在の生活の満足度などについて、2001年調査結果と比較しながら分析した。

また、ライフイベント(きわめて重大な人生のできごと)に関する社会学や心理学の研究を参考にしながら、被災者の震災直後から現在に至るまでの「生活復興過程」の分析(概念化)を行うとともに、生活再建課題7要素、生活復興過程要因、生活復興感(アウトカム指標)という諸要因間の構造的な関係の解明を試みた。(参考文献5)参照)

今回調査（2005年調査）

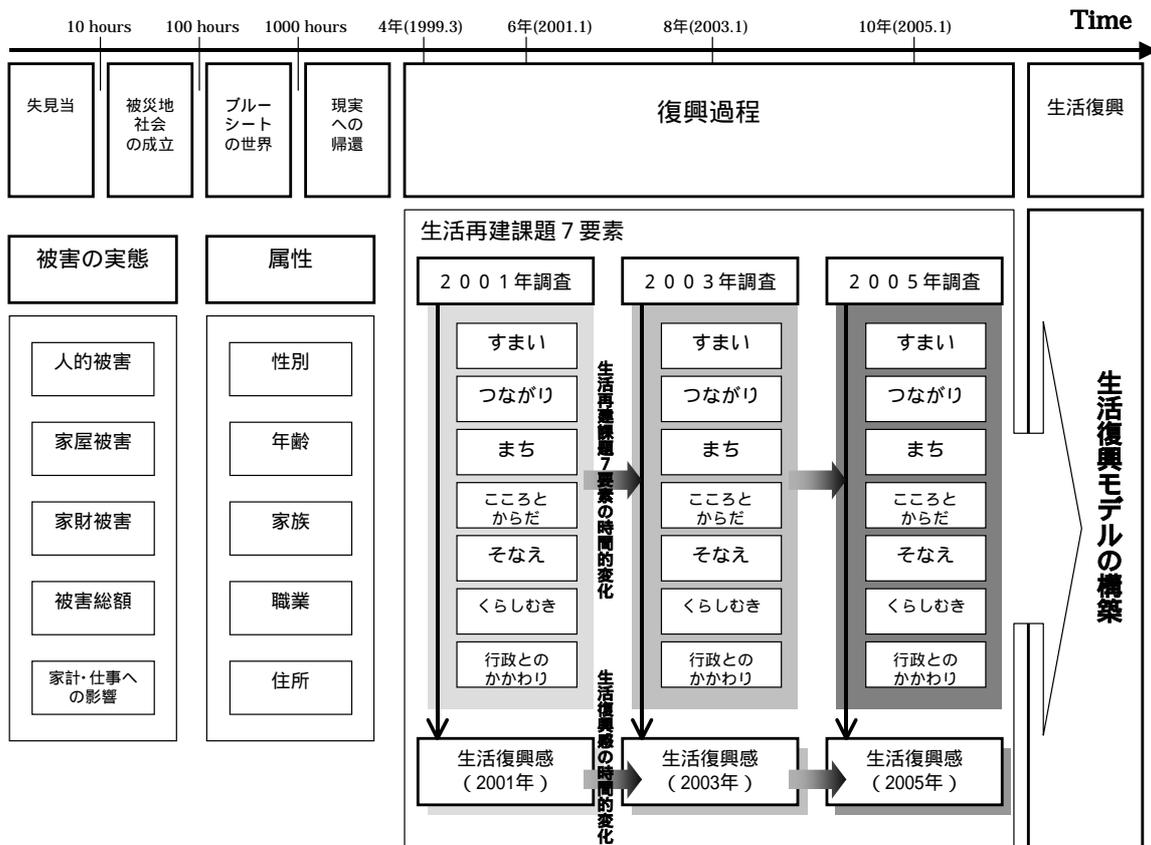
2005年調査では、2003年調査で尋ねた項目を基本的に踏襲しながら、前回から2年が経過するなかで、被災地に暮らす一人ひとりの生活復興がどこまで進んだのか、被災者自身はそれをどのように認識しているのかといった点を中心に分析した（参考2）。

また、今回は、前回調査から導入した被災者の時系列的な生活復興過程の分析（生活復興カレンダー）について、新たな項目を追加することによって、被災者の10年間にわたる全体的な生活復興過程を明らかにすることを試みた。

さらに、被災者の震災体験に対する意識や今後の地震への備え意識などについても分析することによって、この10年間の被災者の生活復興の全容の解析を試みた。

あわせて、今回は、これまで2001年、2003年、2005年と3回にわたって実施した生活復興調査において継続して回答した297名について詳細な分析を行い、被災者の長期的な生活復興のメカニズムの解明を試みた（パネル調査分析）。

（参考2）震災後の時間経過等を考慮した調査設計の概念図



(注)災害発生後の社会のようすは、時間経過とともにさまざまに移りかわっていくことが、阪神・淡路大震災を対象とした調査から明らかになっている。本調査では、阪神・淡路大震災を対象とした調査で明らかになった3つの社会の転換点を分析に活用した。

3つの社会の転換点とは「震災後10時間(震災当日)」「震災後100時間(震災後2-4日間)」「震災後1000時間(震災後2ヶ月頃)」である。

これら3つの時間軸によって分けられる4つの社会のようすは、「失見当：震災の衝撃から強いストレスを受け、身体的精神的に変調をきたしている時期」「被災地社会の成立：震災によるダメージを理性的に受け止め、新しい現実が始まったことを理解する時期」「ブルーシートの世界：震災による一時的な社会が完成し、人々がその中で活動する時期」「現実への帰還：ライフラインなどの社会のフローシステムの復旧により、一時的な社会が終息に向かい、人々が生活の再建に向け動き出す時期」の4つのようすである。

参考文献

- 1) 石塚智一・渡部洋・芝祐順(編)：統計用語辞典，新曜社，1984
- 2) 林春男(編)：震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査 京都大学防災研究所巨大災害研究センター・テクニカルレポート，1999-01，1999
- 3) 兵庫県(編)：震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査，2000
- 4) 兵庫県(編)：生活復興調査(平成13年度)，2002
- 5) 兵庫県(編)：生活復興調査(平成15年度)，2004
- 6) 青野文江他：阪神・淡路大震災における被災者の対応行動に関する研究～西宮市を事例として～，地域安全学会論文報告集，No.8，pp.36-39，1998
- 7) 田中聡他：被災者の対応行動にもとづく災害過程の時系列展開に関する考察，自然災害科学，18(1)，pp.21-29，1999
- 8) 木村玲欧他：阪神・淡路大震災後の被災者の移動とすまいの決定に関する研究，地域安全学会論文集，No.1，pp.93-102，1999

3 . 回収状況及び回答者特性

1) 回収状況

調査票送付数は 3300 票、回答総数は 1161 票（回答率 35.2%）であった。

そこから、白紙、未記入・誤記入多、年齢・性別・住所未記入票を除外した。

また、本調査では、被災者を「震災時兵庫県内在住者」と定義しているため、震災時に兵庫県外にいた人も分析対象から除外した。

その結果、最終的な有効回答数は、1028 票（有効回答率 31.2%）であった。

	合 計	男性	女性
有効回答数	1028	453	575
有効回答率	31.2		

有効回答数の単位は人、有効回答率の単位は%

2) 回答者特性

回答者の性別、年代、現在の家族人数、現在の住所、現在の住居形態、現在の職業の各項目について、性別(男性、女性)、年代別(20・30代、40・50代、60代以上)で、特性の差を明らかにした。

性別 × 年代

回答者の性別は、男性は 44.1%、女性は 55.9%であった。

性別と年代をみると、男性は 60代が最も多く（全体の 13.7%）、女性も 60代が最も多かった（全体の 15.0%）。

	合 計	男性	女性
合計	100.0	44.1	55.9
20～29歳	7.5	3.3	4.2
30～39歳	9.0	3.4	5.6
40～49歳	11.3	5.0	6.3
50～59歳	20.7	7.4	13.3
60～69歳	28.7	13.7	15.0
70歳以上	22.7	11.3	11.4
平均年齢 (歳)	56.95		

単位：%

現在の家族人数

回答者の現在の家族人数は、平均 2.9 人で、2、3 人の世帯が多かった。

性別でみると、男性より女性の方が、単身世帯が多かった。

年代別でみると、20 代～50 代の家族人数は 3、4 人が多いが、60 代以上は 2 人が多かった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
単身世帯	8.1	5.3	10.3	4.7	5.2	11.0
2人	35.8	39.7	32.7	11.8	19.7	53.6
3人	25.3	24.7	25.7	30.0	30.3	20.6
4人	16.1	15.9	16.3	31.2	24.2	6.3
5人	8.7	9.1	8.3	14.7	13.6	3.6
6人以上	5.3	5.1	5.4	7.5	5.8	4.2
無回答	0.8	0.2	1.2	0.0	1.2	0.8

単位：%

現在の住所

回答者の現在住所の内訳は、下表のとおりである。

西宮市、西区の回答者は、20・30 代の比率が高かった(西宮市 15.3%、西区 14.1%)、
灘区、長田区の回答者は、20・30 代(どちらも 3.5%)に比べ、60 代以上(灘区 7.0%、
長田区 6.6%)が多かった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1. 神戸市 中央区	4.7	5.3	4.2	5.9	4.2	4.5
2. 灘区	5.1	5.1	5.0	3.5	2.7	7.0
3. 東灘区	5.8	6.4	5.4	3.5	6.7	6.1
4. 兵庫区	4.3	4.9	3.8	6.5	3.6	4.0
5. 長田区	5.7	4.9	6.4	3.5	5.5	6.6
6. 須磨区	9.8	9.3	10.3	8.8	10.9	9.5
7. 垂水区	8.4	8.2	8.5	9.4	9.4	7.4
8. 西区	10.1	9.9	10.3	14.1	13.3	6.8
9. 北区	9.9	9.5	10.3	7.6	12.1	9.3
10. 西宮	15.3	15.5	15.1	15.3	13.0	16.7
11. 芦屋市	3.4	4.0	3.0	4.1	3.0	3.4
12. 明石市	3.8	3.3	4.2	2.4	3.9	4.2
13. 宝塚・川西市	8.2	8.2	8.2	7.1	7.0	9.3
14. 伊丹・尼崎市	2.1	2.9	1.6	3.5	2.4	1.5
15. 猪名川町	0.9	0.9	0.9	0.6	0.9	0.9
16. 淡路	2.5	2.0	3.0	4.1	1.2	2.8
17. 無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

単位：%

現在の住居形態

回答者の現在の住居形態をみると、持地持家の比率が56.4%と最も多かった。

	合計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.持地持家	56.4	56.1	56.7	50.0	55.2	59.3
2.分譲集合住宅	18.2	19.0	17.7	22.7	21.8	14.9
3.公団・公社	3.4	3.6	3.3	2.4	2.1	4.5
4.公営	6.4	6.8	6.1	4.7	5.8	7.4
5.社宅	1.1	0.4	1.6	2.4	2.1	0.0
6.借地持家	4.3	4.9	3.8	1.2	4.2	5.3
7.借家	2.7	2.6	2.8	1.8	2.4	2.4
8.民間賃貸集合住宅	5.8	5.1	6.4	14.1	4.8	4.8
9.その他・無回答	1.6	1.5	1.5	1.6	1.5	1.5

単位：%

現在の職業

回答者の現在の職業の内訳は、下表のとおりである。

全体の有職率は47.7%（男性56.0%、女性40.3%）であった。

*「有職者」とは、全体から、「16.年金・恩給生活者」「17.専業主婦」「19.学生」「20.無職・その他」「21.無回答」と回答した人を除いた人々である。

	合計	男性	女性	20・30代	30・40代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.研究・技術職	1.9	3.8	0.5	2.9	3.6	0.6
2.教員	1.2	0.7	1.6	0.6	2.7	0.4
3.保険医療従事者	1.7	0.9	2.3	5.3	0.6	1.1
4.弁護士・税理士などの専門職	0.5	1.1	0.0	0.0	0.6	0.6
5.自由業	1.9	2.0	1.9	3.5	0.9	2.1
6.管理職の公務員(課長以上)	0.3	0.7	0.0	0.0	0.6	0.2
7.一般の公務員	2.3	4.4	0.7	3.5	3.6	1.1
8.会社・団体等の役員	3.1	5.5	1.2	2.4	3.9	2.8
9.会社・団体等の管理職(課長以上)	4.2	9.1	0.3	1.2	10.0	1.5
10.一般事務従業者	3.7	2.2	4.9	10.0	4.5	1.1
11.店員・外交員等のサービス業の従業者	4.8	5.7	4.0	13.5	5.2	1.7
12.運輸・通信の現場従業者	1.3	2.6	0.2	0.6	3.0	0.4
13.製造・建設業の現場従業者	3.0	6.0	0.7	6.5	3.9	1.3
14.自営・商工経営者	6.9	10.6	4.0	2.9	8.5	7.2
15.農林業者	0.5	0.9	0.2	0.6	0.6	0.4
16.年金・恩給生活者	12.1	16.8	8.3	0.0	0.3	23.3
17.専業主婦	17.0	0.0	30.4	10.6	20.3	17.0
18.パート主婦	9.9	0.0	17.7	6.5	20.0	4.7
19.学生	2.1	2.2	2.1	12.9	0.0	0.0
20.無職・その他	21.0	24.3	18.4	15.3	6.7	31.8
21.無回答	0.6	0.7	0.5	1.2	0.3	0.6

単位：%

4 . 被害実態

回答者の被害実態について、「家族被害」「家屋被害」「家財被害」「被害額の年収に対する割合」を分析した。

家族被害

家族被害をみると、家族が死亡した人は0.7%、入院した人は1.9%、軽いケガや病気をした人が16.7%、被害なしが73.6%であった。

	合計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1. 死亡家族あり	0.7	0.4	0.9	0.6	1.2	0.4
2. 入院傷病者あり	1.9	2.0	1.9	2.4	2.1	1.7
3. 軽傷病者あり	16.7	17.0	16.5	16.5	17.0	16.7
4. 被害なし	73.6	76.4	71.5	75.9	76.7	71.0
5. 無回答	7.0	4.2	9.2	4.7	3.0	10.2

単位：%

家屋被害

家屋被害をみると、全壊全焼世帯が15.2%、半壊半焼世帯が19.9%、一部損壊世帯が45.2%、被害なしが19.4%であった。

	合計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1. 全壊	14.0	13.2	14.6	8.2	9.4	18.8
2. 全焼	1.2	1.5	0.9	1.2	0.9	1.3
3. 半壊	19.3	21.4	17.6	21.2	18.2	20.3
4. 半焼	0.6	0.0	1.0	0.6	0.6	0.6
5. 一部損壊	45.2	43.0	47.0	46.5	51.5	40.9
6. 被害なし	19.4	20.1	18.8	22.4	19.7	18.2
7. 無回答	0.4	0.7	0.2	0.0	0.3	0.6

単位：%

家財被害

家財被害をみると、家財が全部被害を受けた人は 11.8%、半分被害を受けた人は 25.8%、軽い被害を受けた人は 51.6%、被害なしは 8.9%であった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.全部被害を受けた	11.8	11.9	11.7	8.8	8.8	14.6
2.半分被害を受けた	25.8	26.5	25.2	24.7	22.1	28.4
3.軽い被害を受けた	51.6	49.9	52.9	55.3	58.8	45.8
4.被害なし	8.9	9.7	8.3	9.4	9.4	8.5
5.無回答.わからない	2.0	2.0	1.9	1.8	0.9	2.6

単位：%

被害額の年収に対する割合

被害額の年収に対する割合をみると、被害額が年収の 10%未満の人は 36.2%であった。また、年収と同程度(100%)以上の被害を受けた人は 16.9%であった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.300%以上	7.9	8.6	7.3	7.1	4.2	10.4
2.200-300%	3.7	4.9	2.8	2.4	4.2	3.8
3.100-200%	5.3	5.5	5.0	5.9	4.8	5.3
4.70-100%	5.0	4.9	5.0	0.6	3.3	7.4
5.50-70%	6.7	5.7	7.5	4.1	6.1	8.0
6.30-50%	11.7	14.6	9.4	7.6	10.6	13.6
7.10-30%	20.5	18.3	22.3	20.0	23.9	18.6
8.10%未満	26.4	26.0	26.6	35.3	32.7	19.5
9.被害なし	9.8	9.3	10.3	11.2	9.7	9.5
10.無回答	3.1	2.2	3.8	5.9	0.3	4.0

単位：%

5 . 検定結果

前回の 2003 年調査との継続性が統計的に有効であるかどうかを、カイ自乗検定 (pearson のカイ自乗検定) という統計手法によって検定 (統計的仮説検定) した。

検定項目は、性×年齢・職業・住所・身体被害・建物被害の 5 アイテムであり、これらについて、前回調査との間に大きな差異があるかどうかを検定した結果が下表である。

これによると、両調査間の性別×年齢については、若干の統計的な有意差 (漸近有意確率が 1%以下の有意な水準。数字が小さくなるほど、大きな差異がある。) が見られるものの、職業、住所、身体被害、建物被害については、両調査間での差異は小さく、全体として、前回調査との継続性については、問題はないと考えられる。

(2005年調査 n=1028、2003年調査 n=1203)			
	Pearsonのカイ自乗値	自由度	漸近有意確率 (両側)
性×年齢	26.354	11	0.006 **
職 業	6.946	6	0.329
住 所	7.864	15	0.647
身体被害	1.655	3	0.647
建物被害	3.152	3	0.369

5% : *
1% : **
0.1% : ***

Pearson のカイ自乗値 : カイ自乗分布 (あるものの集合の中で、特定の変数の値がどのようになっているかの相対的様相の分布) を用いて分析した度数

漸近有意確率 : 同じような調査を行った場合に全く違う結果になる危険率。通常、危険率を 5% (=0.05) に許容しており、ある調査結果に基づく危険率 (有意水準) が 5% 以下の場合、統計的に有意な差があったと判断される。

なお、本調査結果については、検定が可能な結果又は検定が必要な結果については、すべて検定を行った。

第2章 調査結果のポイント

1. 平成17年1月(2005.1)時点での復興のようす

まちの復興

まちの復興が進んでいると感じている人の割合が増加しており、被災者のまちの復興に対する認識は着実に高まっている。

まちの復興が進んでいると感じている人の割合(「かなり速い」+「やや速い」+「ふつう」)		
前々回：80.6% (2001.2)	前回：82.0%(+1.4ポイント) (2003.1)	今回：83.9%(+1.9ポイント) (2005.1)

地域の夜の明るさについて「震災前より明るくなった」と感じている人の割合が増加している。

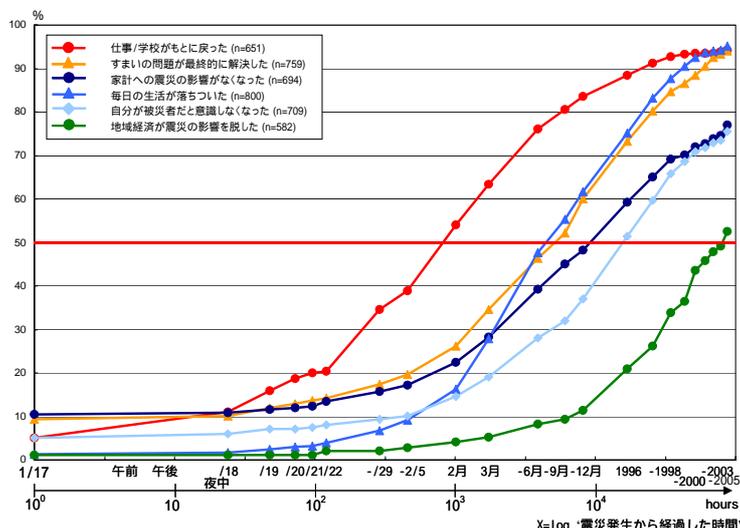
「震災前より明るくなった」と感じている人の割合		
前々回：14.0% (2001.2)	前回：19.2%(+5.2ポイント) (2003.1)	今回：23.5%(+4.3ポイント) (2005.1)

生活復興カレンダー

(*被災者が、どのような時期に、どのようなことについて、どのように考え、どのように生活復興を成し遂げていったのかという生活復興過程)

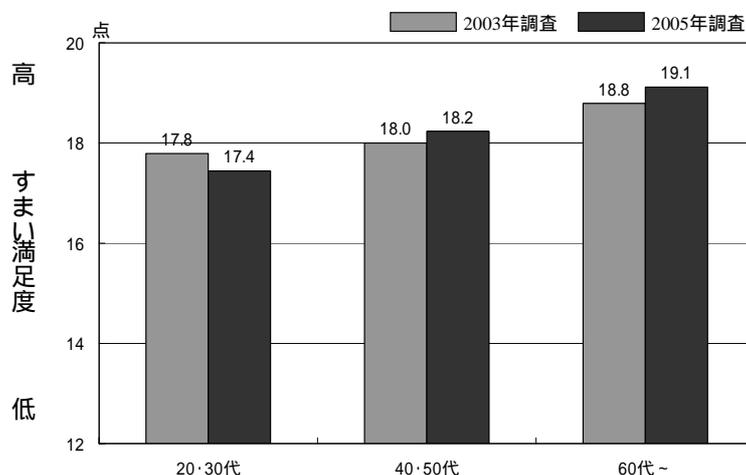
「自分が被災者だと意識しなくなった」と感じている人は、震災1年後(1996年)に過半数を超え、2005年1月時点では75.5%であった。

「地域経済が震災の影響を脱した」と感じている人が過半数を超えたのは、震災10年目の2005年1月であった(52.6%)。



すまい満足度

20・30代の人より60代以上の人の方が、現在住んでいる住居への満足度（すまい満足度）が高かった。



くらしむき（家計）の変化

家計収支が悪化（震災前に比べて収入・支出・預貯金が減少）した人が、前回に比べて増加した。

家計収支の震災前比較（2003年比）

収入	増えた:10.0% (-1.3ポイント)	変わらない:32.0% (-4.6ポイント)	減った:58.0% (+5.9ポイント)
支出	増えた:40.7% (+1.0ポイント)	変わらない:38.3% (-1.7ポイント)	減った:21.0% (+0.7ポイント)
預貯金	増えた:8.0% (+0.7ポイント)	変わらない:25.9% (-2.0ポイント)	減った:66.1% (+1.4ポイント)

衣服費、外食費、レジャー費を切りつめたうえに、保険料、食費、日用雑貨費、交通費、文化・教育費をやりくりしながら、家計の収支バランスをとっている。

行政とのかかわり

「共和主義的（公共への積極的関与型）」な考え方が減少し、「自由主義的（公共無関心型）」な考え方が増加している。

〔 *共和主義：公共的なことがらは市民の積極的な参画によって担われるべきだという考え方
自由主義：市民一人一人が自由な考えでふるまっていけばよいとする考え方 〕

前回(2003年)調査と比較すると、上記の傾向は60代以上の人に特に顕著に見られた。

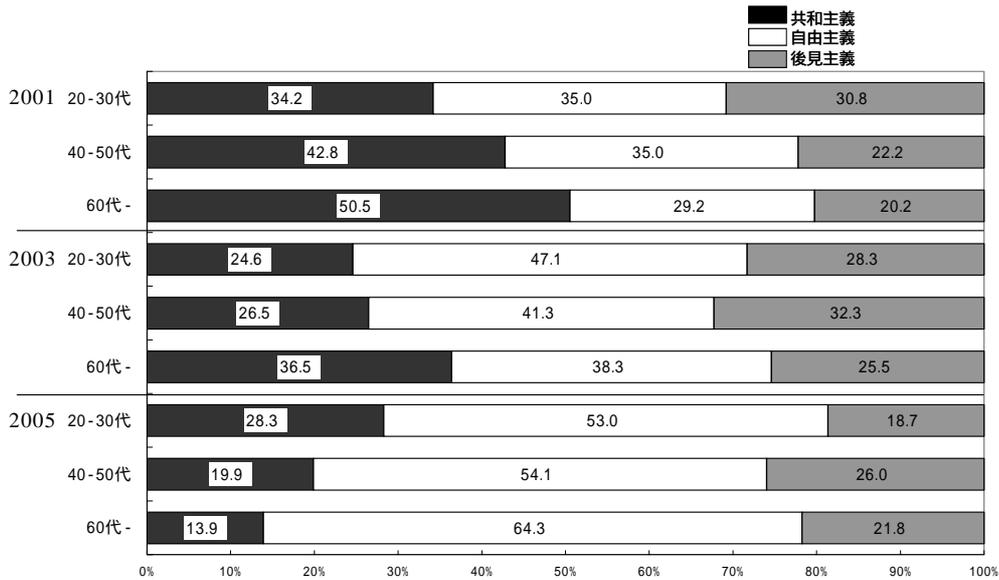


図3 行政とのかかわりにおけるカテゴリーに属する人数の割合(調査年世代別)

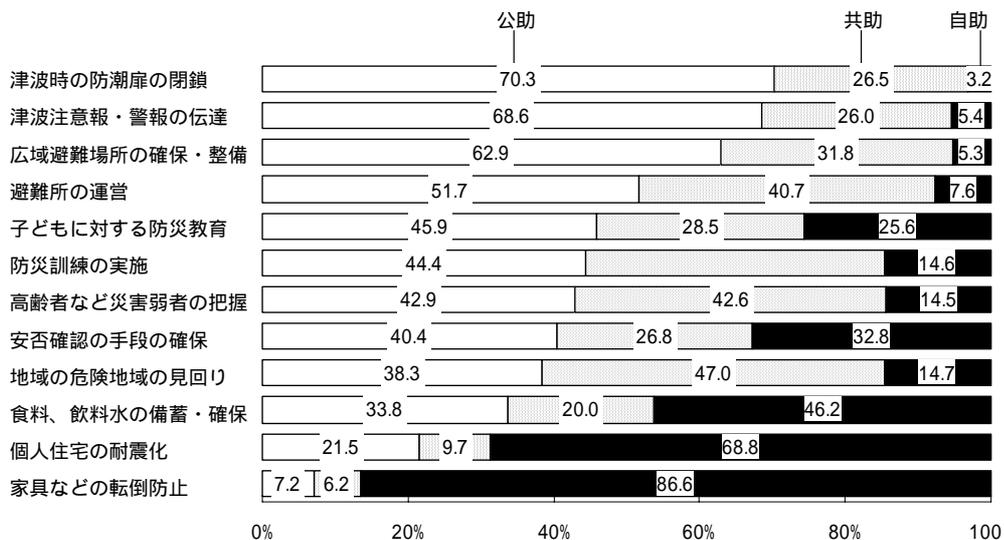
そなえ意識

(* 東南海・南海地震など将来の災害に対する「自助・共助・公助」のそなえ意識)

「公助」で取り組むべきものは、「津波時の防潮扉の閉鎖」、「津波注意報・警報の伝達」、「広域避難場所の確保・整備」が多かった。

「自助」で取り組むべきものは、「家具などの転倒防止」、「個人住宅の耐震化」、「食料・飲料水の備蓄・確保」が多かった。

「共助」で取り組むべきものは、「地域の危険地域の見回り」、「高齢者などの災害弱者の把握」、「避難所の運営」が多かった。



2. 生活復興感

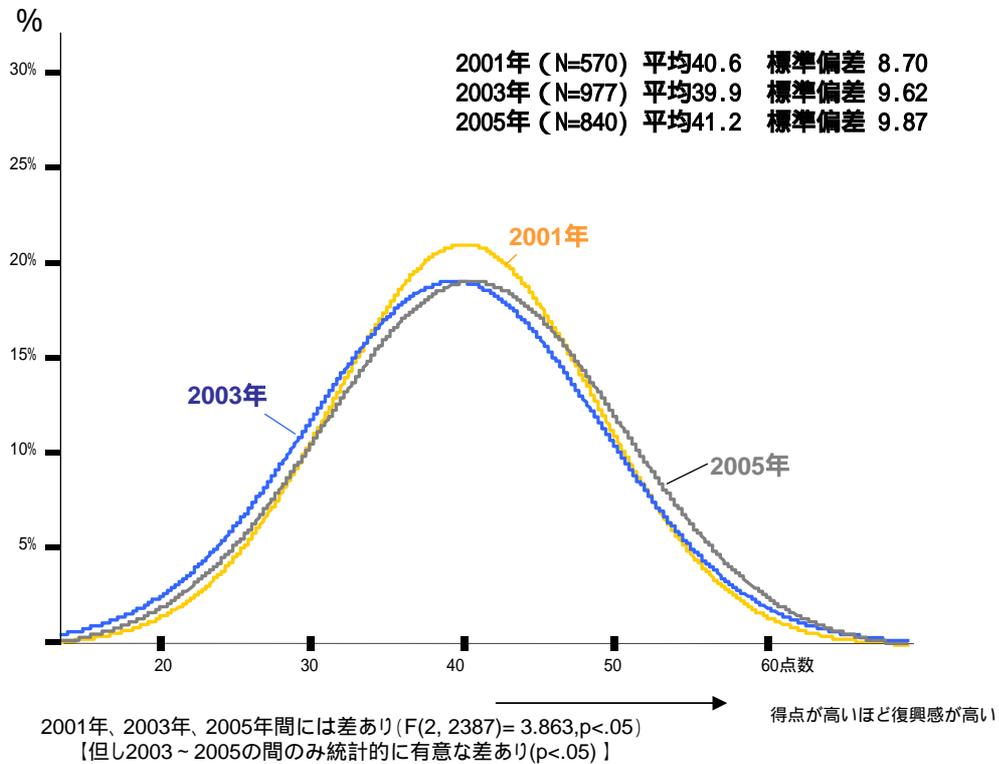
生活復興感

(* 自らの生活再建が進んだのかどうかという被災者の生活復興に対する認識について、「生活の充実度」「生活の満足度」「1年後の生活の見通し」をもとに分析したもの)

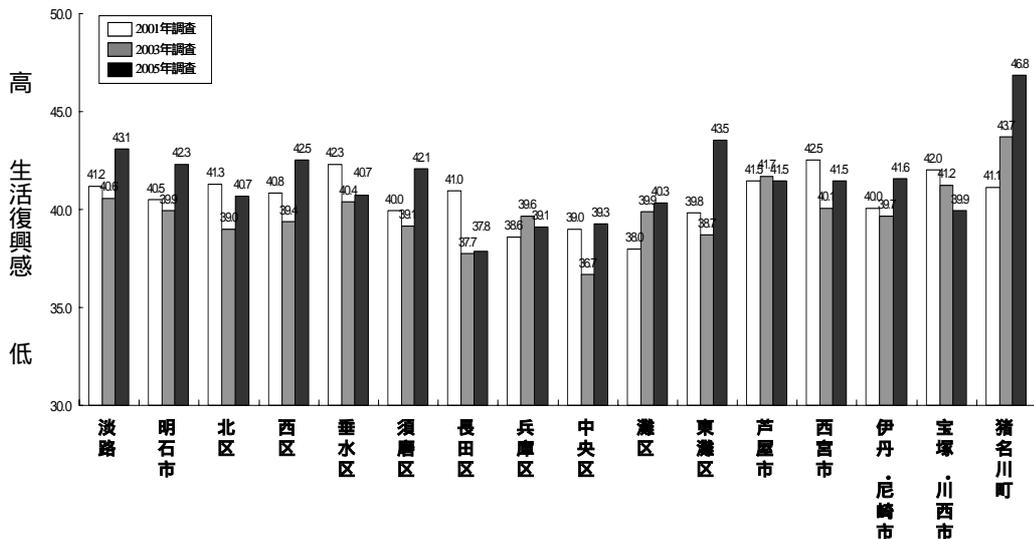
生活復興感の高低は、7つの要素(すまい・人と人とのつながり・まち・そなえ・こころとからだ・くらしむき・行政とのかかわり)から影響を受け、「すまいの満足度が高い」「市民性が高い」「こころとからだのストレスが低い」人などの生活復興感が高かった。

生活再建課題7要素	生活復興感の高低
すまい	現在の地域ですっと暮らしていきたいと思っている人の生活復興感が高い。 すまい満足度の高い人ほど、生活復興感が高い。
人と人とのつながり	市民性が高い人ほど、生活復興感が高くなっている。 近所づきあいや地域活動への参加が積極的な人ほど、生活復興感が高い。 家族間の「きずな(心理的な結びつき)」の強い人ほど生活復興感が高く、「かじとり(リーダーシップ)」のバランスがとれた人ほど、生活復興感が高い。
まち	まちの復旧・復興のスピードが「速い」と感じている人は、「遅い」と感じている人に比べて、生活復興感が高い。 地域の夜の明るさが「震災前より明るくなった」と感じている人は、「震災前より暗くなった」と感じている人に比べて、生活復興感が高い。 まちの共有物(コモンズ)への認知や愛着の度合いが高い人ほど、生活復興感が高い
そなえ	将来の災害によってもたらされる被害の程度が「小さい」と予測している人は、「大きい」と予測している人に比べて、生活復興感が高い。
こころとからだ	こころとからだのストレスが低い人は、ストレスが高い人に比べて、生活復興感が高い。
くらしむき	家計が「好転」した人は、「悪化」した人に比べて、生活復興感が高い。
行政とのかかわり	「共和主義的(公共への積極的関与型)」な人は、「自由主義的(公共無関心型)」「後見主義的(行政依存型)」な人に比べて、生活復興感が高い。 公園の維持管理や地域の行事・活動などに対する金銭的な自己負担の意識が高い人は、自己負担をあまりしたくないという意識の人に比べて、生活復興感が高い。

被災者の生活復興感は、2003年に比べてやや上昇した。
生活復興感の高い人と低い人のばらつきは徐々に広がっている。



地域別にみると、生活復興感が高かったのは、猪名川町、東灘区、淡路、西区、明石市、須磨区であり、低かったのは、長田区、兵庫区、中央区、宝塚・川西市である。



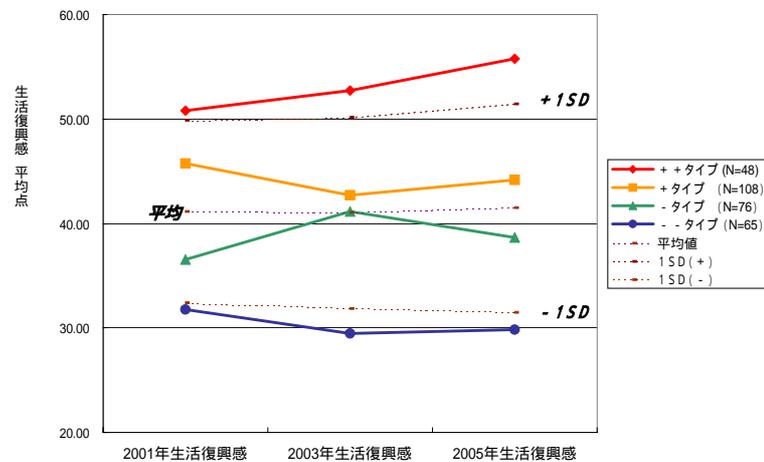
3. パネル調査

パネル調査

(* これまでの3回(2001年、2003年、2005年)のいずれの調査にも継続して回答した297名の生活復興過程等の分析)

2001年から2005年の4年間の生活復興感は、基本的に安定しており、以下の4つのパターンに分類できる。

- ・ プラスプラス(++)タイプ：3時点ともに生活復興感が最も高いタイプ
- ・ プラス(+)タイプ：3時点ともに生活復興感が平均以上で安定しているタイプ
- ・ マイナス(-)タイプ：3時点ともに生活復興感が平均以下で安定しているタイプ
- ・ マイナスマイナス(--)タイプ：3時点ともに生活復興感が非常に低いタイプ



4. 震災復興の意味づけ

震災体験に対する意識

「震災での体験は得がたい経験だった」など、震災体験の意味を肯定的にとらえている人が多かった。

逆に「震災での体験は過去から消したい」など、震災体験の意味を否定的にとらえている人は比較的少なかった。

震災体験の意味を肯定的にとらえている人の割合(「まったくそう思う」+「どちらかといえばそう思う」)

「震災での体験は得がたい経験だった」：80.1%

「人生には何らかの意味があると思う」：72.4%

「生きる事は意味があると強く感じる」：71.6%

震災体験の意味を否定的にとらえている人の割合(「まったくそう思う」+「どちらかといえばそう思う」)

「震災の話は聞きたくない」：18.7%

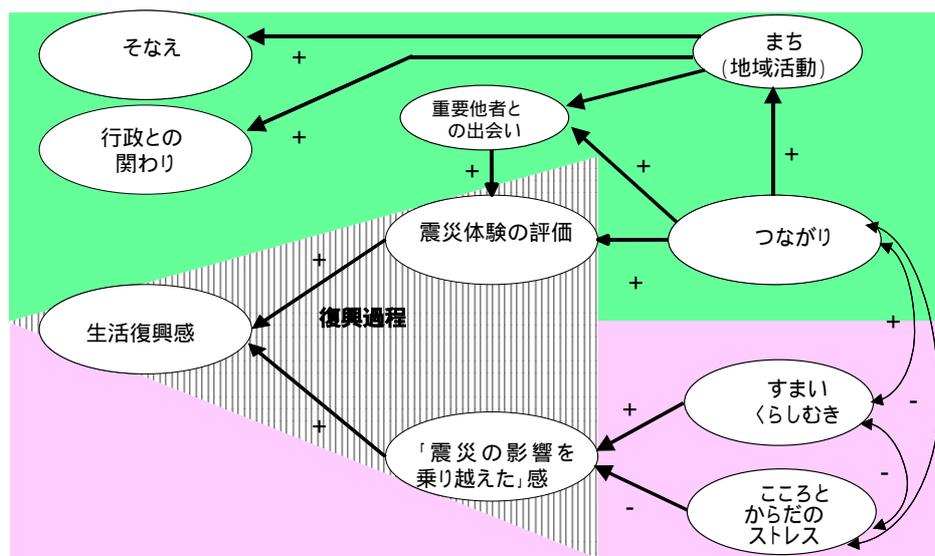
「震災については触れてほしくない」：23.9%

「震災での体験は過去から消したい」：29.6%

5. 統合的な生活復興モデルの構築

2005年生活復興モデルのポイントと今後への提案

(* 生活復興モデル：被災者の生活再建のための諸課題、震災に対する評価、震災の現在の生活への影響度、生活復興感に関連する諸要因の因果関係の解析結果)



2005年モデル(鳥瞰図)

2005年生活復興モデルで明らかになったポイント

被災者の「震災の影響を乗り越えた」という意識の進行

・震災から10年が経過し、被災者の生活復興感の度合いを左右する要因は、もはや家屋被害等の大小ではなく、現在のすまいの満足度や家計の状況、ストレスの有無などの要因が大きくなってきており、被災者の「震災の影響を乗り越えた」という意識が進行している実態がうかがえる。

「震災体験の肯定的評価」の重要性

・被災者の生活復興感を左右する要素としては、「重要他者」(自分の人生を肯定的にとらえ直すきっかけとなった人)との出会いを通じて、被災者自身が個々の震災体験を肯定的に評価し、「生きること、人生には意味がある」と価値づけることが重要な要素である。

「ポスト震災復興10年社会」(平時社会)への移行

・震災後、被災地で高まった共和主義的(住民主導的)な市民社会意識が2003年から2005年の2年間の間にかなり低下したことにより、生活復興感とそうした意識との関連性が見られなくなった。このことから、被災地は、いわば「ポスト震災復興10年社会」という、限りなく平時に近い新たなフェーズ(時間位相)に移行(復帰)したと見なすことができる。

今後への提案

「ポスト震災復興10年社会」に対応した支援施策の検討が必要である。

- ・これまでは、「震災復興」という視点に重点を置いた生活復興支援施策が展開されてきたが、今後は、震災から10年以上が経過した「ポスト震災復興10年社会」という限りなく平時に近いフェーズ（時間位相）の中で、「すまい、家族や地域の人々とのつながり、まちへの愛着、災害へのそなえ、こころやからだのストレス、家計、行政とのかかわり」など、人々の生活復興感を引き続き左右している要因に注目しながら、支援施策を検討する必要がある。

今後の大規模災害時には「住宅再建・生活再建支援」「こころのケア」が重要である。

- ・大規模災害時の復興支援施策としては、住宅確保や住宅再建支援、被災者の暮らしの再建につながる支援金の支給等も含めた生活再建支援、こころのケアや健康対策などが重要である。

ソーシャル・キャピタルの醸成や地域活動を促進する施策が必要である。

- ・大規模災害時には、家族や地域における人間関係の豊かさといったいわゆるソーシャル・キャピタルの醸成や、地域活動の促進につながる支援施策が、被災者の生活復興を促す効果的な施策である。

震災体験の語り継ぎなど震災の経験や教訓の継承・発信が重要である。

- ・震災メモリアル事業や震災の経験・教訓を継承・発信する事業などを通じて、行政が直接的に震災体験の積極的な意味づけを支援していくことが必要である。とりわけ、若い世代に対する体験の語り継ぎが非常に重要である。

平時における「参画と協働」の方向性の検討が大切である。

- ・現在の被災地は、もはや少数派となった共和主義的（住民主導的）意識の高い市民層と、多数派である公共的な事柄への無関心層に二分化されている。このような状況の中で、今後の「参画と協働」の方向について、どのような施策や取り組みが必要であるか、社会全体としてじっくりと検討していくことが大切である。

防災分野での県民と行政による「参画と協働」が重要である。

- ・南海・東南海地震における自助や共助が果たすべき役割や公助の役割など防災分野での県民と行政の「参画と協働」による取り組みをさらに進めていくことが重要である。

震災復興の過程で芽生えた「参画と協働」の取り組みを、様々な分野に広げていくことが必要である。

- ・震災復興の過程で芽生えた「参画と協働」の取り組みを、震災体験の継承・発信や災害の強いまちづくりなど、県政の様々な分野に一層広げていくことが求められる。

調査結果 編

第1部 平成17年1月時点での復興のようす

第1章 都市の再建

1. すまいの再建

本節では、1)住居形態の変化、2)震災当日の避難とその理由、3)すまいの移動、4)地域への永住希望、5)すまい満足度について述べた。

「住居形態の変化」では、震災によって被災者がどのような住居構造の住宅に移り住んだのかについて、2001年調査・2003年調査の結果と比較しながら分析した。

「当日の避難理由」では、震災発生後に避難したかどうか、震災当日に避難した人々、避難しなかった人々が、どのような理由で避難を行ったのか、避難を行わなかったのかについて分析を行った。

「すまいの移動」では、被災者が時間経過に伴って、具体的にどのような場所を居住地として移動していったのかについて分析を行った。

「すまい満足度」では、調査時点で居住しているすまいにどの程度満足しているのかについて分析を行った。

1) 住居形態の変化(問12・15)

- ・民間賃貸住宅(集合住宅・借家)から分譲集合住宅・持家へと変化している。

震災時と現在の住居形態の変化

震災時から2005年1月の調査時点に到るまでの、住居形態の変化を見てみると(表1-1)、震災時に比べて、分譲集合住宅(震災時(2005年調査回答、以下同様)13.7% 2001年17.3% 2003年18.0% 2005年18.3%)や、持地持家(震災時53.4% 2001年58.3% 2003年55.4% 2005年56.4%)の比率が高まったのに対して、借家(震災時5.2% 2001年3.2% 2003年3.2% 2005年2.7%)、民間賃貸集合住宅(震災時9.0% 2001年7.2% 2003年7.5% 2005年5.8%)、社宅(震災時3.1% 2001年2.3% 2003年1.2% 2005年1.1%)の比率は低くなった。(2001年・2003年・2005年調査の震災時の住居形態比率には統計的に意味のある差(有意差)はない)

このことから、2001年調査・2003年調査結果で見られた「民間賃貸住宅(集合住宅・借家)から分譲集合住宅・持家へ」という傾向が、今回調査でも引き続き強まっていることが明らかになった。これは、神戸・阪神地域の分譲マンションの価格下落等が一因として考えられる。

表 1-1 調査対象の住居形態(2001 - 2005 年調査)

	震災時(1995年1月時点)			2001年1月 調査時点	2003年1月 調査時点	2005年1月 調査時点
	2001年 調査	2003年 調査	2005年 調査			
戸建 持地持家	679 (56.4)	650 (54.0)	549 (53.4)	701 (58.3) +	666 (55.4)	580 (56.4)
分譲 集合住宅	155 (12.9)	175 (14.5)	141 (13.7)	208 (17.3) +	216 (18.0) +	188 (18.3) +
公団・公社	36 (3.0)	36 (3.0)	35 (3.4)	37 (3.1)	40 (3.3)	35 (3.4)
公営住宅	60 (5.0)	64 (5.3)	69 (6.7)	68 (5.7) -	88 (7.3) +	66 (6.4)
社宅	45 (3.7)	32 (2.7)	32 (3.1)	28 (2.3) -	14 (1.2) -	11 (1.1)
借地持家	49 (4.1)	55 (4.6)	52 (5.1)	33 (2.7) -	40 (3.3) +	44 (4.3) +
借家	66 (5.5)	63 (5.2)	53 (5.2)	39 (3.2) -	38 (3.2)	28 (2.7)
民間賃貸 集合住宅	110 (9.1)	123 (10.2)	93 (9.0)	87 (7.2) -	90 (7.5)	60 (5.8) -
仮設住宅	- -	- -	- -	- -	- -	- -
無回答等	3 (0.2)	5 (0.4)	4 (0.4)	2 (0.2)	11 (0.9)	16 (1.6)

2005年調査(n=1028), 2003年調査(n=1203), 2001年調査(n=1203)

震災時の住居形態について、2001・2003・2005年調査には統計的に意味のある差はなし

(01-03: 2(7)=5.31, n.s., 01-05: 2(7)=6.31, n.s., 03-05: 2(7)=3.88, n.s.,)

住居形態の移り変わり

被災者の住居形態が、震災時から 2005 年調査時点まで、どのように変わっていったのかについて分析を行った(表 1-2)。

震災時に持地持家、分譲集合住宅に住んでいた人は、震災後も同じ住居形態のすまいに住んでいる人がそれぞれ約 9 割、約 8 割であった。

一方、震災時に民間賃貸集合住宅に住んでいた人の 22.6%が分譲集合住宅、21.5%が持地持家に移り、震災時に借家に住んでいた人の 30.2%が持地持家に移るなど、賃貸住宅や借家に住んでいた人の持地持家化がみられた。

表 1-2 震災時と調査時点での住居形態の移り変わり

	震災時の住まい									合計	
	戸建 持地持家	集合住宅 持地持家	公団・ 公社	公営住宅	社宅	借地持家	借家	民間賃貸 集合住宅	無回答		
合計	549 (100)	141 (100)	35 (100)	69 (100)	32 (100)	52 (100)	53 (100)	93 (100)	4 (100)	1028 (100)	
現在の 住まい	戸建 持地持家	491 (89.4)	15 (10.6)	4 (11.4)	11 (15.9)	9 (28.1)	11 (21.2)	16 (30.2)	20 (21.5)	3 (75.0)	580 (56.4)
	集合住宅 持地持家	21 (3.8)	117 (83.0)	3 (8.6)	7 (10.1)	14 (43.8)	3 (5.8)	2 (3.8)	21 (22.6)	-	188 (18.3)
	公団・公社	-	3 (2.1)	25 (71.4)	-	-	-	5 (9.4)	2 (2.2)	-	35 (3.4)
	公営住宅	6 (1.1)	-	1 (2.9)	47 (68.1)	-	-	6 (11.3)	6 (6.5)	-	66 (6.4)
	社宅	3 (0.5)	-	-	-	7 (21.9)	-	-	1 (1.1)	-	11 (1.1)
	借地持家	1 (0.2)	2 (1.4)	-	-	1 (3.1)	37 (71.2)	1 (1.9)	2 (2.2)	-	44 (4.3)
	借家	5 (0.9)	1 (0.7)	-	1 (1.4)	-	-	19 (35.8)	2 (2.2)	-	28 (2.7)
	民間賃貸 集合住宅	12 (2.2)	1 (0.7)	1 (2.9)	2 (2.9)	1 (3.1)	1 (1.9)	3 (5.7)	39 (41.9)	-	60 (5.8)
	無回答等	10 (1.8)	2 (1.4)	1 (2.9)	1 (1.4)	-	-	1 (1.9)	-	1 (25.0)	16 (1.6)
同住居形態で 同住所	444 (90.4)	99 (84.6)	20 (80.0)	39 (83.0)	5 (71.4)	34 (91.9)	13 (68.4)	22 (56.4)			

注：上：実数、下(カッコ内)：%(各列の合計を100%とした場合)、枠囲みのデータ：震災時と現在の住居形態が同じ%は、震災時にある住居形態に住んでいた人が、現在はどういう住居形態に移り住んでいるのかの割合を表す。
同住居形態で同住所：震災前と現在が同じ住居形態の人(枠囲みデータ)の中で、住所も変わっていない人

2) 震災当日の避難とその理由

震災当日、被災者が避難したかどうかを尋ねた。更に、避難した理由・避難しなかった理由についても尋ね、避難の実態を明らかにした。

地震発生時の居場所（問3）

- ・94.7%の人が自宅で被災した。

地震発生時の居場所を尋ねた。無回答(n=6)を除いた1022人の内訳をみると（図1-1）自宅にいた人が94.7%でほとんどの人が自宅で被災していた。それ以外は、勤務先にいた人が1.1%、通勤途上が0.9%、宿泊施設が0.4%、その他が2.9%であった。

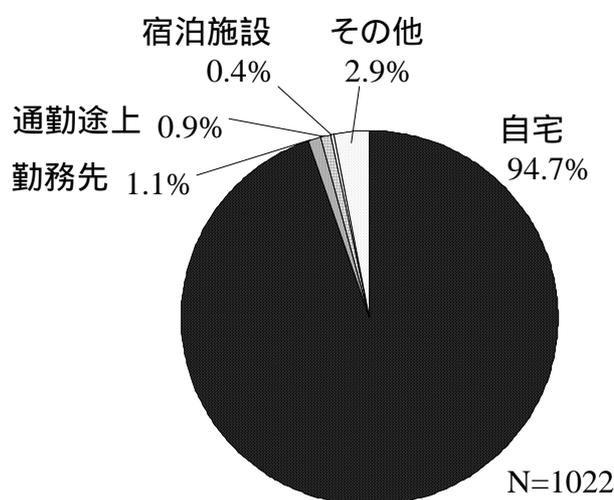


図 1-1 地震発生時の居場所

震災当日の避難（問4）

- ・約3割の人が震災当日に避難し、約1割の人は避難したくてもできなかった。

震災当日に避難をしたかどうかについて尋ねた。無回答(n=4)を除いた1024人の内訳をみると（図1-2）避難した人が28.7%、避難したくてもできなかった人が8.4%であった。一方、避難の必要がなかった人が55.7%、避難しなかった人（理由不明：付問の具体的な避難理由に回答していない人）は7.2%であった。

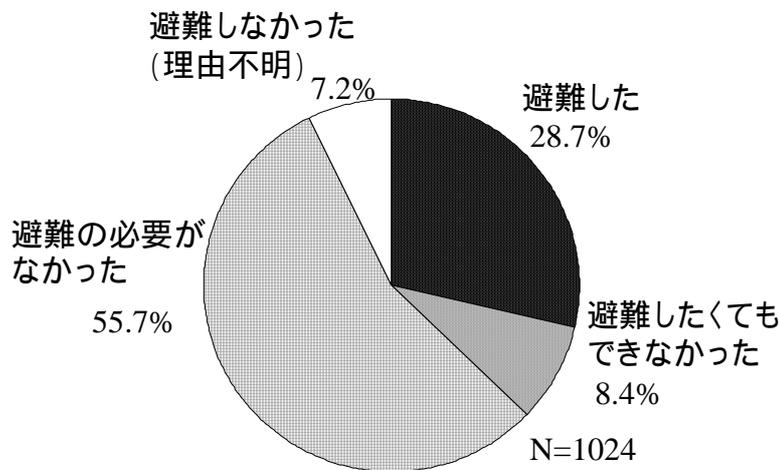


図 1-2 震災当日の避難

- ・ 60代以上は男女とも 3 割以上の人々が避難していた。
- ・ 半壊家屋では約 5 割、全壊家屋では約 7 割、層破壊家屋では約 9 割の人々が避難していた。

震災当日の避難について、無回答および避難しなかった(理由不明)人を除いた 950 人について、性別、年齢、被害程度などでどのような違いがあるのかについて分析した。その結果、性別・年齢、家屋被害程度について、統計的に意味のある(有意な)差がみられた(図 1-3)。

性別・年齢における違いを見ると、まず、60代以上で「避難した」人は男女ともに 3 割を超えることがわかった。居住している家屋が古く大きな被害を被ったり、身体的事情などによって避難した人が多かったことなどが考えられる。

また、男性 40 代以上の人をみると「避難したくてもできなかった」人が 40・50 代で 13.4%、60 代以上で 12.4% と他の年代よりも高いことがわかった。世帯主であるために、さまざまな立場があり自分だけが避難することができない家庭の事情があったことなどが考えられる ($\chi^2(10)=24.94, p<.01$)。

次に、家屋被害程度による避難行動の違いを見た。家屋被害程度については、り災証明等の判定(問 7)に加え、家屋の構造に関する被害(問 14)についても尋ね、全壊の中で「ある階がつぶれてしまう」ような重篤な被害を「層破壊」として特に区別した。その結果、家屋被害が大きければ大きいほど、避難した人の割合が大きくなっていることがわかった。家屋被害がない人で避難した人は 11.2%、一部損壊では 17.6% であったのに対し、半壊では 47.2%、全壊では 71.6% と避難する人の割合が大きくなり、層破壊では 92.0% の人が避難していたことがわかった ($\chi^2(8)=307.94, p<.01$)。

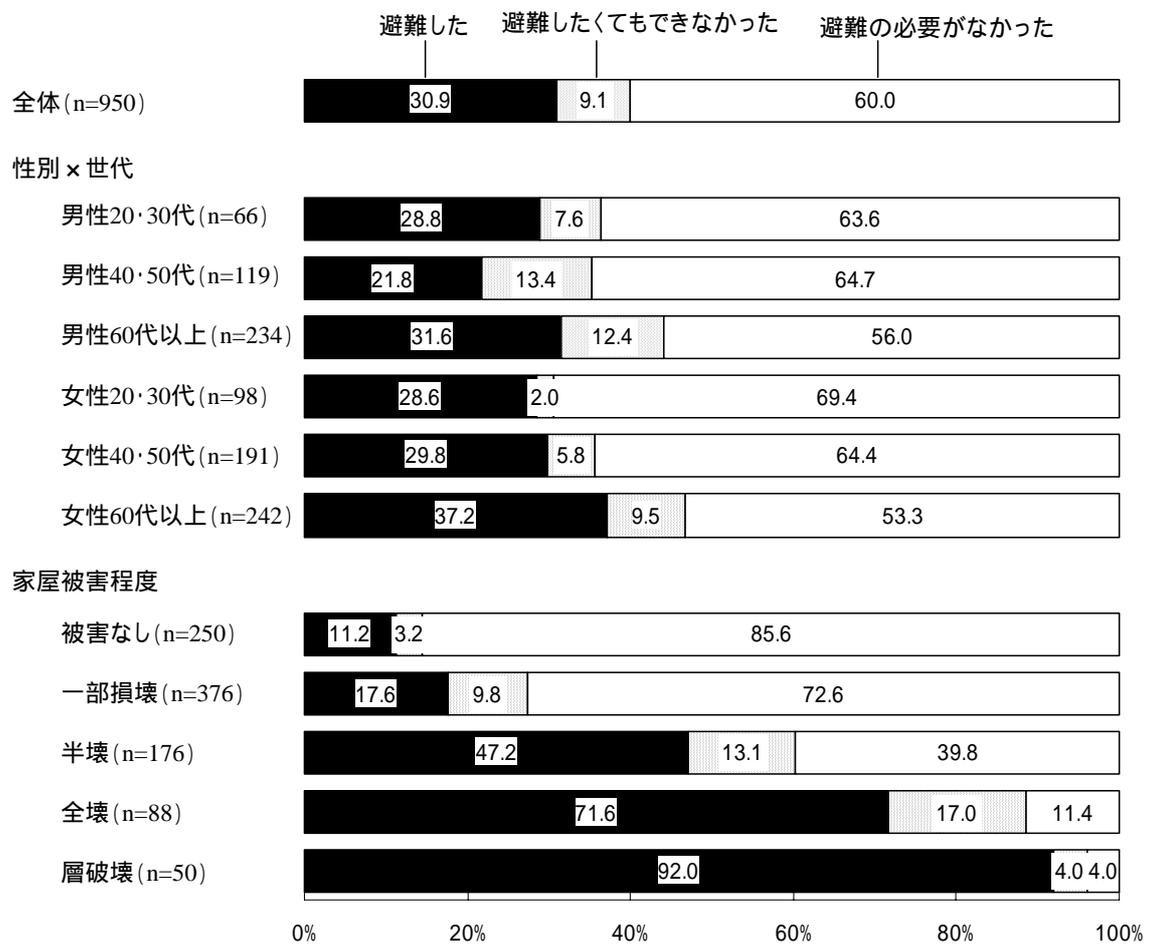


図 1-3 震災当日の避難（性別 × 世代別、家屋被害程度別）

震災当日に避難した理由（問4）

- ・余震への恐怖、建物の安全性への不安、ライフラインの途絶が、避難の大きな理由だった。

震災当日に避難をした人(n=294)に対して、「あなたはどのようにして避難をしましたか。その理由についてあてはまるものすべてに をしてください」と尋ねた。

その結果(図1-4)、震災当日に避難した理由は、余震の恐怖(66.0%)、建物の安全性への不安(66.0%)が最も多く、以下、断水(63.6%)、ガス途絶(62.6%)、トイレ使用不能(55.8%)などのライフラインの途絶が大きな理由としてあげられていた。

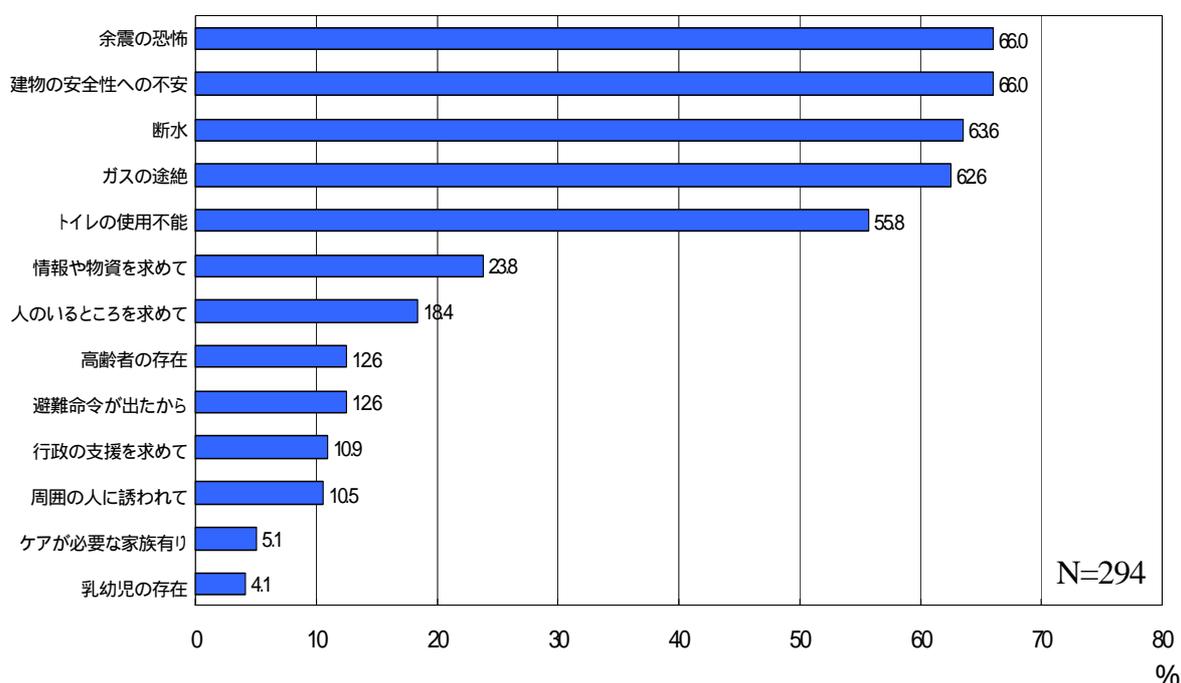


図1-4 震災当日の避難理由（複数回答）

震災当日に避難した理由のタイプ（問4）

- ・震災当日の避難理由は、「ライフラインの使用不可」「情報・物資支援の要求」「ケアが必要な家族の存在」「建物の安全性への不安」「余震恐怖」の5つだった。

避難理由をタイプ分けするために最尤法(さいゆうほう)・プロマックス回転という統計分析手法を用いて因子分析を行った。分析の結果、因子負荷の低い数項目を除き、最終的に5因子を抽出した(表1-3)。

その結果、震災当日に避難した理由は、ガス・上下水道の途絶による「ライフラインの使用不可」、公的な情報や物資などの支援を求めての「情報・物資支援の要求」、高齢者や乳幼児などのケアが必要な家族がいたための「ケアが必要な家族の存在」、建物の安全性への不安があり周囲の人に誘われて避難をする「建物の安全性への不安」、余震への恐怖からの「余震恐怖」の5つにタイプ分けされることがわかった。

表 1-3 震災当日に避難した理由についての因子分析表

震災当日に避難した理由	因子負荷量					共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	
ガスの途絶	.97	-.05	.02	-.19	.15	.94
断水	.94	.03	-.01	.13	-.17	.85
トイレの使用不可	.86	-.03	-.01	.04	-.01	.72
行政支援を求めて	.00	.75	.02	-.23	-.01	.52
情報・物資を求めて	.05	.70	-.03	-.08	.05	.51
人を求めて	-.09	.49	-.02	.10	.06	.28
高齢者の存在	-.01	-.02	1.00	-.02	.06	1.00
ケアが必要な家族の存在	.10	.03	.17	.00	.06	.06
避難命令の発令	.01	.10	.03	-.34	.12	.08
周囲に誘われて	-.01	.23	.04	.30	-.25	.10
建物の安全性への不安	.19	.17	.05	.30	-.15	.16
余震への恐怖	.04	.10	.01	.26	.48	.54
乳幼児の存在	.04	.01	-.06	.19	-.29	.05
固有値	1.1	2.7	1.3	0.5	0.2	5.8
寄与率(%)	8.6	21.1	9.8	3.6	1.7	44.8

最尤法・プロマックス回転

- ・ライフラインの使用不可のために避難した人が約4割、ケアが必要な家族がいて避難した人が約3割だった

避難した理由を回答した人(n=294)それぞれについて、因子得点が最も高い因子を選び、回答者を5つの避難理由のどれか1つにタイプ分けした。その結果(図1-5) ライフラインの使用不可のための避難が37.1%、ケアが必要な家族の存在によって避難した人が28.2%、情報・物資支援を求めての避難が14.6%、建物の安全性への不安のために避難した人が13.6%、余震恐怖で避難した人が6.5%であった。

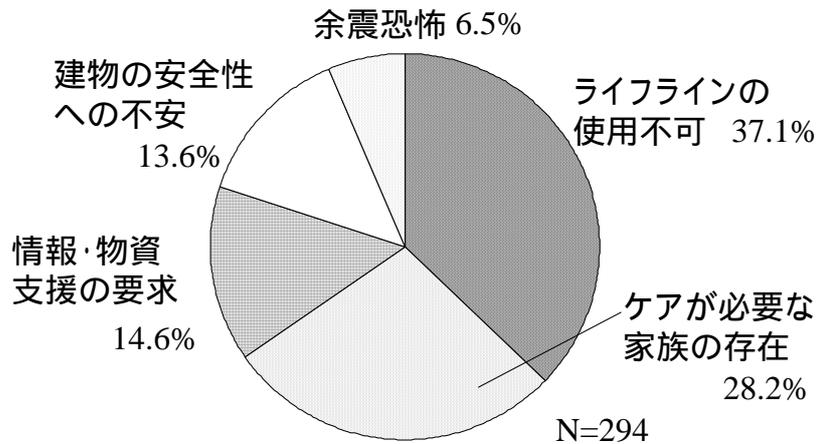


図 1-5 震災当日の避難理由 (因子分析結果)

・余震恐怖が原因で避難した人は家屋被害が少なかった人が多く、ケアが必要な家族がいるために避難した人は、家屋被害の大きかった人が多かった。

各属性での差をみると、性別・世代・家族人数・住居形態・職業・住所などの個人属性では統計的に意味のある差 (有意差) がみられず、家屋被害程度について統計的に意味のある差 (有意差) がみられた (図 1-6)。

家屋被害程度でみると (n=286:無回答を除く)、余震恐怖が原因で避難をした人は、被害なし・一部損壊など家屋被害の少なかった人が多かった。また、ケアが必要な家族がいるために避難した人は、全壊・層破壊など家屋被害の大きかった人が多かった ($\chi^2(16)=30.17, p<.05$)。

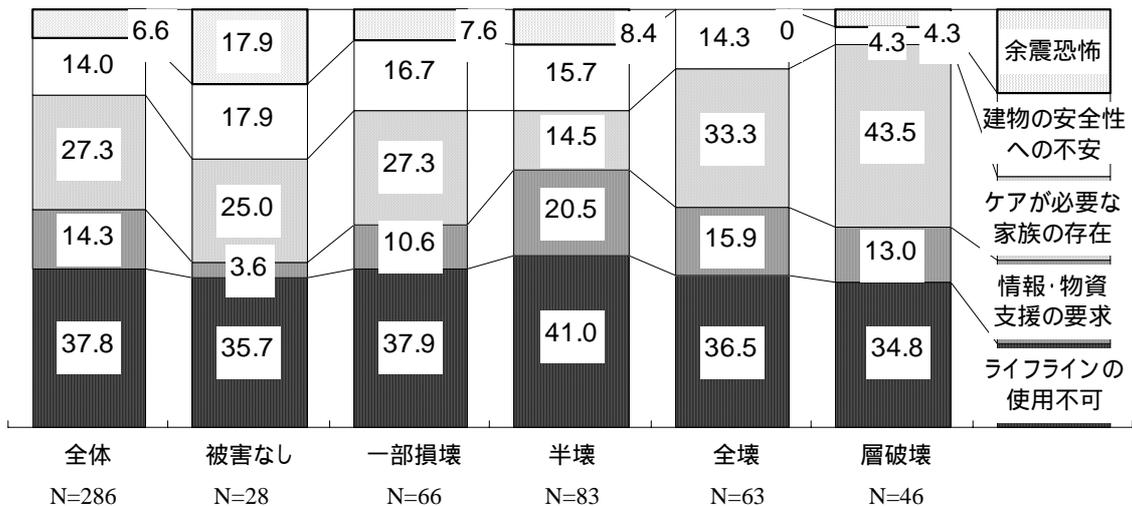


図 1-6 震災当日の避難理由 (因子分析結果) (家屋被害程度別)

震災当日に避難の必要がなかった理由（問４）

- ・家の中の方が安全、避難命令が出なかった、ライフラインが使用可能という理由が多かった。

震災当日に避難の必要がなかった人(n=560：無回答(n=10)を除く)に対して、「あなたはどのようにして避難をしなかったのですか。その理由についてあてはまるものすべてに をしてください」と尋ねた。

その結果(図 1-7)、避難の必要がなかった理由は、家の中の方が安全だった(53.6%)、避難命令が出なかった(37.0%)、トイレが使用可能だった(31.3%)、水道が使用可能だった(26.4%)、ガスが使用可能だった(23.0%)の順に回答が多かった。

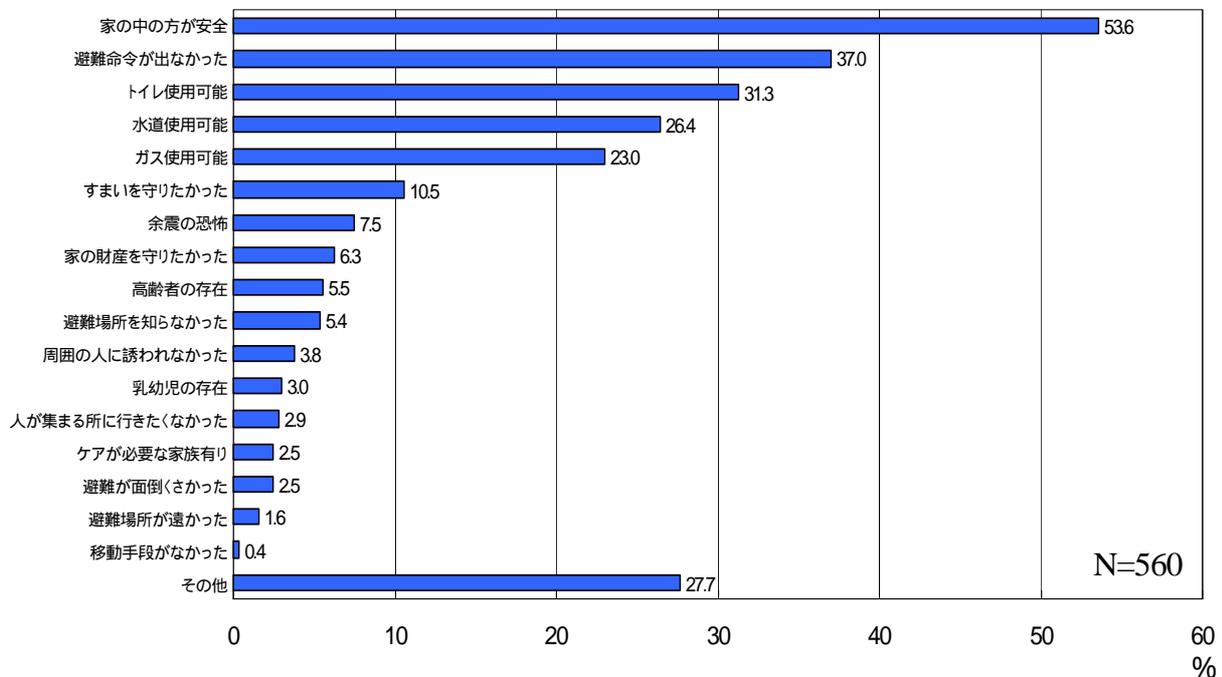


図 1-7 震災当日に避難の必要がなかった理由（複数回答）

震災当日に避難したくてもできなかった理由（問４）

- ・避難命令が出なかったという理由のほか、家の中の方が安全、避難場所を知らなかった、住まいを守りたかったという理由が多かった。

震災当日に避難したくてもできなかった人(n=85：無回答(n=1)を除く)に対して、「あなたはどのようにして避難したくてもできなかったのですか。その理由についてあてはまるものすべてに をしてください」と尋ねた。

その結果(図1-8)、避難したくてもできなかった理由は、避難命令が出なかった(35.3%)、家の中の方が安全だった(21.2%)、避難場所を知らなかった(20.0%)、すまいを守りたかった(18.8%)、余震が恐かった(14.1%)の順に回答が多かった。

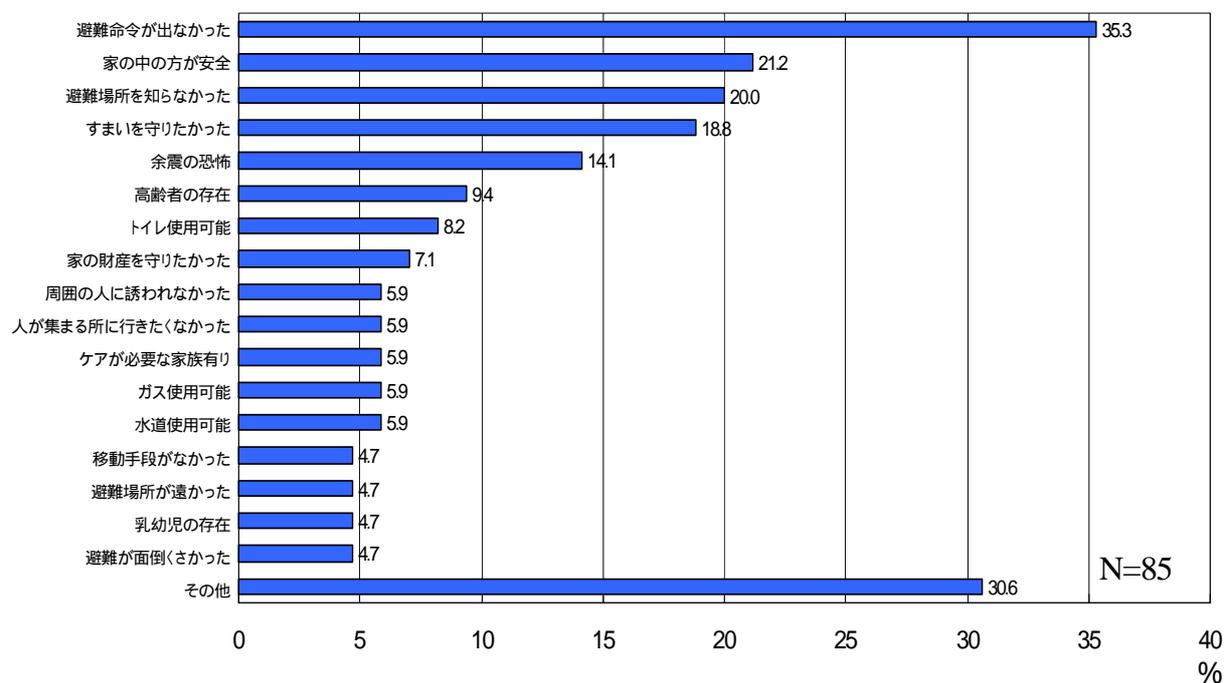


図 1-8 震災当日に避難したくてもできなかった理由（複数回答）

3) すまいの移動(問17)

2003年調査から、被災者が長期的にどのような場所を居住地にしながら移動していったのかという「被災者の長期的なすまいの変遷過程」に焦点をあてて質問した。

2005年調査においても、被災者が、震災当日から震災後10年目(調査時点(2005年1月))に至るまでに、どのような避難先を移動していったのかについて質問し、その割合を明らかにした。質問した時点は、震災当日、震災後2-4日、震災後2週間、震災後1ヶ月、震災後2ヶ月、震災後3-6ヶ月、震災後1年、震災後2年、震災後3-6年、震災後7-8年、震災後9-10年の11時点である。

その結果をもとに、各時点における被災者の避難先等の割合を表したのが表1-4及び図1-9である。図1-9の横軸は、地震発生後の時間経過を表している。時間経過は対数軸で表されており、横軸左端が地震発生後10時間、 10^2 時間(100時間:地震発生後2~4日間)、 10^3 時間(1,000時間:地震発生後2ヶ月)、 10^4 時間(10,000時間:地震発生後1年)、横軸右端が 10^5 時間(100,000時間:地震発生後10年)を表している。また、縦軸は各避難先に避難している人の割合を表している。

自宅での居住

- ・震災から10年が経過した調査時点では97.4%の人が「自宅」に居住していた。

図表をみると、震災当日に自宅にいた被災者は全体の76.4%であった。その後、時間経過に伴い、避難先ではなく自宅に居住する人が増えていった。震災後2週間では76.1%、震災後2ヶ月では82.6%、震災後1年では87.7%の人が自宅に居住していた。調査時点の震災後9-10年では、97.4%の人が「(避難先ではなく)自宅に住んでいる」と回答していた。この傾向は、2003年調査と同様であった。

具体的な避難先

- ・被災者の避難先の変遷は、時間経過に伴い、「避難所(震災当日) 血縁宅(震災後2-4日~震災後2ヶ月) 避難先として借りたアパート・マンション(震災後2ヶ月以降)」というパターンが多かった。

具体的な避難先を見てみると、避難所は、震災後10時間時点で6.8%の被災者が避難したが、時間の経過に伴い人数は減少していった。

血縁宅は、震災当日(7.7%)から増え始め、震災後2週間でピーク(13.4%)を迎えた。震災後1ヶ月頃から減少したものの、震災後3-6ヶ月に至るまでは最も多くの被災者が避難していた。

避難先として自分で借りたアパート・マンションは、震災後1ヶ月頃から多くなりはじめ(2.9%)、震災後3-6ヶ月(4.2%)からは、最も多い避難先であった。

また、仮設住宅は、震災後1ヶ月を過ぎた頃から利用されはじめ、震災後1年目に利用のピーク(2.8%)を迎えていたことがわかった。

こうした傾向は、2003年調査と同様であった。

表 1-4 すまいの移動

震災後経過時間 居住地	10 ¹ 時間		10 ² 時間		10 ³ 時間						
	当日	2-4日	2週間	1ヶ月	2ヶ月	3-6ヶ月	7-12ヶ月	2年目	3-6年目	7-8年目	9-10年目
自宅	76.4	76.3	76.1	79.1	82.6	86.4	87.7	91.8	95.1	96.6	97.4
血縁	7.7	10.1	13.4	9.6	8.0	3.9	2.4	0.8	0.7	1.1	0.7
勤務先	0.1	0.7	1.6	2.8	2.1	1.7	1.1	0.7	0	0	0
友人・近所	1.0	1.6	1.7	1.1	0.4	0.5	0.3	0.1	0	0	0
避難所	6.8	4.9	2.8	1.6	0.7	0.1	0.0	0.0	0	0	0
仮設住宅	0.1	0.0	0.0	0.4	1.0	2.4	2.8	2.1	0.5	0.0	0.0
賃貸住宅	0.4	1.0	1.8	2.9	3.6	4.2	5.1	4.1	2.4	1.1	0.8
その他	7.5	5.5	2.8	2.5	1.6	0.9	0.5	0.5	0.9	1.3	1.1
N	910	894	902	890	890	880	878	861	850	843	841

各時点で避難した人を100%としたときの割合(%)

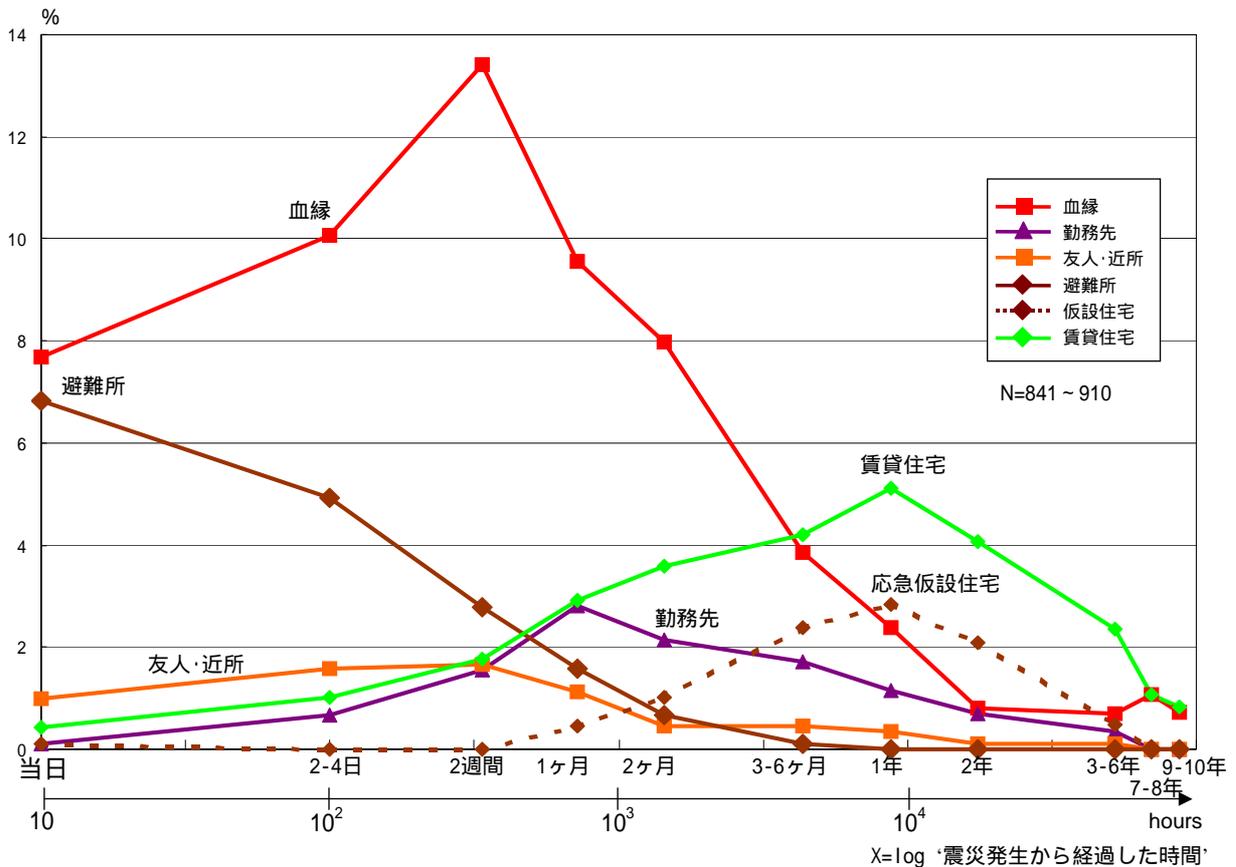


図 1-9 すまいの移動

4) 地域への永住希望 (問 40)

永住希望

- ・現在の地域ですっと暮らしていきたい人は8割弱だった。
- ・年齢が高くなるほど現在の地域ですっと暮らしていきたい人が多かった。

地域の永住希望について、「これからも現在住んでいる地域で、ずっと暮らしていきたいか」を尋ねたところ(図1-10)、全体の78.4%が「ずっと暮らしていきたい」と回答した(無回答等は除く)。

また、世代別でみると、統計的に意味のある差がみられた。すなわち、20・30代では、ずっと暮らしていきたい人の割合が67.5%、40・50代では75.6%、60代以上では84.1%であり、年齢が高くなるほど、ずっと暮らしていきたい人が多かった。

($\chi^2(2)=22.28, p<.01$)

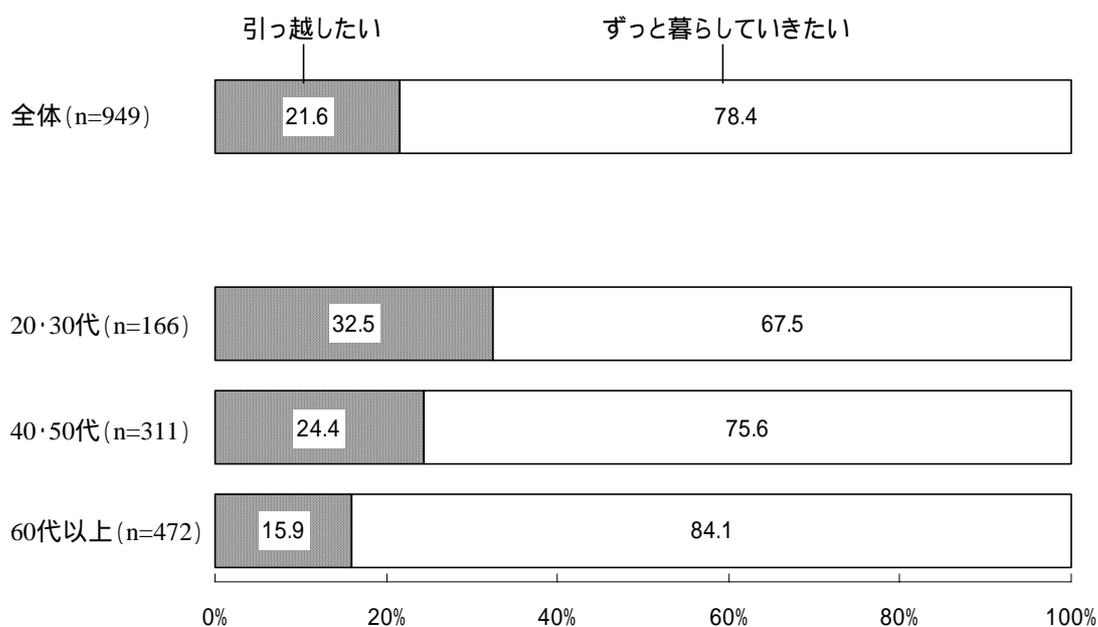


図 1-10 現在住んでいる地域での永住希望

希望移転先

- ・兵庫県内に引越したい人は6割強であり、そのうち震災前と同じ地域に引越したい人は2割強であった。

次に、「引越したい」と回答した人(n=205)に希望移転先を尋ねた。その結果(図1-11)、震災前に住んでいたのと同じ地域が23.4%、震災の被害があった兵庫県南部地域20.5%、震災の被害がなかった兵庫県地域が17.1%、兵庫県以外の関西

が10.2%、関西以外が11.2%であった。すなわち、「引っ越したい」と回答している人の6割は「引っ越すとしても兵庫県内に引っ越したい」と考えていることがわかった。

なお、世代別、性別などその他の個人属性、人的被害、家屋被害などでは、統計的に意味のある差はなかった。

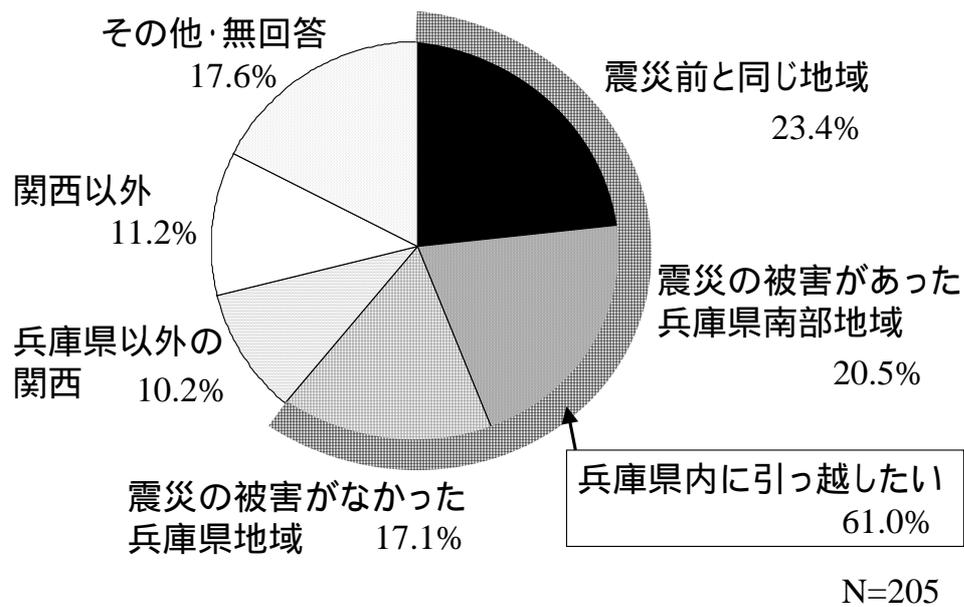


図 1-11 「引っ越したい」と回答した人の永住希望地

5) すまい満足度 (問16)

現在居住している住まいの満足度について、「現在あなたのお住まいについて、あなたの考えを教えてください」として、下表の6設問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4選択肢で回答を求めた。

得られた回答について因子分析を行なったところ、これら6設問が1つの概念を測っていることが明らかとなり、この概念を「すまい満足度」とした(表1-5)。

さらに、「そう思う」に4点、「どちらかといえばそう思う」に3点、「どちらかといえばそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を与え、「すまい満足度得点」とした。

表 1-5 因子分析表 (すまい満足度)

		すまい満足度	共通性
1	現在の住宅は住みごちがよい	.858	.590
2	今まで住んできたなかで、現在の住まいがいちばんいい	.768	.516
3	今、住んでいる住環境を大切にしたい	.719	.736
4	今の住宅で安心して暮らしている	.685	.372
5	現在の住まいには不満がある	-.610	.329
6	この住宅にずっと住み続けるつもりだ	.573	.469
	固有値	3.01	
	寄与率	50.20	

世代とすまい満足度

- ・世代の高い人ほど、すまい満足度が高かった。

回答者の世代とすまい満足度との関係を見ると(図1-12)、20・30代の人に比べて60代以上の人のすまい満足度が高く、世代の高い人ほど、すまい満足度が高いことがわかった。

この傾向は2003年調査と同様であった。

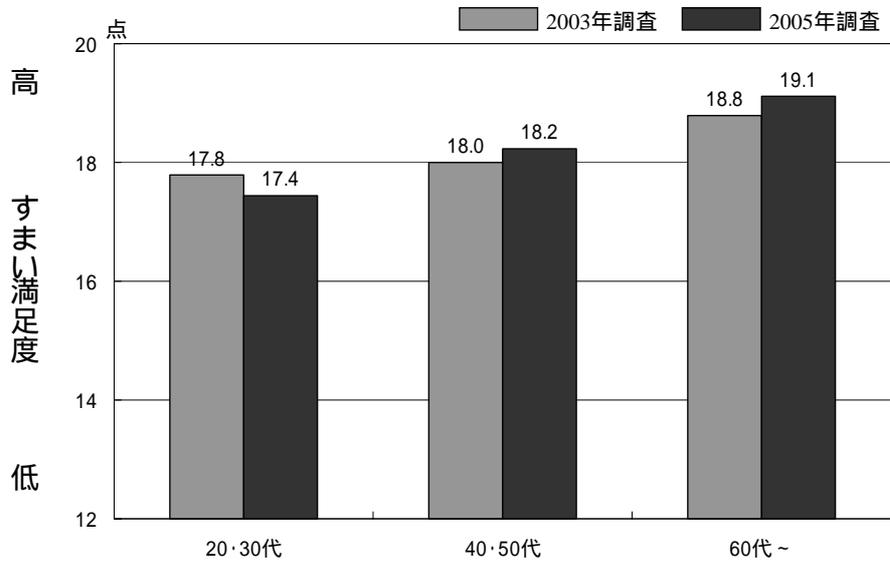


図 1-12 すまい満足度（世代）

住宅被害

- ・住宅被害のなかった人や一部損壊の人のすまい満足度が高かった。
- ・全壊被害の人のすまい満足度も高かった。

震災時の住宅の被害程度と現在のすまい満足度との関係を見ると（図1-13）住宅被害のなかった人や一部損壊の人のすまい満足度が高かった。

また、今回は、住宅が層破壊した人のすまい満足度が高かったが、今回は、全壊被害の人のすまい満足度が高かった。

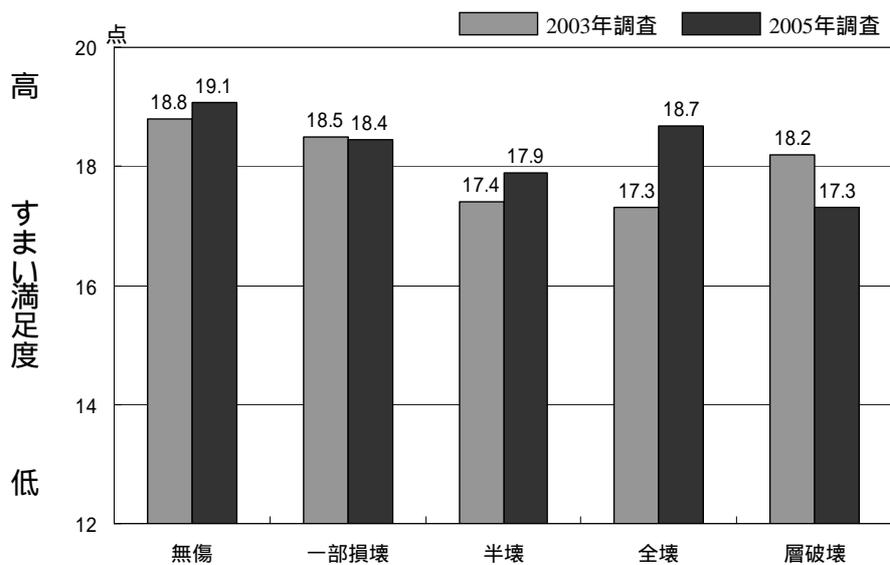


図 1-13 すまい満足度（住宅被害）

住居構造

- ・「一戸建て」に住んでいる人のすまい満足度が高かった。

住居構造とすまい満足度との関係を見ると(図1-14)、一戸建てに住んでいる人のすまい満足度は高く、木造集合住宅に住んでいる人のすまい満足度は低かった。

この傾向は2003年調査とほぼ同様であったが、今回は、2003年調査に比べて、棟割式住宅、木造集合住宅に住んでいる人のすまい満足度が向上していた。

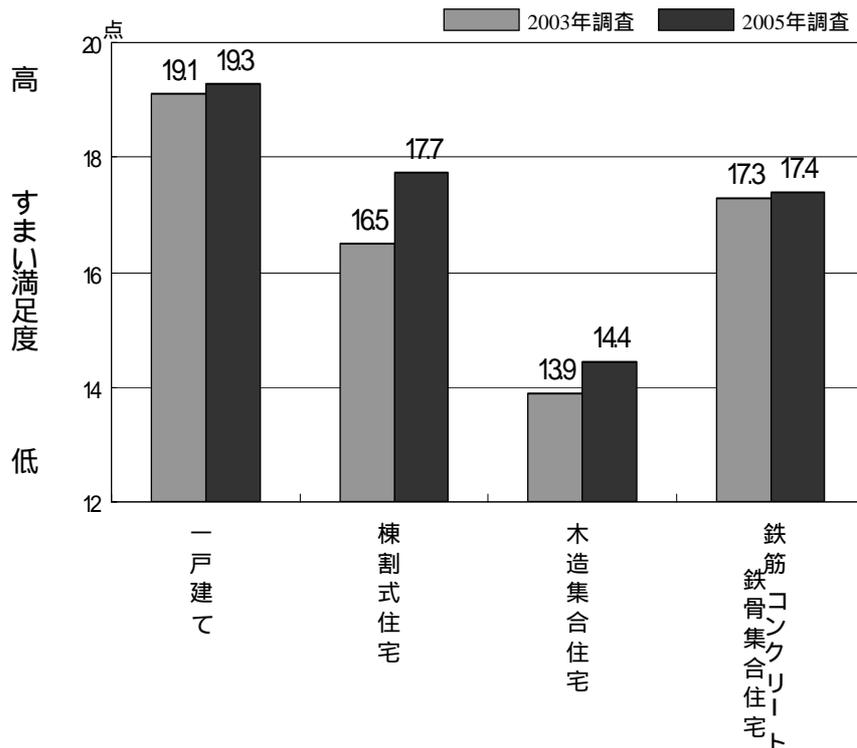


図 1-14 すまい満足度(住居構造)

住居形態

- ・持ち家に住んでいる人のすまい満足度が高かった。

現在のすまいの住居形態とすまい満足度との関係を見ると(図1-15)、「持地持家」「分譲集合住宅」「借地持家」に住んでいる人のすまい満足度が高かった。

この傾向は2003年調査と同様であった。

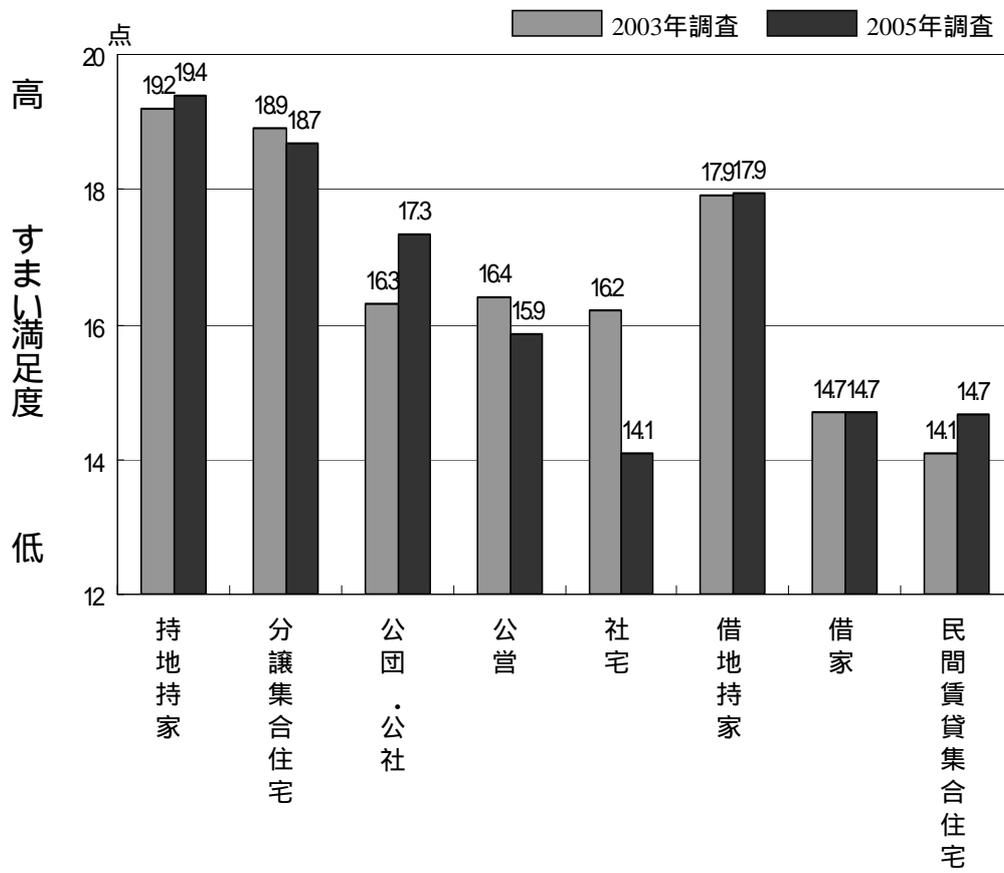


図 1-15 すまい満足度（住居形態）

2. まちの再建

1) まちの復興イメージ (問 30)

まちの復興状況に対して、市民一人ひとりがどのようなイメージを持っているかを調べるために、「まちの復旧・復興状況」「地域の夜の明るさ」について、2001年、2003年調査に引き続き、2005年調査でも同様の項目を尋ねた。

まちの復興速度感

- ・時間の経過とともに、まちの復興が着実に進んでいると感じている人の割合が増えている。

まちの復興速度をどのように感じているかについて示した(図 1-16)。

図 1 は、左から順に「かなり速い」「やや速い」「ふつう」「やや遅い」「かなり遅い」「その他」である。

「かなり速い」から「ふつう」までの割合は、時間の経過とともに漸増しており、この 10 年でまちの復興が着実に進んできたことがうかがわれる。

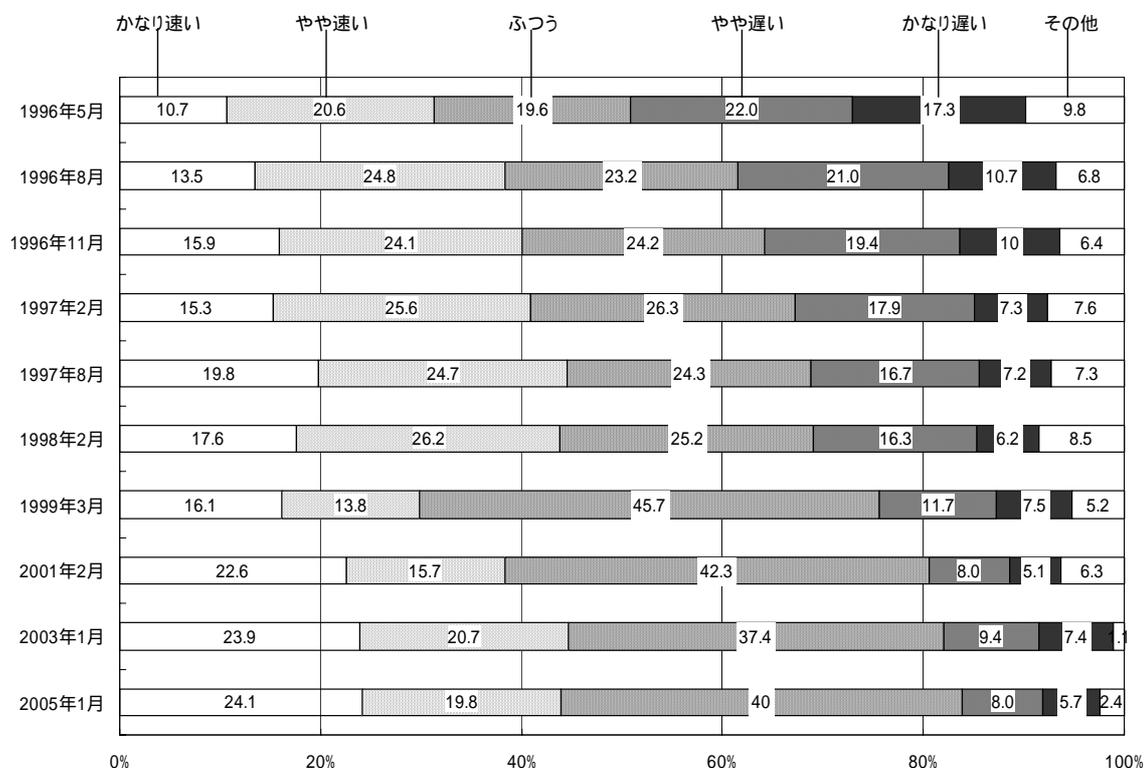


図 1-16 まちの復興速度感

(注1) 今回調査と同様の項目を質問した神戸市の「市政アドバイザー復興定期便」(第1回:1996年5月、第2回:1996年8月、第3回:1996年11月、第4回:1997年2月、第5回:1997年8月、第6回:1998年2月)及び「震災後の居住地の変化と暮らしの実情に関する調査」((財)阪神・淡路大震災記念協会(1993年3月))の結果もあわせて分析の参考とした。(これらの調査とは、調査対象者が異なっており、一概に論じることはできないが、全体の傾向を考察するための参考とした。)

夜の明るさ

・時間の経過とともに、「震災前より明るくなった」と感じている人の割合が増えている。

地域の夜の明るさをどのように感じているかについて、図1-17に示した。

図2は、左から順に「震災前より明るくなった」「震災前の状態に戻った」「震災の影響はなかった」「震災前より暗くなった」「その他」である。時間の経過とともに、震災前より明るくなったと感じている人が漸増している。

「震災前より暗くなった」と感じている人は、震災直後の1996年5月には全体の27.1%であったが、2005年調査時点では9.8%まで減少した。(注2)注1と同様。

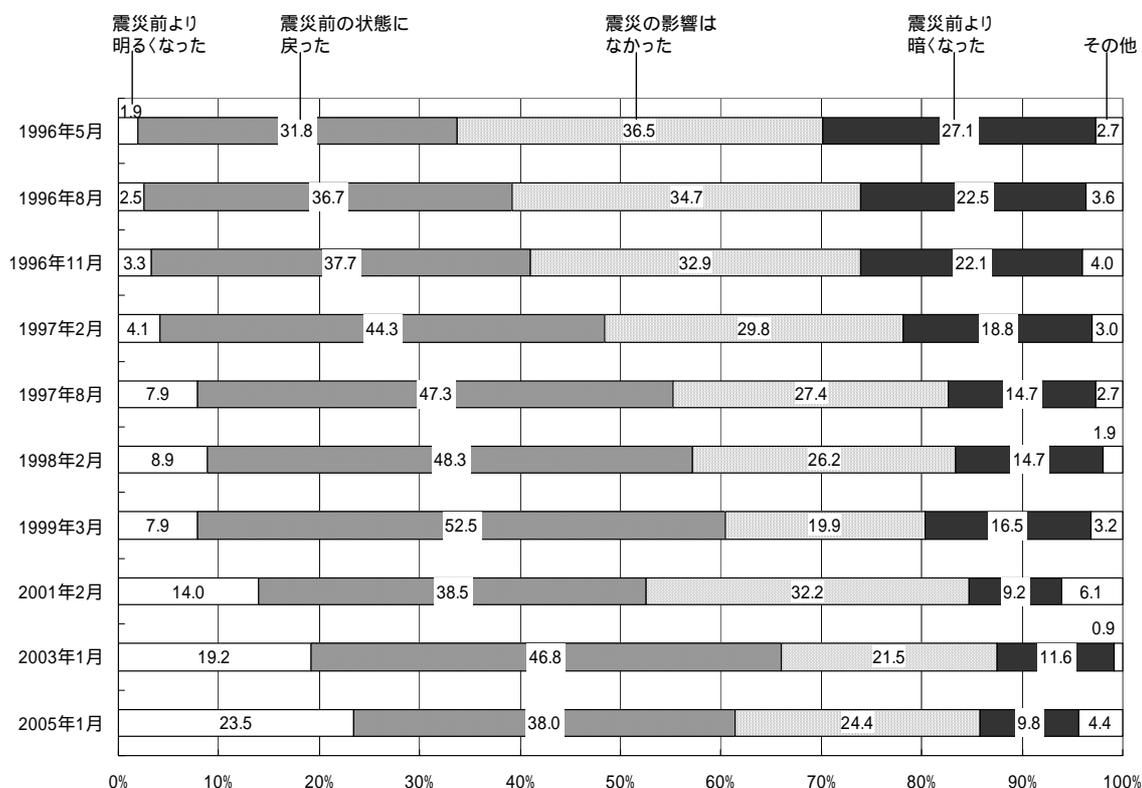


図1-17 夜の明るさ

地域別復興イメージ

- ・「まちの復興が遅い」との回答が全体平均より多いのは、兵庫区、淡路島、長田区、須磨区、灘区、中央区だった。
- ・「震災前より暗くなった」との回答が全体平均より多いのは、淡路島、中央区、須磨区、長田区、兵庫区だった。

地域によって、まちの復興イメージに差異があるかどうか注目した。

図 1-18 は、地域の「復興が遅い」(= 「やや遅い」 + 「かなり遅い」) と回答した人の割合、地域の夜の明るさが「震災前より暗くなった」と回答した人の割合をあわせて図示したものである。

「復興が遅い」との回答が全体平均(13.7%) より多いのは、兵庫区(34.9%)、淡路島(34.6%)、長田区(32.7%)、須磨区(22.2%)、灘区(15.4%)、中央区(14.6%)であった。

「震災前より暗くなった」との回答が全体平均(9.8%) より多いのは、淡路島(36.0%)、中央区(27.1%)、須磨区(19.0%)、長田区(18.2%)、兵庫区(11.4%)であった。

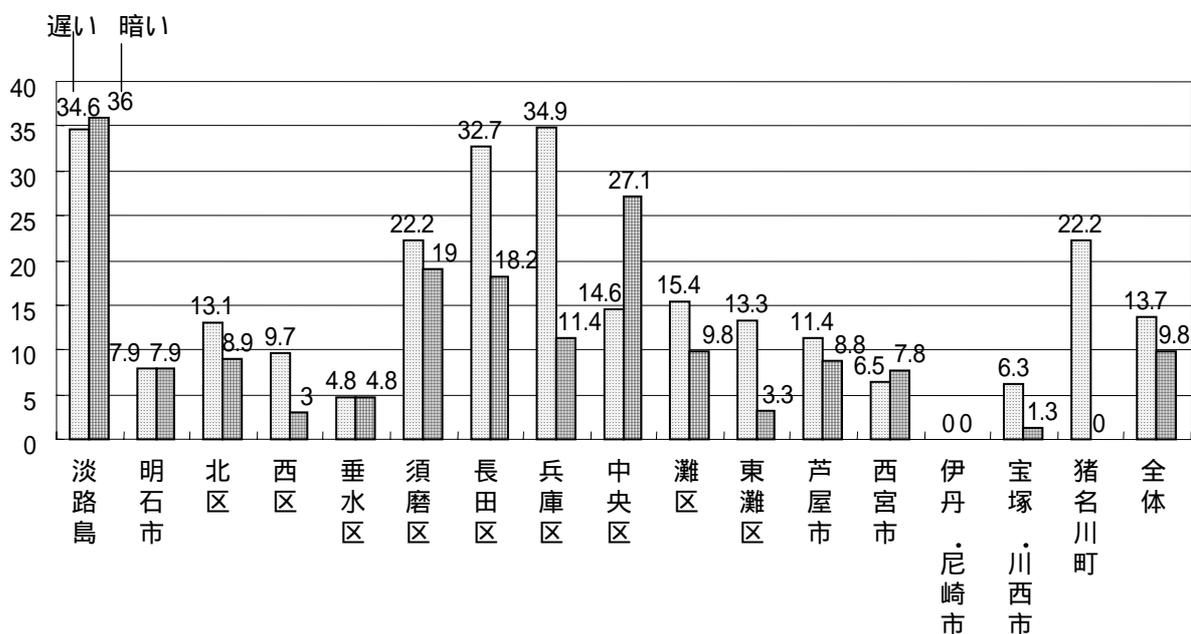


図 1-18 地域別の復興停滞感

2) まちへの愛着 (問 41)

まちへの愛着を測定する項目は、2001年調査・2003年調査の質問項目を原則として踏まえ、「まちなみ」「歴史」「人の営み」の3つの側面から測定した。

「まちなみ」については、「豊かな緑」「愛着のある公園」「あなたが好きだと思う街並み」の3項目から測定した。

「歴史」については「震災を後世に伝えるもの」「歴史を感じさせる建物や言い伝え」「他のまちとは違う独自の雰囲気」の3項目から測定した。

「人の営み」については、「みんなが気軽に集まれる場所」「自治会や市民活動を行っているグループ」「地域の行事(祭り、運動会など)」「立ち話ができそうな道ばた・路地」の4項目で測定した。

これらの項目に対して「ある・ない・知らない」という回答選択肢によって、「まちへの愛着」の度合いを測定した。

さらに、「ある」に3点、「ない」に2点、「知らない」に1点を与え、回帰による方法で因子得点を計算した(表1-6)。

なお、これらの項目に対し「ある・ない」と反応することは、自分の住むまちに関心を払って、「まちへの愛着」を示す態度であるととらえ、逆に「知らない」という反応は、まちへの関心がない態度としてとらえることとした。

表 1-6 まちへの愛着因子分析結果

	人の営み 因子	歴史 因子	まちなみ 因子	共通性
地域の行事(祭り・運動会など)	0.798	0.120	0.040	0.653
自治会や市民活動グループ	0.795	0.091	0.000	0.640
立ち話ができそうな道ばた・路地	0.598	0.072	0.311	0.459
みんなが気軽に集まれる場所	0.513	0.161	0.314	0.387
歴史を感じさせる建物や言い伝え	0.056	0.791	0.035	0.630
お地蔵さん・小さな祠	0.132	0.692	-0.130	0.514
震災を後世に伝える「もの」	0.098	0.635	0.103	0.423
ほかのまちとは違う独自の雰囲気	0.106	0.469	0.310	0.327
好きだと思う街並み	0.052	0.163	0.720	0.547
愛着のある公園	0.148	0.028	0.697	0.509
豊かな緑	0.135	-0.048	0.624	0.410
固有値		5.501		
寄与率(%)		50.004		

地域別の「まちへの愛着」

- ・まちへの愛着の3側面とも全体平均より高かったのは、明石市、須磨区、灘区、東灘区、猪名川町だった。
- ・まちへの愛着の3側面とも全体平均より低かったのは、長田区だけだった。

因子得点の地域別の平均値を計算し、グラフ表現の便宜上、各値を100倍して傾向をわかりやすく示した(図1-19)。

まちへの愛着の3側面とも全体平均より高い値(3因子の平均値が3つとも正の値)だったのは、明石市、須磨区、灘区、東灘区、猪名川町であった。

逆に、3側面とも全体平均より低い値(負の値)だったのは長田区だけだった。

2003年調査と比較すると、まちの愛着の3側面すべてが全体平均よりも高い地域については、須磨区、灘区、猪名川町が2003年調査に引き続いて高く、明石市、東灘区が今回は高くなった。宝塚・川西市は、今回はまちなみ要素が低くなった。

長田区は、2003年調査に引き続き、今回も全体平均よりも低かった。長田区は、震災被害によって街並みや人の営みが大きく変容し、再開発事業等も未だ進展中であるため、人々のまちへの愛着意識の形成途上であることがうかがわれる。

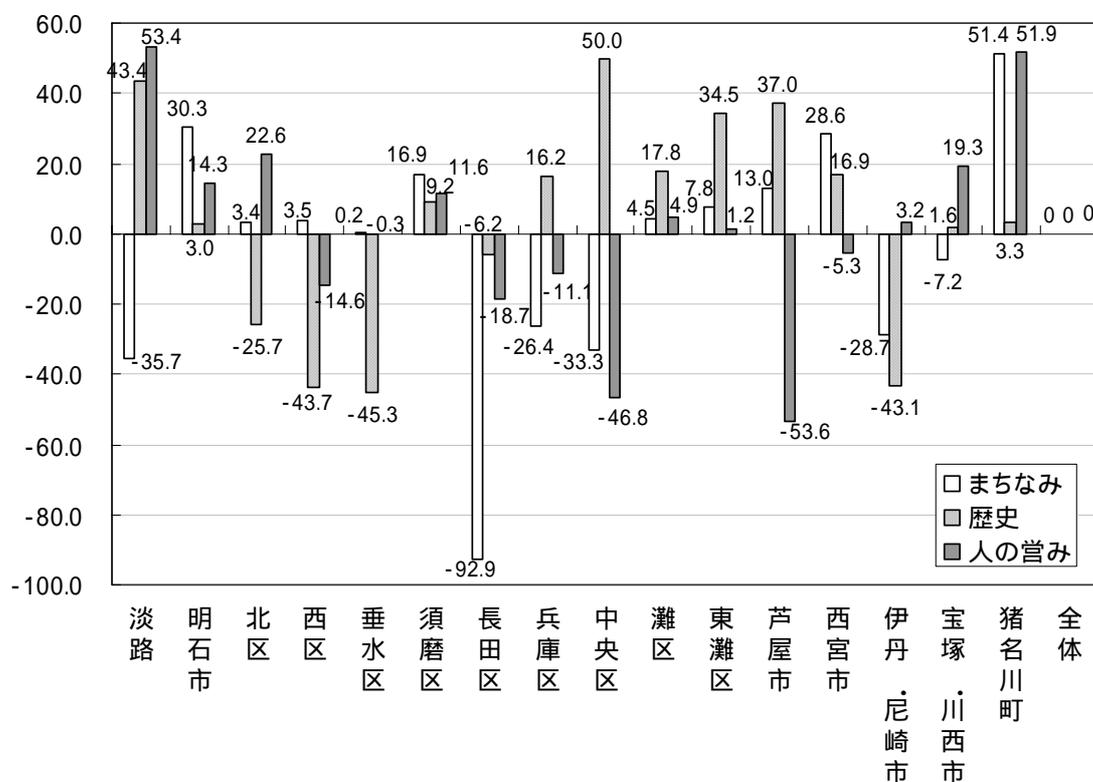


図1-19 まちへの愛着3側面の地域別平均値

第2章 経済の再建

1. 暮らしむきの変化（家計簿調査）

震災が世帯単位の暮らしむきに及ぼした影響を見るために、家計簿調査を実施した。

具体的には、市井に出回っている家計簿の形式を採用し、「家計のやりくりには、震災後どのような変化がありましたか。家計簿を思いうかべて、各項目についてそれぞれあてはまるところにをつけてください。」と質問し、収入、支出、預貯金に関して「増えた、変わらない、減った」の3選択肢で回答を求めた。（問18、図1-20）

また、支出に関しては、さらに細かく「食費、外食費、住居・家具費、光熱費、日用雑貨費、衣服費、文化・教育費、交際費、レジャー費、交通費、医療費、保険料、自動車費」の13費目に細分し、同じく3選択肢で回答を求めた。

*自動車費に関しては、全回答者が自動車を所有するわけではないので、全体の分析からは除いた。

問18. 家計のやりくりには、震災後、どのような変化がありましたか。現在の家計簿を思いうかべて、各項目について、それぞれあてはまるところにをつけてください。

震災前と比べて、現在のお宅の家計簿では...	
1) 収入	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
2) 支出	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
3) 食費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
4) 外食費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
5) 住居・家具費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
6) 光熱費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
7) 日用雑貨	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
8) 衣服費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
9) 文化・教育費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
10) 交際費(冠婚葬祭を含む)	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
11) レジャー費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
12) 交通費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
13) 医療費	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
14) 保険料	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
15) 自動車費(ある方のみ)	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)
16) 預貯金	(増えた ・ 変わらない ・ 減った)

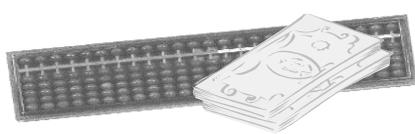


図1-20 暮らしむきに関する質問項目

全体傾向

- ・全体傾向をみると、収入が減り、支出を切り詰め、預貯金を減らした人が増加し、収入が減った分を、支出を切り詰めて、家計のバランスをとっていた。

くらしむきの全体傾向をみると(図 1-21)、収入は全体の 58.0%の人が「減った」と回答し、2001 年調査に比べて 16.9 ポイント、2003 年調査に比べて 5.9 ポイント増えていた。支出、預貯金が「減った」人は、2003 年調査に比べて微増していた。

全体傾向としては、収入が減った分を、預貯金の取り崩しだけでなく、支出を切り詰めて、家計のバランスをとっているという状況であるといえる。

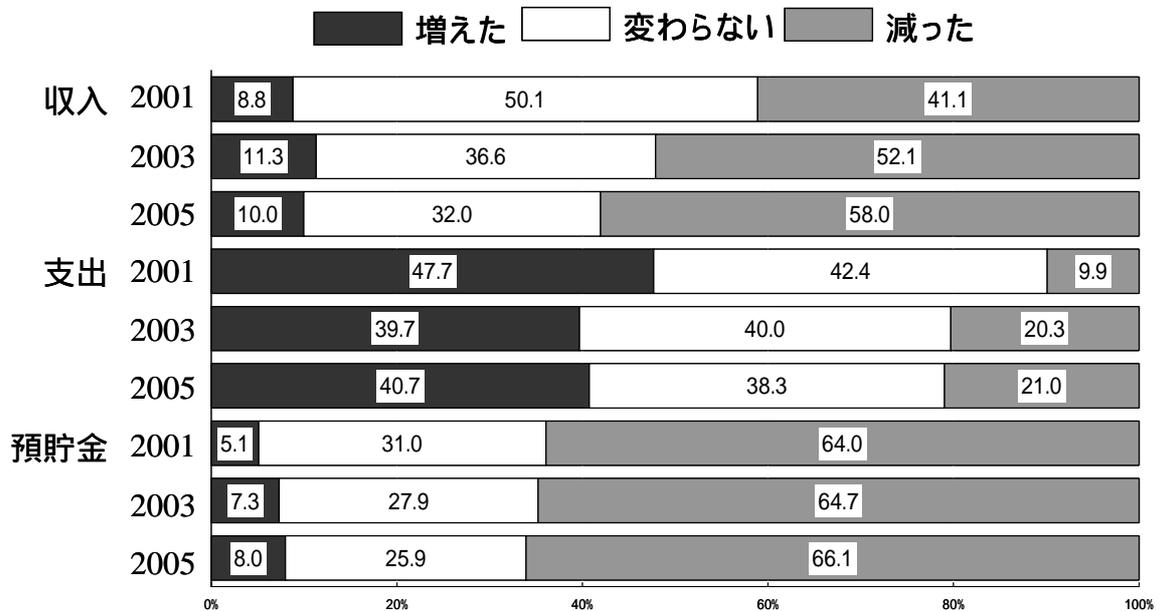


図 1-21 2001 年・2003 年・2005 年調査 くらしむきの全体傾向の比較

くらしむきと家屋被害程度との関連性

ア．家屋被害程度と収入・支出・預貯金との関連性

- ・家屋被害程度の高い人ほど、収入・預貯金が減った人が多かった。
- ・家屋被害程度と支出との関連性では、特別な傾向は見られなかった。

家屋被害程度によって、被災者のくらしむきにどのような違いがあるのかを分析した。（図 1-22, 1-23, 1-24）。2001 年調査では、家屋被害程度の高い人ほど、収入が減り、支出が増え、預貯金が減った人が多かった。2003 年調査では、引き続き、家屋被害程度の高い人ほど、収入・預貯金が減った人が多かったが、支出と家屋被害程度の関連性では特別な傾向は見られなかった。

2005 年調査においても、2003 年調査と同様、家屋被害程度の高い人ほど、収入・預貯金が減った人が多かったが、支出と家屋被害程度の関連性では特別な傾向は見られなかった。

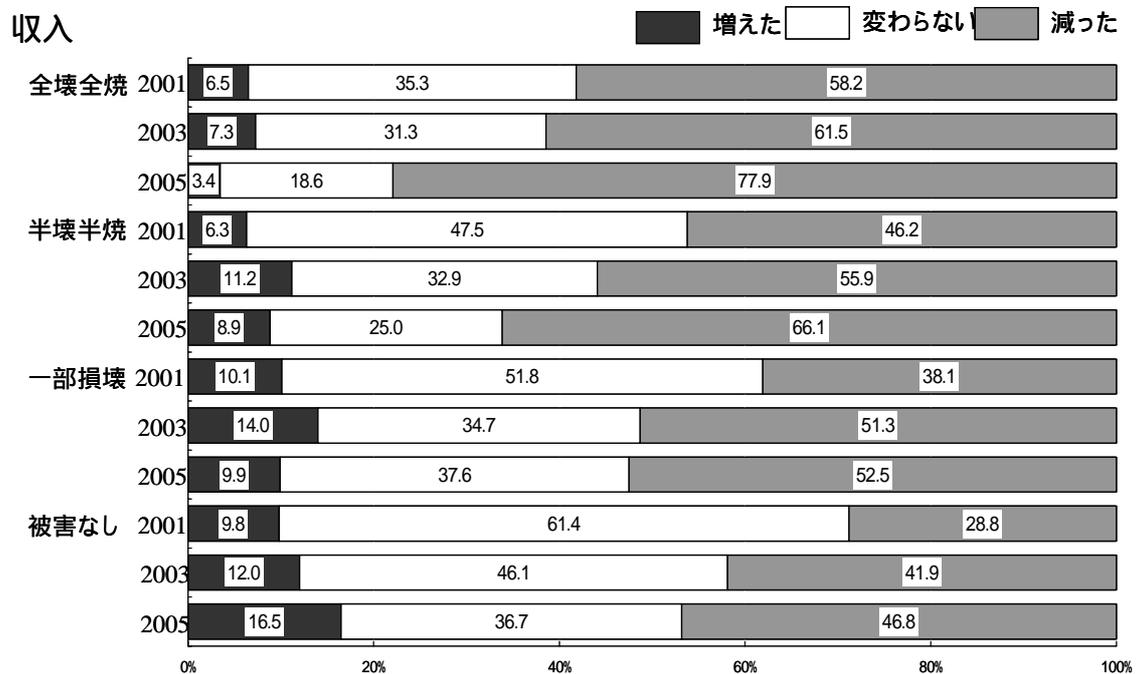


図 1-22 2001 年・2003 年・2005 年調査 家屋被害程度別収入の比較

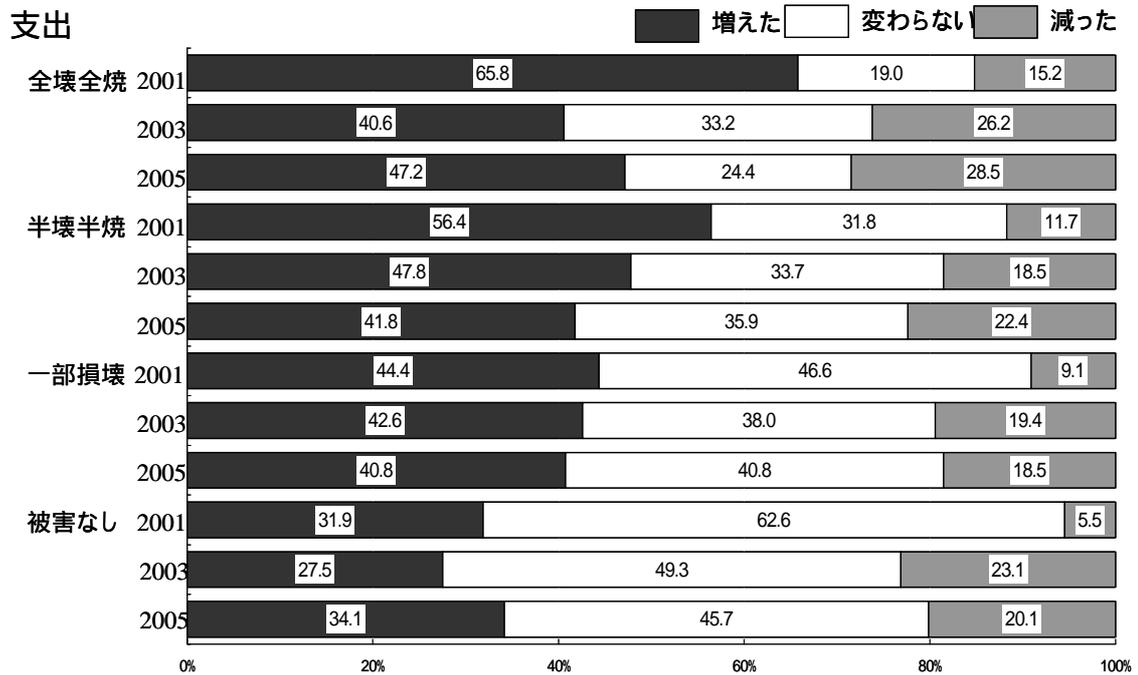


図 1-23 2001年・2003年・2005年調査 家屋被害程度別支出の比較

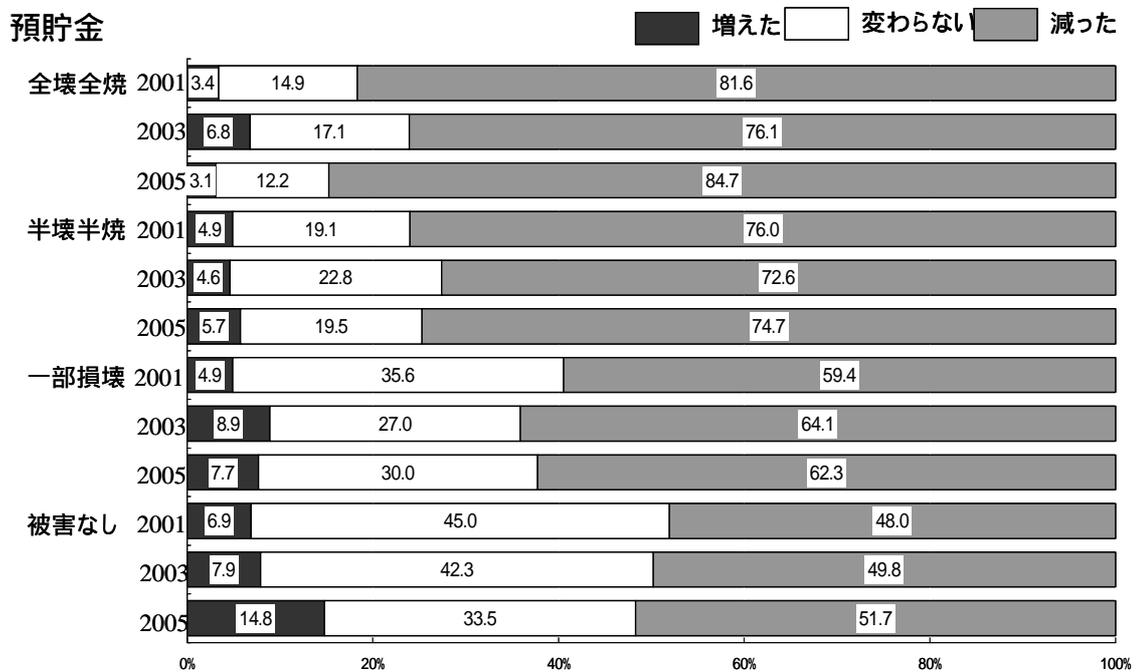


図 1-24 2001年・2003年・2005年調査 家屋被害程度別預貯金の比較

イ．支出細目と家屋被害程度との関連性

・家屋被害程度別に、支出細目の支出パターンを見ると、2001年調査・2003年調査と同様に、「ふえる一方」型、「やりくり」型、「けずる一方」型の3パターンに分類された。

2005年調査回答者における家屋被害程度別の支出細目の回答傾向に対して、クラスター分析を行ったところ、3パターンが明らかとなった。各パターンについて2001年調査・2003年調査と同様に、「ふえる一方」型「やりくり」型「けずる一方」型と名づけた(図1-25)。

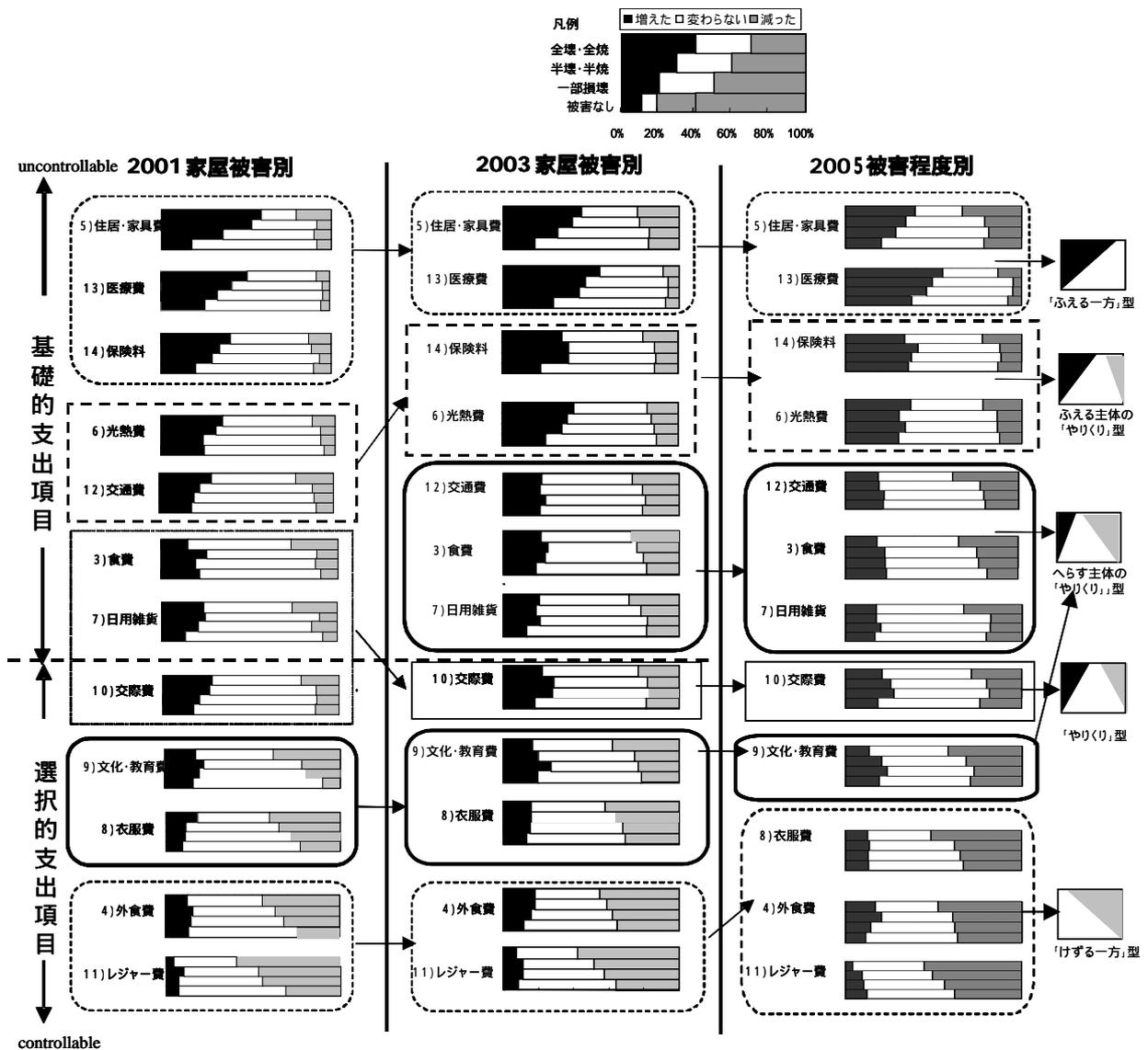


図 1-25 2001年調査・2003年調査・2005年調査 家屋被害程度別支出パターン(支出細目別)

a) 「ふえる一方」型

震災から 10 年たった調査時点でも、「住居・家具費」「医療費」については、家屋被害程度の大きかった人ほど、支出が増えた人が多かった。たとえ、くらしむきに変化があったとしても、個人裁量のやりくりでは減らすことのできないのが、これらの支出細目の特徴といえる。

b) 「やりくり」型

「やりくり」型は、2001 年調査・2003 年調査と同様、「やりくりをしても支出が増えた」パターン、反対に「やりくりをして支出を減らした」パターン、「支出の増減がほぼ拮抗した」パターンの 3 つに分類できた。

やりくりをしても増えた経費は、「保険料」「光熱費」であった。反対に減らした経費は、「交通費」「食費」「日用雑貨」「文化・教育費」であった。2003 年調査ではこのパターンに分類された「衣服費」は 2005 年では「c. けずる一方」型に分類された。また、増減がほぼ拮抗した経費は「交際費」であった。くらしむきを維持するために、各世帯の裁量でやりくりしているのがこれらの細目であるが、支出を減らす方向でやりくりしている人が多いことが明らかとなった。

c) 「けずる一方」型

「けずる一方」型に分類されたのは、2001 年調査・2003 年調査と同様、「外食費」「レジャー費」であった。また「衣服費」が 2005 年調査では「けずる一方」型に分類された。多くの人が、生活のうるおい部分であるこれらの支出を減らし、増やした人は顕著に少なかった。これらの細目を減らした人が多いという事実から、家屋被害の大きかった人ほど、生活からゆとりや余裕が奪われ、震災からの復興を実感するまでには至っていない状況がうかがわれた。

ウ．2001年調査・2003年調査・2005年調査の比較

- ・4年間の支出パターンの全体傾向には、大きな差はなかった。
- ・5つの支出細目（保険料・交通費・食費・日用雑貨費・衣服費）については、2001年からの4年間の間に、支出を減らした人が多かった。

2001年調査・2003年調査・2005年調査における支出細目のパターンを比較すると（表1-7）、4年間の基本的な支出のトレンドに変化はなかった。

しかし、次の5細目については、4年間の間に支出パターンが「へらす」方向に変化した。（左から順に、2001年、2003年、2005年調査でのパターン）

保険料：「ふえる一方型」 「ふえる主体のやりくり型」 「ふえる一方型」
 交通費：「ふえる主体のやりくり型」 「へらす主体のやりくり型」 「同左」
 食費、日用雑貨費：「やりくり型」 「へらす主体のやりくり型」 「同左」
 衣服費：「へらす主体のやりくり型」 「同左」 「けずる一方型」

以上から、生活に密着した支出（保険料・交通費・食費・日用雑貨費）をより切りつめるとともに、生活の選択肢としての消費（衣服費）についてもさらに減らして、くらしむきのバランスをとろうとしていることが明らかになった。景気低迷の影響がまだ個人消費に影響を与えている結果であることがうかがわれる。

表1-7 2001・2003年・2005年調査 家屋被害程度別支出パターン（支出細目別）

	支出細目	2001年調査支出パターン	2003年調査支出パターン	2005年調査支出パターン
1	住居・家具費	ふえる一方型	ふえる一方型	ふえる一方型
2	医療費	ふえる一方型	ふえる一方型	ふえる一方型
3	保険料	ふえる一方型	ふえる主体のやりくり型	ふえる一方型
4	光熱費	ふえる主体のやりくり型	ふえる主体のやりくり型	ふえる主体のやりくり型
5	交通費	ふえる主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型
6	食費	やりくり型	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型
7	日用雑貨	やりくり型	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型
8	交際費	やりくり型	やりくり型	やりくり型
9	文化・教育費	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型
10	衣服費	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型	けずる一方型
11	外食費	けずる一方型	けずる一方型	けずる一方型
12	レジャー費	けずる一方型	けずる一方型	けずる一方型

くらしむきと世帯年収との関連性（問 22 付問）

ア．世帯年収と収入・支出・預貯金との関連

- ・ 2003 年調査・2005 年調査においては、収入・支出・預貯金の全体傾向を規定する最も大きな要因は「年収」であった。

2003 年調査・2005 年調査では、2001 年調査にはなかった「年収」についての質問項目を設けた。くらしむきと世帯年収との関係を見ると、年収の額が大きくなればなるほど、収入・預貯金が増えた人が多かった。支出については、年収 1000 万円までは、年収の額が大きくなればなるほど増えた人が多かった(図 1-26, 1-27, 1-28)。前節で明らかになったように、くらしむきと家屋被害程度との関係が小さくなっていることをあわせて考えると、震災後 8 年～10 年が経過した 2003 年調査時点・2005 年調査時点における被災者のくらしむきを規定する最も大きな要因は、家屋被害程度ではなく、世帯ごとの年収であるといえる。

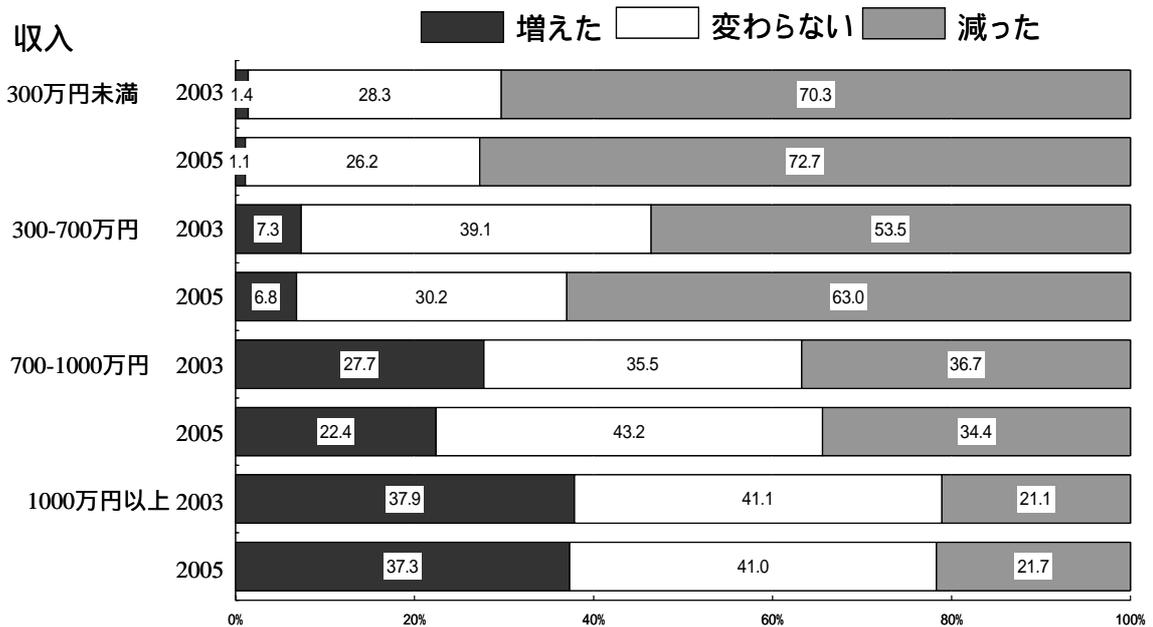


図 1-26 2003 年調査・2005 年調査 世帯年収別収入の比較

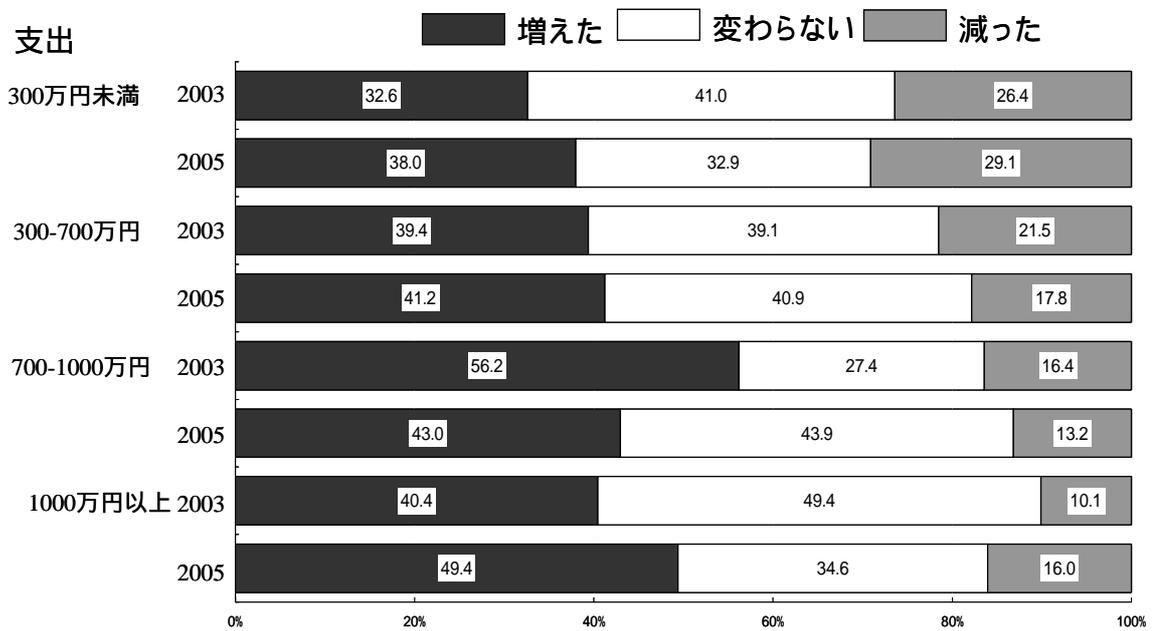


図 1-27 2003 年調査・2005 年調査 世帯年収別支出の比較

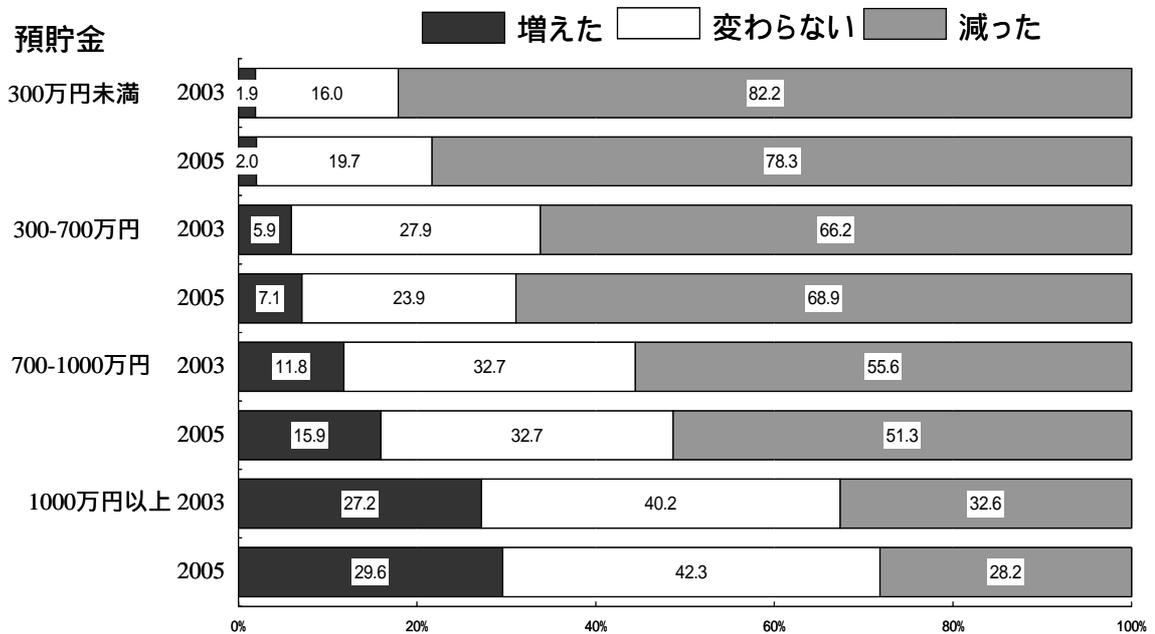


図 1-28 2003 年調査・2005 年調査 世帯年収別預貯金の比較

イ. 2005年調査における支出細目と世帯年収との関連性

- ・世帯年収別に、支出細目のパターンを見ると、「ふえる一方」型、「増やす傾向」にある型、「余裕のある人は増やし、余裕のない人は増やさない」型、「やりくり型」、「けずる一方」型の5パターンに分類された。

世帯年収別の支出細目の回答傾向に対して、クラスター分析をおこなったところ、上記の5つのパターンが明らかとなった。(図1-29)。

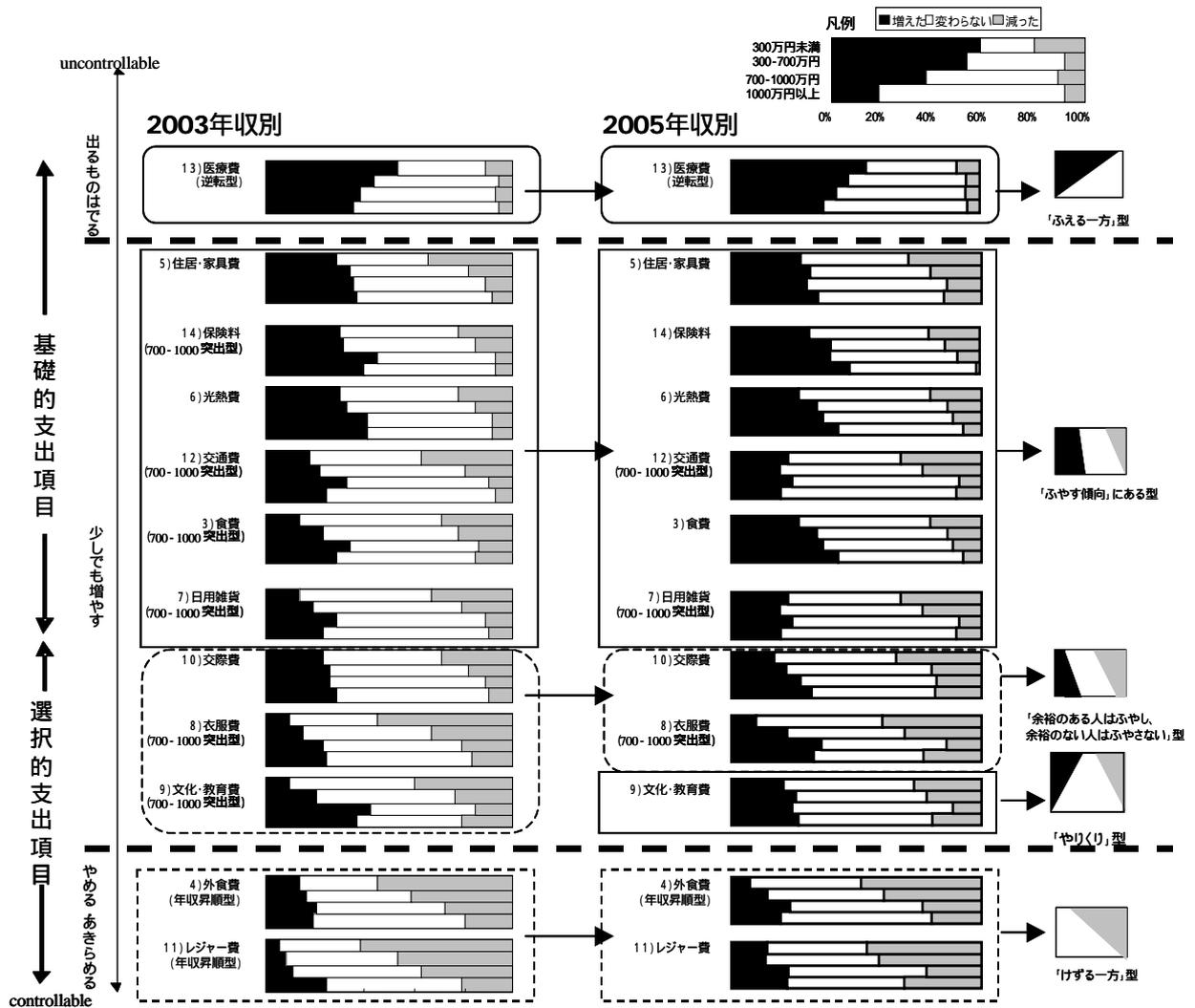


図1-29 2001・2003年調査 年収別支出パターン(支出細目別)

a) 「ふえる一方」型

2003年調査・2005年調査において、低所得者ほど支出が増えた経費は「医療費」であった。たとえ年収が少なくとも、個人の裁量で支出の増減がコントロールできないものであることが特徴である。

b) 「ふやす傾向」にある型

2003年調査・2005年調査において、高所得者ほど支出を「ふやす傾向」にある経費は、「住宅・家具費」「保険料」「光熱費」「交通費」「食費」であった。これらの経費は、年収による支出の差がそれほど顕著ではなく、年収にかかわらず、全体的に支出を増やした人が多かった。これらは、医療費以外の生活に最低限必要な細目であることから、切りつめようとしても難しい状況であったことが示唆された。

c) やりくり型

2003年調査では、2005年調査時点では、「余裕のある人は増、余裕のない人は減」型に分類されていた「文化・教育費」については、その増減が拮抗した。

d) 「余裕のある人は増、余裕のない人は減」型

2003年調査・2005年調査において、生活に余裕のある高所得者ほど支出を増やし、余裕のない低所得者ほど支出を減らした経費は、「交際費」「衣服費」であった。具体的には、年収700万円以上の生活に余裕がある人は、支出を増やした人が多く、700万円以下の人は減らした人が多かった。つまり生活に最低限必要ではないこれらの細目については、余裕のある人ほど支出をふやし、余裕のない人は減らしていることが明らかとなった。

e) 「けずる一方」型

2003年調査・2005年調査において、年収が少ないほど厳しく節約した経費は、「外食費」「レジャー費」であった。低所得者ほど支出を減らした人が顕著に多く、余裕のない生活では、まっ先に削られる細目であることが明らかとなった。また、高所得者でも、支出を増やした人は、相対的に少なく、社会全体の厳しい経済状態を反映していると考えられる。

ウ．2005年調査における世帯年収による支出内容の特徴

- ・「住居・家具費」「医療費」「保険料」「光熱費」「食費」「日用雑貨費」などの生活に密着した経費の支出が増えた人が多かった。

家計調査においては、消費支出を品目別に分類する際、「基礎的支出項目」と「選択的支出項目」の2つに分類して、支出動向を分析する手法が一般的で

ある。基礎的支出項目は、生活に最低限必要で、支出動向が好不況の影響を受けにくい項目である。選択的支出項目は、それ以外の項目であり、支出動向は好不況の影響を受けやすいとされる。2003年調査・2005年調査における12細目においては、基礎的支出項目が「住居・家具費」「医療費」「保険料」「光熱費」「食費」「日用雑貨費」の7項目、選択的支出項目が、「文化・教育費」「衣服費」「交際費」「外食費」「レジャー費」の5項目である。

2003年調査・2005年調査において、基礎的支出項目、選択的支出項目に着目してみると、基礎的支出項目の7項目すべてが、「ふえる一方型」「ふやす傾向にある型」に分類され、これら生活に密着する支出が「増えた」と答えた人が多かった。また2003年調査では見られなかった傾向であるが、選択的支出項目の中から「文化・教育費」について年収に関係なく全体的に増減が拮抗した。本来、好不況の影響を受けることが少ない基礎的支出項目を増やし、さらに「文化・教育費」についても、全体的にやりくりを行っている傾向が明らかとなり、厳しいくらしむきがうかがわれる。

エ．回答者の年収における支出パターンの特徴

・支出が「増えた」に着目すると、「逆転型」「年収700-1000万円突出型」「年収昇順型」の3パターンに分類された。

a) 「逆転型」

2003年調査・2005年調査において、年収の少ない人ほどその支出を増やしている項目は「医療費」であった。これはライフステージと密接な関係があると考えられる。すなわち、比較的収入の少ない高齢者等（年金所得者等）が、医療費等を増やしていることなどが考えられ、この層への何らかの配慮が今後とも必要であることを示唆している。

b) 「年収700 - 1000万円突出型」

2003年調査においては「保険料」「交通費」「食費」「日用雑貨費」「衣服費」「文化・教育費」については、年収1000万円以上よりも年収700 - 1000万円の層の方が支出を増やしていた。2005年調査では、こうした突出型の支出細目は、「交通費」「日用雑貨費」「衣服費」の3つであった。

c) 「年収昇順型」

年収が多ければ多いほど支出を増やした項目は、2003年調査においては「外食費」「レジャー費」であった。2005年調査においては「外食費」のみであった。「レジャー費」に関しては2005年調査では「年収昇順型」の傾向が見られなくなった。

2 . 震災による仕事への影響

本節では、1)震災後の転職・転廃業とその理由、2)震災による職場への影響、3)震災後の年商 / 売上げの変化とその理由について述べた。

「震災後の転職・転廃業とその理由」では、震災前と調査時点(2005年1月)を比較し、転職・転廃業の人の割合とその原因が震災によるものなのか否かを明らかにした。

「震災による職場への影響」では、震災で職場が影響を受けたかどうか、被害総額がどの程度か、被害総額の年商に対する割合がどの程度かについて職業別に明らかにした。

「震災後の年商・売上げの変化とその理由」では、震災後に年商・売上げがどのように変化したのかについて、その理由もあわせて明らかにした。

1) 震災後の転職・転廃業とその理由(問21)

- ・震災が原因で転職・転廃業をした人は、全体の7.3%であるのに対して、震災以外が原因で転職・転廃業した人は全体の20.0%であった

震災後の転職・転廃業の状況をみると(図1-30)、震災後も震災前と同じ仕事を続けている人が27.1%、震災が原因で転職・転廃業をした人が7.3%(退職・廃業:4.0%、転職・転業:3.3%)、震災とは無関係な転職・転廃業をした人が20.0%(退職・廃業:14.5%、転職・転業:5.5%)であった。

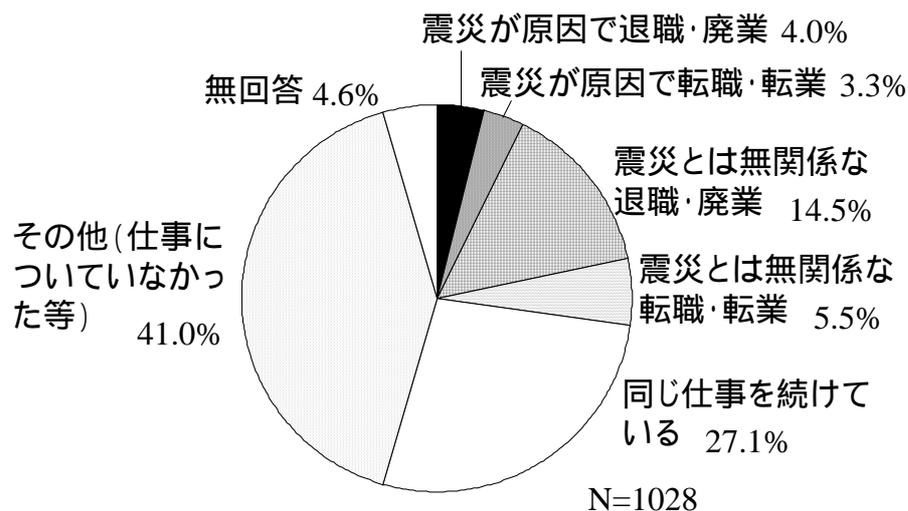


図 1-30 震災前と現在を比較した転職状況

2) 震災による職場への影響 (問 22)

震災による職場への影響

- ・職場が震災によって影響を受けたのは、どの業種も全体の7割前後だった。

震災による職場への影響をみると(図 1-31)、どの業種も70%前後の回答者が「震災時に勤めていた仕事場は、震災によって何らかの影響を受けた」と回答した。特に、商工自営業は80.0%と最も高かった。

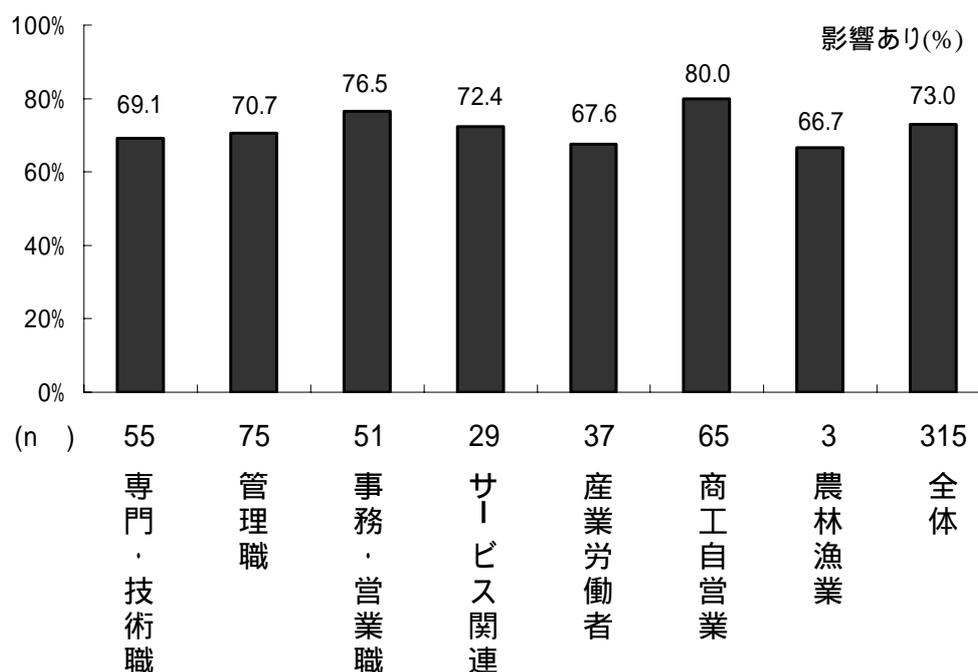


図 1-31 震災による職場への影響

被害総額

- ・1億円以上の大きな被害を受けたのは、管理職、事務・営業職、産業労働者の職場が多かった。一方で、商工自営業の職場の被害総額は相対的に小さかった。

職場における被害総額をみると(図 1-32)、職業によって大きく違っていることがわかった。

管理職の42.0%、事務・営業職の24.1%、産業労働者の23.8%が、「職場は1億円以上の被害を受けた」と回答した。

一方、商工自営業で「1億円以上の被害を受けた」のは8.0%であり、100万円未満の被害が28.0%、100万円～1000万円の被害が30.0%だった。

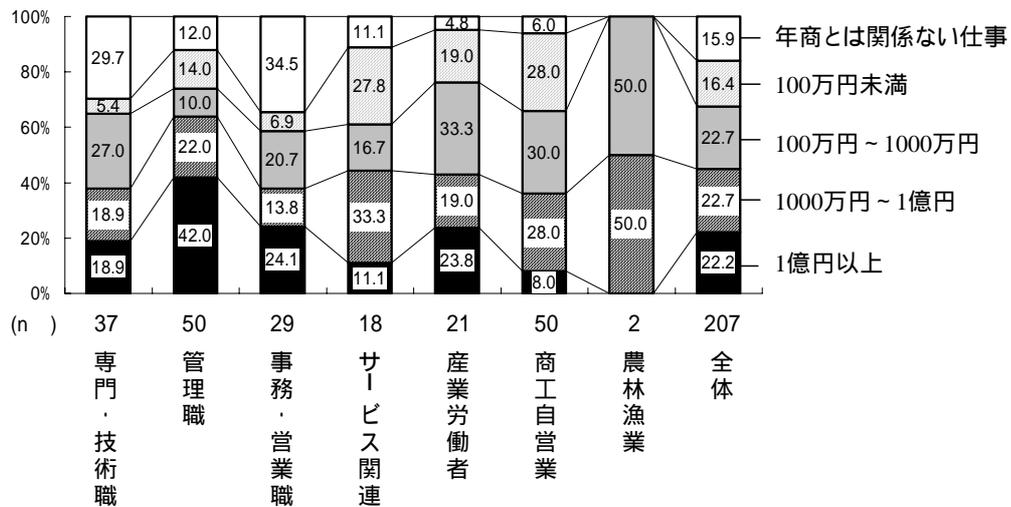


図 1-32 職場における被害総額

被害総額の年商に対する割合

- ・職場の被害総額の年商に対する割合が大きいのは、サービス関連従事者や商工自営業者の職場であった。

職場における被害総額が年商のどれくらいの割合にあたるかをみると(図 1-33)、サービス関連従事者や商工自営業者の職場でその割合が大きかった。

サービス関連従事者の職場では、年商の100%以上の被害を受けた人が16.7%、年商の30-100%の被害を受けた人が33.3%であった。

商工自営業者では、年商の100%以上被害を受けた人が16.1%、年商の30-100%の被害を受けた人が22.6%であった。

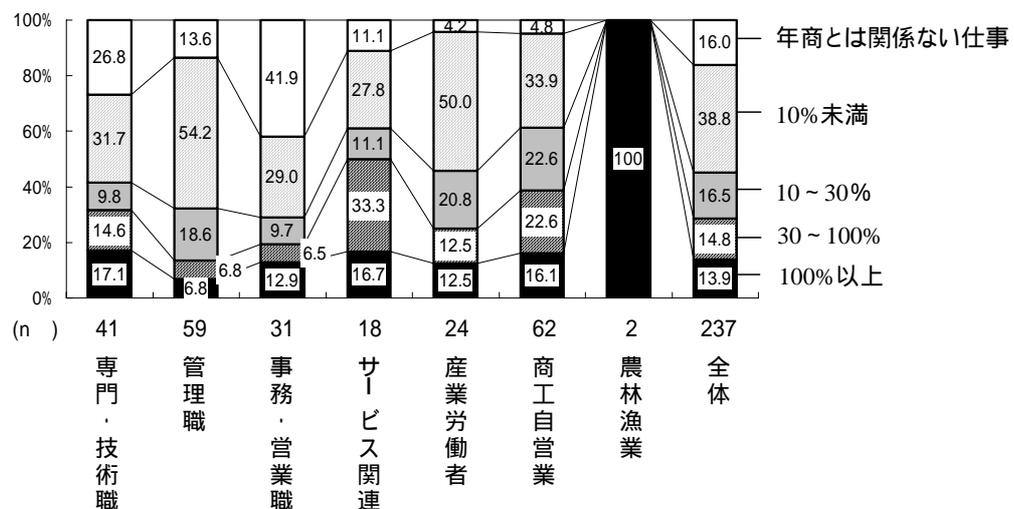


図 1-33 職場被害総額の年商における割合

3) 震災後の年商 / 売り上げの変化とその理由 (問 23)

売上・業績の推移と震災の影響について、震災の前後でみるとどのようなパターンになるのかについて、6つのパターンの中からどのパターンに当てはまるのかを質問した(図 1-34)。

全体傾向

- ・売上・業績が悪化しているのは全体の5割強であり、震災の影響で悪化しているのは約2割だった。

売上・業績の変化の全体傾向を見ると(図 1-34)、売上・業績が悪化しているのは、全体の52.2%だった。震災の影響で悪化しているのは、20.4%、震災以外の要因で悪化しているのは31.8%だった。一方、売上・業績が順調なのはわずか3.8%だった。

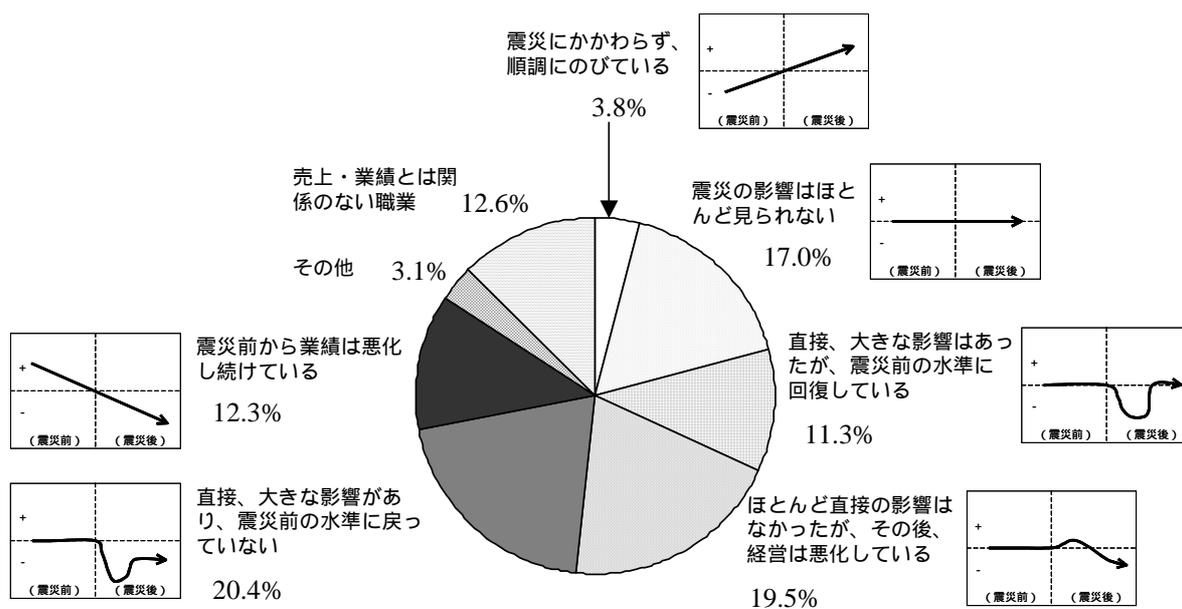


図 1-34 震災による仕事場への影響

職業別の状況

・売上・業績が悪化しているのは、商工自営業、サービス関連従事者、産業労働者が多かった。特に、商工自営業は、震災による影響が大きかった。

職業別に見ると（図 1-35）、震災にかかわらず順調にのびているのは、産業労働者(8.6%)、専門・技術職(5.1%)であった。

一方、直接、大きな影響があり、震災前の水準にもどっていないのは、商工自営業(30.9%)であり、また、ほとんど直接の影響はなかったが、その後、経営は悪化しているのは、商工自営業(32.4%)、産業労働者(25.7%)であった。

震災前から業績は悪化し続けているのは、サービス関連従事者(20.6%)、専門・技術職(18.6%)、商工自営業(16.2%)であった。

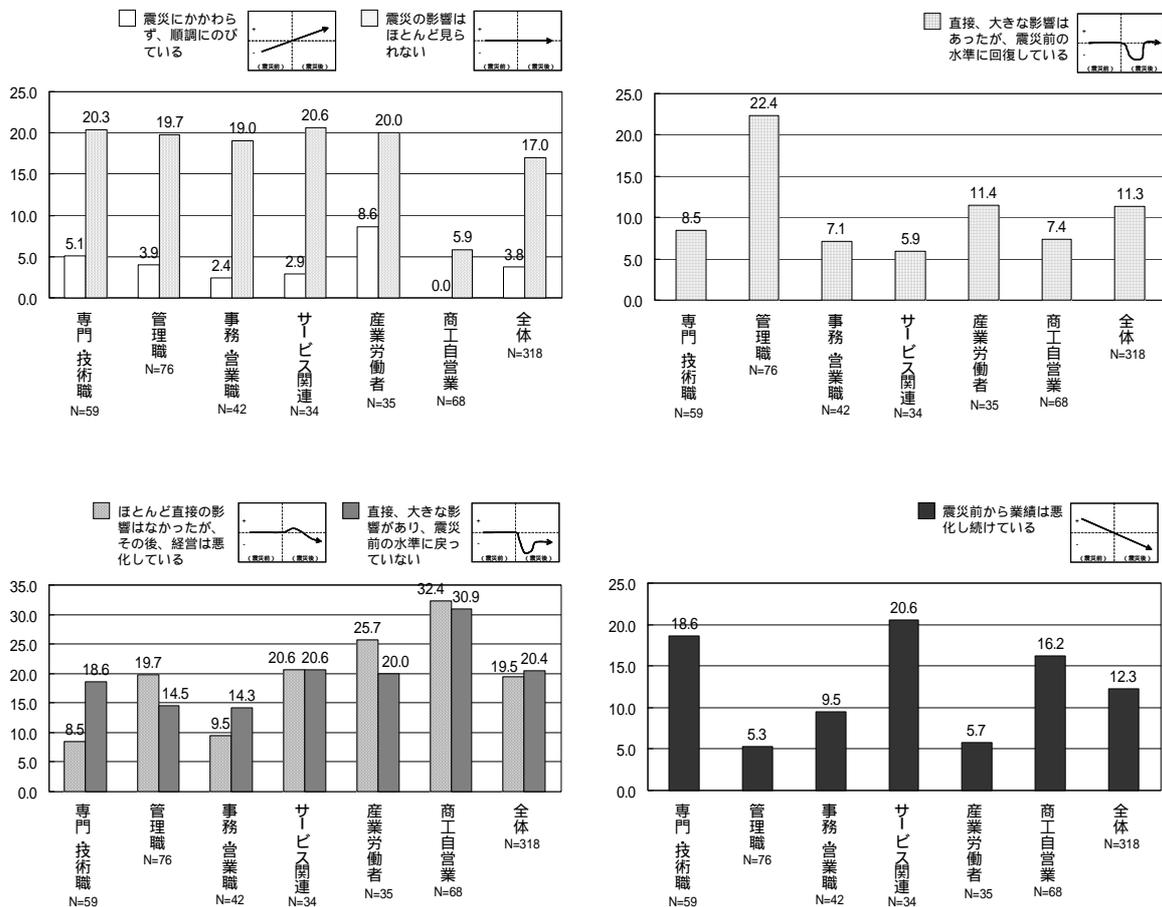


図 1-35 震災による仕事場への影響（職業別）

現在の売上の震災前との比較

・商工自営業の 64.6%、サービス関連従事者の 45.0%は、震災前より売上が 3 割以上減少していた。

震災時の売上を 100%とすると、現在の売上は何%になるのかについて尋ねたところ（図 1-36）全体では 5 割以上減が 22.0%、3～5 割減は 1.9%、1～3 割減は 5.7%、1 割減～同程度が 34.6%、同程度(100%)以上が 13.2%であった。

職業別にみると、商工自営業とサービス関連従事者の売上減少率が大きいことがわかった。商工自営業の 32.3%が 5 割以上減、同じく 32.3%が 3～5 割減であった。また、サービス関連従事者も、20.0%が 5 割以上減、25.0%が 3～5 割減であった。

このように、商工自営業者の 64.6%、サービス関連従事者の 45.0%が売上を 3 割以上減少させ、厳しい状況にあることがわかった。

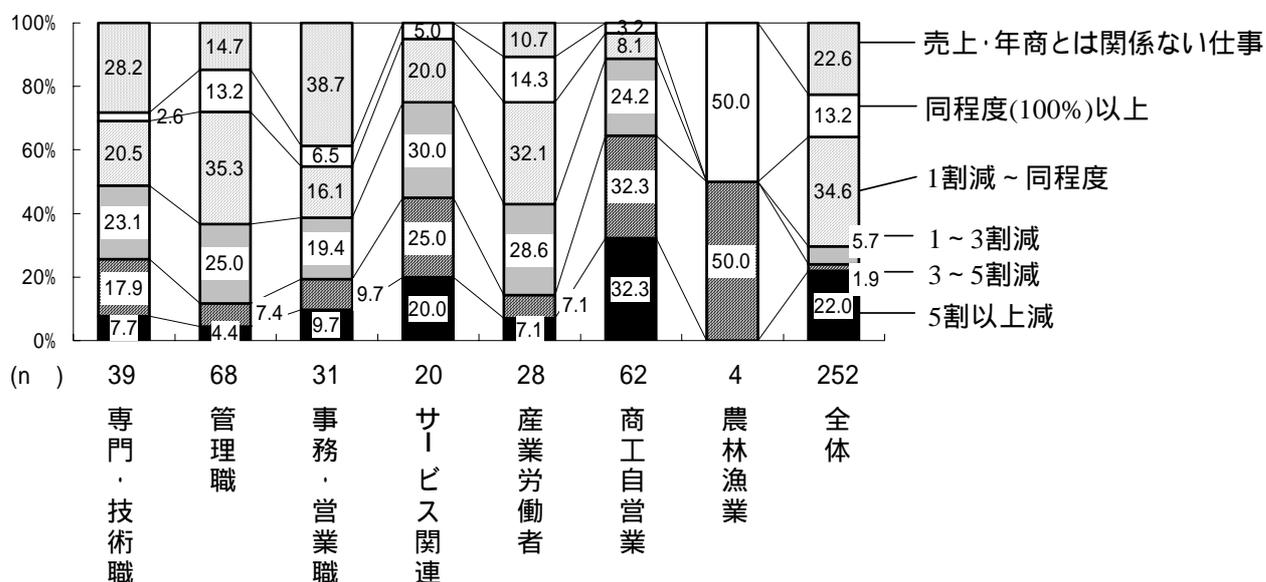


図 1-36 震災前を 100%とした時の現在の売上

第3章 生活の再建

1. 生活復興カレンダー（問32）

本節では、被災者の時系列的な生活復興過程、すなわち「生活復興カレンダー」について明らかにした。

震災によって被災者は、それまでの日常とは違う新しい現実の中に放り込まれ、その中で壊れてしまった生活を立て直し、新たな日常生活を確立しなければならなかった。

しかしながら、このような事実は誰もが知っているものの、「実際に被災者が、どのような時期に、どのようなことについてどのように考え、どのように生活復興を成し遂げていったのか」という生活復興過程については、インタビュー等による個々の事例は存在するものの、その全体像は明らかになっていない。

そこで2003年調査から、生活復興に関する被災者の気持ちや行動が、震災発生後、時間とともにどのように変化していったのかを尋ねることで、被災者の生活復興過程の全体像を明らかにすることを試みた。

具体的には、生活復興の節目となりうる6つの気持ち・行動について、それらの気持ち・行動がいつ頃起こったのかを振り返ってもらい、震災発生以降の「カレンダー」をつけるかたちで回答してもらった。特に2005年調査では、より長期的な生活復興過程を明らかにするために、2項目のみを2003年調査から踏襲し、4項目を新たに設定して尋ねた。

質問項目とした生活復興の節目となりうる気持ち・行動は、「仕事/学校がもとに戻った」「すまいの問題が最終的に解決した」「家計への震災の影響がなくなった」「毎日の生活が落ちついた」「自分が被災者だと意識しなくなった」「地域経済が震災の影響を脱した」の6つである。

- ・過半数の人の「仕事/学校がもとに戻った」のは、震災後1ヶ月～2ヶ月だった。
- ・過半数の人の「すまいの問題が最終的に解決」し、「毎日の生活が落ちついた」のは震災半年後だった。
- ・過半数の人が「家計への震災の影響がなくなった」「自分が被災者だと意識しなくなった」と感じたのは、震災1年後だった。
- ・過半数の人が「地域経済が震災の影響を脱した」と感じたのは震災10年後だった。

生活復興の節目となりうる気持ち・行動について、震災からの時間経過にともなってどれくらいの人々が「そう思った/行った」のかについて分析を行った。図1-37の横軸に、震災発生後の時間経過を表し(対数軸で時間経過を表現)、縦軸にその時点までに「そう思った/行った」と回答した割合を表した。この割合が50%を超えた(全体の半数が「そう思った/行った」)時期を、「その気持ち(行動)が感じられた(行われた)」時期と定義して分析した(無回答を除く)。

「仕事/学校がもとに戻った」人が50%を超えたのは、震災から1ヶ月が経過した平成7年2月(1000時間)であった(54.1%)。調査時点の2005年では94.2%だった。

「毎日の生活が落ちついた」と「すまいの問題が最終的に解決した」人が50%を超えたのは、それぞれ平成7年7月、9月(55.3%, 52.2%)であった。すまいの問題が最終的に解決することで、毎日の生活が落ちついたと感じる人が多かったことが考えられる。調査時点での2005年では、それぞれ95.1%、93.9%であった。

「家計への震災の影響がなくなった」人が50%を超えたのは、震災から1年が経過した平成8年(10000時間)であった(59.2%)。調査時点の2005年では76.9%であった。

「自分が被災者だと意識しなくなった」人が50%を超えたのも、平成8年であった(51.5%)。調査時点の2005年では75.5%であった。前回調査では、2003年1月時点で82.8%の人が「自分が被災者だと意識しなくなった」と回答していたが、今回は調査時点が震災から10周年の節目にあたったことから、前回に比べて、自らを被災者として意識した人がやや増加したと考えられる。しかしながら、2003年、2005年調査の結果から、被災者の8割前後の人は、自分が被災者だと意識しなくなっていることが改めて実証された。

一方で、「地域経済が震災の影響を脱した」と感じている人は、調査時点である2005年に過半数を超えた(52.6%)ことがわかった。震災から10年が経過した被災地においても、地域経済には震災の影響が今なお残っていることがわかった。

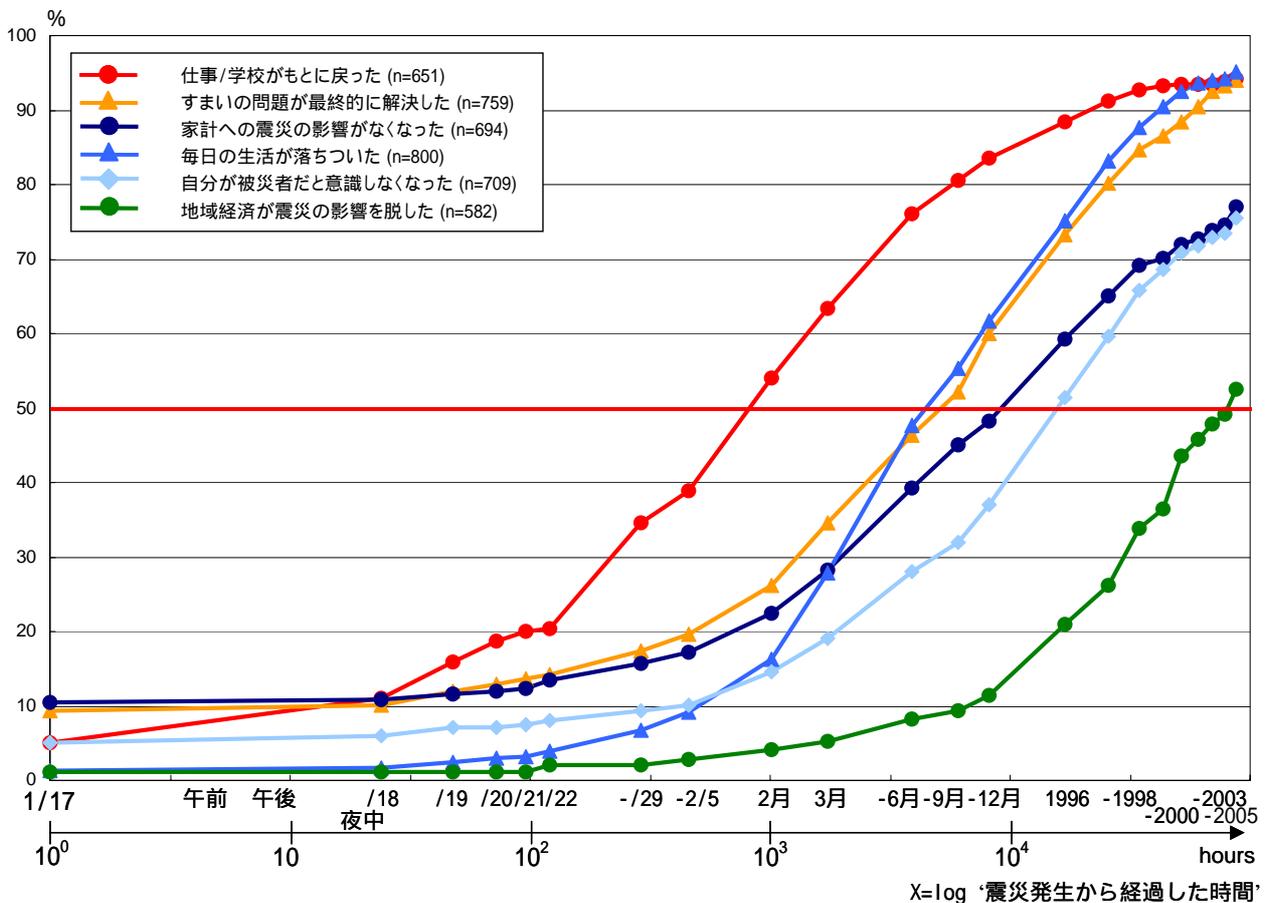


図 1-37 生活復興カレンダー (2005年)

・「自分が被災者だと意識しなくなった時期」については、家屋被害程度が強く影響していた。

「自分が被災者だと意識しなくなった」時期は、家屋被害程度によって大きな差が見られた(図 1-38)。

「自分が被災者だと意識しなくなった」人が 50%を超えた時期は、被害なし被災者は震災後 3 ヶ月が過ぎた 4-6 月、一部損壊被災者は 1996 年、半壊被災者は 1998 年、全壊被災者は 2005 年であった。

震災から丸 10 年を迎えた調査時点(2005 年 1 月)では、層破壊被災者の過半数である 56.4%、全壊被災者の 50.0%、半壊被災者の 34.0%が「自分は被災者である」と認識していることがわかった(一部損壊被災者は 16.9%、被害なし被災者は 8.8%)。

このことから、震災後 10 年を迎えた調査時点においても、家屋被害程度の大きかった被災者には、震災の影響が残っていることがうかがえる。なお、この傾向は、2003 年調査と同様であった。

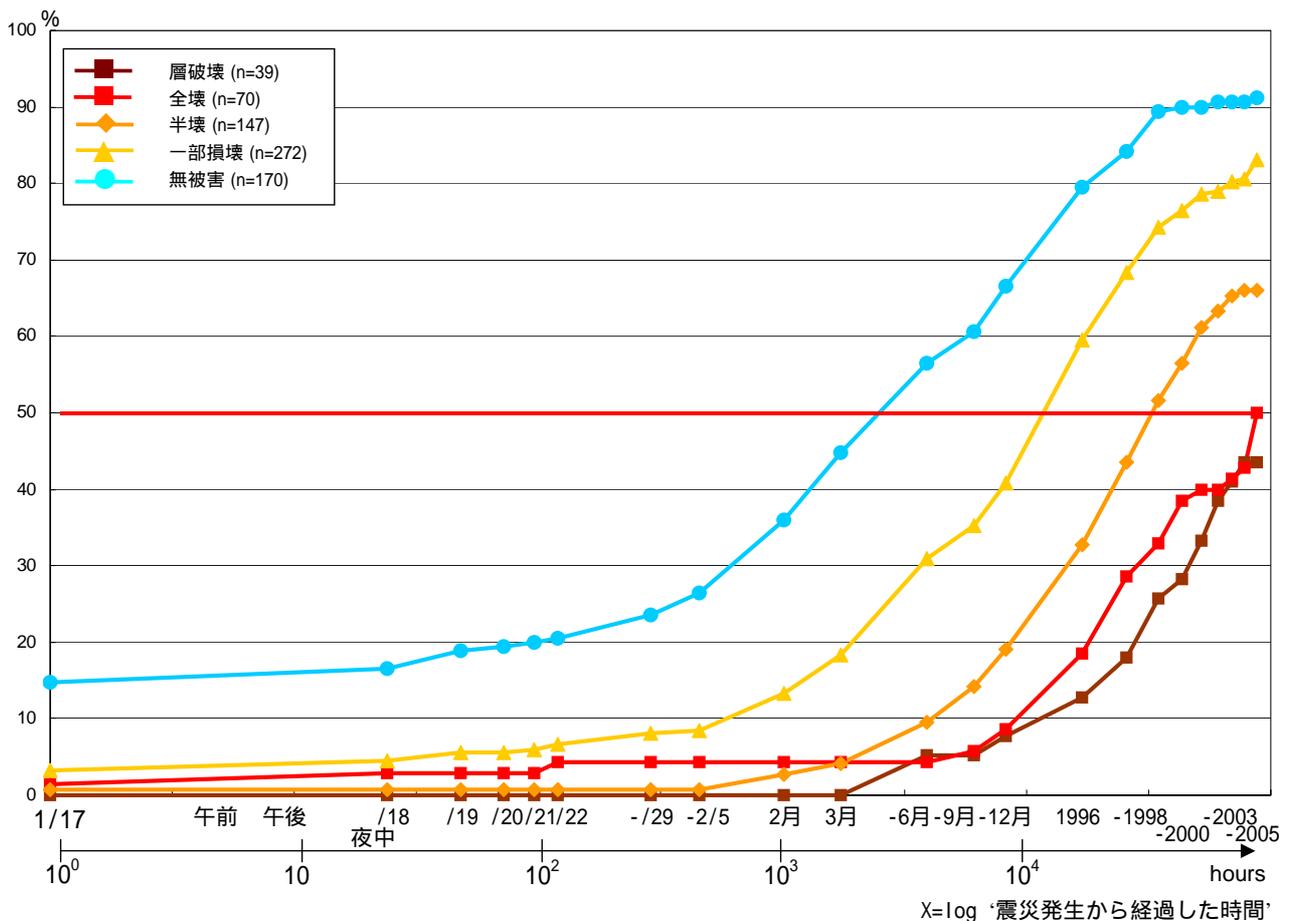


図 1-38 「自分が被災者だと意識しなくなった」時期(家屋被害程度別)

2. 震災体験に対する意識（問 29）

「震災からこれまでの10年をふり返ると、その間の体験について、あなたはどのような印象をお持ちですか」と尋ね、以下の13の体験について「まったくそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも言えない」「どちらかといえばそう思わない」「まったくそう思わない」の5選択肢で回答を求めた。

得られた回答について、「まったくそう思う」と回答した人が多い順に並べたのが、図1-39である（無回答除く）。

- ・「震災での体験は得がたい経験だった」など、震災体験の意味を肯定的にとらえている人が多く、「震災での体験は過去から消したい」など、震災体験の意味を否定的にとらえている人は比較的少なかった。

「まったくそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した人が多かったのは、「震災での体験は得がたい経験だった」（80.1%）、「人生には何らかの意味があると思う」（72.4%）、「生きることは意味があると強く感じる」（71.6%）などであり、震災体験の意味を肯定的にとらえている人が多かった。

また、「まったくそう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した人が多かったのは、「震災の話は聞きたくない」（49.3%）、「震災での体験は過去から消したい」（44.5%）、「震災については触れてほしくない」（41.7%）などであり、震災体験の意味を否定的にとらえている人は比較的少なかった。

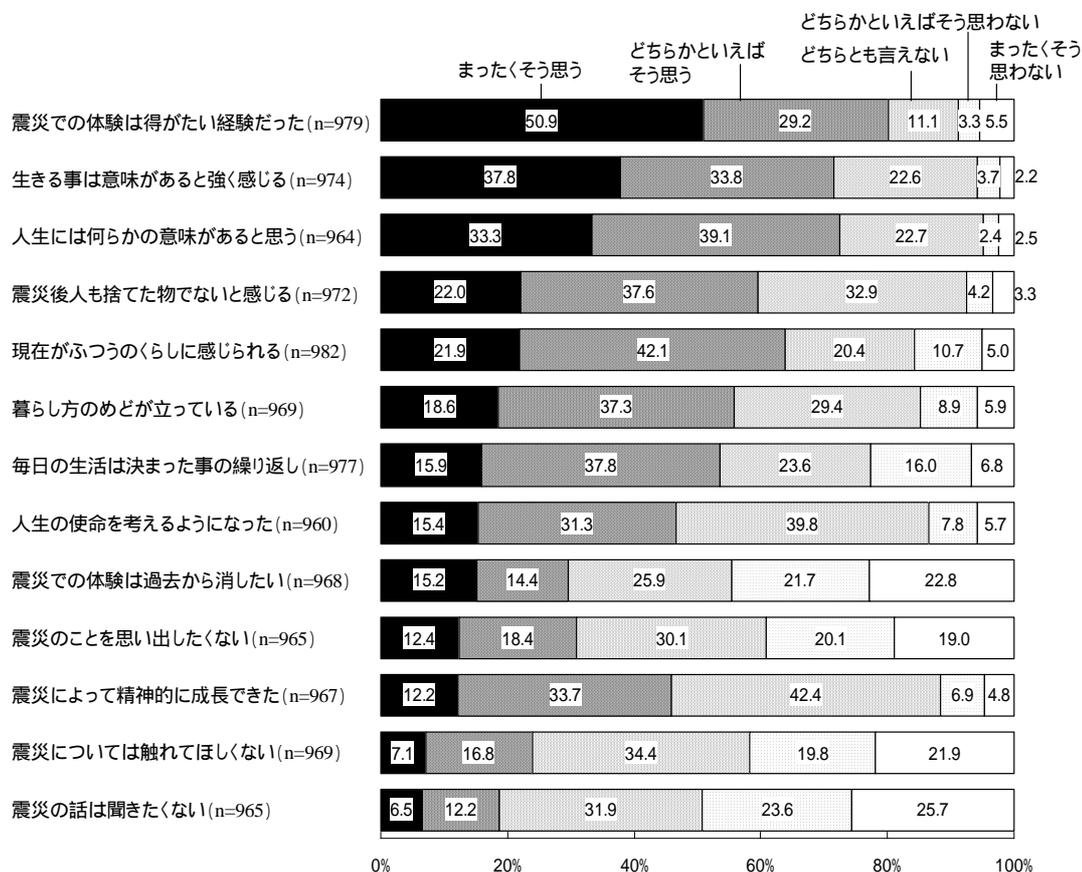


図 1-39 震災体験に対する意識

3. こころとからだの変化 (問 27)

こころとからだについては、その健康度を測るために、最近1ヶ月にどのようなストレス反応を経験していたのかをたずねた。

具体的には、「あなたは最近1ヶ月の間(平成16年12月～平成17年1月)につぎにあげた『こころやからだの状態』をどのくらい体験しましたか」として12項目をあげ、「まったくない-いつもあった」の5段階評定で回答を求めた。

これらの項目は、1995年12月に行われた日本赤十字社の調査(参考文献1)におけるストレス反応の影響度を測った全111項目についての主成分分析の結果、第一主成分における負荷量の高いものについて、こころとからだの領域ごとに抽出した12項目である。得られた回答に対して因子分析を行った結果、2つの因子が抽出された。

第1因子は「こころのストレス」であり、第2因子は「からだのストレス」である(表1-8)。

この「こころのストレス」「からだのストレス」については、2001・2003・2005年調査でも同様の質問項目を設けてきたが、同様の分析結果が得られており、こころとからだのストレスを測る尺度としての安定性が証明されたといえる。これらの質問項目を用いることで、その時々社会に暮らす人々が持っているストレスの度合いを測ることが可能である。

参考文献

- 1) 日本赤十字社：大規模災害発生後の高齢者生活支援に求められるメンタル・ヘルス・ケアの対応に関する調査研究報告書、日本赤十字社、1996

表 1-8 こころとからだのストレス・因子分析の結果

	こころの ストレス因子	からだの ストレス因子	共通性
1 気分が沈む	.860	.275	.713
2 寂しい気持ちになる	.826	.252	.747
3 次々とよくないことを考える	.796	.303	.814
4 気持ちが落ち着かない	.787	.305	.726
5 集中できない	.754	.346	.688
6 何をするのもおっくうだ	.695	.354	.608
7 息切れがする	.252	.844	.755
8 動悸がする	.266	.827	.776
9 胸がしめつけられるような痛み	.233	.713	.556
10 めまいがする	.277	.679	.562
11 頭痛、頭が重い	.344	.662	.538
12 のどがかわく	.337	.566	.434
固有値	4.22	3.69	
寄与率	35.21	65.98	

2001年、2003年調査との比較

2001年調査、2003年調査、2005年調査で、「こころとからだのストレス」を問う質問項目12項目を設定し、「まったくない、まれにあった、たまにあった、たびたびあった、いつもあった」の5選択肢を与えた。

回答者の回答から、「まったくない」と答えたものに1点、「まれにあった」に2点、「たまにあった」に3点、「たびたびあった」に4点、「いつもあった」に5点を与え、各回答者の得点を足し合わせることで、各回答者の「こころのストレス得点」「からだのストレス得点」とした。このように得点化することで、被災者のこころ・からだのストレス度合いの変化を見ることができた。

「こころのストレス」「からだのストレス」について、2001年・2003年・2005年調査における回答者の得点分布を示したものが、図1と図2である。

- ・こころ・からだのストレスは、全体傾向として増加の傾向を示している。

「こころのストレス」については、2001年から2003年にかけて増加傾向が見られたが、その後変化は見られなかった。(図1-40)

「からだのストレス」については、2001年から2003年にかけて増加傾向が見られたが、2005年にかけては減少傾向が見られた。(図1-41)

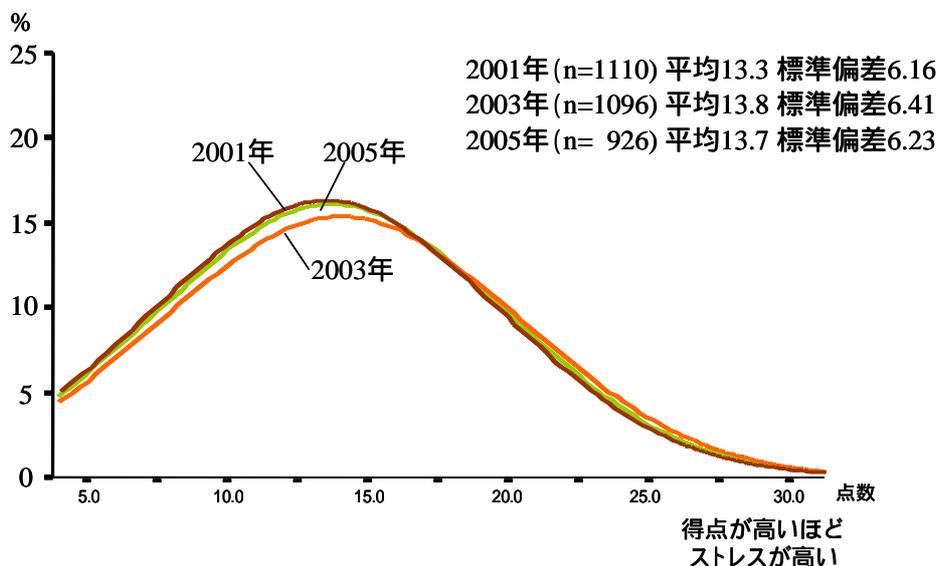


図1-40 こころのストレス・全体傾向の比較

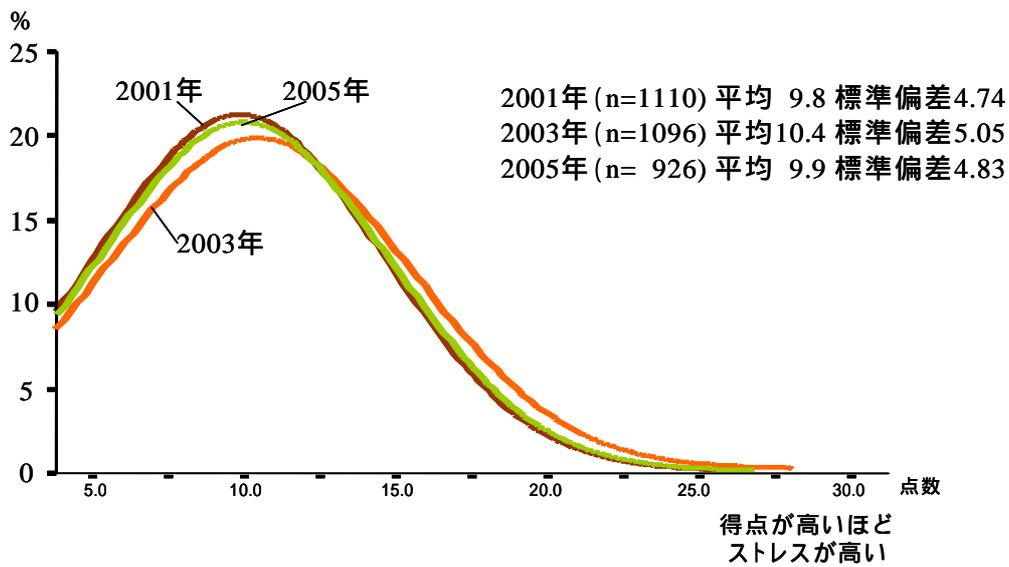


図 1-41 からだのストレス・全体傾向の比較

属性との関連

- ・高年世代のからだのストレスは若中年世代に比べて高かった。

「こころのストレス」「からだのストレス」とも、性別とは有意な(統計的に意味のある)関連性は見られなかった。

世代との関連では、「こころのストレス」と世代との関連性は見られなかったが、「からだのストレス」と世代との関連性が見られた。

60代以上の高年世代のからだのストレスは、20・30代、40・50代の若中年世代に比べて高かった。その傾向は、2001年・2003年調査でも同様であった。

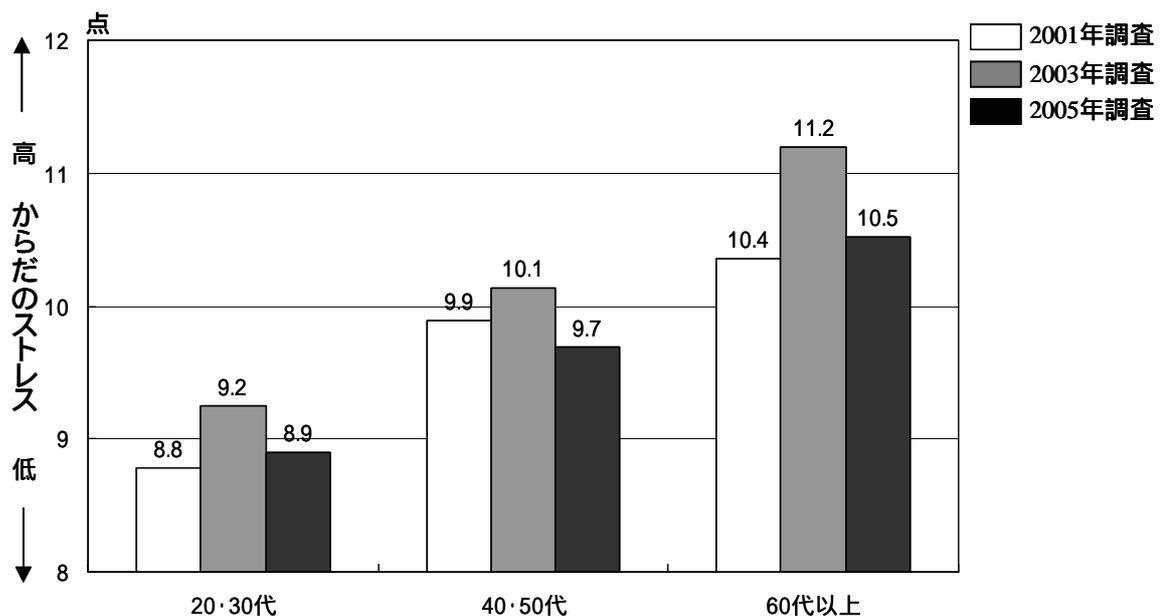


図 1-42 世代とからだのストレス

家屋被害程度との関連

- ・家屋被害程度が大きい人ほど、こころとからだのストレスは高かった。

2001年、2003年、2005年調査とも、家屋被害の程度が大きい人ほど、「こころのストレス」「からだのストレス」ともに高かった。特に、家屋が全壊全焼した人については、2001年、2003年、2005年と年が経るにしたがって、からだのストレス、こころのストレスともに増加傾向が見られた。一方、家屋被害がなかった人は、3調査にわたってほとんどストレスは安定して低い値で推移していた。このことから、大きな家屋被害を受けた人ほど、ストレスはなかなか軽減されず、むしろ増大する傾向があることが推測できる。

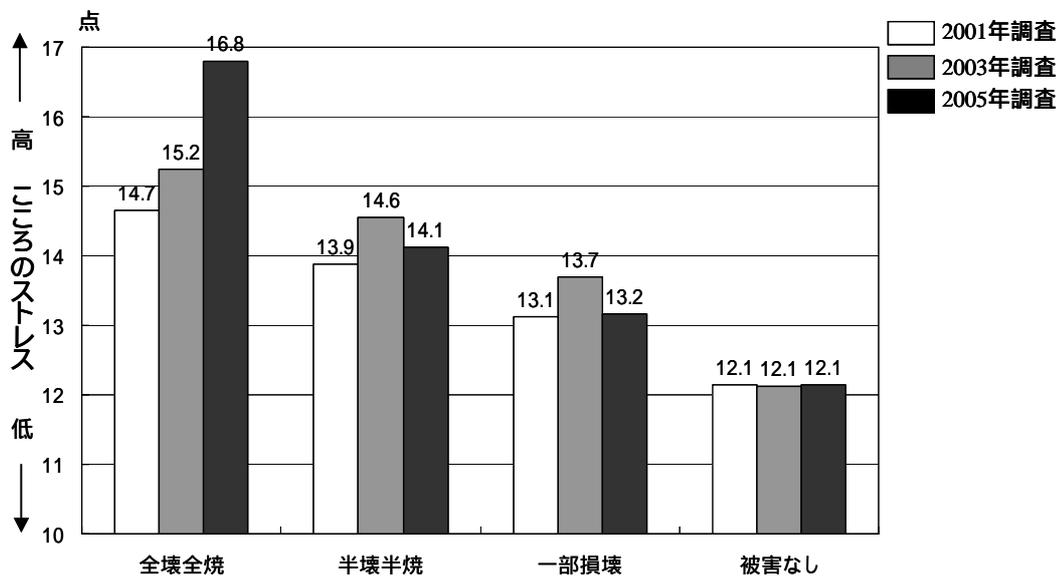


図 1-43 家屋被害程度とこころのストレス

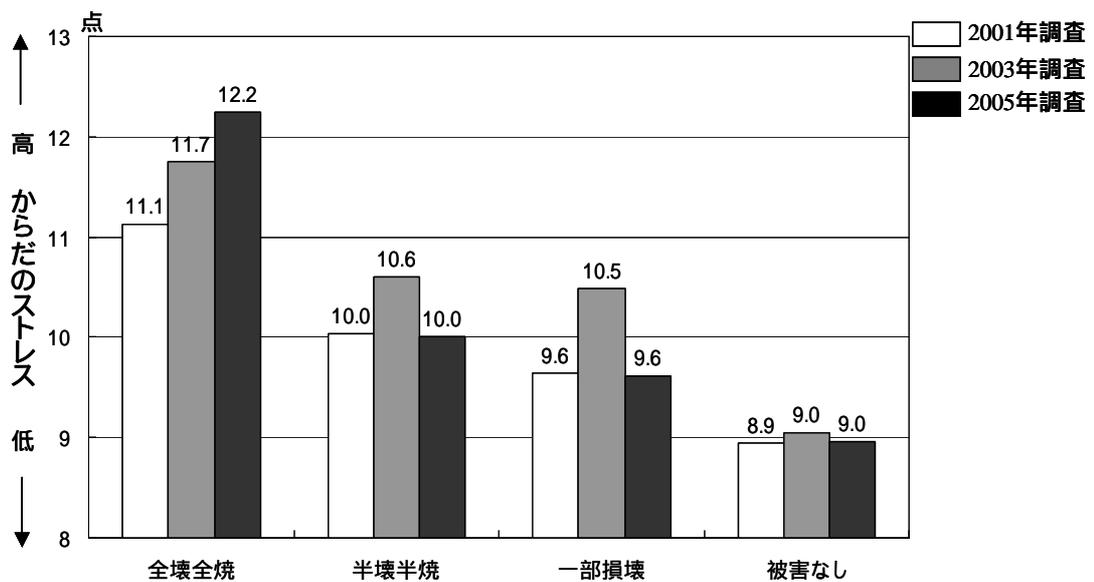


図 1-44 家屋被害程度とからだのストレス

世帯年収との関連

- ・世帯年収の高低が、こころ・からだのストレスに影響を与えている。

こころとからだのストレスと世帯年収との関連をみると、年収が「300万円未満」の人のストレスが最も高くなっていた。世帯年収が300万円以上の人のストレスは、全体平均以下で低かった。

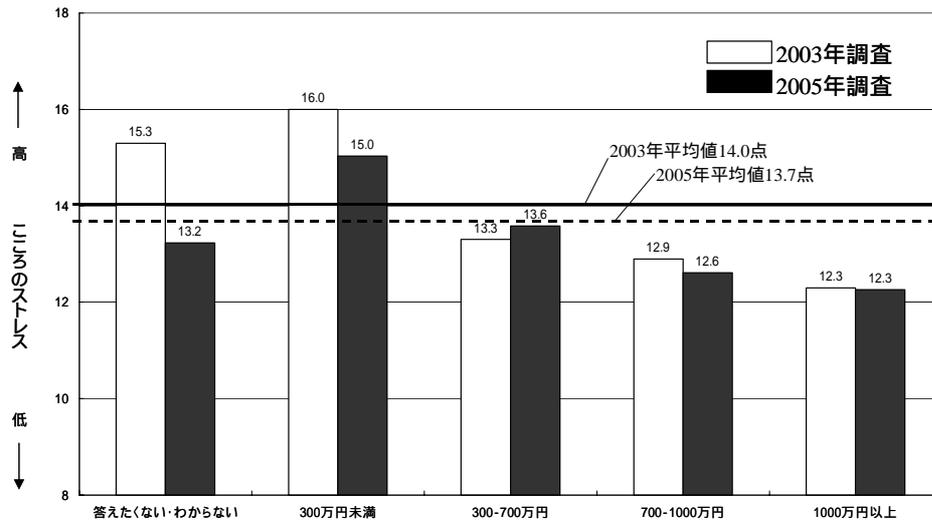


図 1-45 世帯年収別こころのストレス

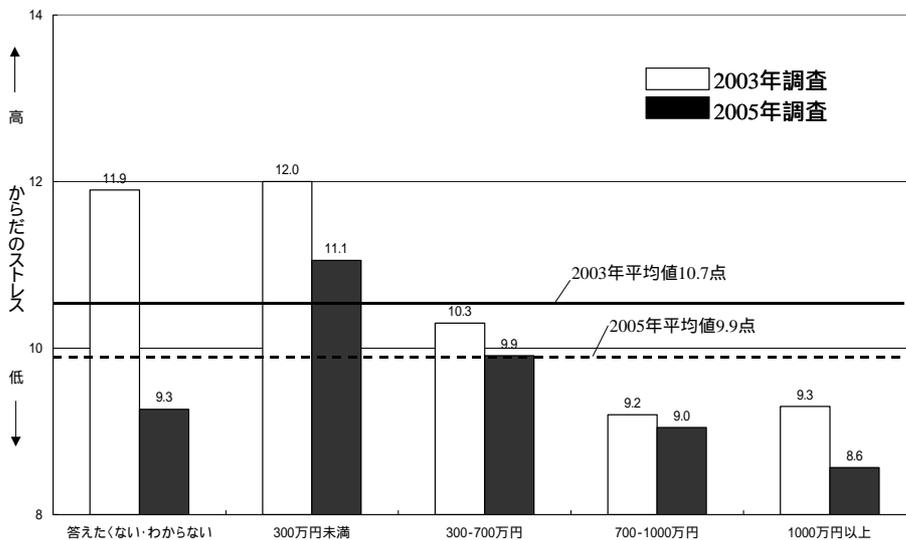


図 1-46 世帯年収別からだのストレス

4. つながりの変化

1) 市民性 (問 35)

被災地では、阪神・淡路大震災を契機として、自律と連帯に基づく新しい市民意識（市民性）が生まれ、復興を進める市民の力として機能してきたといわれている。

「市民性」とは、世の中を「公」と「私」に二分してとらえるのではなく、あらたに「共」という概念を加え、「公・共・私」の3つの関連としてとらえ、行政だけが公共の領域を担うのではなく、市民も「共」の領域から公共に参画するという発想を持つ意識といえる。

2005年調査では、「あなたのお考えに近いのは1、2のどちらですか。これらはどちらが正解というものではありません。気楽な気持ちであなたのお考えに近いほうに をしてください」として、16項目についてたずねた。

得られた回答者の回答傾向をグルーピングするため、等質性分析という手法で解析した結果、1つの軸のみが出現し、これを「市民性得点」として用いた。

図1-47は、等質性分析の結果、市民性を測るための16項目に与えられた得点のグラフである。この16項目の得点の合計点が高い人ほど「市民性が高い」といえる。

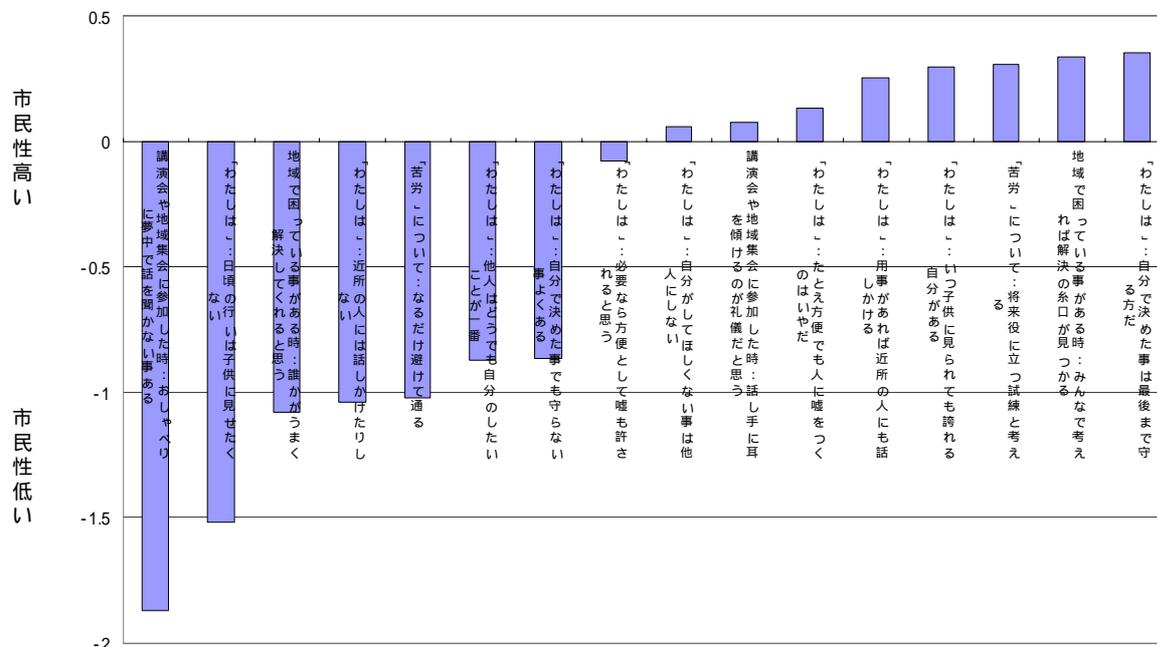


図 1-47 市民性の各項目得点 (等質性分析結果)

世代との関連

・20・30代の市民性は低く、65～74歳の市民性は高かった。

世代と市民性との関連をみると、20代・30代の市民性は極端に低く、65～74歳の市民性が最も高いことがわかった。

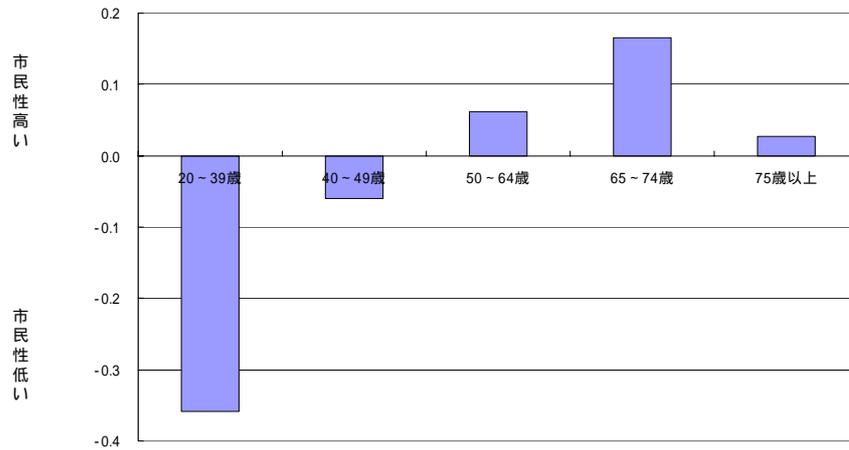


図 1-48 世代と市民性

近所づきあいとの関連

・近所づきあいが活発な人は市民性が高く、活発でない人は市民性が低かった。

「近所に世間話をする人がいる・いない」・「おすそわけをする家がある・ない」といった近所づきあいと市民性との関連をみると、普段から世間話をする人が近所にいたり、おすそわけをする家が近所にあるような近所づきあいが活発な人は市民性が高く、活発でない人は市民性が低いことがわかった。

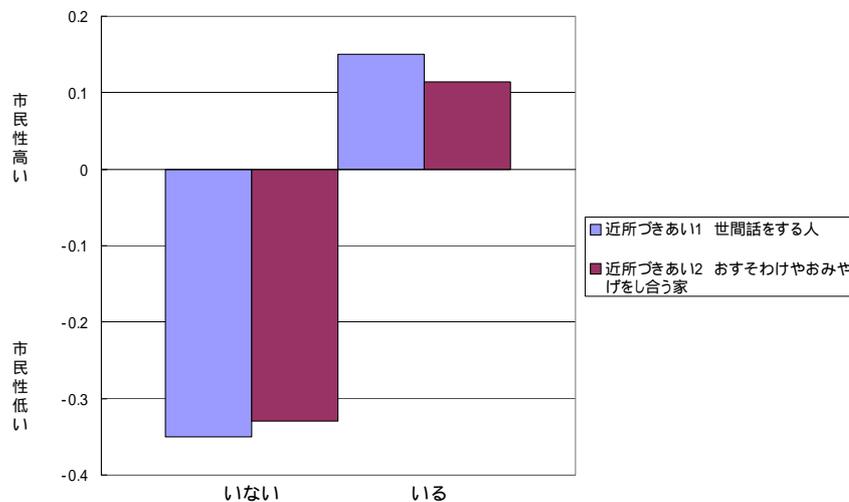


図 1-49 近所づきあいと市民性

地域活動との関連

- ・地域活動に積極的に参加している人は市民性が高く、参加していない人は市民性が低かった。

「まちのイベントの世話」「趣味やスポーツサークルへの参加」「自治会の仕事」「地域ボランティア活動への参加」の有無と市民性との関連をみると、地域活動に参加している人の市民性が高く、参加していない人の市民性が低いことがわかった。

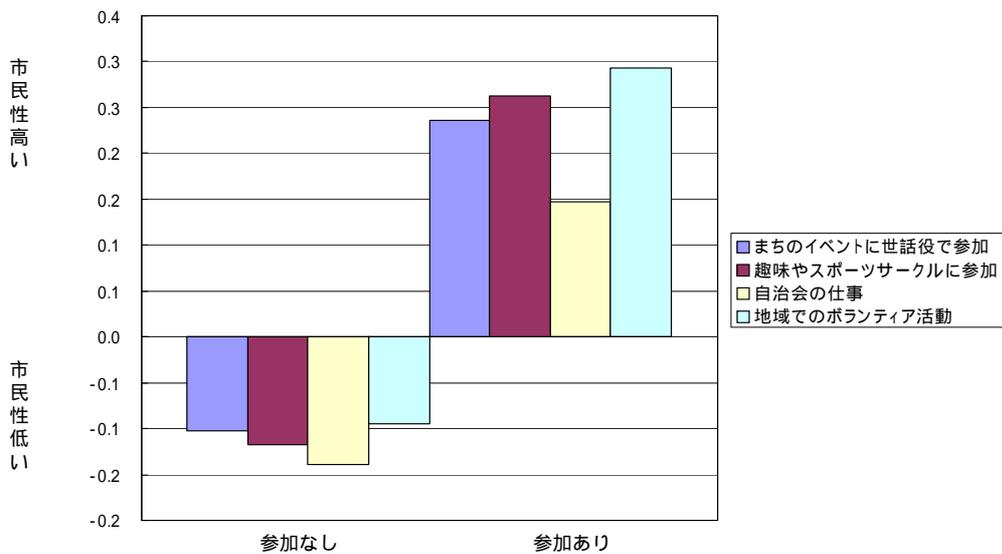


図 1-50 地域活動と市民性

2) 他者や周囲に対する態度(「世間志向」・「社会志向」)(問 35)

人々の他者や周囲に対する態度については、「社会」という独立した個人の共同体の中で個人分離の関係を重視する「社会志向」タイプと、「世間」という贈与や互酬をベースとした持ちつ持たれつ関係を重視する「世間志向」タイプがあるとされている。

中世西洋史学者の阿部謹也は、『「世間」論序説』(1999)の中で、『「社会」]はいわば近代的な用語の世界であり、貨幣経済を軸とする表向きの構造をもっている。他方で、『世間』は主として対人関係の中にあり、そこでは貨幣経済ではなく、贈与・互酬の原則が主たる構造をなしている」と述べている。

また、刑事法学者の佐藤直樹は、『「世間」の現象学』(2001)の中で、阿部の定義を踏まえ、社会と世間の違いについて、次のような一覧表を作成している。

表 1-9 社会と世間との違い (佐藤(2001)より)

非権力性 平等性 実質性の重視 聖/俗の分離 合理的な関係 個人主義的 変革が可能 個人の集合体 個々の時間意識をもつ	社会
権力性 排他性(ウチ/ソトの区別) 儀式性の重視 聖/俗の融合 非合理的 呪術的な関係 集団主義的 変革が不可能 個人の不在 共通の時間意識をもつ	世間

「世間志向」タイプの人、年長者との関係では、年齢を考えて目上の人を敬い、親子関係では、子供がいくつになっても親にはある程度の責任があると考えられる傾向がある。

「社会志向」タイプの人、年長者との関係では、年齢を問わず誰もが対等な関係であると考え、親子の関係では、「親は親、子は子」という個人分離を志向する傾向がある。

2005年調査では、「世間志向」タイプ、「社会志向」タイプのいずれかを測るための項目を新たに設けた。

具体的には、「あなたのお考えに近いのは1、2のどちらですか。これはどちらが正解というものではありません。気楽な気持ちであなたのお考えに近いほうに をしてください」として、14項目について尋ねた。

得られた回答者の回答傾向をグルーピングするため、等質性分析を行った結果、1つの軸のみが出現し、これを「世間/社会得点」として用いた。

図 1-51 は、等質性分析の結果、「世間志向」タイプ、「社会志向」タイプを測るための14項目に与えられた得点のグラフである。この14項目の得点の合計点が高い人ほど「世間志向」タイプであり、得点が高い人ほど「社会志向」タイプである。

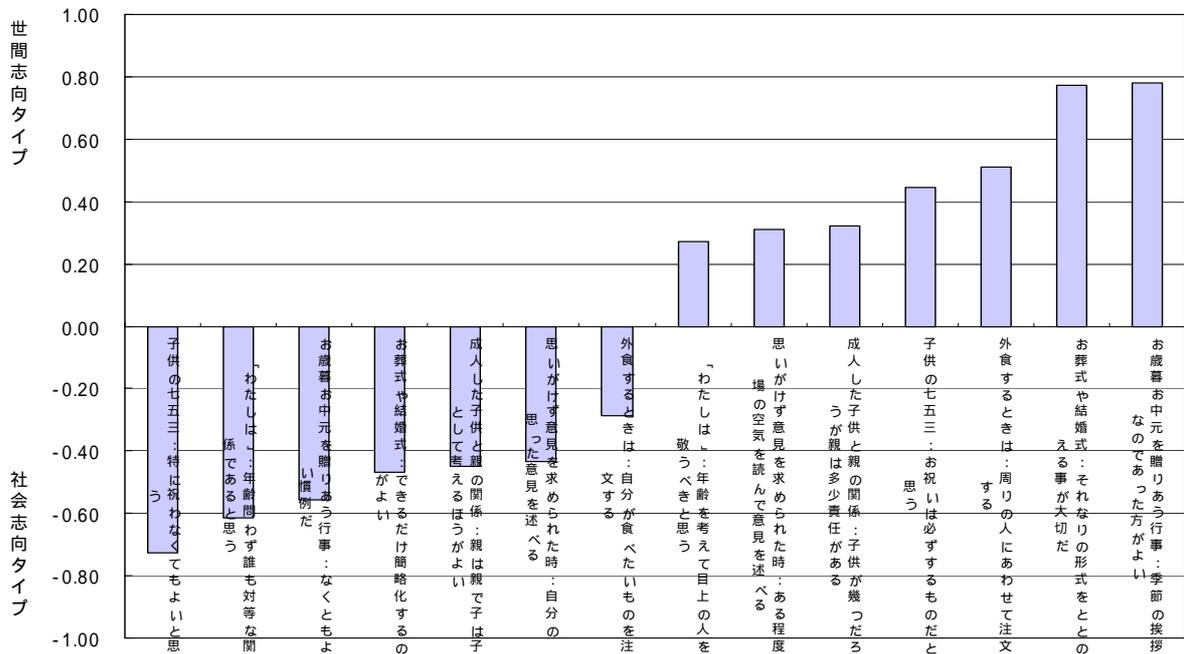


図 1-51 世間/社会の各項目得点 (等質性分析結果)

年代との関連

・「世間志向」タイプは40代が多く、「社会志向」タイプは50～64歳の人が多かった。

年代との関連をみると、「世間志向」タイプは40代が最も多く、65～74歳、20・30代も多かった。「社会志向」タイプは50～64歳が多かった。

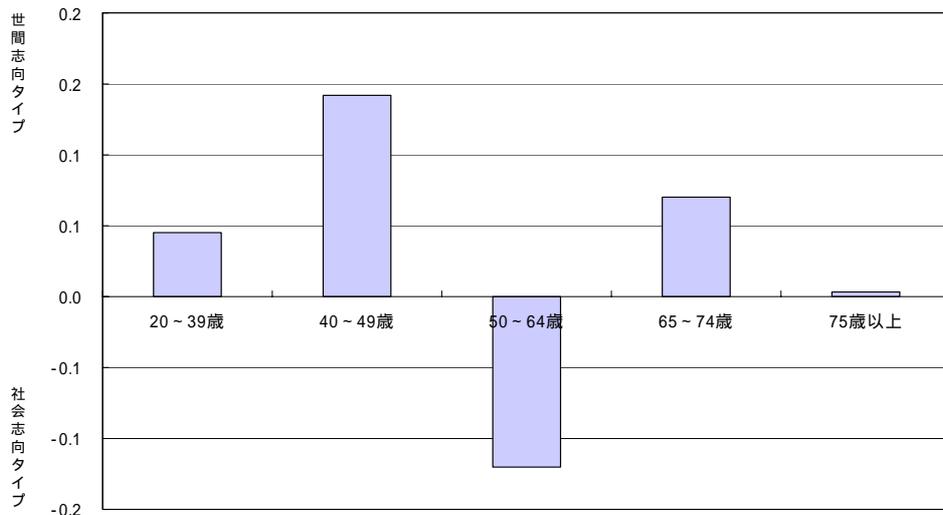


図 1-52 世間/社会への態度と年代

重要他者との出会いの有無との関連

- ・「世間志向」タイプの人、重要他者（震災から立ち直るきっかけを与えてくれた人、心を開いて話することができる人など）との出会いがあった人が多かった。

震災から10年の間に重要な他者との出会いがあったか否か（震災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた、心を開いて話することができる人との出会いがあったなど）との関連をみると、「世間志向」タイプの人、重要他者との出会いがあった人が多いことがわかった。

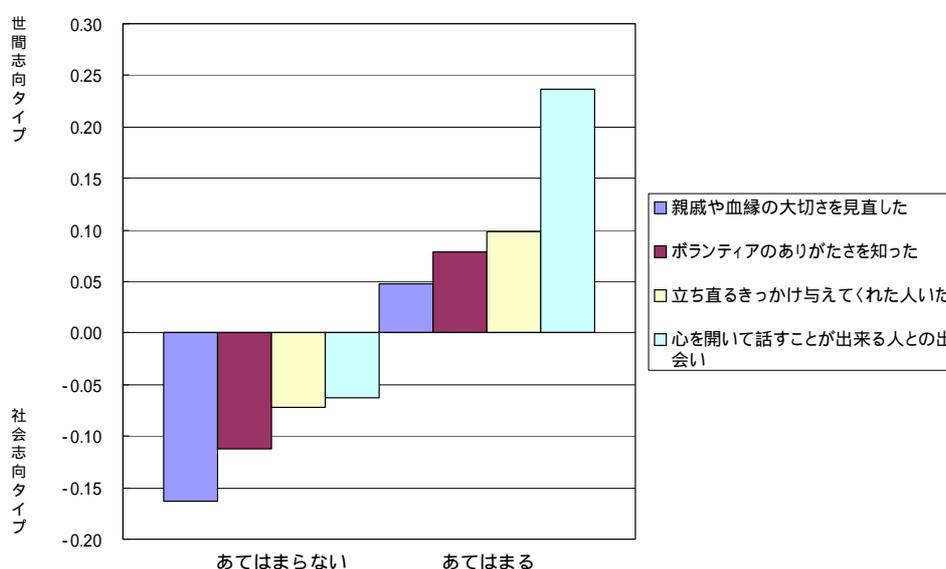


図 1-53 世間/社会と重要他者との出会いの有無の関係

地域活動に対する意識との関連

- ・「世間志向」タイプの人、「地域活動は行政の支援や指導がなければ続かない」と思っている人が多く、「社会志向」タイプの人、「地域活動に参加するかしないかは本人の自由だ」と思っている人が多かった。

地域活動に対する意識との関連をみると、「世間志向」タイプの人、「地域活動は行政の支援や指導がなければ続かない」と思っている人が多かった。一方、「社会志向」タイプの人、「地域活動に参加するかしないかは本人の自由だ」と思っている人が多かった。

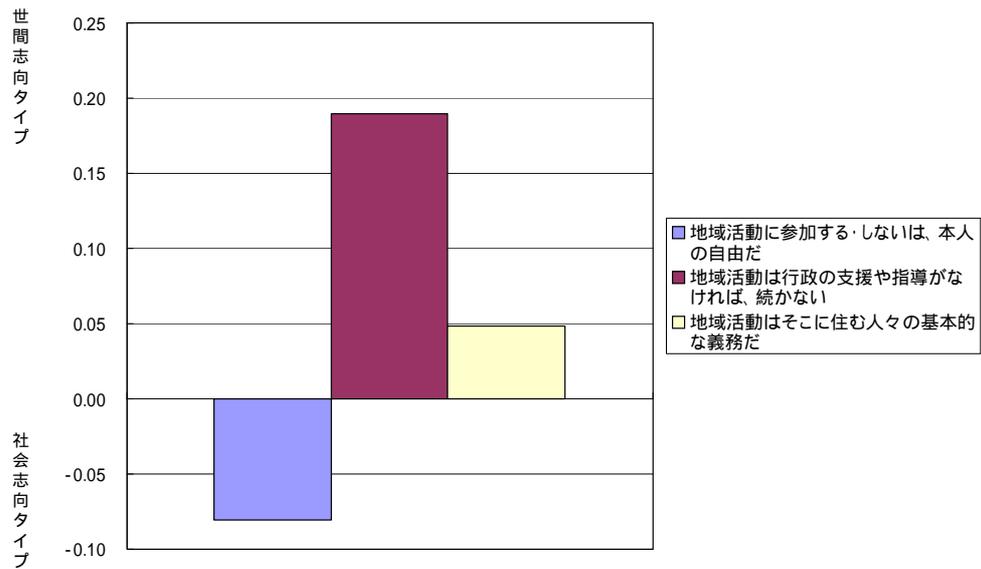


図 1-54 世間/社会と行政とのかかわりの関係（地域活動について）

大災害時に命を守るものについての意識との関連

- ・大災害の時に市民の命を守るものについて、「世間志向」タイプの人共助重視の人が多く、「社会志向」タイプの人自助重視、公助重視の人が多かった。

大災害時に命を守るものについての意識との関連をみると、「世間志向」タイプの人共助重視、大災害時に市民の命を守るのはみんなの助け合いだと考えている（共助重視）人が多かった。また、「社会志向」タイプの人自助重視、大災害時に市民の命を守るのは市民それぞれの努力だ（自助重視）、行政の仕事だ（公助重視）と考えている人が多かった。

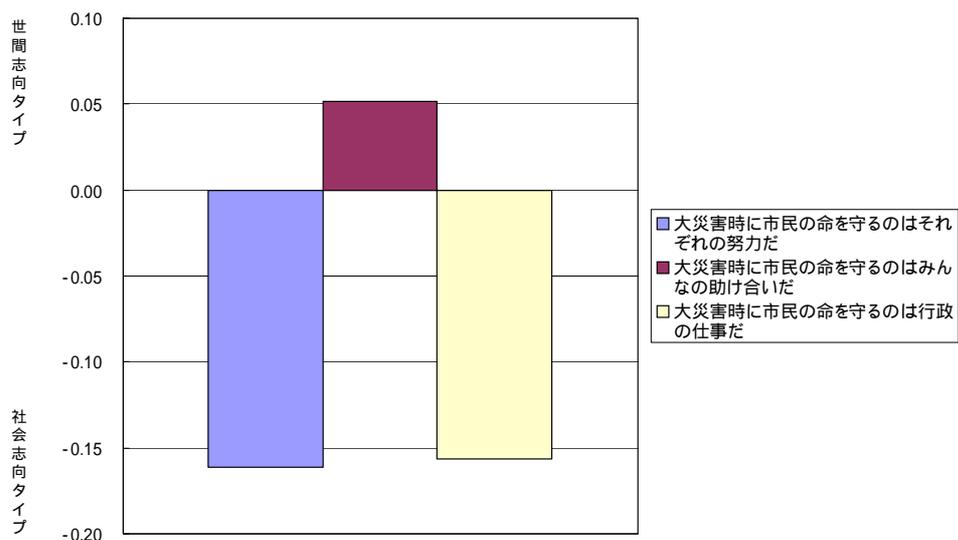


図 1-55 世間/社会と行政とのかかわりの関係（大災害時に命を守るのは）

3) 家 族 (問 34)

被災者の現在の家族関係の状況を測るために、2001年、2003年調査に引き続き、家族システムの評価尺度 FACES KG -16 (Version) を用いた。この家族システム評価尺度は、家族システム円環モデルに基づき北米で開発された尺度を、日本の社会や文化に適合させるために、オリジナル項目を作成し、実証的な項目分析を行ったものである。家族システム円環モデルとは、家族をそれぞれの成員間で相互に作用しあう一つのシステムととらえ、家族の機能を「きずな」「かじとり」という二つの側面から調べるモデルである。

「きずな」とは、家族成員間の心理的な距離を示し、「かじとり」とは、家族内のリーダーシップや役割関係、決まりなどを状況の変化に応じて変化させる柔軟性を示している。円環モデルによれば、通常の世界生活では「きずな」「かじとり」ともに中庸でバランスの取れた場合に、家族関係の機能度が最も高まると想定している。逆に、極めて低い、または高すぎる場合には家族成員を支える力が弱まると考えている。

家族のきずなについては、きずなの強い順に「ベツタリ、ピツタリ、サラリ、バラバラ」の4グループに分類した。

家族のかじとりに関しては、かじとりの度合いの強さにより「てんやわんや、柔軟、きっちり、融通なし」の4グループに分類した。

家族関係（きずな）とストレスとの関連

- ・家族成員間の心理的な距離（きずな）が「バラバラ」の人のストレスが高く、「ベツタリ」の人のストレスが低かった（図 1-56）

家族関係のきずなとストレスとの関連をみると、こころのストレス、からだのストレスともに、家族関係が「バラバラ」タイプの人々のストレスが高く、一方、「ベツタリ」タイプの人々のストレスが低いことがわかった。

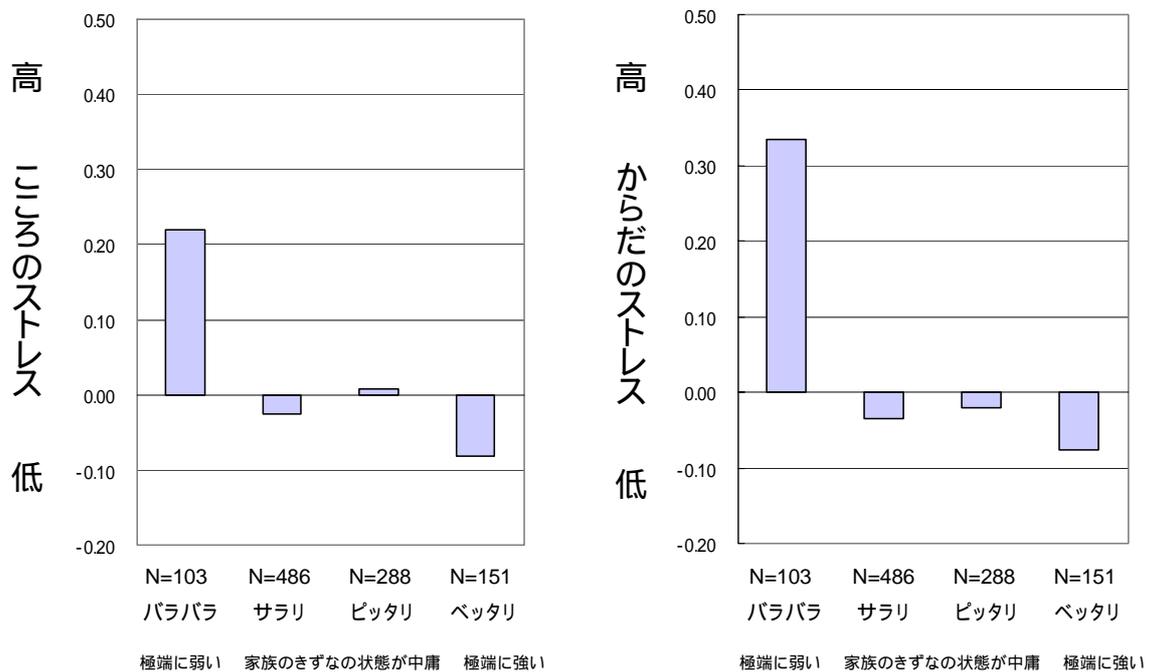


図 1-56 家族関係（きずな）とストレスの関係
 （左図：こころのストレス、右図：からだのストレス）

家族関係（かじとり）とストレスとの関連

- ・こころのストレスは、家族関係のかじとりが「融通なし」「てんやわんや」の人のストレスが高く、「きっちり」の人のストレスが低かった。
 - ・からだのストレスは、家族関係のかじとりが「融通なし」の人のストレスが高かった。
- （図 1-57）

家族のかじとりとストレスとの関連をみると、こころのストレスについては、「融通なし」「てんやわんや」タイプの人々のストレスが高く、からだのストレスについては、「融通なし」タイプの人々のストレスが高いことがわかった。

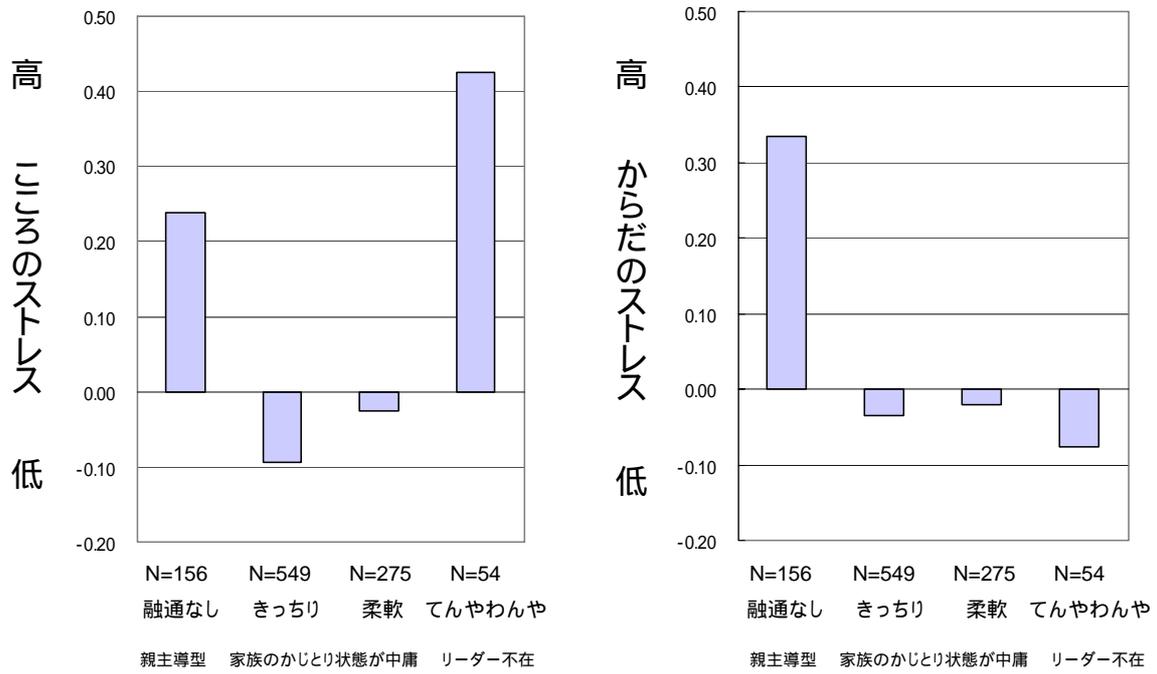


図 1-57 家族関係（かじとり）とストレスの関係
 （左図：こころのストレス、右図：からだのストレス）

5 . 行政とのかかわり

1) 市民と行政との新しい関係 (問 45)

震災以前は、行政に全てまかせておけば、後見人としてこれ以上の存在はないとする「後見主義的」考え方、市民一人一人が自由な考えでふるまっていけばよいとする「自由主義的」考え方の二つの考え方が多かったといわれている。震災後はボランティアや市民の共助の重要性を認識する機会を得て、元来行政だけの仕事と考えられていた公共的なことについても、市民の積極的関与によって担われるべきとする「共和主義的」考え方が定着しつつあると考えられてきた。

市民と行政とのかかわり方についてどのようなものがよいと思うか回答を求めた。

具体的には「震災以来、市民と行政との関係が注目されるようになりました。あなたはどのような市民と行政とのかかわり方がよいとお考えですか」として、4つのテーマ「ゴミ出しのルール」「地域活動」「大災害の時に、市民の命を守るのは」「まちづくり」について、「後見主義」「自由主義」「共和主義」のそれぞれの考え方に基づく選択肢を用意し回答を求めた。(問 45)

得られた回答について、等質性分析(回答データからの情報を損なわない形で、質問項目の似ているカテゴリーを探し出し、似通った反応を示す調査対象者を見つけ出す統計的分析手法)を行った。

その結果得られた得点から、回答者が行政とのかかわり方について、「後見主義」「自由主義」「共和主義」のどの考えを強く持っているかによって、3つのグループに分けた。

2005年調査の「行政とのかかわり」に関する回答傾向は、2001年調査、2003年調査と同様に、「後見主義」「自由主義」「共和主義」にグループ分けすることができた。(図 1-58)

*共和主義は「自律と連帯をもとに成立」、後見主義は「連帯は重視するが自律は弱い」、自由主義は「連帯は無視して、自律についてはコミットしていない」という特徴を持つ考え方である。

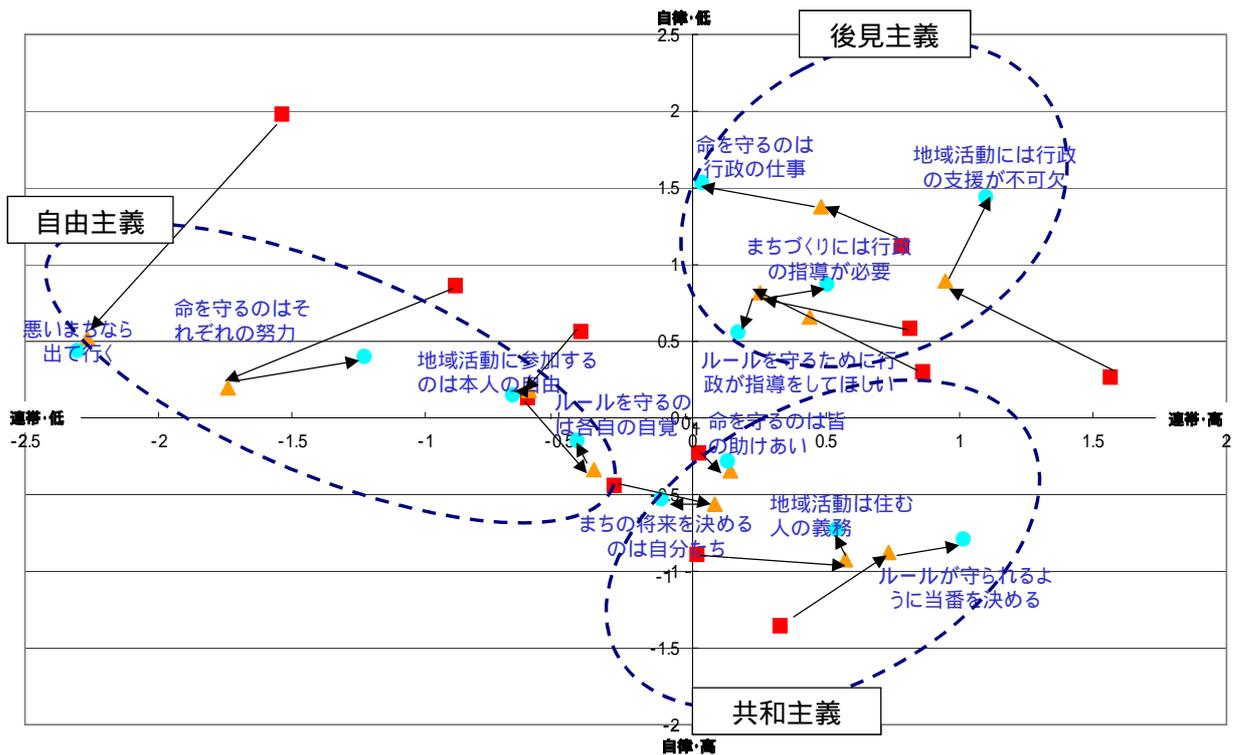


図 1-58 2001 年調査結果()、2003 年調査結果()、2005 年調査結果()

全体傾向

- ・共和主義的な考え方を持つ人が減少し、自由主義的な考え方を持つ人が増加した。

各カテゴリーに属する回答者の人数を比較すると、共和主義的な考え方を持つ人は 18.2%(2003 年調査比 -12.6%ポイント)、自由主義的な考え方を持つ人は 59.2%(同 +18.5%ポイント)、後見主義的な考え方を持つ人は 22.6%(同 -5.8%ポイント)であり、共和主義的な考え方を持つ人が減少し、自由主義的な考え方を持つ人が増加した。(図 1-59)

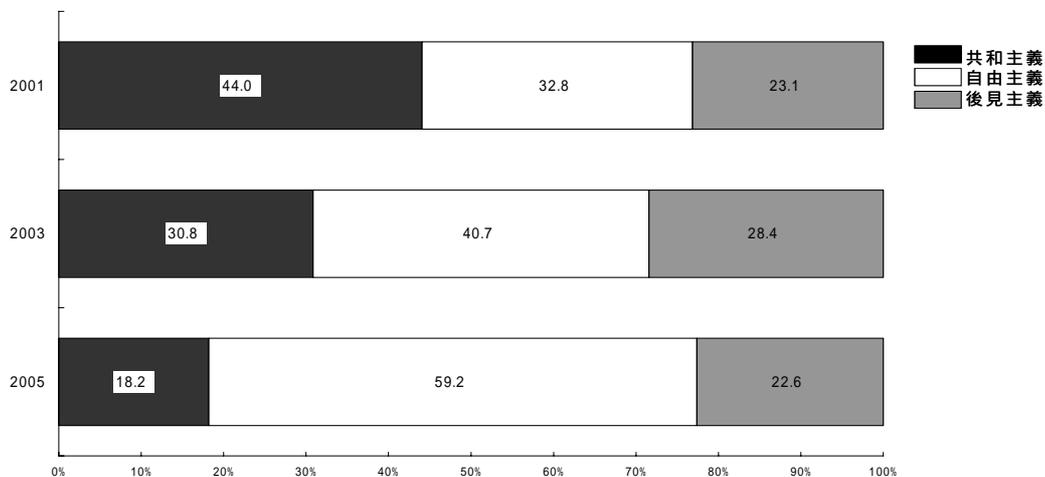


図 1-59 行政とのかかわりにおける各カテゴリーに関する人数の割合

世代との関連

- ・ 世代が高くなるほど、「共和主義」の人が少なく、「自由主義」の人が多かった。
- ・ 40代以上は、時間経過とともに、「共和主義」の人が減少し、「自由主義」の人が増加した。（図 1-60）

世代別に行政とのかかわり方を見ると、20・30代の人よりも40・50代、60代以上のの方が、「共和主義」の人が多く、「自由主義」の人が多いことがわかった。

また、2001年調査からの傾向を見ると、40代以上の人は、時間経過とともに、「共和主義」の人が減少し、「自由主義」の人が増加していることがわかった。

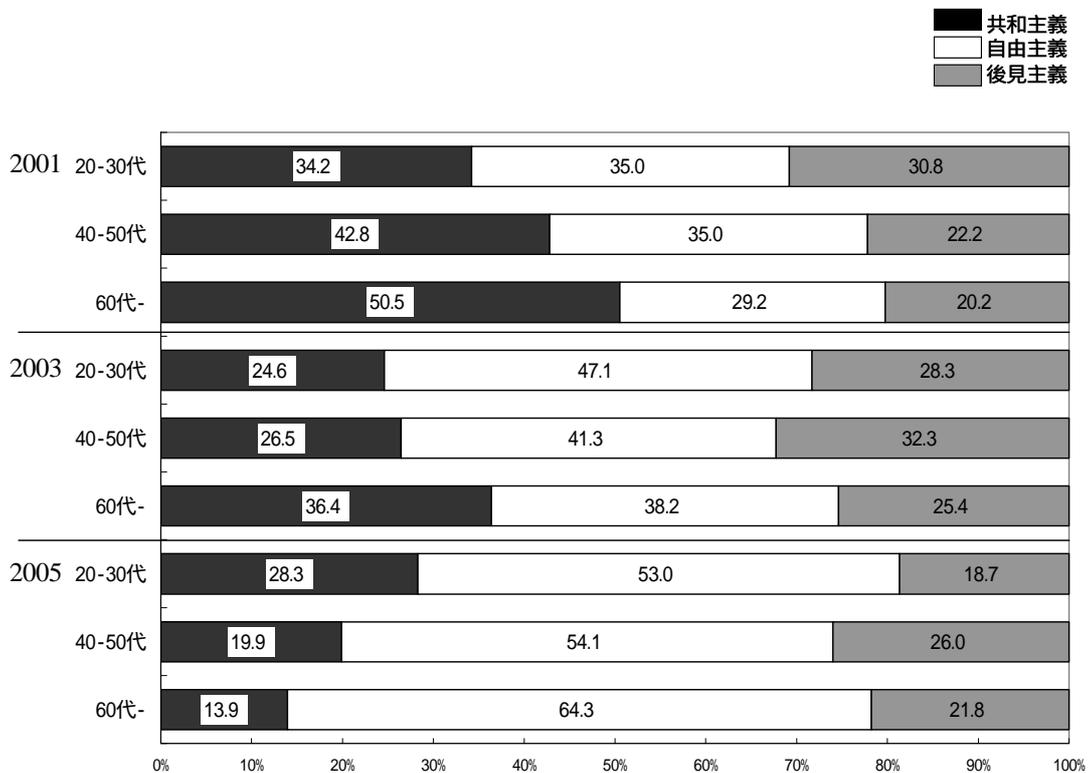


図 1-60 行政とのかかわりにおけるカテゴリーに属する人数の割合（調査年世代別）

第4章 将来の災害に対するそなえ意識の変化

近年、東南海・南海地震の危険性が高まっており、国の中央防災会議によれば、その発生は今世紀前半とも予想されている。政府は、2003年12月、「東南海・南海地震に係る地震防災対策の推進に関する特別措置法」に基づき、「東南海・南海地震対策大綱」を決定し、1都2府18県652市町村を「著しい地震災害の恐れがある地域」として「東南海・南海地震防災対策推進地域」（以下、推進地域）に指定した。阪神・淡路大震災の被災地も、その多くがこの推進地域に含まれている。

さらに、東南海・南海地震については、特に2つの地震が同時発生した場合、空前の広域災害になることが予想され、国や地元自治体、災害ボランティアなどによる救援・復旧活動にも多大な困難が予想されている。そのため、国や自治体による「公助」のみならず、地域コミュニティを基盤とした住民による「共助」、個人や世帯を基盤とした「自助」の必要性が強調されている。

そこで、2005年調査では、2001年調査、2003年調査に引き続き、阪神・淡路大震災の経験や教訓、知識、情報等が、被災地に暮らす人々の将来の災害（東南海・南海地震）に対する「そなえ」意識を、どのように変化させたかについて検討した。

具体的には、第1に、東南海・南海地震に対する被害予測、第2に、自助・共助・公助に対する態度について、それぞれ検討した。特に、自助・共助・公助のバランスをどのように考えるかについては、2005年調査から新たに質問項目（問48）を設定して詳しく検討した。

1. 被害の予測（将来の災害に対する不安）

2003年調査と同様に、「京都大学防災研究所・巨大災害研究センターでは、阪神・淡路大震災以降、西日本は地震の活動期に入り、2040年ごろに、静岡から四国沖にかけて東南海・南海地震が起こると予想しています」との文章とともに、阪神・淡路地域を中心とした震度予想地図を質問紙に示し、表1-10の8種類の被害発生の可能性について、「可能性がまったくない・可能性が非常に高い」の5段階評定で回答を求めた。（問45）

得られた回答に対して、因子分析を行った。具体的には、2001年調査、2003年調査と同様に、主因子法を用いた。

その結果、これまでの1因子とは異なり、2因子が抽出された。第1因子は、東南海・南海地震の被害予測の程度あるいは同地震に対する不安の程度を示す因子であり、これは、2001年調査、2003年調査と同じものである。

また、第2因子は、津波被害（項目7）及び帰宅困難者（項目8）の2項目のみが高い因子負荷量を示しており、阪神・淡路大震災とは異なる新たな被害様態に対する不安の程度を示す因子と解釈される。

今回、これまでの1因子構造と異なり第2因子が抽出されたのは、2003年調査以後、インド洋大津波災害が発生し津波災害に対する注目が社会的に高まったこと、2004年に、新潟県中越地震や豪雨災害が相次ぎ、新たな被災様態への不安が高まったこと、さらに、福岡県西方沖地震及び週末に東京都心を襲った地震等で、実際に多くの帰宅困難者が発生したことなどが影響していると考察される。すなわち、津波や帰宅困難といった新しい被害様態に関するマスメディア報道やそれによる意識の高まりが、本調査で第2因子が第1因子と独立して抽出された原因と考えられる。

ただし、表1-10の通り、これら2項目は第1因子にも高い因子負荷量を示している。また、第1因子に対する因子負荷の構造そのものは、2001年調査、2003年調査とほぼ同様である。さらに、第2因子は第1因子と比べると寄与率（説明率）も低い。

したがって、今回についても、これまでの調査と同様、第1因子の因子得点をもって、「東南海・南海地震の被害予測」得点とすることとした。なお、この得点は、点数が高いほど、大きな被害が出る可能性が高いと回答していることを示す。

表1-10 東南海・南海地震の被害予測：因子分析の結果（主因子法）

	被害予測得点		
	第1因子負荷量	第2因子負荷量	共通性
1 亡くなったり病気ケガをする	.687	-.052	.474
2 住まいが住めなくなる	.736	-.282	.621
3 収入や財産に大きな被害がでる	.807	-.289	.734
4 普段の生活に戻るまで長時間かかる	.811	-.153	.681
5 まちが広範囲にわたり大被害をうける	.791	-.040	.628
6 人のつきあいに大きな変化を受ける	.694	-.004	.482
7 津波で海岸部や河川沿いに被害がでる	.548	.553	.606
8 帰宅困難者がでる	.645	.514	.680
固有値	4.526	1.115	
寄与率 (%)	56.6	13.9	

個人属性との関連

東南海・南海地震に対する被害予測と個人属性（性別・年齢・職業）との関連をみると、統計的に意味のある差は見られなかった。

これは、2001年調査、2003年調査と同様であり、将来の災害に対する被害予測、不安の程度は、性別、年齢、職業といった個人属性によっては決まらないことを示唆している。

被害程度との関連

東南海・南海地震に対する被害予測と阪神・淡路大震災における被害程度との関連をみると、被害程度の大小によって、被害予測の程度は大きく左右されることがわかった。これは、2001年調査、2003年調査と同様の傾向であった。

すなわち、過去の被災体験（被災の程度）が、将来発生するかもしれない地震に対する被害予測、不安の程度に大きな影響を及ぼすことがわかった。

ア．人的被害との関連（図 1-61）

- ・「入院病者あり」「軽病傷者あり」の人は、被害程度が大きくなるという予測が多かった。
- ・「人的被害なし」の人は、被害程度を小さく見積もっていた。

東南海・南海地震の被害予測と、回答者本人や同居家族の人的被害（死亡家族あり、入院病傷者あり、軽病傷者あり、人的被害なし）との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。

「入院病者あり」「軽病傷者あり」の人は、「人的被害なし」の人よりも、大きな被害を予測していた。「人的被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。

被害が大きかった人ほど将来の災害に対して大きな被害を予想するという傾向は、2001年調査、2003年調査とほぼ同様であった。

なお、今回の結果では、「死亡家族あり」の人が、将来の地震に対して被害を小さく見積もっていたが、これは「死亡家族あり」と回答した人の数が非常に少なかったことによる影響が大きいと考えられることから、このデータについては、統計的な分析からは除外した。

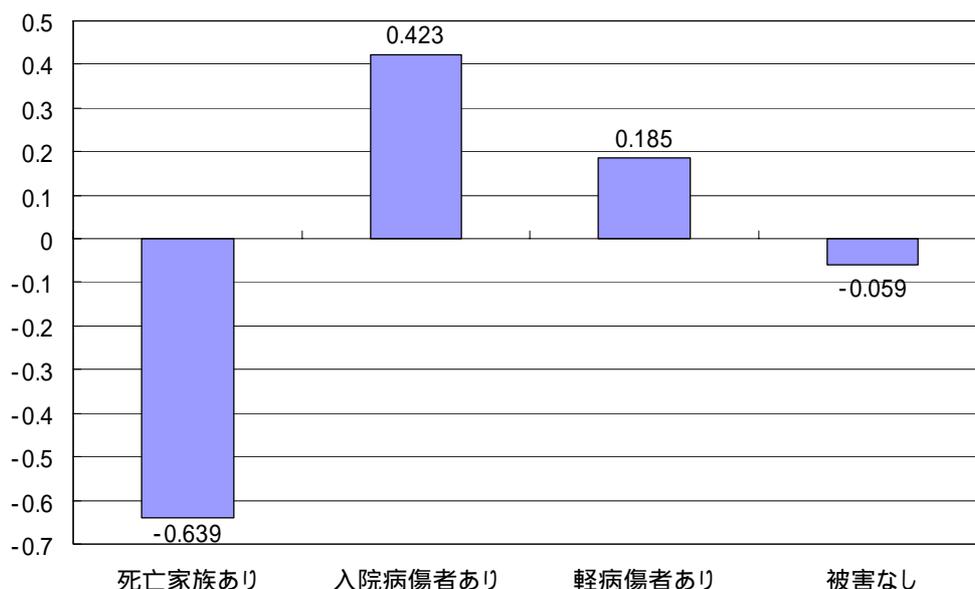


図 1-61 東南海・南海地震の被害予測（人的被害別）

イ．家屋被害との関連（図 1-62）

- ・「全壊・全焼」「半壊・半焼」の人は、被害程度が大きくなるという予測が多かった。
- ・「被害なし」の人は、被害程度を小さく見積もっていた。

東南海・南海地震の被害予測と、回答者の家屋被害（全壊・全焼、半壊・半焼、一部損壊、被害なし）との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。比較的大きな被害をうけた人（「全壊・全焼」「半壊・半焼」）は、「一部損壊」「被害なし」の人よりも大きな被害を予測していた。他方、「被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。また、「一部損壊」の人は、両者の中間に位置した。この傾向は、2001年調査、2003年調査とほぼ同様であった。

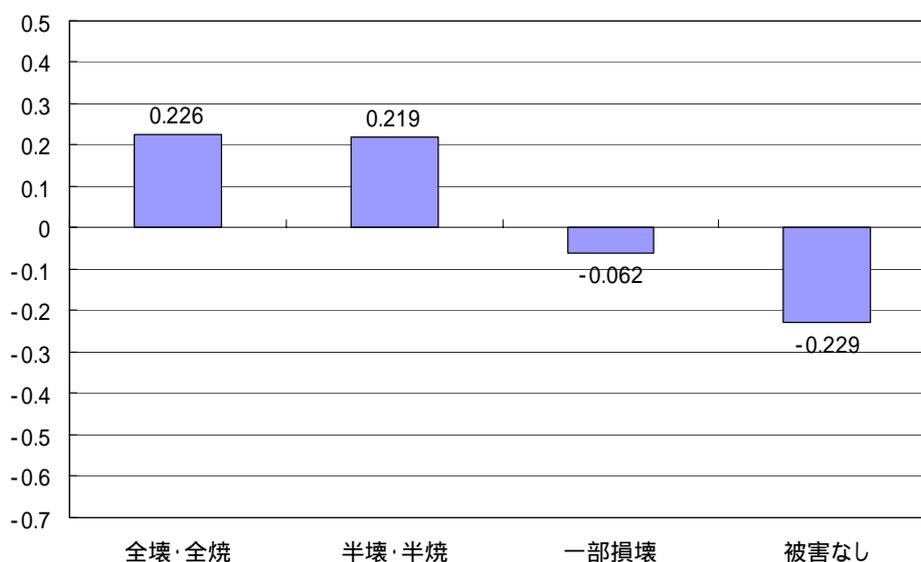


図 1-62 東南海・南海地震の被害予測（家屋被害別）

ウ．家財被害との関連（図 1-63）

- ・「全部被害」「半分被害」の人は、被害程度が大きくなるという予測が多かった。
- ・「被害なし」の人は、被害程度を小さく見積もっていた。

東南海・南海地震の被害と、回答者の家財被害（全部被害、半分被害、軽い被害、被害なし）との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。

「全部被害」「半分被害」の人は、「軽い被害」の人よりも大きな被害を予測していた。また、「被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。この傾向は、2001年調査、2003年調査とほぼ同様であった。

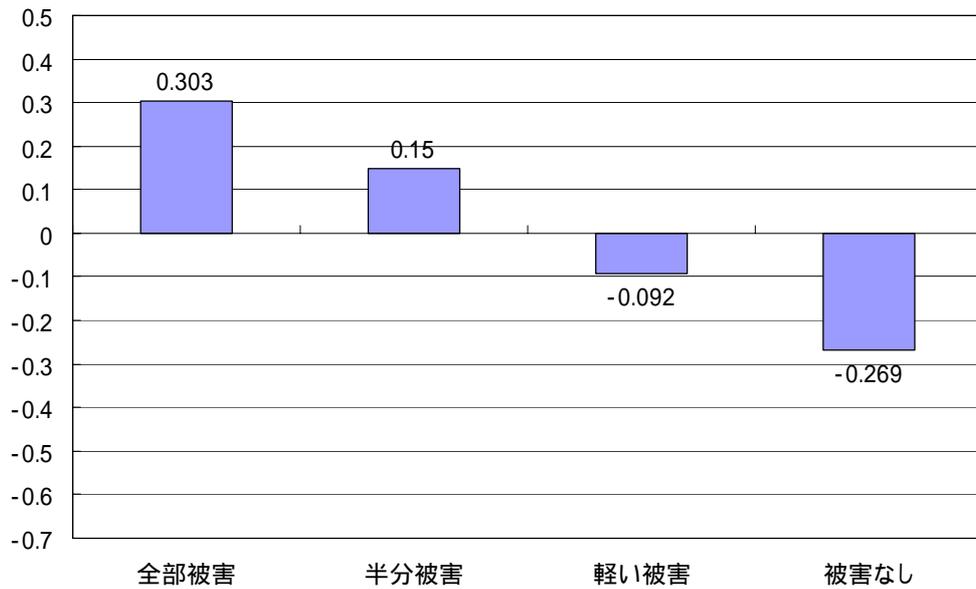


図 1-63 東南海・南海地震の被害予測（家財被害別）

エ．被害総額との関連（図 1-64）

- ・被害があった人は、被害額にかかわらず全体的に、被害程度が大きくなるという予測が多かった。
- ・「被害なし」の人は、他と比べて被害程度を小さく見積もっていた。

東南海・南海地震の被害予測と、回答者の被害総額（住宅、家財等をすべて含む）との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。

被害総額が年収の「30%～50%」を超える人は、全体的に、被害総額の小さかった人よりも大きな被害を予測していた。これに対して、「被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。この傾向は、全体的には、2001年調査、2003年調査とほぼ同様であった。

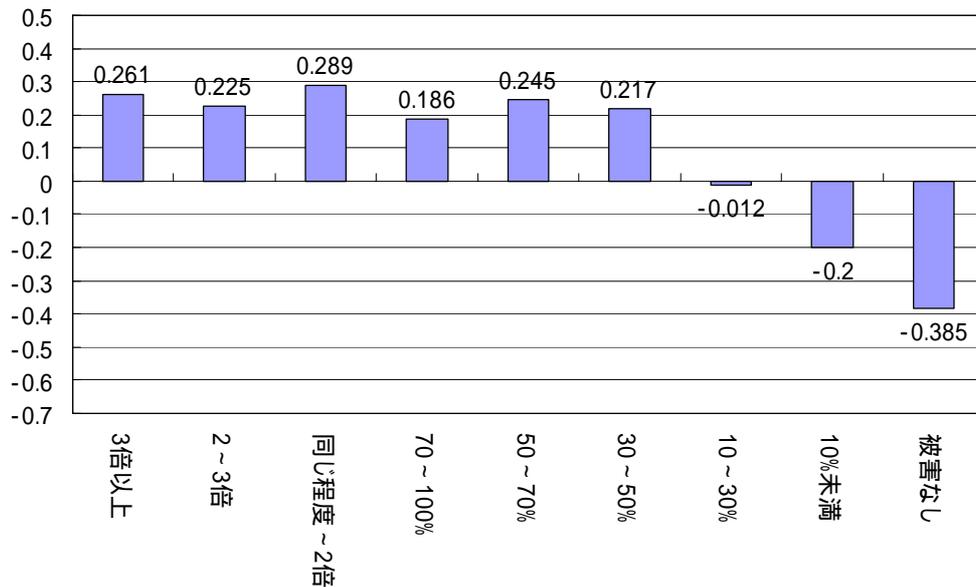


図 1-64 東南海・南海地震の被害予測（被害額の年収に占める割合別）

まとめ

以上をまとめると、東南海・南海地震の被害がどの程度になるかという予測は、回答者の年齢・性別・職業といった個人属性によって決まるのではなく、阪神・淡路大震災で、実際にどの程度の被害を受けたかによって大きく左右されることがわかった。

つまり、過去の被災体験は、将来の災害に対する予測に大きな影響を及ぼすことが示唆される。特に、過去の災害で被害のなかった人は、災害そのものは体験しているにもかかわらず、将来の災害に対しては楽観的な被害予測をしており、この点は十分留意しておく必要がある。

また、この傾向は、今回だけでなく、2001年調査、2003年調査でも見いだされており、一般的かつ安定的な傾向であるといえる。

2. 自助・共助・公助への態度 - 将来へのそなえ -

非常に広域にわたって大規模な被害が発生することが予想される東南海・南海地震では、国や自治体による「公助」のみならず、地域コミュニティを基盤とした住民による「共助」、個人や世帯を基盤とした「自助」の必要性が強調されている。

そこで、阪神・淡路大震災の経験や教訓、知識、情報が、被災地に暮らす人々の将来の災害（東南海・南海地震）に対する「そなえ」意識をどのように変化させたかについて検討した。

具体的には、以下の3つの質問項目によって、「自助・共助・公助」に対する意識をとらえることを試みた。

第1の質問項目は、主として、「自助・共助」の側面を念頭においたものである。具体的には、『以下のことがらについて、すでに「やっている」、または「生活の不便・自分自身の経済的な負担がある程度あっても、やらなければならない」と思うようになったことがあれば教えて下さい。それぞれについて、あてはまる番号1つに をしてください。』という項目である。そして、消火器や三角バケツを準備している、近くの学校や公園など、避難する場所を決めているなど、合計18項目について、「やっている」、「やるべきだ」、「やったほうがよい」、「やる必要がない」の4段階評定での回答を求めた。（問46）

第2の質問項目は、主として、「公助」の側面を念頭においたものである。具体的には、『あなたが大地震に関して、国や地方公共団体に力を入れてもらいたい対策はどのようなことですか。この中のそれぞれについて、あてはまる番号1つに をしてください。』という項目である。そして、避難経路や避難場所の整備、食料・飲料水・医薬品の備蓄など、合計12項目について、「やるべきだ」、「やったほうがよい」、「やる必要がない」の3段階評定での回答を求めた。（問47）

以上2つの質問項目（問46と問47）については、問47に、「津波に対する避難勧告情報などの伝達技術」、「津波時の防潮堤の閉鎖」という2項目を新たに追加した以外は、2003年調査と同じ項目構成になっている。このため、回答者の意識に変化があったどうかについて検討することができる。

第3の質問項目は、自助・共助・公助に対するバランス意識をより正確にとらえるために、2005年調査で新しく導入した項目である。具体的には、『2020年～2040年ごろに発生が予想される「南海・東南海地震」に対する防災について「自助」（個人や家庭での取り組み）、「共助」（自治会や地域社会での取り組み）、「公助」（行政の取り組み）という3つの取り組みがありうると言われています。次にあげる活動をおこなう場合、「自助」、「共助」、「公助」をそれぞれ、どのような役割分担で行うことが適切と思いますか。例にならって、合計10割になるように、「自助」、「共助」、「公助」、それぞれの割合をお答えください』という項目である。そして、家具などの転倒防止、高齢者など災害弱者の把握など、合計12項目を掲げ、自助・共助・公助のバランスについて、合計10割を3つの領域に配分してもらった形式での回答を求めた。（問48）

自助・共助（どのようなそなえが必要と考えられているか）（図 1-65）

問 46（18 項目）に挙げられた自助及び共助の「そなえ」について、どのようなそなえが必要とされているかについて概括的に把握した。

すなわち、18 項目それぞれについて、「やっている」を 4 点、「やるべきだ」を 3 点、「やったほうがよい」を 2 点、「やる必要がない」を 1 点として得点化した。項目ベースでいえば、4 点満点で得点が高いほど、そのそなえがより強く求められていることを意味する。

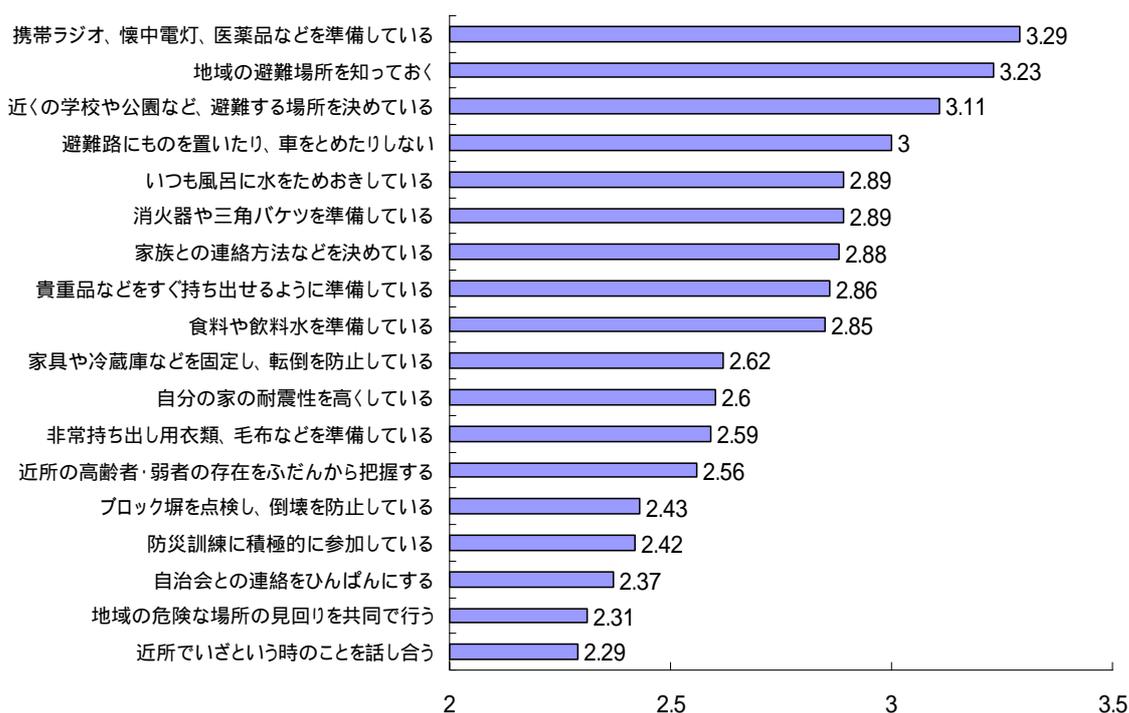


図 1-65 何が求められているか（自助・共助）

自助・共助に関わる項目を見ると（図 1-65）、「携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している（項目 7）」がもっとも優先されるべきと考えられており、「地域の避難場所を知っておく（項目 15）」、「近くの学校や公園など、避難する場所を決めている（項目 11）」などがそれに続いた。この順序は 2003 年調査と同じであり、得点もほとんど変化がなかった。具体的には、項目 7 は 3.29 点（2003 年） 3.29 点（2005 年） 項目 15 は 3.17 点（2003 年） 3.23 点（2005 年） 項目 11 は 3.13 点（2003 年） 3.11 点（2005 年）である。

他方で、自治会を中心とした活動についての優先度は低く考えられ、「近所でいざという時のことを話し合う（項目 18）」が最下位となったほか、「地域の危険な場所の見回りを共同で行う（項目 17）」、「自治会との連絡をひんばんにする（項目 16）」もそれに続いた。この順序も 2003 年調査と同じであり、得点もほとんど変化がなかった。具体的には、項目 18 は 2.27 点（2003 年） 2.29 点（2005 年） 項目 17 は

2.29点(2003年)、2.31点(2005年)、項目16は2.36点(2003年)、2.37点(2005年)である。

以上により、非常持ち出し品の準備、避難場所の確認を中心に自助の必要性は認識されているが、近所や自治会を中心とした共助の側面は、自助に比べるとその重要性が認識されていないことがわかった。また、この傾向は、この2年間でほとんど変化していないことも明らかとなった。

公助(どのようなそなえを行政に求めているか)(図1-66)

問47(14項目)に挙げられた公助の「そなえ」について、どのようなそなえが必要とされているかについて概括的に把握した。

すなわち、14項目それぞれについて、「やるべきだ」を3点、「やったほうがよい」を2点、「やる必要がない」を1点として得点化した。項目ベースでいえば、3点満点で得点が高いほど、そのそなえがより強く行政に求められていることを意味する。

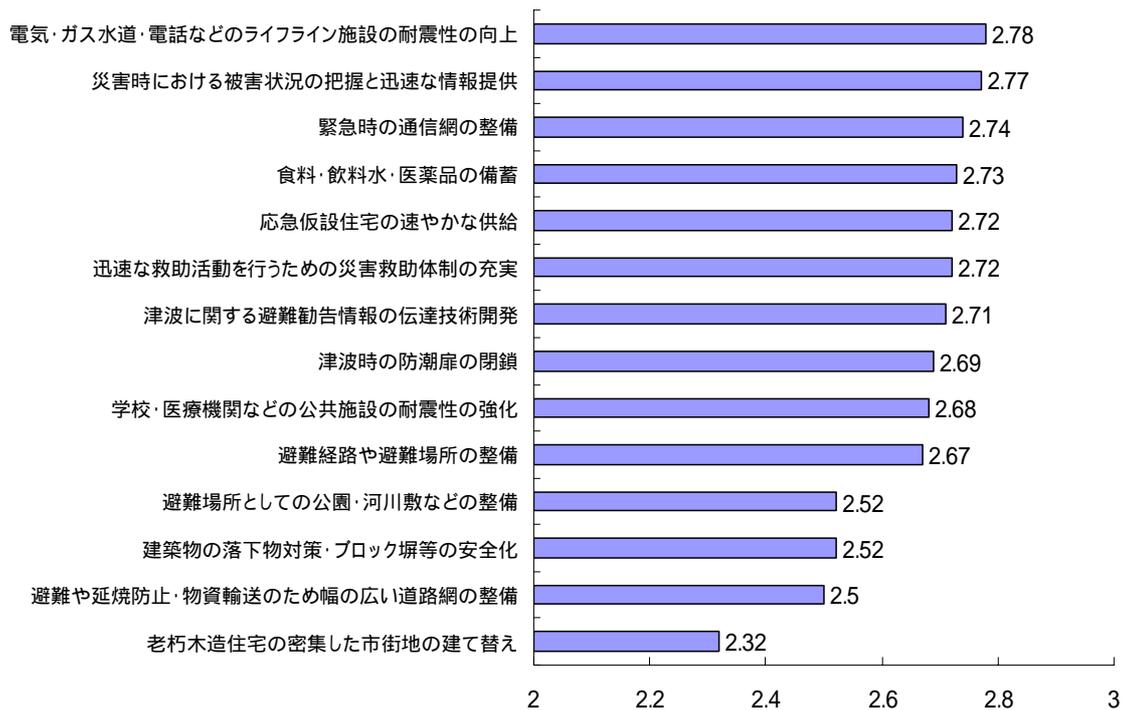


図1-66 何が求められているか(公助)

公助に関して求められている項目を見ると(図 1-66)、「電気・ガス水道・電話などのライフライン施設の耐震性の向上(項目 4)」が最も優先されるべき項目と考えられ、「災害時における被害状況の把握と迅速な情報提供(項目 5)」、「緊急時の通信網の整備(項目 3)」などがそれに続いた。この順序は 2003 年調査と同じであり、得点もほとんど変化がなかった。具体的には、項目 4 は 2.82 点(2003 年) 2.78 点(2005 年) 項目 5 は 2.75 点(2003 年) 2.77 点(2005 年) 項目 3 は 2.73 点(2003 年) 2.74 点(2005 年)である。

他方で、より抜本的な改善や広域にわたる取り組みが必要とされると思われる項目については、その必要性が低く考えられる傾向にあった。たとえば、「老朽木造住宅の密集した市街地の建て替え(項目 8)」が最下位になったほか、「避難や延焼防止・物資輸送のため幅の広い道路網の整備(項目 12)」、「避難場所としての公園・河川敷などの整備(項目 11)」もそれに続いた。この順序も、2003 年調査と同じであり、得点もほとんど変化がなかった。具体的には、項目 8 は 2.37 点(2003 年) 2.32 点(2005 年) 項目 12 は 2.51 点(2003 年) 2.50 点(2005 年) 項目 11 は 2.52 点(2003 年) 2.52 点(2005 年)である。

なお、2005 年調査で新たに追加した 2 つの項目については、「津波に対する避難勧告情報などの伝達技術(項目 13)」が 2.71 点で全体では 7 位、「津波時の防潮堤の閉鎖(項目 14)」が 2.69 点で全体では 8 位と、行政に求める防災対策としてはいずれも中位に位置づけられた。

自助・共助・公助のバランス意識の分析

ア．項目別の分析(図 1-67)

- ・「津波時の防潮扉の閉鎖」、「津波注意報・警報の伝達」、「広域避難場所の確保・整備」は、公助でなすべきと考えられていた。
- ・「家具などの転倒防止」、「個人住宅の耐震化」、「食料・飲料水の備蓄・確保」は、自助でなすべきと考えられていた。
- ・「地域の危険地域の見回り」、「高齢者などの災害弱者の把握」、「避難所の運営」は、共助への期待が大きかった。

ここでは、2005 年調査で新たに加えた問 48 を用いて、自助・共助・公助のバランス意識を分析した。

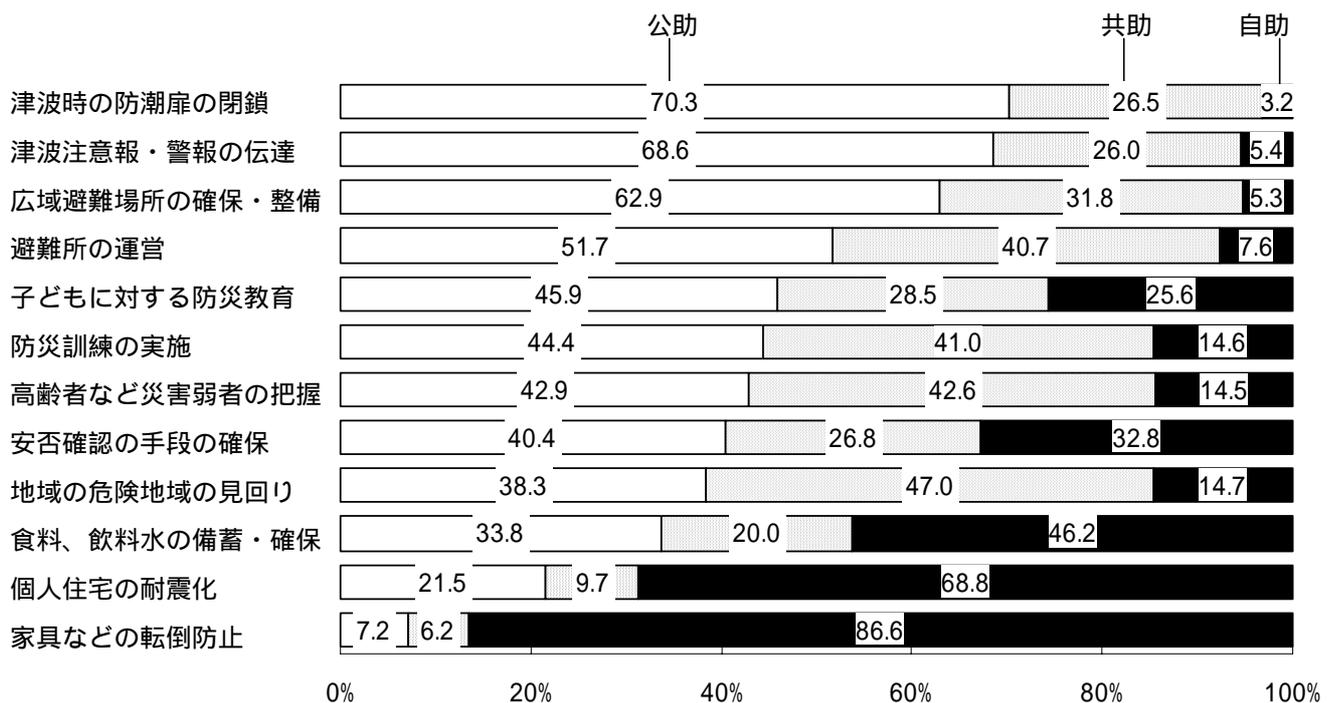


図 1-67 自助・共助・公助のバランス意識

図 1-67 は、問 48 に含まれていた 12 の防災項目について、自助・共助・公助の全体を 10 (割) としたとき、公助の割合が高かった順にそれらを並べたものである。これをみると、「津波時の防潮扉の閉鎖」、「津波注意報・警報の伝達」、「広域避難場所の確保・整備」などの項目について、公助に期待する割合が高い。また、これら 3 つの項目は自助でカバーすべきと考える割合がもっとも小さかった 3 項目でもある。

反対に、公助への期待は低く、自助でカバーすべきと考えられた項目としては、「家具などの転倒防止」、「個人住宅の耐震化」、「食料・飲料水の備蓄・確保」の 3 項目である。

他方で、共助への期待が高かった項目は、高い順に、「地域の危険地域の見回り」、「高齢者などの災害弱者の把握」、「避難所の運営」である。

イ．自助・共助・公助のバランス意識と諸項目との関係 (図 1-68, 1-69)

- ・女性の方が男性よりも共助を重視する傾向にあった。
- ・中年年齢層は高年齢層に比べて共助に期待する意識が低かった。

次に、12 項目を総合して、全体として自助・共助・公助のバランス意識がどのようになっているかについて分析した。具体的には、自助・共助・公助に割り振られた割合を 12 項目すべて合計し、その合計点 (最大 0~120 点) を 10 割とみなして、自助・共助・公助のバランス意識を算出した。その上で、その得点と諸項目との関係を分析した。

イー1 性別

自助・共助・公助のバランス意識と、性別との関連をみると（図 1-68）統計的に意味のある差が認められた。

すなわち、男性は、女性よりも公助と自助を重視する傾向にあり、逆に、女性は、男性よりも共助を重視する傾向にあった。これは、一般的に、女性の方が男性よりも近所づきあい等を通して地域社会との結びつきが強いことと関係していると推測される。

ただし、自助のウェートが高い3つの項目（家具などの転倒防止（項目1）個人住宅の耐震化（項目2）食料、飲料水の備蓄・確保（項目3））では、男女差は見られなかった。つまり、これらの3つの項目は、男女共通して、自助努力が重要視されていた。

他方で、以下の項目では男女差が見られた。

まず、公助意識と共助意識について、男女間で統計的に意味のある差が認められた項目としては、安否確認の手段の確保（項目4）広域避難場所の確保・整備（項目9）子どもに対する防災教育（項目10）津波注意報・警報の伝達（項目11）津波時の防潮扉の閉鎖（項目12）があった。これらの5つの項目ではいずれも、男性は女性よりも公助を重視し、女性は男性よりも共助を重視していた。

また、共助意識と自助意識について、男女間で統計的に意味のある差が認められた項目としては、防災訓練の実施（項目5）地域の危険地域の見回り（項目7）があった。これらの項目では、いずれも、男性は女性よりも自助を重視し、女性は男性よりも共助を重視していた。

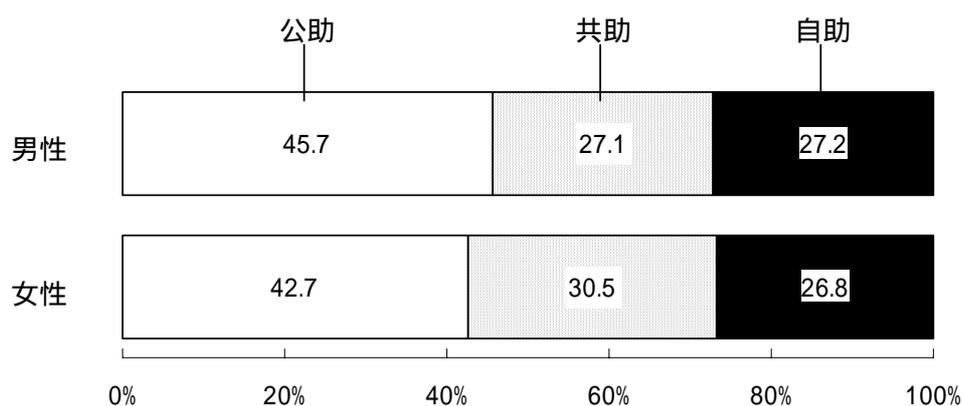


図 1-68 自助・共助・公助のバランス意識（性別）

イー2 年齢別

自助・共助・公助のバランス意識と、年齢との関連をみると（図 1-69）、一部に統計的に意味のある差が認められた。具体的には、公助については年齢による差が見られなかったが、共助と自助については、40代、50代の中年年齢層と70歳代以上の高年齢層の間で差が見られた。

すなわち、40代、50代の中年年齢層の共助に対する期待が、70歳以上の高年齢層よりも低いことがわかった。これについては、40代、50代の中年年齢層は、仕事、家庭両面での負担がピークに達する世代であるため、地域社会（共助）への関心が低下する傾向にあることと関連すると思われる。逆に、70歳以上の高年齢層は、体力等の問題から自助に対して不安を抱え、地域社会からの支援、協力（共助）に期待する部分が多いことも影響していると思われる。いずれにしても、自助・共助・公助のバランス意識の年齢層による違いに留意しておく必要がある。

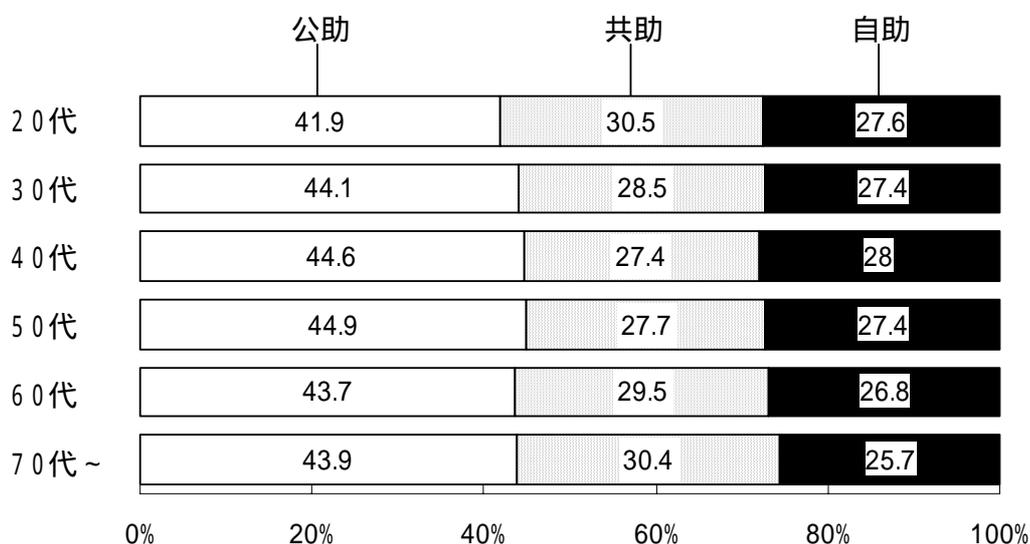


図 1-69 自助・共助・公助のバランス意識（年齢別）

イー3 被害程度別

自助・共助・公助のバランス意識と被害程度との関連をみると、人的被害、家屋被害、家財被害、被害総額いずれの要因との間でも、統計的に意味のある差は認められなかった。

すなわち、過去の被災体験は、直接的には、自助・共助・公助のバランス意識に影響しないことが示唆される。

第2部 生活復興感

第1章 生活復興感尺度の結果

2001年、2003年調査と同様に「生活の充実度」「生活の満足度」「1年後の生活の見通し」の3つに関する質問項目を設けた。

生活充実度に関しては、「あなたは現在の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか」と問い、「忙しく活動的な生活を送ることは」、「自分のしていることに生きがいを感じることは」、「まわりの人びととうまくつきあっていくことは」、「日常生活を楽しく送ることは」、「自分の将来は明るいと感じることは」、「元気ではつつとしていることは」、「仕事の量は」、の計7項目について、「かなり減った～かなり増えた」の5選択肢で回答を求めた。(問26)

生活の満足度については、「あなたは現在、つぎにあげたことがらについて、どの程度満足されていますか」と問い、「毎日のくらしに」、「ご自分の健康に」、「今の人間関係に」、「今の家計の状態に」、「今の家庭生活に」、「ご自分の仕事に」、の計6項目に対して、「たいへん不満である～たいへん満足している」の5選択肢で回答を求めた。(問28)

1年後の生活の見通しについては、「1年後のあなたを想像してください。あなたは今よりも生活が良くなっていると思いますか、どうですか。」として、「かなり良くなる～かなり悪くなる」までの5選択肢を与えた。(問30)

これら3種類の質問群を、質問紙の中で異なった場所でたずねた。

得られた回答により、これら計14項目が「生活復興感」という1つの潜在変数をはかっているかどうかを確認するために、因子分析を行った。その結果1因子が抽出された。

つまり、14項目は確かに1つの潜在変数をはかっていることがわかり、この潜在変数を「生活復興感」と名づけ、2001年、2003年調査に引き続き、2005年調査においても分析の対象とした。(表2-1)

表 2-1 2005 年度生活復興感尺度・因子分析結果(N=1028)

		因子負荷量	共通性
問 26	震災前と比べて増えましたか？減りましたか？		
	1 忙しく活動的な生活を送ること	0.535	0.778
	2 生きがいを感じることに	0.747	0.714
	3 まわりの人々とのつきあい	0.648	0.610
	4 日常生活を楽しく送ること	0.794	0.758
	5 将来は明るいと感じること	0.781	0.667
	6 元気ではつらつとしていること	0.791	0.736
	8 仕事の量	0.388	0.813
問 28	あなたの満足度は？		
	1 毎日の暮らし	0.768	0.775
	2 自分の健康	0.619	0.496
	3 今の人間関係	0.654	0.579
	4 今の家計の状態	0.634	0.664
	5 今の家庭生活	0.682	0.689
	6 自分の仕事	0.658	0.636
問 30:c	1年後のあなたは？ 今より生活がよくなっていますか？	0.516	0.319
固有値		6.247	
寄与率 (%)		44.622	

「生活復興感」の全体傾向について、2001 年調査、2003 年調査、2005 年調査の比較を行った。

具体的な方法としては、それぞれの調査での生活復興感に関する 14 設問に対する回答を得点化し、各年の生活復興感得点とした。(表 2-2)

表 2-2 生活復興感・得点表

		かなり 増えた	少し 増えた	変わら ない	少し 減った	かなり 減った
問26 震災前と比べて増えましたか？減りましたか？						
1	忙しく活動的な生活を送ること	5点	4点	3点	2点	1点
2	生きがいを感じる	5点	4点	3点	2点	1点
3	まわりの人々とのつきあい	5点	4点	3点	2点	1点
4	日常生活を楽しく送ること	5点	4点	3点	2点	1点
5	将来は明るいと感じること	5点	4点	3点	2点	1点
6	元気でつらつとしていること	5点	4点	3点	2点	1点
8	仕事の量	5点	4点	3点	2点	1点
問28 あなたの満足度は？						
		いつも ある	たびた びある	たまに ある	まれに ある	まった くない
1	毎日のくらし	5点	4点	3点	2点	1点
2	自分の健康	5点	4点	3点	2点	1点
3	今の人間関係	5点	4点	3点	2点	1点
4	今の家計の状態	5点	4点	3点	2点	1点
5	今の家庭生活	5点	4点	3点	2点	1点
6	自分の仕事	5点	4点	3点	2点	1点
問30:c 1年後のあなたは？						
		かなり 良くなる	やや 良くなる	変わら ない	やや 悪くなる	かなり 悪くなる
	今より生活がよくなっていますか？	5点	4点	3点	2点	1点

- ・被災者の生活復興感は2003年に比べてやや上昇した。
- ・生活復興感の高い人と低い人とのばらつきが広がる傾向が見られた。

2001年調査、2003年調査、2005年調査における生活復興感得点の代表値を比較すると、統計的に意味のある差異があった ($F(2, 2387) = 3.863, p < .05$) (図 2-1)

生活復興感は、2001年(平均 40.6)から2003年(平均 39.9)にかけては、ほとんど変動がなかったが、2003年(平均 39.9)から2005年(41.2)にかけてはやや上昇($p < .05$)した。

また、年を追うにつれて、生活復興感の高い人と低い人とのばらつきが広がっていることがわかった(標準偏差: 8.70(2001年) 9.62(2003年) 9.87(2005年))。

2001年調査から2005年調査までの結果をみると、この4年間の生活復興感の推移は、この間のわが国の景気動向によって説明できると考えられる。図 2-2 の日経平均株価の推移をみると、2001年から2003年にかけて、日本経済は低迷のどん底にいたが、2003年を底に、2005年にかけて回復基調がみられた。こうした景気動向と生活復興感とは、図で明らかなように高い相関を有しており、経済の再建が生活復興の重要な側面であることが指摘できる。

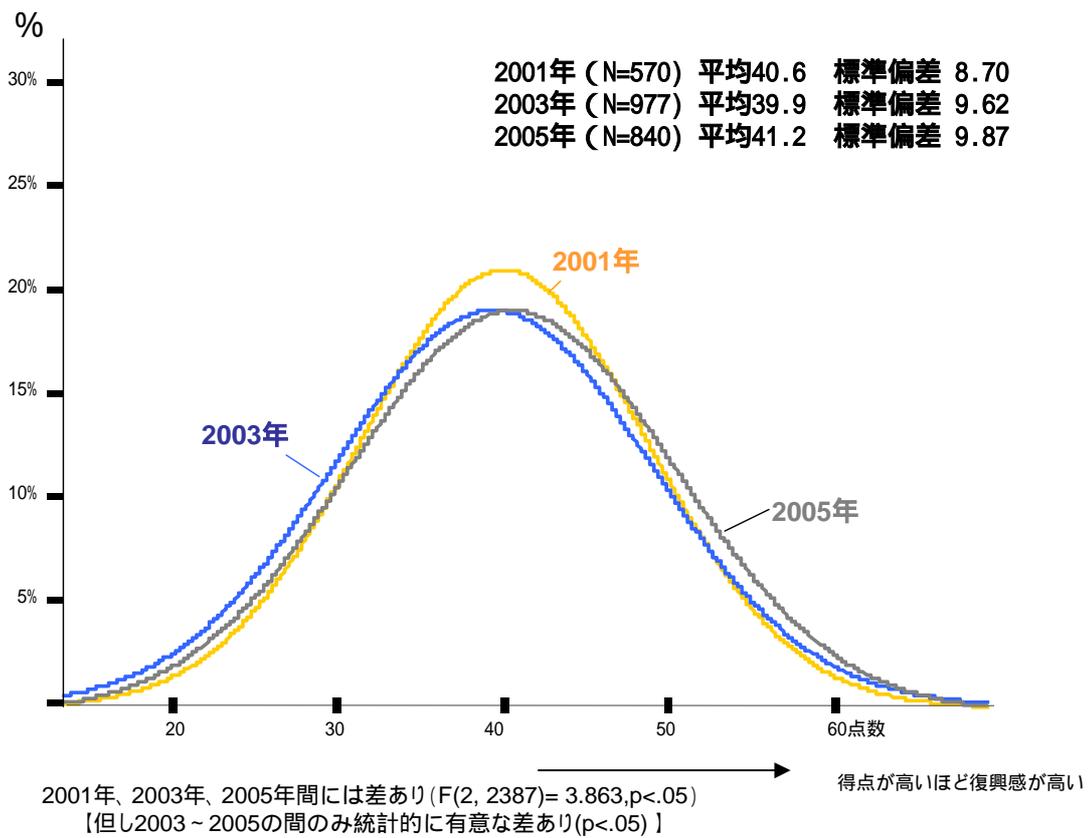


図 2-1 生活復興感の3時点における得点分布

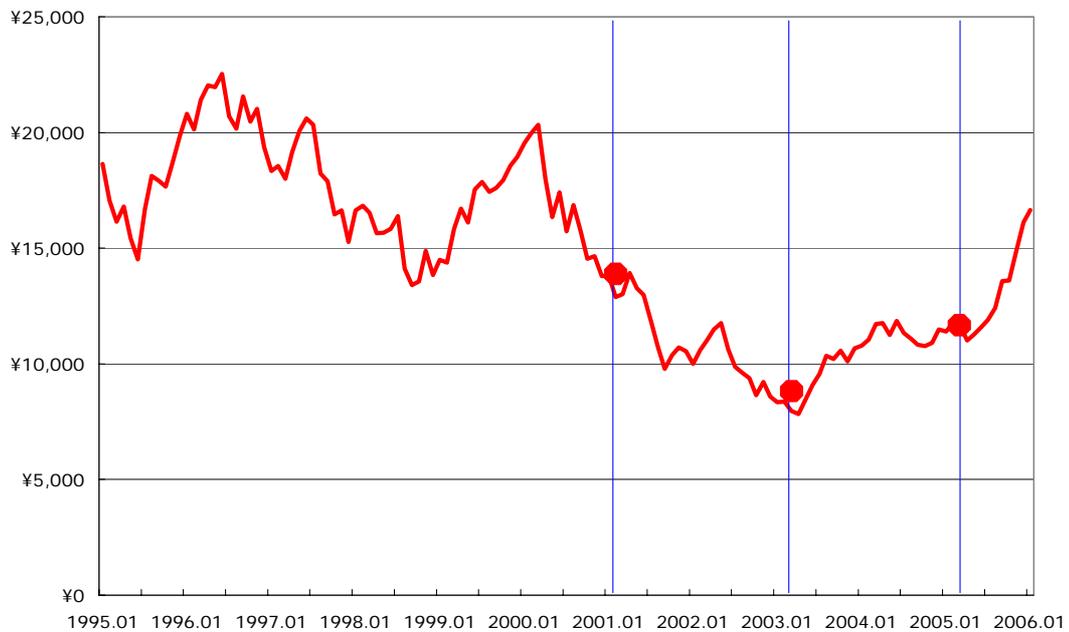


図 2-2 調査時期と日経平均株価との関係 (が調査時期)

第2章 生活復興感を規定する生活再建課題

本章においては、2001年、2003年調査に引き続き、生活再建課題7要素*と生活復興感との関連を調べた。

*「生活再建課題7要素」とは、震災5年目に被災地で行われた神戸市震災復興検証の市民ワークショップにおける言語データを集約した結果、導き出された7つの要素(すまい・人と人とのつながり・まち・そなえ・こことからだ・くらしむき・行政とのかかわり)である。

1. すまい

地域への永住希望と生活復興感

・現在の地域ですっと暮らしていきたいと思っている人の生活復興感が高かった。

すまいの永住希望と生活復興感との関連をみると、2003年調査では、地域への永住を希望している人と希望していない人の生活復興感には、統計的に意味のある差はなかったが、2005年調査では、統計的に意味のある差があることがわかった。

現在の地域ですっと暮らしていきたいと思っている人の生活復興感が高く、今後引っ越したいと考えている人の生活復興感は低かった。

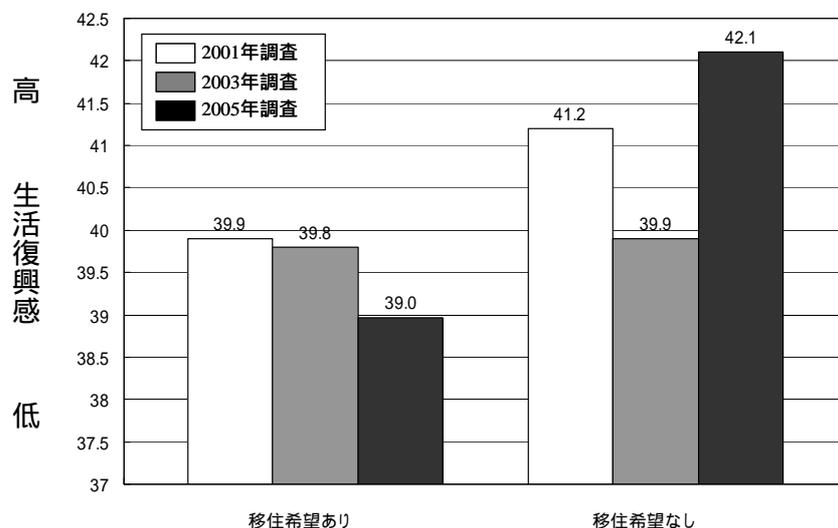


図 2-3 生活復興感 (永住希望)

すまい満足度と生活復興感

- ・すまい満足度の高い人ほど、生活復興感が高かった。

現在のすまいの満足度と生活復興感との関連をみると、現在自分が居住しているすまいの満足度が高い人ほど生活復興感が高く、すまいの満足度が低い人ほど生活復興感が低かった。なお、この傾向は、2003年調査でも同様であった。

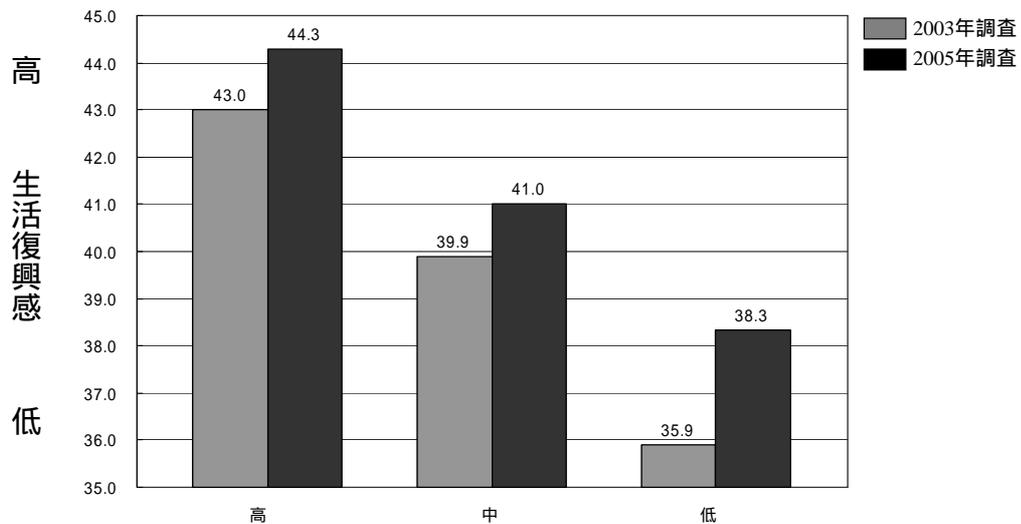


図 2-4 生活復興感（すまい満足度）

住居形態と生活復興感

- ・社宅・寮、民間分譲集合住宅、持地持家に居住している人の生活復興感が高かった。
- ・公営住宅に居住している人の生活復興感が低かった。

住居形態と生活復興感の関連をみると、社宅・寮、民間分譲住宅、持地持家などに居住している人の生活復興感が高く、公営住宅に居住している人の生活復興感が低かった。なお、この傾向は、2001年、2003年調査でも同様であった。

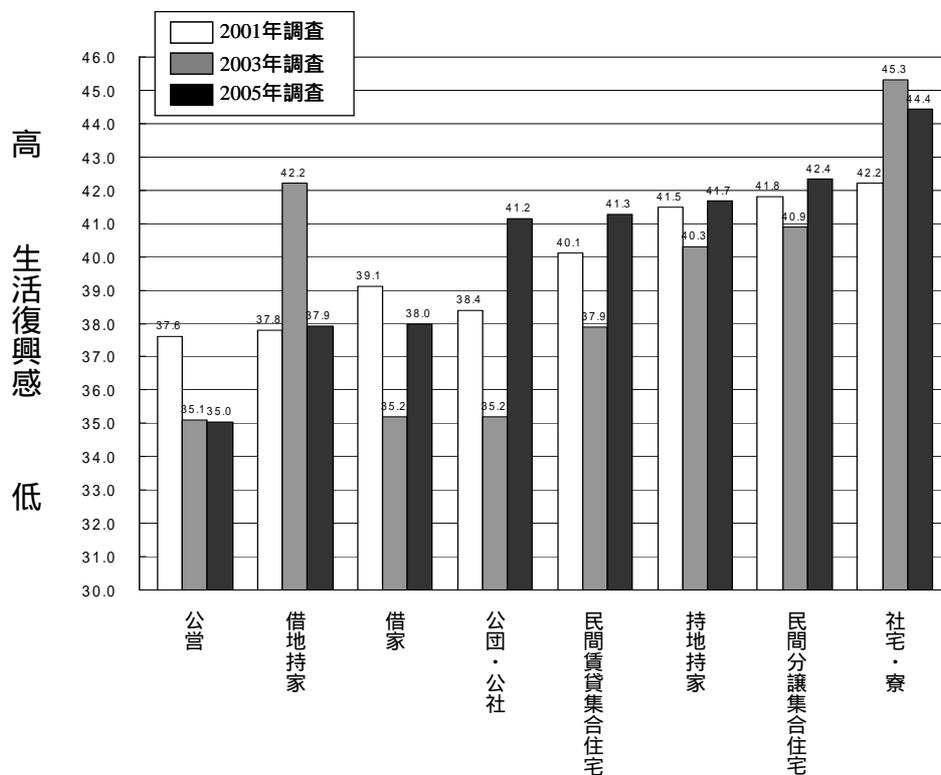


図 2-5 生活復興感生活復興感（すまいの形態）

2. 人と人とのつながり

市民性と生活復興感

- ・市民性が高い人ほど、生活復興感が高かった。

市民性と生活復興感との関連をみると、市民性が高い（自律・連帯する意識が高い）人の生活復興感が高く、市民性が低い人の生活復興感は低かった。

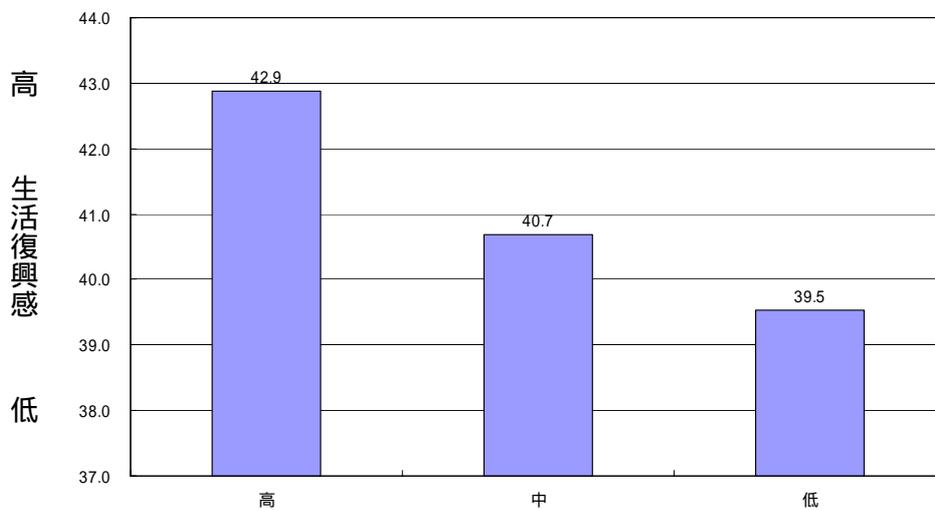


図 2-6 生活復興感（市民性）

社会的信頼（社会に対する信頼意識）

- ・社会に対する信頼の意識が高い人ほど、生活復興感が高かった。

社会に対する信頼の意識と生活復興感との関連をみると、社会に対する信頼の意識が高い（他者に対して「基本的に正直である」「ほとんどの人は信頼できる」と思っている）人は生活復興感が高く、信頼の意識が低い人は生活復興感が低かった。

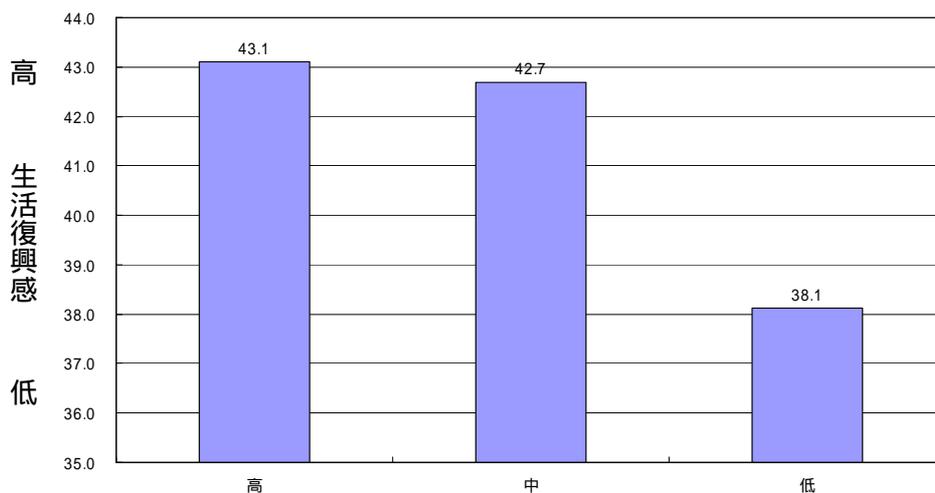


図 2-7 生活復興感（社会的信頼）

近所づきあい・地域活動と生活復興感

- ・近所づきあいや地域活動に積極的な人ほど、生活復興感が高かった。

近所づきあい（「近所におすそわけをする家がある」「近所に世間話をする人がいる」など）や地域活動（「まちのイベントに参加している」「地域でのボランティア活動をしている」など）の度合いと生活復興感との関連をみると、近所づきあいや地域活動に積極的な人は生活復興感が高く、積極的でない人は生活復興感が低かった。

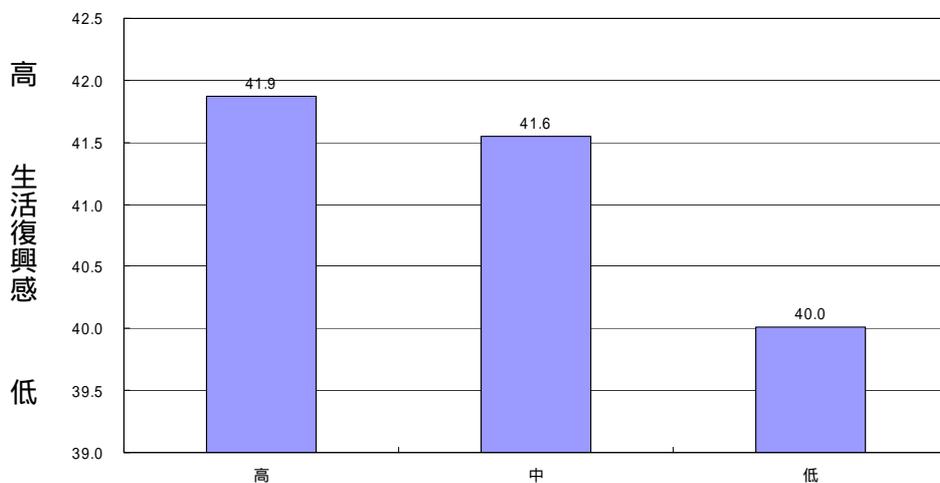


図 2-8 生活復興感生活復興感（近所づきあい・地域活動）

家族関係と生活復興感

- ・家族間の心理的な結びつき（きずな）の距離が遠い（バラバラ）人の生活復興感が低かった。
- ・家族関係のかじとり（リーダーシップ）について、中庸なバランスの取れた（きっちり・柔軟）人は生活復興感が高かった。

家族関係の「きずな」（心理的な結びつき）と生活復興感との関連をみると、心理的な結びつきの距離が遠い（バラバラ）人の生活復興感が非常に低かった。

また、2001年、2003年調査では、中庸な結びつき（サラリ、ピッタリ）の人の生活復興感が高かったが、今回は、家族関係が非常に密着している（ベッタリ）人の生活復興感が最も高かった。

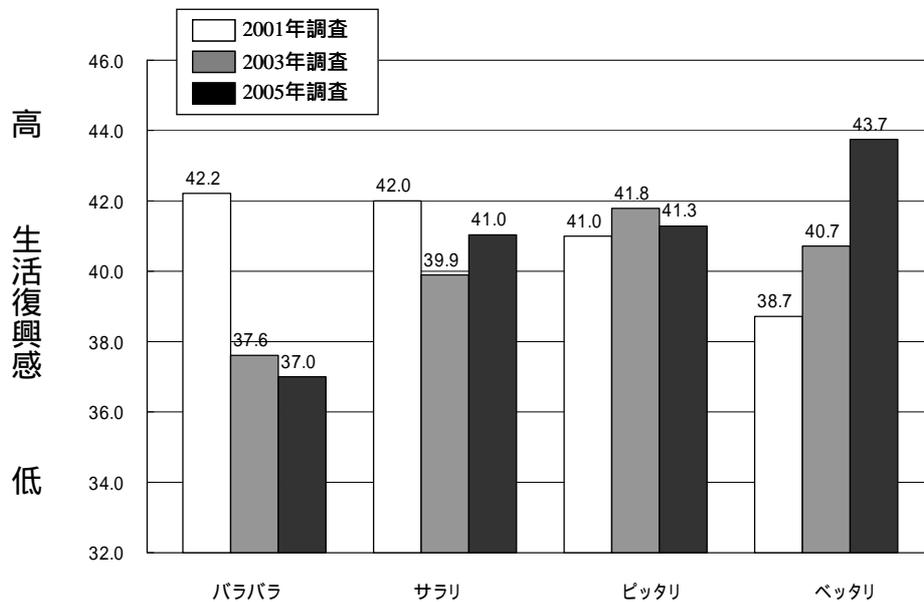


図 2-9 生活復興感（家族のきずな）

また、家族関係の「かじとり」(リーダーシップ)と生活復興感との関連をみると、家族関係のかじとりにバランスの取れた（キッチリ、柔軟）人の方が、バランスの取れていない（融通なし、てんやわんや）人より生活復興感が高かった。

なお、この傾向は、2001年、2003年調査と同様であった。

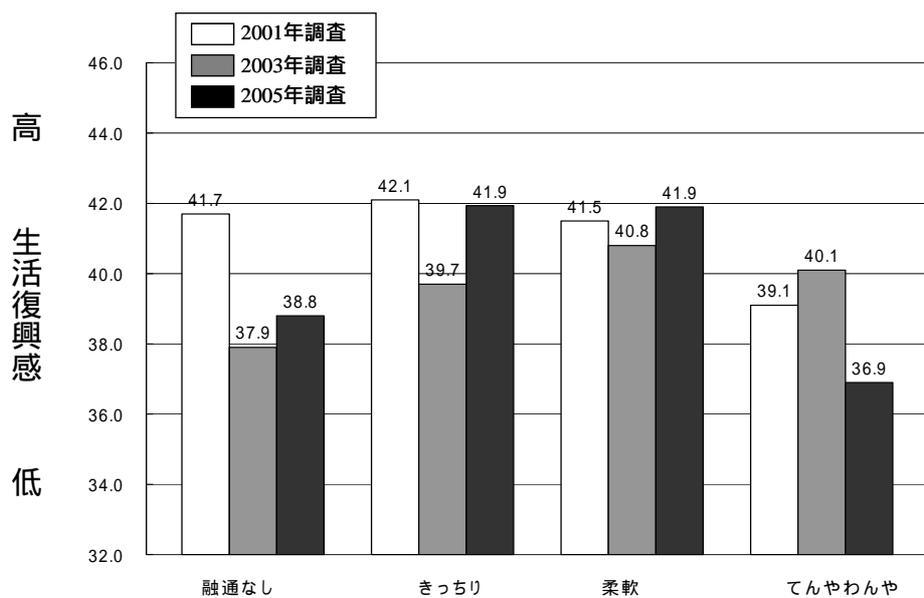


図 2-10 生活復興感（家族のかじとり）

他者や周囲に対する態度と生活復興感

- ・他者や周囲に対して、持ちつ持たれつ関係を重視する「世間志向」タイプの人の生活復興感が高く、個人分離の関係を重視する「社会志向」タイプの人の生活復興感は低かった。

他者や周囲に対する態度と生活復興感との関連をみると、持ちつ持たれつ関係を重視する「世間志向」タイプの人の生活復興感が高く、個人分離の関係を重視する「社会志向」タイプの人の生活復興感は低かった。

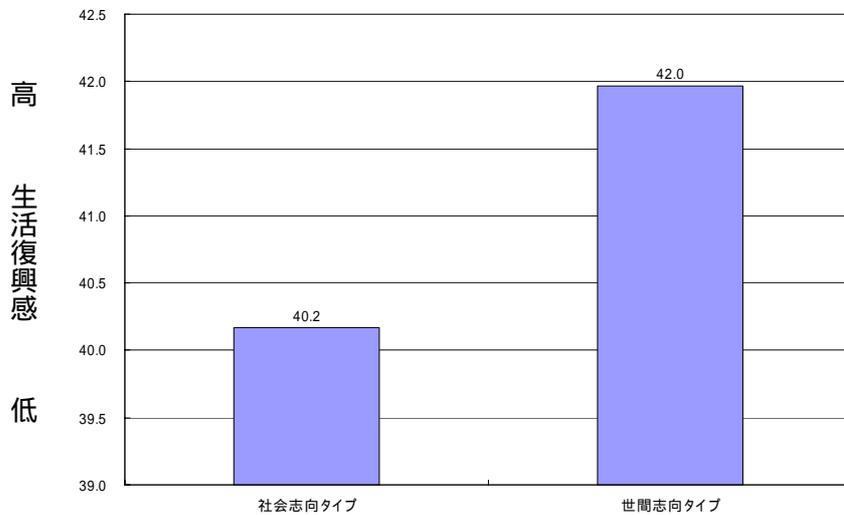


図 2-11 生活復興感（世間的、社会的なつながり）

3 . まち

まちの復興速度感と生活復興感

- ・自分が生活するまちの復興の速度が「速い」と感じている人の生活復興感が高く、「遅い」と感じている人の生活復興感は低かった。

自分の「まち」の復興の速度を「かなり速い」「やや速い」と答えた人に「速い」、「ふつう」と答えた人に「ふつう」、「やや遅い」「かなり遅い」と答えた人に「遅い」の 카테고리を与え、生活復興感との関連をみた。

まちの復興の速度が「速い」と感じている人の生活復興感が高く、「遅い」と感じている人の生活復興感は低かった。

なお、この傾向は、2001年調査、2003年調査でも同様であった。

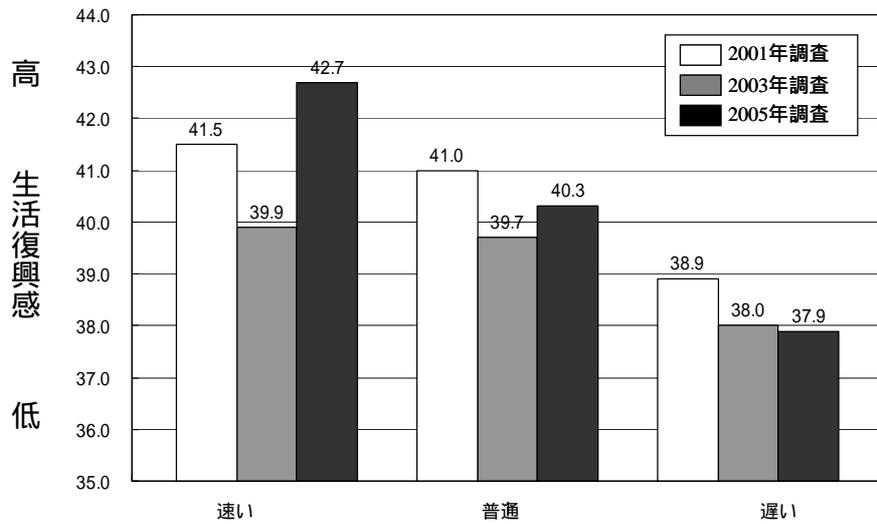


図 2-12 生活復興感（まちの復興速度感）

地域の夜の明るさと生活復興感

- ・地域の夜の明るさが「震災前よりも明るくなった」と感じている人の生活復興感が高く、「震災前よりも暗くなった」と感じている人の生活復興感が低かった。

地域の夜の明るさと生活復興感との関連をみると、夜の明るさが「震災より明るくなった」と感じている人の生活復興感が高く、「震災前よりも暗くなった」と感じている人の生活復興感は低かった。

なお、この傾向は、2001年調査、2003年調査でも同様であった。

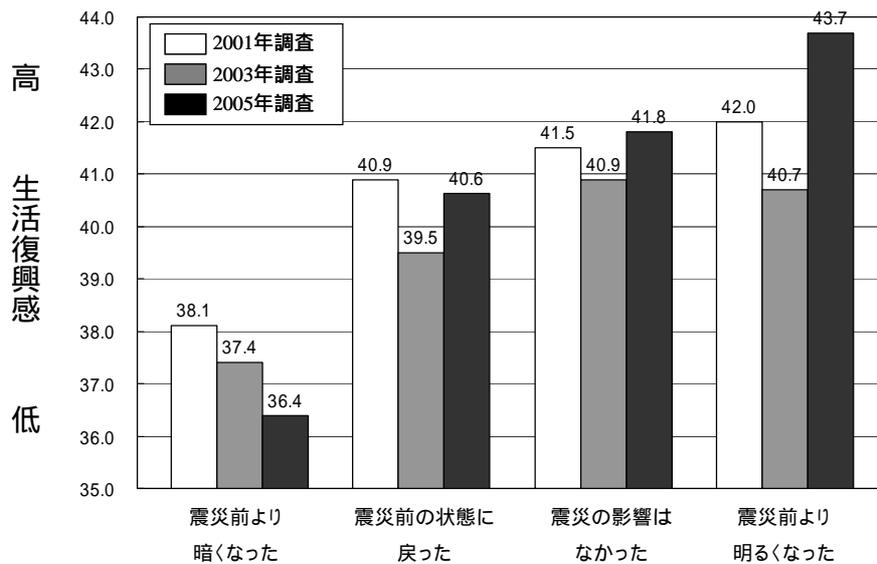


図 2-13 生活復興感（まちの明るさ）

まちの共有物（コモンズ）と生活復興感

- ・まちの共有物（コモンズ）の認知や愛着の度合いが高い人の生活復興感が高く、愛着の度合いの低い人の生活復興感は低かった。

まちの共有物への認知や愛着の度合いと生活復興感との関連をみると、自分の生活するまちにある共有物（公園、街並み、みんなが気軽に集まれる場所など）」の認知や愛着の度合いが高い人は生活復興感が高く、自分の住むまちへの愛着の度合いが低い人の生活復興感は低かった。

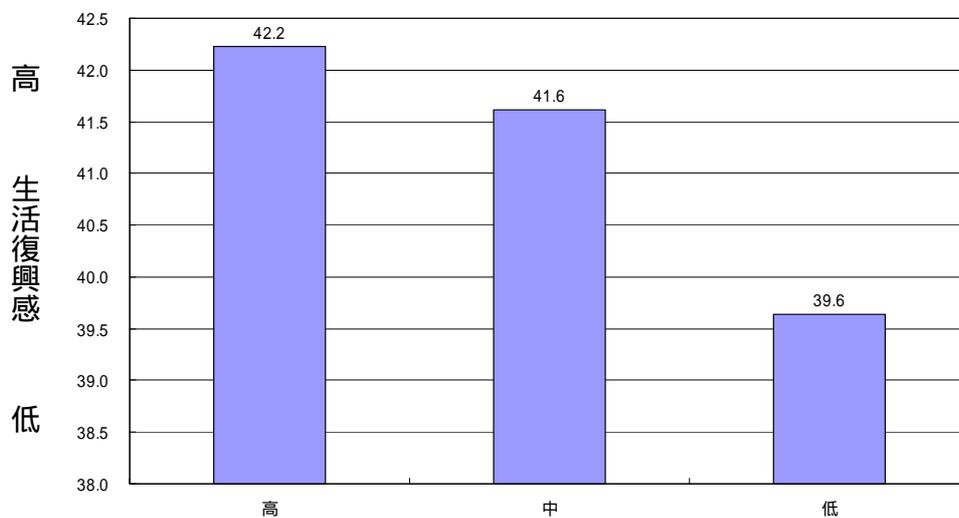


図 2-14 生活復興感（まちのコモンズ）

4 . そなえ

被害予測（将来の災害に対する不安）と生活復興感

- ・将来の災害による被害を低く予測している人の生活復興感が高く、高く予測している人の生活復興感は低かった。

将来起こりうる災害への被害予測と生活復興感の関連をみると、将来の災害による被害を低く予測している人の生活復興感が高く、被害を高く予測している人の生活復興感は低かった。

なお、この傾向は、2003年調査と同様であった。

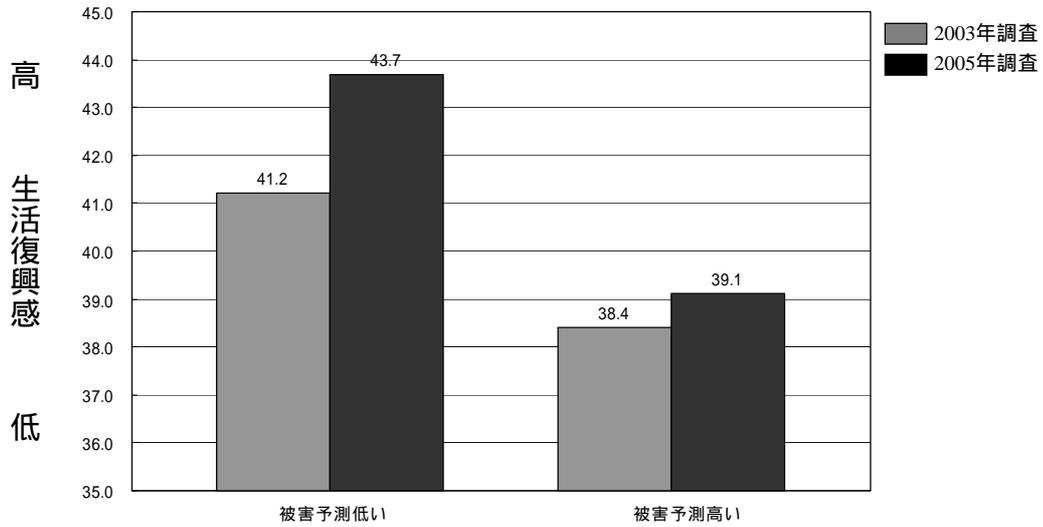


図 2-15 生活復興感（東南海・南海地震被害予測）

5 . 心とからだ

心・からだのストレスと生活復興感

- ・心とからだのストレスが低い人ほど、生活復興感が高かった。

心とからだのストレスと生活復興感の関連をみると、ストレスが低い人の生活復興感が高く、ストレスが高い人の生活復興感は低かった。

なお、この傾向は、2001 年、2003 年調査と同様であった。

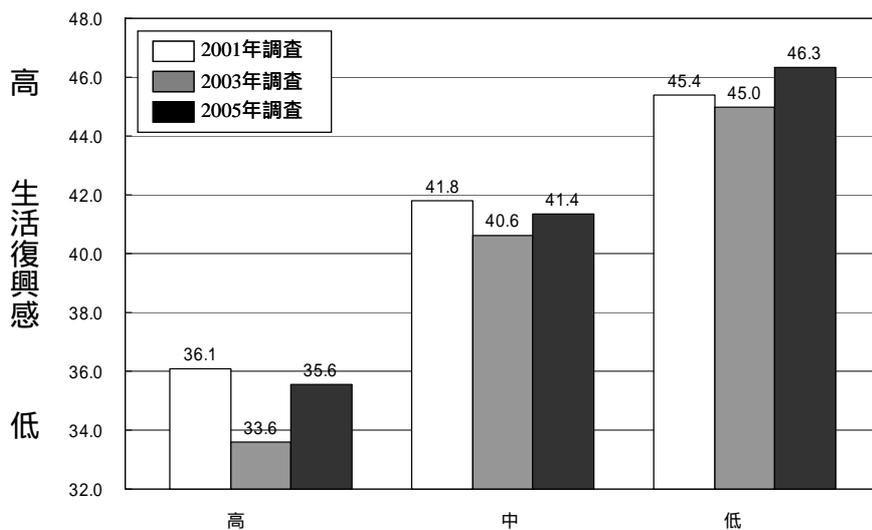


図 2-16 生活復興感生活復興感（心のストレス）

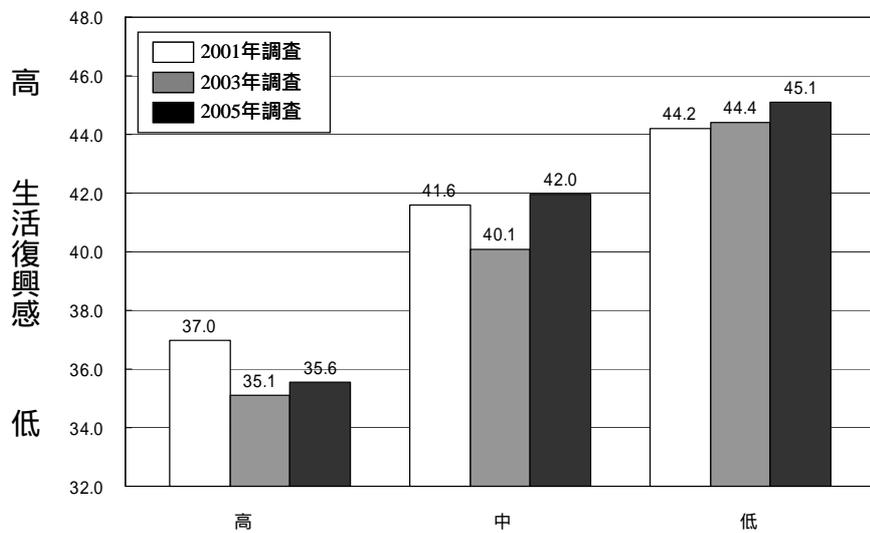


図 2-17 生活復興感生活復興感（からだのストレス）

6. くらしむき

家計の収支と生活復興感

- ・家計の収支が震災前に比べて「好転」の人の生活復興感が高く、「悪化」の人の生活復興感は低かった。

家計の収支と生活復興感の関連をみるため、家計に関する回答結果を次のように整理した。

収入・預貯金については、震災前に比べて「増えた」とした回答には+1点を、「変わらない」には0点、「減った」とした回答には-1点を与えた。支出については、震災前に比べて「増えた」とした回答には-1点、「変わらない」には0点、「減った」と回答した人には1点を与えた。

回答者ごとに収入、預貯金、支出について得点を足しあわせ、+の得点をなったものを「好転」、0となったものを「トントン」、-の値をなったものを「悪化」とした。

その結果、家計収支が「好転」の人の生活復興感が高く、「悪化」の人の生活復興感は低かった。なお、この傾向は、2001年、2003年調査と同様であった。

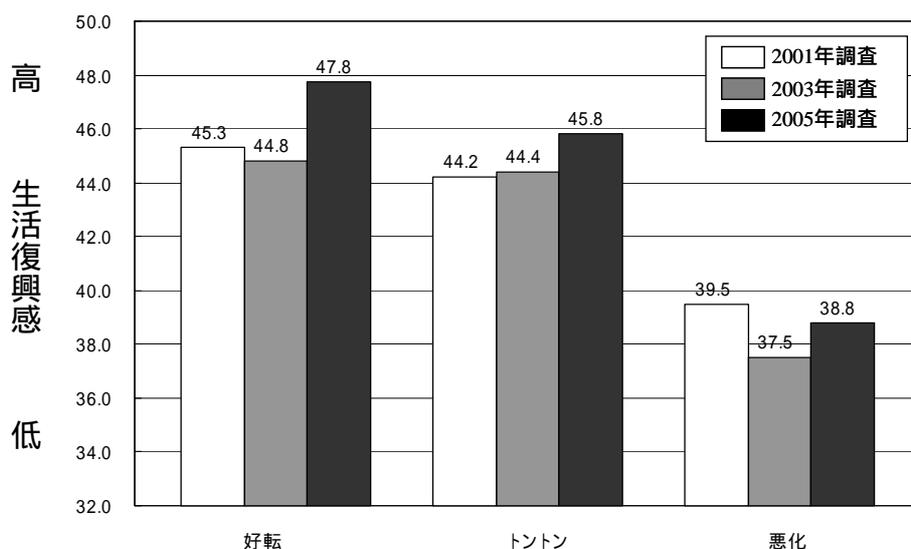


図 2-18 生活復興感（家計収支）

7 . 行政とのかかわり

行政とのかかわりと生活復興感

- ・共和主義的な考え方（公共的なことからは、市民の積極的な参画によって担われるべきだという考え方）の人の生活復興感が高かった。

行政とのかかわり方と生活復興感との関連をみると、共和主義的な考え方の人は生活復興感が高く、後見主義的な考え方（地域の問題や公共的な事柄はすべて行政にまかせておけばいいという考え方）の人の生活復興感は低かった。

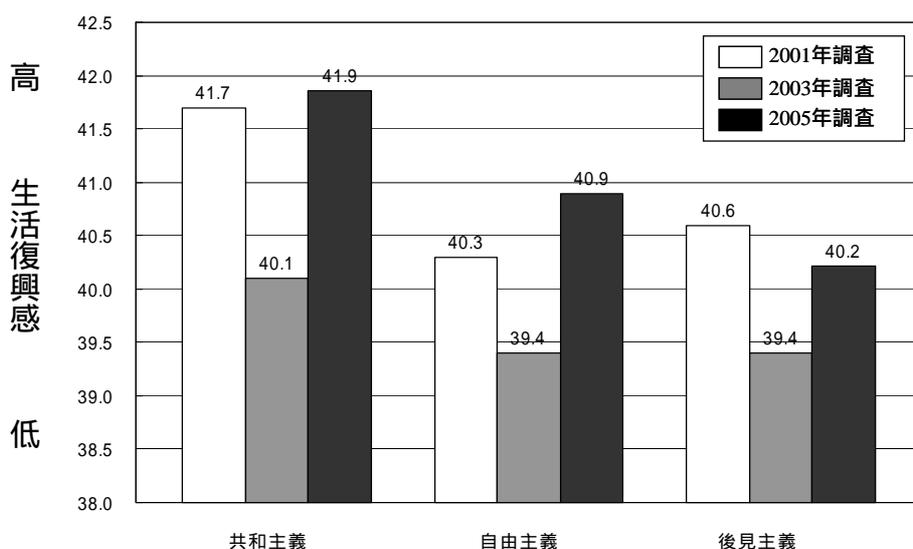


図 2-19 生活復興感（行政とのかかわり）

まちの公共物への自己負担意識(Willingness to Pay)

- ・公園の維持管理や地域の行事・活動などに対する金銭的な自己負担の意識が高い人ほど、生活復興感が高かった。

まちの公共物への自己負担意識については、近所の公園の維持管理、地域の行事（祭り・運動会等）、地域活動・市民活動に、年間いくらまでなら費用を負担できるかを金額で尋ねた。

得られた回答をもとに、0円、1000円未満、1000円～2999円、3000円以上の4つに分類し、まちの公共物への自己負担意識指標として得点化した。

まちの公共物への自己負担意識と生活復興感との関連をみると、自分のまちの公共物に対する金銭的な自己負担意識の高い人は生活復興感が高く、自己負担をあまりしたくないという意識の人の生活復興感は低かった。

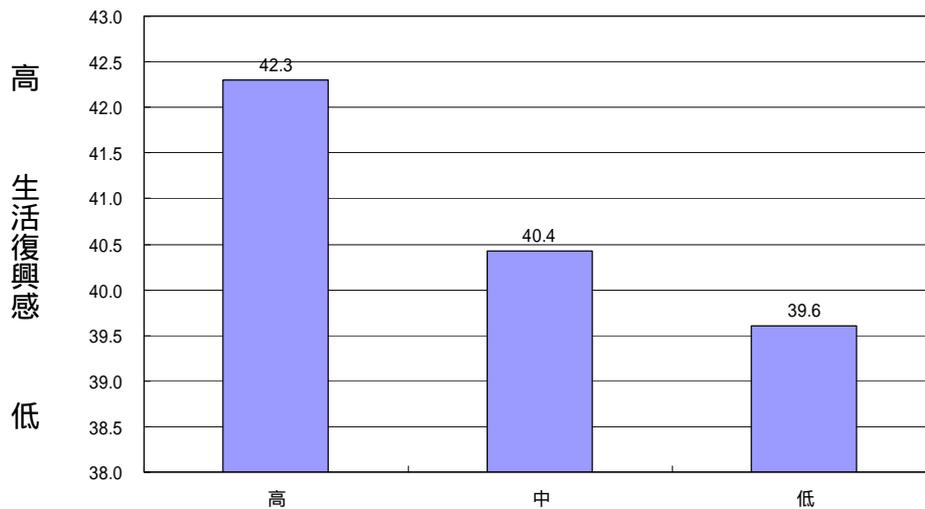


図 2-20 生活復興感（公共物への自己負担意識）

第3章 地域や職業による生活復興感の違い

1. 地域による違い

- ・生活復興感が高かったのは、猪名川町、東灘区、淡路、西区、明石市、須磨区であり、生活復興感が低かったのは、長田区、兵庫区、中央区、宝塚・川西市である。

地域別の生活復興感をみると(図 2-21)、生活復興感が高かったのは、猪名川町、東灘区、淡路、西区、明石市、須磨区であり、生活復興感が低かったのは、長田区、兵庫区、中央区、宝塚・川西市であった。

また、2003年調査と比較すると、16地域のうち13地域で生活復興感が上がり、特に、東灘区、猪名川町、西区、須磨区、淡路、明石市で大きな上昇がみられた。一方で、生活復興感が下がったのは、宝塚・川西市、兵庫区、芦屋市の3地域だけだった。

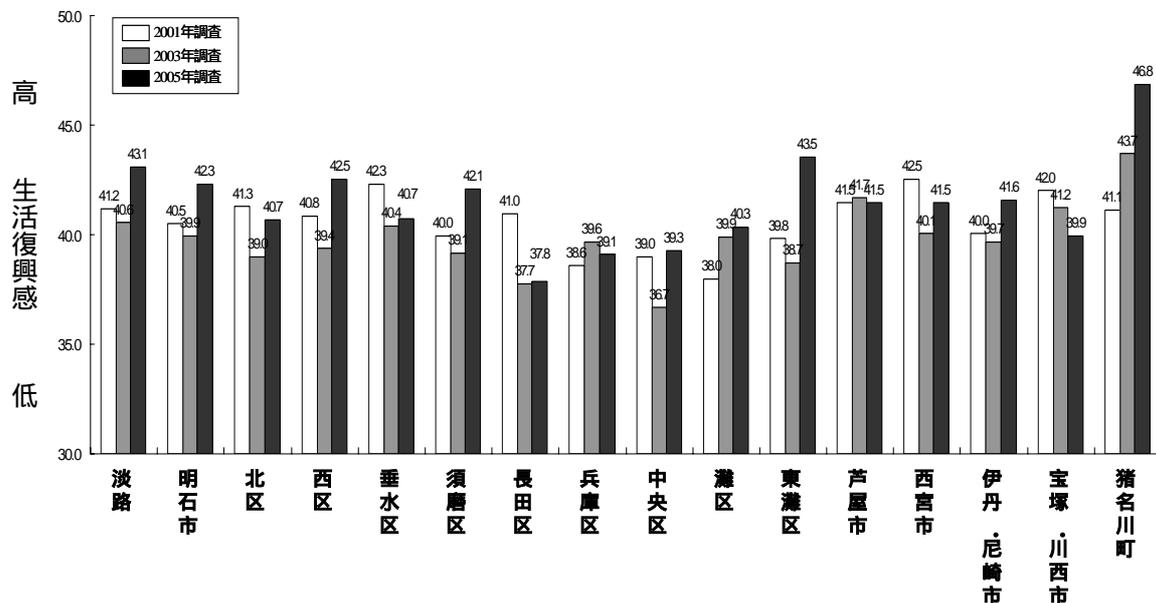


図 2-21 生活復興感(地域別)

2. 職業による違い

- ・生活復興感が高かったのは、学生、管理職、専門・技術職であり、生活復興感が低かったのは、無職、商工自営業、産業労働者である。

職業別の生活復興感をみると(図 2-22)、生活復興感が高かったのは、学生、管理職、専門・技術職であり、生活復興感が低かったのは、無職、商工自営業、産業労働者であった。

また、2003 年調査と比較すると、農林漁業を除くすべての職業で生活復興感が上がり、特に 59 歳以下の無職、サービス関連従事者、専門技術職、商工自営業、産業労働者で大きな上昇がみられた。

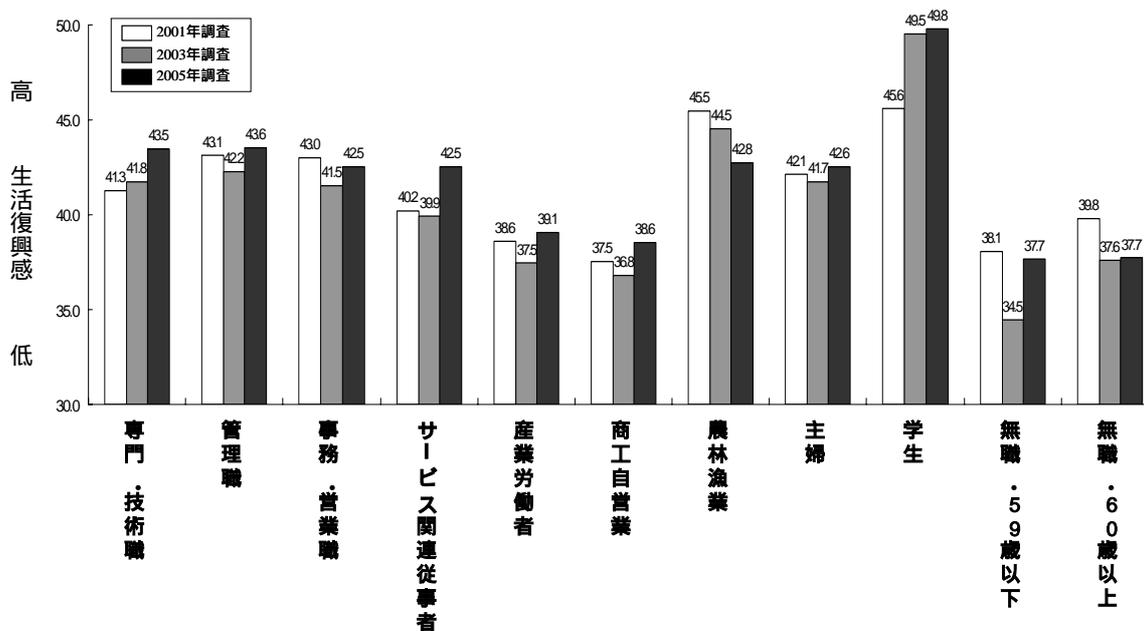


図 2-22 生活復興感（職業別）

第3部 統合的な生活復興モデル(2005年モデル)の構築

2003年調査においては、人々のライフイベント(きわめて重要な人生のできごと)に関する社会学や心理学の研究を参考にしながら、被災者の震災直後から現在に至るまでの「生活復興過程」の分析を行うとともに、生活再建課題7要素、生活復興過程要因、生活復興感という諸要因間の構造的な関係の解明を行った。

2005年調査においても、2003年調査における解析手法を基本的に踏襲しながら、2005年生活復興調査結果に基づく統合的な生活復興モデル(2005年モデル)の構築を試みた。

なお、第3部での分析においては、生活復興感を規定する多数の要因相互間に因果的なモデルを想定したうえで、実際に調査から得られたデータとの適合性を検証するなど、極めて多数の項目を同時に解析することが必要となる。したがって、未回答項目のある回答者のデータを分析対象から除外すると、多くの貴重なデータが活用できなくなることから、こうしたパネル回答者の未回答項目を補うために、類似した項目から未回答項目の回答を予測する欠損値処理を行い、結果として、984名の回答データをもとに分析を行った。

1. 生活復興過程要因の分析

1) 2003年調査における生活復興過程要因の分析と結果

2003年調査では、被災者の生活復興過程を規定する要因を概念化するため、被災者の生活復興過程がどのような状況であるのか(生活復興過程尺度)、被災者が震災体験をどのように評価しているのか(人生評価尺度)に着目して分析した。

その結果、被災者の生活復興過程は、「復興途上」、「自立(奮闘中)」、「震災が人生の転機(となった)」、「自立(回復)」、「(震災は)肯定的な体験」という5つの要因で規定されることが明らかになった。

被災者の生活復興過程を測定する22項目についての因子分析結果は、下表の通りであった(表3-1)。

表 3-1 生活復興過程尺度 17 項目と人生変化尺度 5 項目の因子分析
(斜交解)結果 (2003 年調査)

	再興途上 Retreat	自立 (奮闘中) Struggle for Meaning	震災が人生 の転機 Sense of Life Change	自立 (回復) Return to Normalcy	肯定的な体験 Life Change Direction	Communality
14.震災については触れてほしくない	0.842	-0.134	0.026	-0.138	-0.145	0.719
19.震災の話は聞きたくない	0.828	-0.177	0.004	-0.116	-0.165	0.691
11.震災のことを思い出したくない	0.806	-0.119	0.114	-0.072	-0.208	0.659
5.震災での体験は過去から消したい	0.716	-0.101	0.208	-0.049	-0.212	0.552
13.震災後感動することが少なくなった	0.669	-0.226	0.130	-0.138	-0.228	0.469
8.自分の運命に無関心になった	0.577	-0.254	-0.051	0.063	-0.259	0.380
6.今では震災を話題にすることもない	0.453	-0.186	-0.382	0.019	-0.083	0.385
12.生きる事は意味があると強く感じる	-0.249	0.738	0.043	0.137	0.259	0.567
18.人生には何らかの意味があると思う	-0.200	0.706	0.040	0.060	0.215	0.520
9.震災によって精神的に成長できた	-0.112	0.658	0.332	0.065	0.331	0.475
20.震災後人も捨てた物でないと感じる	-0.192	0.620	0.185	0.169	0.295	0.402
7.人生の使命を考えるようになった	0.013	0.612	0.282	-0.046	0.130	0.434
16.宿命に流されず生きる勇気がある	-0.072	0.600	-0.007	0.071	0.292	0.398
4.震災での体験は得がたい経験だった	-0.208	0.412	0.210	0.256	0.096	0.264
(人生変化2)震災前後で自分は変わったと感じる	0.080	0.234	0.818	-0.224	0.349	0.740
(人生変化3)自分の人生は変わったと感じる	0.120	0.194	0.806	-0.301	0.216	0.700
(人生変化1)震災を時間的区切りとした言い方	0.087	0.065	0.718	0.052	-0.082	0.592
3.現在がふつうのくらしに感じられる	-0.124	0.153	-0.140	0.850	0.146	0.730
2.毎日の生活は決まった事の繰り返し	0.049	-0.009	-0.094	0.749	-0.059	0.593
1.暮らし方のめどが立っている	-0.166	0.204	-0.138	0.713	0.269	0.562
(人生変化2-1)自分の変化の方向*	-0.251	0.353	0.257	0.106	0.872	0.783
(人生変化3-1)人生の変化の方向*	-0.267	0.330	0.049	0.160	0.866	0.766
因子回転後の負荷量平方和	3.952	3.387	2.443	2.163	2.465	
因子寄与率(%)**	19.8%	16.9%	12.2%	10.8%	12.3%	

N=1203

さらに、この5つの要因(因子)間にどのような関連性があるのかについて分析した。

全22項目間の関連性の因子分析では、プロマックス法(斜交解)を用いて、各5因子それぞれの因子負荷量を求めた。そこで、この5因子に対する負荷量行列を用いて、1203名の回答者それぞれの各5因子での因子得点を求め、これら5因子間の関連性について再度の因子分析(二次因子分析)を行った。なお、この場合は因子間に相関を認めないバリマックス回転によって因子の解釈を試みた。その結果が表3-2である。

表 3-2 生活復興過程尺度・人生変化尺度の二次因子分析
 (斜交因子間相関行列の因子分析) の結果 (2003 年調査)

	できごとの評価	できごとの影響度	
	Event Evaluation	Event Impact	Communality
自立 (奮闘中) (Struggle for Meaning)	0.789	0.055	0.629
肯定的体験 (Life Change Direction)	0.784	0.015	0.617
再興途上 (Retreat)	-0.534	0.474	0.493
震災が人生の転機 (Sense of Life Change)	0.267	0.740	0.633
自立 (回復) (Return to Normalcy)	0.150	-0.668	0.463
回転後の負荷量平方和	1.617	1.222	
因子寄与率 (%)	32.3%	24.4%	

N=1203

上記の二次因子分析の結果、「自立 (奮闘中)」、「肯定的体験」、「再興途上」と「震災が人生の転機」、「自立 (回復)」はさらに上位の 2 因子により統合的に関連づけられることが明らかとなった。そこで、「自立 (奮闘中)」、「肯定的体験」対「再興途上」が対比される第 1 軸の因子を「できごとの評価 (震災というできごとの現在の評価)」と命名し、一方「自立 (回復)」対「震災が人生の転機」、「再興途上」が対比される第 2 軸の因子を「できごとの影響度 (震災というできごとの現在の影響度)」と命名した。

2) 生活復興過程要因分析の結果 (2005年調査)

2005年調査では、2003年調査で使用した生活復興過程尺度及び人生変化尺度の22項目についてさらなる精査を行い、最終的に18項目を使用して分析した。今回用いた項目は、表3-3のとおりである。

表 3-3 2005年調査の生活復興尺度と人生変化尺度の項目 (18項目)

自立(回復)	今の住まいで、どのように暮らしていけば良いのか、そのめどがたっている。 毎日の生活は、震災前と同じように、決まった事のくり返しに感じられる。 現在が「ふつう」のくらしに感じられる。
自立(奮闘中)	震災での体験は、日常生活では得られない得がたい経験だった。 「自分に与えられた人生の使命とは何か」を考えるようになった。 震災によって精神的に成長できた。 「生きることには意味がある」と強く感じる。 人生には何らかの意味があると思う。 震災後、「人間も捨てたものではない」と感じるようになった。
再興途上	震災のことを、思い出したくない。 震災の話は、もう聞きたくない。 震災については、あまり触れてほしくない。 震災での体験は、私の過去から消去ってしまいたい経験だった。
震災が人生の転機	「震災前は・・・、震災後は・・・」のように、震災を時間的な区切りとした言い方を時折耳にします。あなた自身は、こうした言い方をされますか。 あなたは、震災前後で「自分は変わった」とお感じになりますか。 あなたは、震災前後で「自分の人生は変わった」とお感じになりますか。
震災は肯定的な体験	「自分は変わったと」: その変化はよい方向の変化ですか、それとも悪い方向の変化ですか。 「自分の人生は変わったと」: その変化はよい方向の変化ですか、それとも悪い方向の変化ですか。

上記の18項目について、2003年調査と同様に、項目間相関について因子分析を行った(表3-4)。その結果、2005年調査の生活復興過程尺度及び人生変化尺度の18項目は、2003年調査と同様、5つの要因にまとめられることが明らかになった。

表 3-4 生活復興過程尺度と人生変化尺度（18 項目版）の因子分析結果（2005 年調査）

	1.自立(奮闘中)	2.再興途上	3.震災が人生の 転機	4.自立(回復)	5.肯定的体験
05復旧・復興感9 生きる事は意味があると強く感じる	0.80	-0.11	0.11	0.14	0.27
05復旧・復興感11 人生には何らかの意味があると思う	0.79	-0.15	0.07	0.10	0.23
05復旧・復興感7 震災によって精神的に成長できた	0.70	-0.12	0.29	0.12	0.39
05復旧・復興感13 震災後人も捨てた物でないと感じる	0.69	-0.09	0.08	0.20	0.28
05復旧・復興感6 人生の使命を考えるようになった	0.67	0.07	0.40	-0.07	0.13
05復旧・復興感4 震災での体験は得がたい経験だった	0.46	-0.19	0.18	0.37	0.10
05復旧・復興感10 震災については触れてほしくない	-0.11	0.89	0.12	-0.06	-0.18
05復旧・復興感8 震災のことを思い出したくない	-0.11	0.86	0.11	-0.14	-0.23
05復旧・復興感12 震災の話は聞きたくない	-0.13	0.86	0.11	-0.05	-0.15
05復旧・復興感5 震災での体験は過去から消したい	-0.04	0.73	0.16	-0.15	-0.30
05人生変化2 震災前後で自分は変わったと感じる	0.26	0.15	0.88	-0.22	0.15
05人生変化4 自分の人生は変わったと感じる	0.21	0.20	0.85	-0.24	0.10
05人生変化1 震災を時間的区切りとした言い方	0.10	0.06	0.76	-0.07	-0.08
05復旧・復興感3 現在がいつものくらしに感じられる	0.17	-0.11	-0.27	0.83	0.29
05復旧・復興感2 毎日の生活は決まった事の繰り返し	0.05	0.04	-0.17	0.76	-0.06
05復旧・復興感1 暮らし方のめどが立っている	0.13	-0.18	-0.05	0.72	0.31
05人生変化5 人生の変化の方向	0.29	-0.20	0.02	0.21	0.89
05人生変化3 自分の変化の方向	0.35	-0.28	0.11	0.19	0.89

因子抽出法: 主成分分析・回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

N=984

次に、5つの要因（因子）間の関係性について、2003年調査と同様の検討を行うために、二次因子分析を行った（表3-5）。その結果、一つ目の二次因子には、「自立（奮闘中）」、「肯定的体験」、「震災が人生の転機」の3因子が一つにまとめられることがわかった。

この意味を解釈すると、被災者は、自分の人生に影響を与えるきっかけとなった震災体験に対して、意味づけを与えようと努力しており、今から振り返れば震災体験には肯定的な側面もあったと体験を評価している姿が浮かび上がる。

したがって、第1軸の因子を2005年調査における「できごとの評価」（震災というできごとへの現在の評価）の尺度とした。

なお、2003年調査では、「できごとの評価」に震災体験をマイナスに捉える「再興途上」が因子として含まれていたが、2005年調査では、震災体験を人生の転機と捉えるとともに、その転機をプラスと捉える「震災は人生の転機」が含まれる構造に変化した。

この構造上の変化をみると、被災者は、震災体験をマイナスに評価していたが、次第にその体験の中からプラスの価値を見出していくというような人生における一種の帳じり合わせ的な意識の変化が現れたと考えられる。

表 3-5 生活復興過程尺度・人生変化尺度の二次因子分析結果（2005 年調査）

	できごと評価	できごと影響度
1.自立(奮闘中)	0.80	-0.10
5.肯定的体験	0.63	-0.42
3.震災が人生の転機	0.63	0.62
4.自立(回復)	0.09	-0.68
2.再興途上	-0.16	0.63

因子抽出法: 主成分分析・回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

N=984

2つ目の二次因子には、一方の極に「再興途上」と「震災が人生の転機」が、他方の極に「自立(回復)」と「肯定的体験」とが布置される構造となった。

この因子は、「震災が人生に何らかの影響を与え、現在も復興できていない」対「日常に戻り、震災体験を肯定的にふりかえることができる」という対比軸であると解釈できる。

したがって、第2軸の因子を2005年調査における「できごとの影響度」(震災というできごとの現在の影響度)の尺度とした。

この構造を2003年調査と比較すると、震災による影響を脱して日常の生活に戻った層と、震災の影響で未だ再興途上の層に分化している構造がより明瞭になったといえる。

2. 生活復興過程要因と生活復興感との関係

1) 2003年調査のまとめ

2003年調査では、生活復興過程要因と生活復興感との関係を分析し、「できごとの評価」と「できごとの影響度」という2つの生活復興過程要因が、最終的に生活復興の結果（アウトカム）としての生活復興感に強い影響を与えていることを明らかにした（図3-1参照）。その結果を要約すれば以下の3点にまとめられた。

「できごとの評価」・「できごとの影響度」は生活復興感を規定する要因になっていた（統計的に意味のある影響を与えていた）（GFI=0.918）。なお、図3-1のパス図に付されたパス係数はすべて統計的に有意であった。

震災というできごとを肯定的に評価している人ほど、生活復興感が高かった。（「できごとの評価」は生活復興感に正の影響（パス係数 = .28, $p < .001$ ）を与えていた。）

「震災は現在の生活には影響を与えていない」と思っている人ほど（現在の生活が安定している人ほど）生活復興感が高かった。（できごとの影響度は生活復興感に負の影響（パス係数 = -.21, $p < .001$ ）を与えていた。）

生活復興感に対して、
できごと評価は正の、
できごと影響度は負の
因果係数を示した

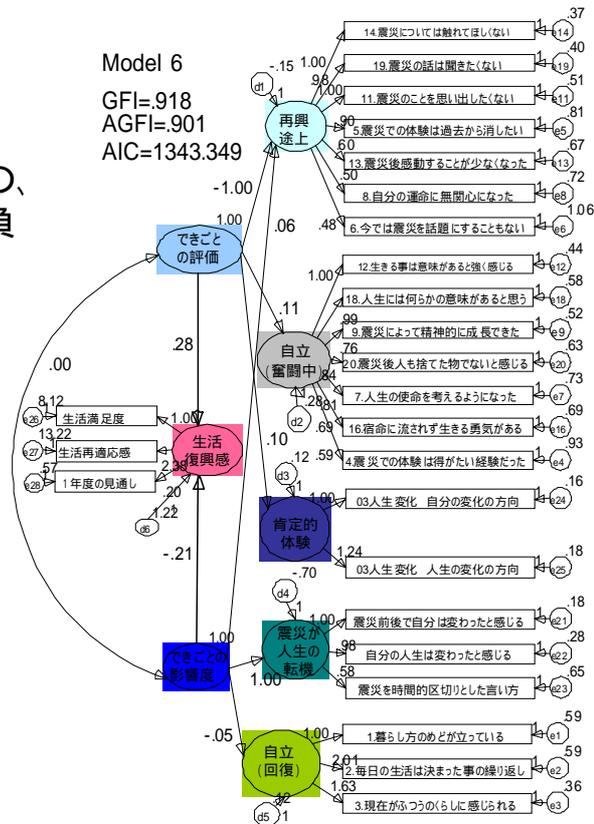


図3-1 2003年調査生活復興過程要因と生活復興感（アウトカム指標）の関係のパス図表現

2) 生活復興過程要因と生活復興感との関係(2005年調査)

本節では、2005年調査においても、2003年調査と同様のモデルが成り立つのかについて確認を行った。具体的には、生活復興過程要因として想定した「できごとの評価」と「できごとの影響度」が生活復興感（アウトカム指標）を規定する要因となっているかについて検証した。

ここで想定するのは以下のようなモデルである。

生活復興過程尺度 13 項目は、想定する 3 因子（「自立(回復)」、「自立(奮闘中)」、「再興途上」）のいずれかの概念を実証的に反映している。

同様に人生変化尺度 5 項目は「震災が人生の転機」、「肯定的体験」という 2 因子を反映している。

上記の計 18 項目をもとにして 5 つの概念が測定されるが、これらの因子間の関連性はより上位に位置づけられる「できごとの評価」と「できごとの影響度」という 2 次因子によって説明されるものである。

「できごとの評価」と「できごとの影響度」という生活復興過程に関する 2 次因子が、最終的に生活復興感（アウトカム指標）を規定している。

上記の想定をモデル化し、生活復興感に対する効果を検討するために、潜在変数を含む構造方程式モデリング（Structural Equation Modeling, SEM）分析を行った。図 3 - 2 が 2005 年調査結果をパス図（変数間の因果関係の方向性を矢印で、その因果関係の強さを示す指標として標準化偏回帰係数 - パス係数 - を矢印に付した連関図で表現したものである。

なお、2005 年調査結果が図 3 - 1 に示した 2003 年の生活復興過程要因と生活復興感の因果関係モデルの分析結果（図 3 - 1）に適合するかどうかを分析したところ、2005 年度調査においてもほぼ同様の結果が得られた。

さらに、生活復興過程要因と生活復興感の因果関係の分析を進め、2005 年調査の結果により適合する新たなモデルを構築した。

2005 年のモデルでは、「できごとの評価」には、「自立(奮闘中)」、「肯定的な体験」、「震災が人生の転機」の 3 つの生活復興過程要因が従属している。また、「できごとの影響度」には、「再興途上」、「自立(回復)」、「肯定的な体験」、「震災が人生の転機」の 4 つの生活復興過程要因が従属している。

以上のような分析に基づく生活復興過程要因と生活復興感（アウトカム指標）の因果関係を 2005 年の最終的なモデルとして採用することとした。

Model 2
 GFI=.922
 AGFI=.901
 AIC=914.419

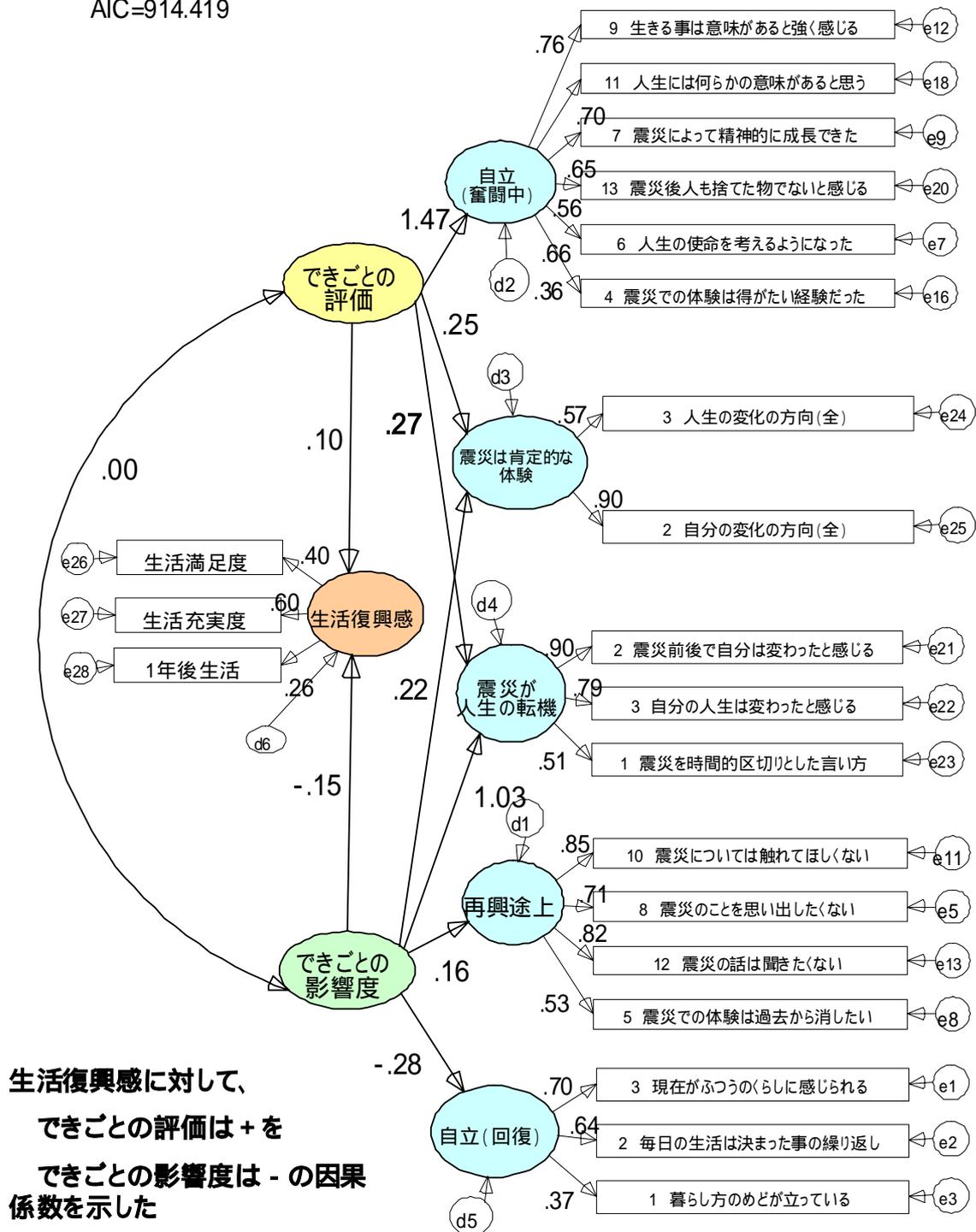


図 3-2 2005 年 生活復興過程要因と
 生活復興感 (アウトカム指標) の関係のパス図表現

図 3-2 によって示された 2005 年調査における生活復興過程要因と生活復興感（アウトカム指標）との関係は、以下の 3 点にまとめられる。

「できごとの評価」・「できごとの影響度」は、生活復興感を規定する要因になっていた。（統計的に意味のある影響を与えていた。）

- ・適合度指標（GFI）は 0 から 1 までの値を取るが、0.922 という値は、標本数が 984 名という今回の調査では大変高い適合度と見なすことができる。また図 3 - 2 のパス図に付されたパス係数はすべて統計的に有意であった。

震災というできごとを肯定的に評価している人ほど、生活復興感が高かった。（「できごとの評価」は生活復興感に正の影響（パス係数 = .10, $p < .05$ ）を与えていた。）

震災というできごとの肯定的評価は、

- ・被災体験と正面から向き合っていること（自立(奮闘中)）
- ・被災体験は自分の人生にとって肯定的な意味のあるできごとであったと意味づけられていること（震災が人生の転機）
- ・現在の人生は震災時と比べて肯定的な方向に進んでいると感じられていること（肯定的体験）、

という 3 要素から成り立っていた。

「震災は現在の生活には影響を与えていない」と思っている人ほど（現在の生活が安定している人ほど）生活復興感が高かった。（「できごとの影響度」は、生活復興感に負の影響（パス係数 = -.15, $p < .05$ ）を与えていた。）

震災というできごとの現在への影響度は、

- ・震災により自分の人生は変わったと感じられること（震災が人生の転機）
- ・震災は肯定的な体験であったと意味づけを行っていること（肯定的体験）
- ・まだまだ震災から立ち直っていない復興途上の状態であること（復興途上）
- ・日常生活に戻ったという感覚（自立(回復)）

という 4 要素から成り立っていた。

3 . 統合的な生活復興モデル(2005 年モデル)の構築

1) 2003 年調査の統合的な生活復興モデル(2003 年モデル)

2003 年調査では、「生活再建課題 7 要素」「生活復興過程要因」「生活復興感」に関連する諸要因の因果関係について解析するため、潜在変数を含む構造方程式モデリング (SEM) による分析を行った (注参照)。

2003 年調査では、生活再建課題 7 要素、生活復興過程要因、生活復興感に関連する変数間の因果関係について 200 近いモデルを想定し、その適合度指標について検討を行った結果、最終的に図 3-3 に示す統合的な生活復興モデルを構築した。

なお、このパス図上のパス係数はすべて統計的に有意 ($P < .001$) であった。

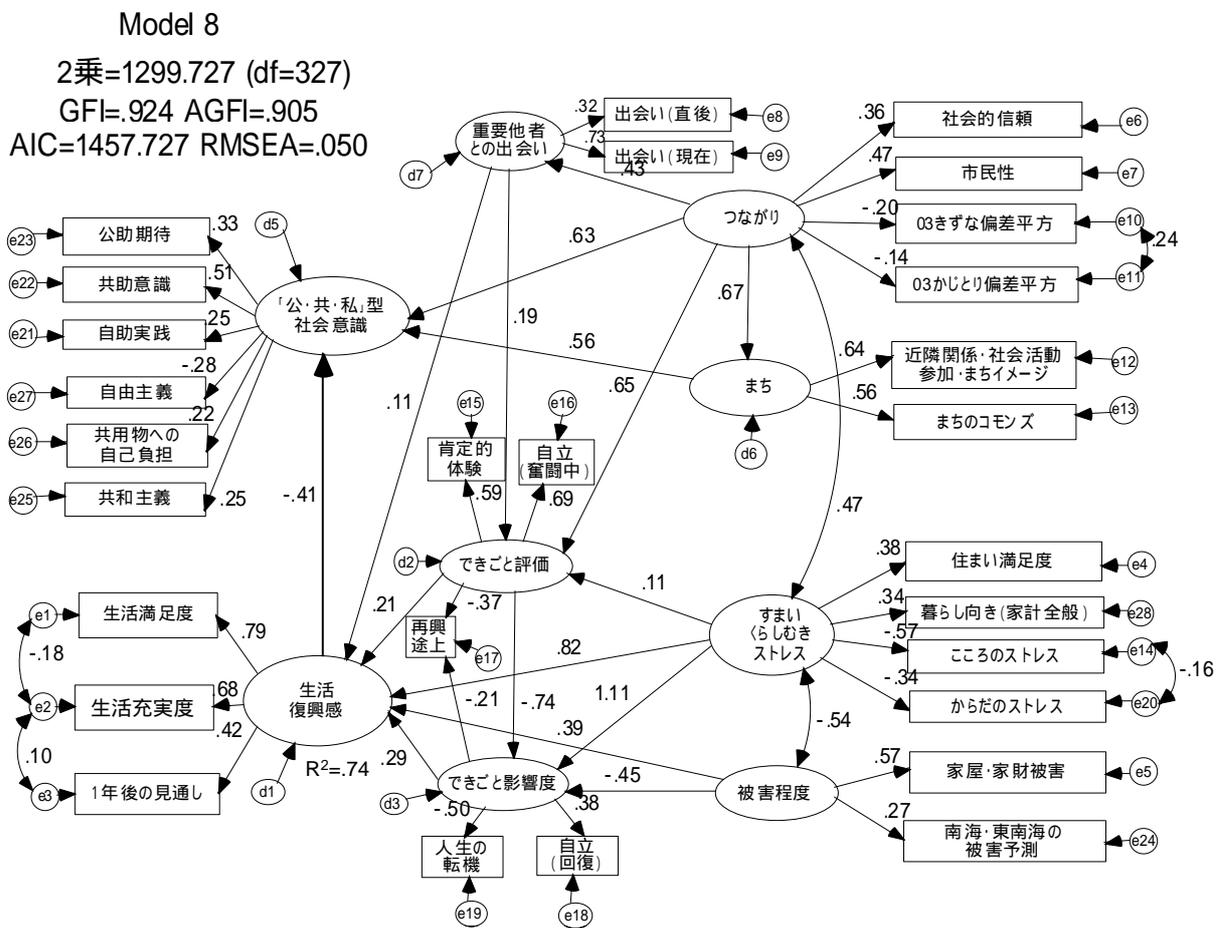


図 3-3 2003 年生活復興調査データをもとに、生活再建要素・復興過程要素・生活復興感を総合した復興過程の構造方程式モデリング (SEM) 分析結果

注) パス図において、実際の調査により観測された変数は四角形で、観測変数が反映していると想定される潜在的な概念 (因子) は楕円形で表記する。SEM が示す結果が、どの程度実際のデータ (この場合には 18 個の生活復興過程要因に関する項目と生活復興感 (アウトカム指標) に関する 3 項目を合わせた 21 項目間の相関係数行列) と適合するかどうかは、適合度指標 (Goodness of Fit Index,

GFI) や自由度調整済み適合度指標(Adjusted Goodness of Fit Index)、あるいは赤池の情報量基準(AIC)などから判断示される。通常、SEM 分析では多数の構造方程式モデルを想定し、それらのモデルの適合度指標を比較した後に、最上の適合度指標を示すモデルを選択することによって、観測変数や潜在変数(因子)間の関係を決定する。このような作業を経て得られたのが、図3-3に示す観測変数とその一次因子、その一次因子を束ねる二次因子が最終的に生活復興感に影響を及ぼすというモデルである。

2) 統合的な生活復興モデル(2005年モデル)の構築

2005年調査においても、「生活再建課題7要素」「生活復興過程要因」「生活復興感」に関連する諸要因の因果関係について、潜在変数を含む構造方程式モデリング(SEM)による解析を行った。

生活再建課題7要素、生活復興過程要因、生活復興感に関連する変数間の因果関係について100近いモデルを想定し、モデルの適合度と因果係数の統計的有意性について検討を行った結果、最終的に、図3-4に示す統合的な生活復興モデルを構築した。

なお、同図に示されたパス係数はどれも $P < .05$ 以下で有意であった。

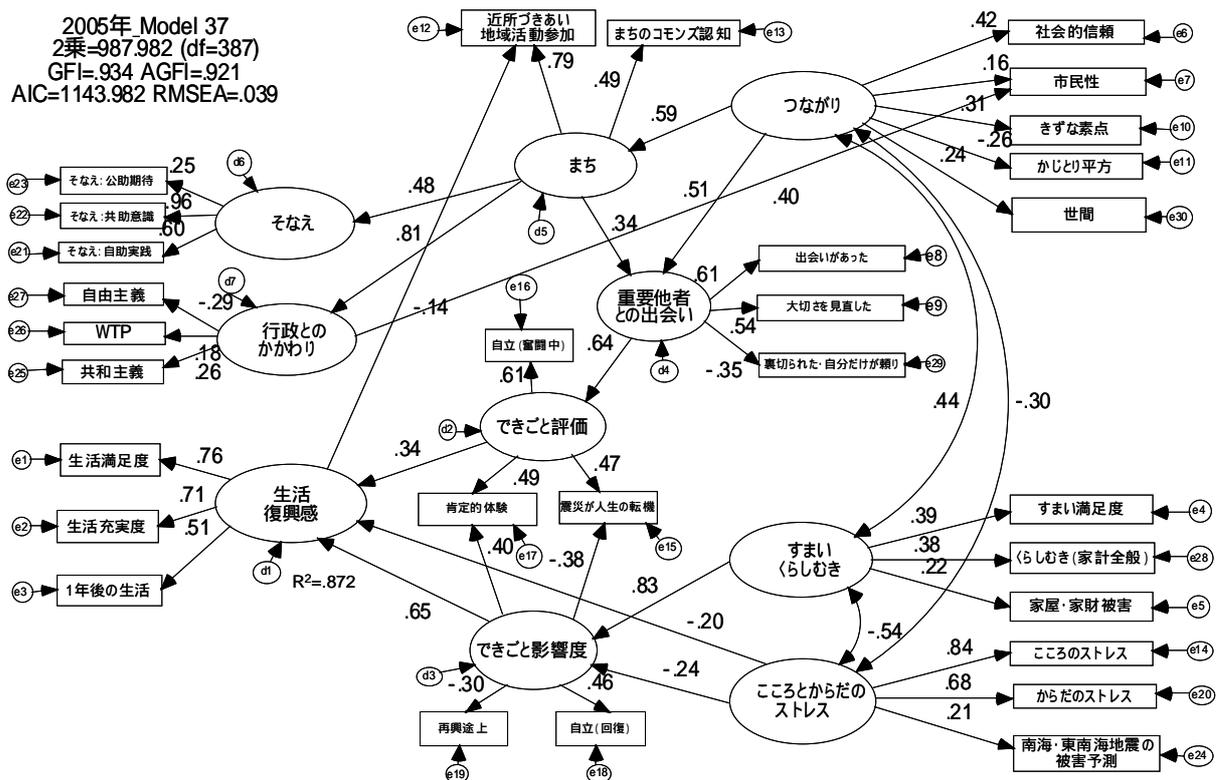


図3-4 2005年生活復興調査データをもとに、生活再建要素・復興過程要素・生活復興感を総合した復興過程の構造方程式モデリング(SEM)分析結果

今回の分析によって、2005 年生活復興モデルにおける生活復興感の決定係数 (R^2 値*) は、2003 年生活復興モデルの 74.0% から 87.2% へと上昇し、生活復興感の説明力を 13.2% 高めることができた。

(* R^2 値とは、多変量の線形モデルの数式が従属変数を予測するための説明力を示す指標。

1 (100%) に近づくほど説明力が高い。)

さらに、各種の適合度指標 (生活復興モデルが実際のデータとどの程度適合しているのかを示す指標) は、GFI (Goodness of Fit Index, 0~1 までの範囲を取り、.9 以上であれば適合度が良いと判断される) が .934 に、自由度調整済み GFI (AGFI 異なった数の変数からなるモデル間の適合度の比較を可能にする。GFI と同様 .9 以上であれば適合度が高いと判断される) が .921 であった。また、変数の数や変数間の関係の如何を問わずモデル全体の適合度を示す赤池の情報量基準 (AIC、数値が小さいモデルの方が適合度が高いことを示す) は 1143.982 であった。最後に、モデルによって説明されないデータ部分 (残差) の割合を示す RMSEA (.05 以下となれば残差が低い、すなわち良く適合していると判断される) が .039 であった。

2005 年生活復興モデルの適合度に関する諸指標を、2003 年生活復興モデルと比較すると、GFI は .924 から .934 に、自由度調整済み GFI は .905 から .921 へと上昇するとともに、赤池の情報量基準 (AIC 値が小さい方が全体の適合度が高い) は、1457.727 から 1143.982 に、またモデルとデータの残差の割合を示す RMSEA (残差の割合が低い方が適合度が高い) は .05 から .039 へと減少していた。

以上の指標の比較から、2005 年生活復興モデルは、2003 年生活復興モデルよりもデータとの適合度が高く、2005 年モデルの構築によって、被災者の生活復興感を高めた。り低下させたりする要因の 87.2% を解明することができた。

3) 2005 年モデルと 2003 年モデルに見られる共通点と相違点

2005 年モデルと 2003 年モデルの共通点と相違点を分析するため、生活復興モデルの抽象的概念 (因果モデル図の楕円部分) 間の関係だけを抽出して鳥瞰図を作成した (図 3-5、図 3-6)。

これをみると、2005 年モデルと 2003 年モデルの全体概要はほぼ共通していた。

すなわち、被災者の「生活復興感」の度合いを直接的に左右する要因は、「震災の影響を乗り越えた感」と「震災体験の評価」であり、しかも、これらの要因は、「すまい」「くらしむき」などの「生活再建課題 7 要素」と強く因果的に関連していた。

また、人と人との「つながり」と「まち」「そなえ」「行政との関わり」との関係に注目すると、自助・共助・公助の「そなえ」の意識や「行政との関わり」に対する意識は、地域活動などの「まち」の要素から影響を受け、その「まち」の要素は、人と人との「つながり」の要素から影響を受けるという構造になっていた。

すなわち、人と人とのつながりが深まり、近所づきあいや地域活動が促進し、まちへの愛着が高まることによって、被災者のそなえ意識が醸成されるとともに、自分たちの地域づくりに積極的に関わっていかうとする共和主義的な意識 (参画と協働) も高まっていくのである。これらの点は、2003 年、2005 年の両モデルに共通していた。

次に鳥瞰図をもとに、両モデルの詳細な比較を行った結果、以下の 3 つの側面 (「震災の影響を乗り越えた」感、「震災体験の評価」、「公・共・私型社会意識」から「そなえ」・「行政とのかかわり」への分化) において、注目すべきポイントが浮かび上がった。

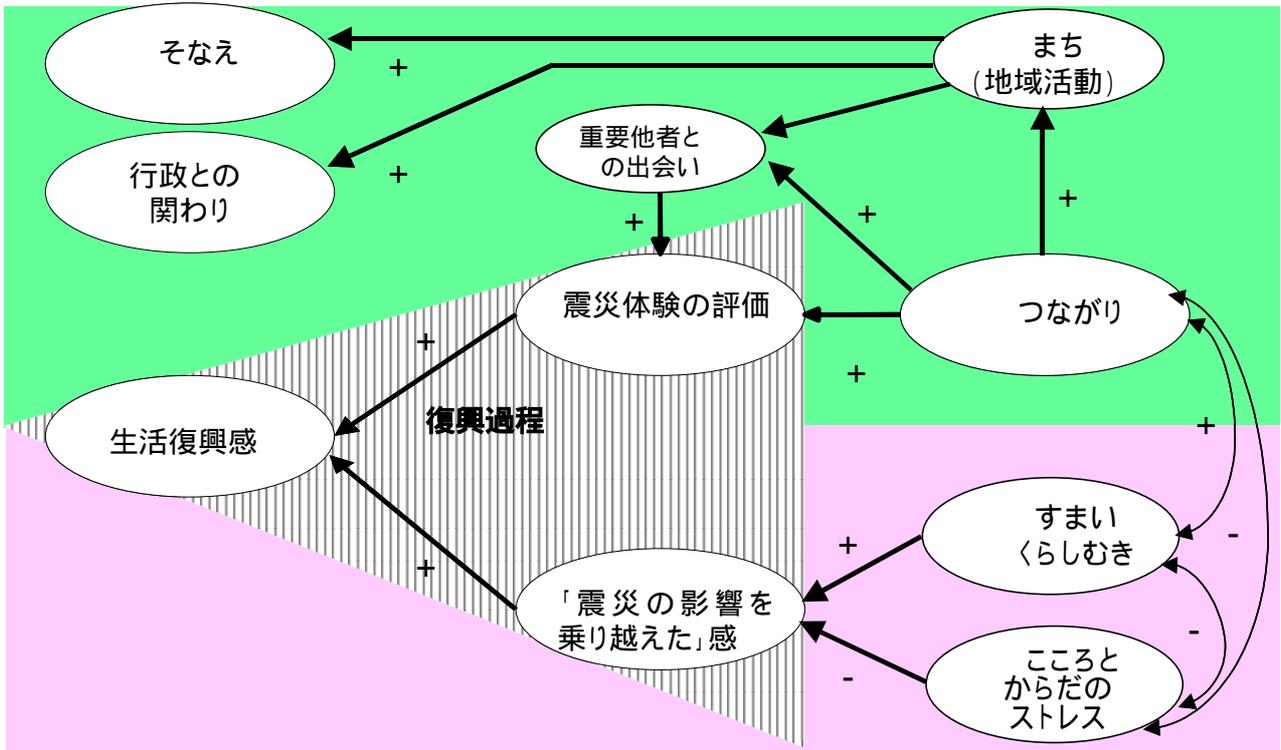


図 3-5 生活復興過程の鳥瞰図 (2005 年生活復興調査結果の概要)

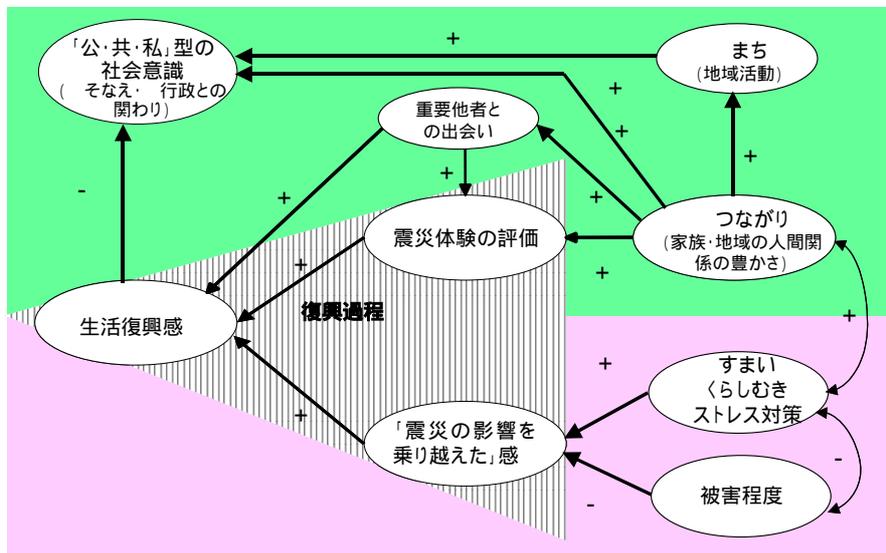


図 3-6 生活復興過程の鳥瞰図 (2003 年生活復興調査結果の概要)

被災者の「震災の影響を乗り越えた」という意識の進行

震災というできごとの影響度と生活復興感との関係についてみると、震災というできごとが現在の生活に影響を与えていない(震災の影響を乗り越えた)と感じている人ほど、生活復興感が高まるのが、2003年調査に引き続き実証された。

「震災の影響を乗り越えた」感とは、具体的には、日常性が回復したこと（自立（回復））、被災体験に対して否定的でないこと（再興途上）、震災がそもそも人生の転機と感じられていないこと（人生の転機）、現在は肯定的な方向に進んでいると感じられること（肯定的体験）である。

また、「震災の影響を乗り越えた」感は、生活再建課題7要素の「すまい（すまい満足度）」、「くらしむき（家計）」、「こころとからだ（ストレス）」から影響を受けていた。すなわち、すまいやくらしむきが安定し、こころやからだのストレスが低い人ほど、震災の影響を乗り越えたという意識が強まり、生活復興感が向上するのである。これについても2003年調査に引き続き実証された。

なお、図3-4の詳細な因果モデル図を参照すると、こころとからだのストレスが高い人は、南海・東南海地震が発生した場合の被害について、悲観的な予測をする傾向にあることもあわせてわかった。

次に、2003年モデルからの変化についてみると、2003年モデルでは、震災による家屋や家財の被害程度は、被災者の生活復興感の度合いを左右する大きな要因となっていたが、2005年モデルでは、被害程度と生活復興感にはもはや直接的な因果関係はなくなっていた。

すなわち、震災から10年が経過し、被災者の住宅再建などが進んだこともあり、被災者の生活復興感の度合いを左右する要因は、もはや震災による家屋被害等の大小ではなく、現在のすまいの満足度や家計の状況、ストレスの有無などの要因が大きくなってきており、被災者の「震災の影響を乗り越えた」という意識が行っている実態がうかがえる（図3-7参照）。

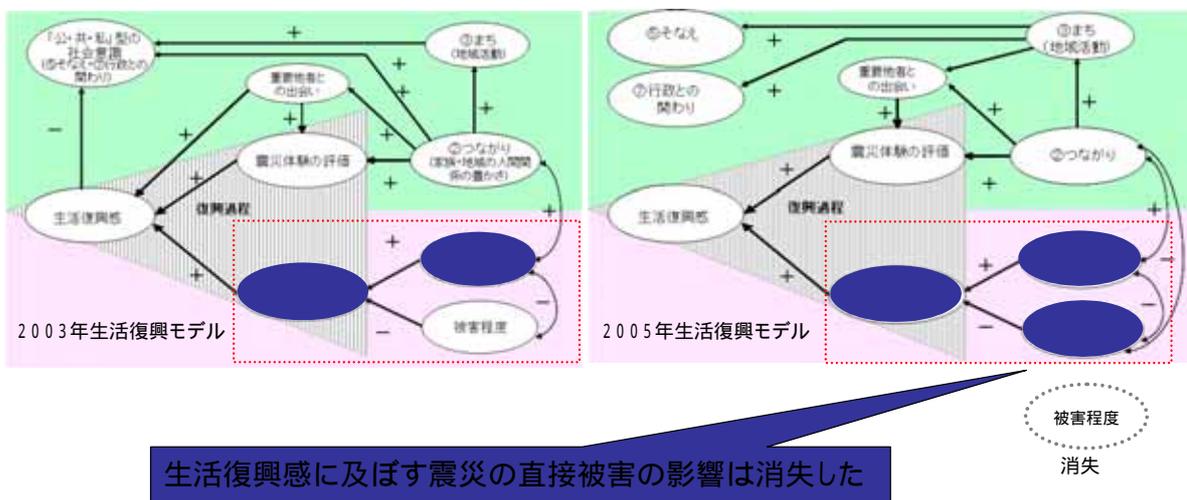


図3-7 2003年生活復興モデルから2005年生活復興モデルへの変化（1）

「震災体験の肯定的評価」の重要性

震災というできごとの評価と生活復興感との関係についてみると、震災体験を現在では肯定的に評価している人ほど、生活復興感が高まることが、2003 年調査に引き続き実証された。

「震災体験を肯定的に評価」しているとは、具体的には、震災体験を肯定的に意味づけしていること（自立（奮闘中））、震災が人生の転機になったと感じていること（人生の転機） 現在は肯定的な方向に進んでいると感じていること（肯定的体験）である。

なお、「震災体験の評価」は、「重要他者（自分の人生を肯定的にとらえ直すきっかけとなった人）との出会い」があったかどうかによって大きな影響を受けていた。また、「重要他者との出会い」は、生活再建課題7要素の「つながり（他者への信頼・市民性・家族関係・世間重視）」、「まち（近所づきあい・地域活動・まちの共有物の認知）」と密接な関係があった。

すなわち、家族や世間の人とのつながりや地域との関わりを通じて、重要他者との出会いがあった人ほど、震災体験を肯定的に評価するようになり、その結果、生活復興感が向上するという因果関係が確認された。

次に、2003 年モデルからの変化についてみると、2003 年モデルでは、「重要他者との出会い」は、生活復興感の度合いを左右する直接的な要因であったが、2005 年モデルでは、「重要他者との出会い」は、「震災体験の評価」を通じて生活復興感に間接的に影響を与えるという構造に変化していた。

このことから、生活復興感の度合いを左右する安定的な要因としては、「重要他者との出会い」そのものだけではなく、むしろそうした出会いを通じて、被災者自身が個々の震災体験を肯定的に評価し、「生きること、人生には意味がある」と価値づけることが重要な要素であるということが、より明確に浮き彫りになったといえる。

重要他者との出会いそのものよりは、出会いを通じた被災者個々の体験の積極的意味づけこそが、生活復興感向上の安定的な要因であった。

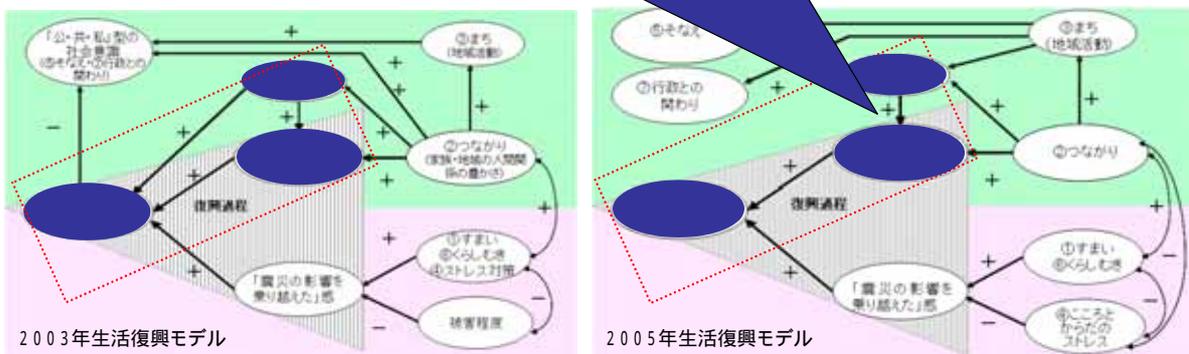


図 3-8 2003 年生活復興モデルから 2005 年生活復興モデルへの変化（ 2 ）

「ポスト震災復興 10 年社会」(平時社会) への移行

2003 年生活復興モデルにおいては、生活復興感が高まるにつれて、地域活動への積極的な参加などの市民意識が薄れる傾向が明らかになったが、2005 年生活復興モデルにおいても、生活復興感の向上に伴って、近所づきあいや地域活動への参加が低下するという傾向は確認され、生活復興感の高まりに伴う「喉元過ぎれば熱さを忘れる」現象が再度確認された。

しかしながら、注目すべき点は、2003 年モデルでは生活復興感と直接的な関係にあった被災者の「公・共・私型社会意識」(創造的市民社会意識) が、2005 年モデルでは「そなえ (意識) 」と「行政との関わり」に分化するとともに、その「行政との関わり」と「そなえ (意識) 」については、生活復興感との直接的な関連性が見られなくなったことである。

すなわち、このことは、2003 年から 2005 年の 2 年間の間に、被災者の「公・共・私型社会意識」の根幹にあった共和主義 (住民主導) 的な意識がかなり低下したことによって、生活復興感と「行政との関わり」、「そなえ (意識) 」との間に関連性がなくなったことを意味する。

言い替えれば、被災地は、いわば「ポスト震災復興 10 年社会」という、限りなく平時に近い新たなフェーズ (時間位相) に移行 (復帰) したと見なすことができる (図 3-9 参照) 。

「公・共・私型社会意識」が消失し、その根幹にあった共和主義(住民主導)的意識と生活復興感との関連性は、見い出せなくなった。(被災地は平時社会に移行した)

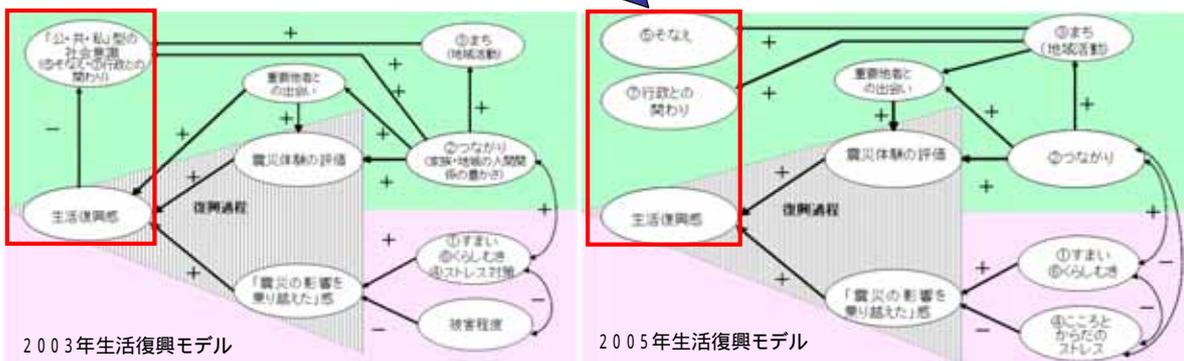


図 3-9 2003 年生活復興モデルから 2005 年生活復興モデルへの変化 (3)

4．生活復興支援施策のあり方への提案

阪神・淡路大震災からの生活復興対策については、これまで行政によるさまざまな支援施策が展開されてきたが、今後の大規模災害における被災者の生活復興への長期にわたる支援施策のあり方を考えると、これらの施策の成果や課題を検証したうえで、被災者自らの生活復興についての意識（生活復興感）を直接的あるいは間接的に高める効果の見込める支援施策を検討することが重要である。

こうした観点から、2001年・2003年・2005年と繰り返し実施してきた生活復興調査に基づく生活復興モデルの構築を通じて得られた知見は、今後の大規模災害からの生活復興支援施策のあり方について、多くの示唆を与えるものである。

「ポスト震災復興10年社会」に対応した支援施策の検討が必要である。

2005年の生活復興調査によって明らかになったこととして第一にあげられる点は、震災による直接被害の影響は、もはや生活復興感の規定因とはなっていない点である。すなわち、震災の直接的な影響から被災地は脱したといういわば「ポスト震災復興10年社会」の姿である。

しかしながら、このことによって、震災復興の過程が終了したことを意味するのではもちろんない。これまでは、「震災復興」という視点に重点を置いた生活復興支援施策が展開されてきたが、今後は、震災から10年以上が経過した「ポスト震災復興10年社会」という限りなく平時に近いフェーズ（時間位相）の中で、「すまい、家族や地域の人々とのつながり、まちへの愛着、災害へのそなえ、こころやからだのストレス、家計、行政とのかかわり」など、人々の生活復興感を引き続き左右している要因に注目しながら、支援施策を検討する必要がある。

今後の大規模災害時には「住宅再建・生活再建支援」「こころのケア」が重要である。

第二に、2001年・2003年・2005年と3回の生活復興調査を通じて継続的に確認されたことは、すまいやくらしむきが安定して、こころやからだのストレスが低い被災者ほど生活復興感が向上する、という事実である。

したがって、今後の大規模災害時の生活復興支援施策としては、住宅の確保や住宅再建支援等の住宅対策や、被災者の暮らしの再建につながる支援金の支給等も含めた生活再建支援がまず何よりも必要であるとともに、被災者のこころやからだのストレスを和らげるためのこころのケア対策や健康対策などの取り組みも求められる。

ソーシャル・キャピタルの醸成や地域活動を促進する施策が効果的である。

第三に、2003年及び2005年生活復興モデルにおいては、自分の人生を肯定的にとらえ直すきっかけとなるような人（重要他者）との出会いがあった人ほど生活復興感が向上することが実証された。

このことは、大規模災害時には、家族や地域における人間関係の豊かさといったいわゆるソーシャル・キャピタルの醸成や、地域活動の促進につながる支援施策が、被災者の生活復興を促進する効果的な施策であることを裏付けたものといえる。

震災体験の語り継ぎなど震災の経験や教訓の継承・発信が重要である。

第四に、2005年モデルでは、重要他者との出会いそのものより、被災者自身が「自らの体験には価値があった」と震災体験を積極的に意味づけることが、被災者の生活復興感を高めることが明らかになった。

すなわち、これまでは、重要他者や人と人とのつながりを通じて、震災体験の積極的な意味づけが誘発されてきたと考えられるが、今後は、例えば、震災メモリアル事業や震災の経験・教訓を継承・発信する事業などを通じて、行政が直接的に震災体験の積極的な意味づけを支援していくことが必要である。

とりわけ、このような継承・発信の対象として、被災地内外の震災を体験していない若い世代に対する体験の語り継ぎは、非常に重要である。また、このような若い世代への震災体験の継承の努力が、新たな人と人とのつながりを誘発し、地域活動を活性化させる可能性についても検討するべきである。

平時における「参画と協働」の方向性の検討が大切である。

第五に、生活復興感の向上に伴って、近所づきあいや地域活動への参加が低下する「喉元過ぎれば熱さを忘れる」効果が実証された。しかも、被災者の共和主義的（住民主導的）な意識は、震災後の一定の間こそ高揚するものの、被災地社会が平時モードに移行するにつれて、次第にそうした意識は消失していくことも明らかになった。こうしたことから、今後の「ポスト震災復興10年社会」においては、震災復興という視点を重視した施策展開から、平時における人々の自律と連帯に基づく「市民性」を高めるような施策展開に移行していくことが必要である。

現在の被災地は、もはや少数派となった共和主義的（住民主導的）意識の高い市民層と、多数派である公共的な事柄への無関心層に二分化されている。このような状況の中で、今後の「参画と協働」の方向について、どのような施策や取り組みが必要であるかについて、社会全体としてじっくりと検討していくことが大切である。

防災分野での県民と行政による「参画と協働」が重要である。

第六に、近い将来に発生が懸念されている「南海・東南海地震へのそなえ」の取り組みは、県民が平時の社会の中で、「公」の領域にわがこととして関心を持ち、県民と行政との参画と協働を進めていくためのきっかけづくりになりうるようになった。

南海・東南海地震における自助や共助が果たすべき役割や公助の役割など防災分野での県民と行政の「参画と協働」による取り組みをさらに進めていくことが重要である。

震災復興の過程で芽生えた「参画と協働」の取り組みを、様々な分野に広げていくことが必要である。

第七に、これまでの震災復興の過程の中で取り組んできた参画と協働の施策は、主として高齢者の見守りなどの福祉施策に力点がおかれてきた。

今後は、参画と協働の領域をより広範囲に広げていくための検討が必要である。多面的な施策が直接的・間接的に生活復興感を高める効果があることを自覚したうえで、例えば、既述の防災の視点といった災害対策のほか、若い世代への語り継ぎといった震災体験の継承・発信に加えて、災害に強いまちづくりといった都市計画とまちづくりの連携など、震災の経験と教訓を踏まえた「参画と協働」の取り組みを県政の様々な分野に一層広げていくことが求められている。

これらの生活復興支援施策のあり方については、2001年、2003年、2005年の3回にわたって実施した生活復興調査における継続的かつ詳細な分析を経て導き出すことのできた貴重な結果であり、ここで示した基本的な方向性が、将来起こりうる大規模災害からの被災者の生活復興支援施策につながっていくことを期待する。

パネル調査結果 編

パネル調査結果（2001年・2003年・2005年調査）

第1章 パネル調査の目的

社会調査には、横断的調査（cross-sectional survey）と縦断的調査（longitudinal survey）の2種類がある。横断的調査とは、1つの対象集団について1時点で行う調査であり、縦断的調査とは、同一の対象集団に対して複数時点で継続して調査を行う方法であり、これを「パネル調査」と呼ぶ。

生活復興調査は、2001年、2003年、2005年と過去3回にわたって実施してきた。

第4部では、これまで3回のいずれの調査においても継続的に回答した297名の回答結果をもとに、被災者一人ひとりの生活復興過程の詳細な実態を明らかにするため、パネル調査分析を行い、1時点の横断的調査だけでは補足できない被災者の長期的な生活復興のメカニズムを明らかにすることを試みた。

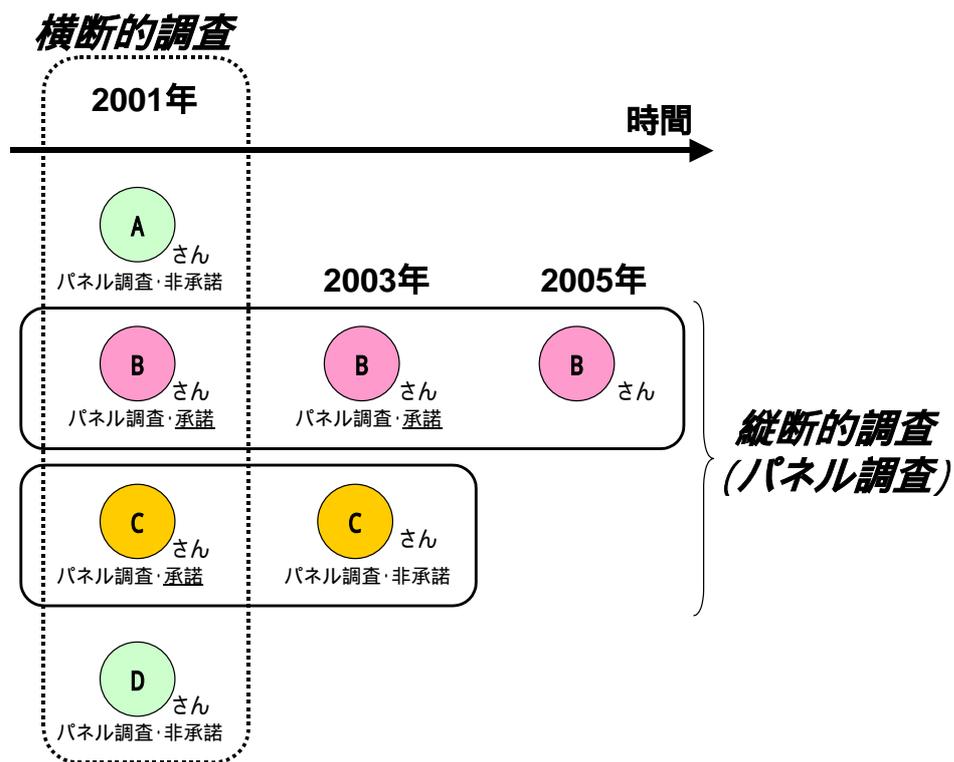


図 4-1 パネル調査の構造（イメージ）

第2章 分析の方法

1. 分析対象

生活復興調査は、2001年、2003年、2005年の3回の調査において、横断的調査と縦断的調査（パネル調査）を同時に実施し、多くの被災者からの回答を収集してきた。

今回のパネル調査分析の対象は、2001年調査の際にパネル回答者として次回も継続して回答することを受諾した486名のうち、2003年調査においても回答するとともに、さらに2005年調査においても回答した297名（パネル回答者）である。

なお、今回のパネル調査分析の対象データについては、パネル回答者が297名と少数であり、ここからさらに未回答項目のある回答者を分析対象から除外すれば、多くの貴重なデータが活用できなくなることから、こうしたパネル回答者の未回答項目を補うために、類似した項目から未回答項目の回答を予測する欠損値処理を行った。

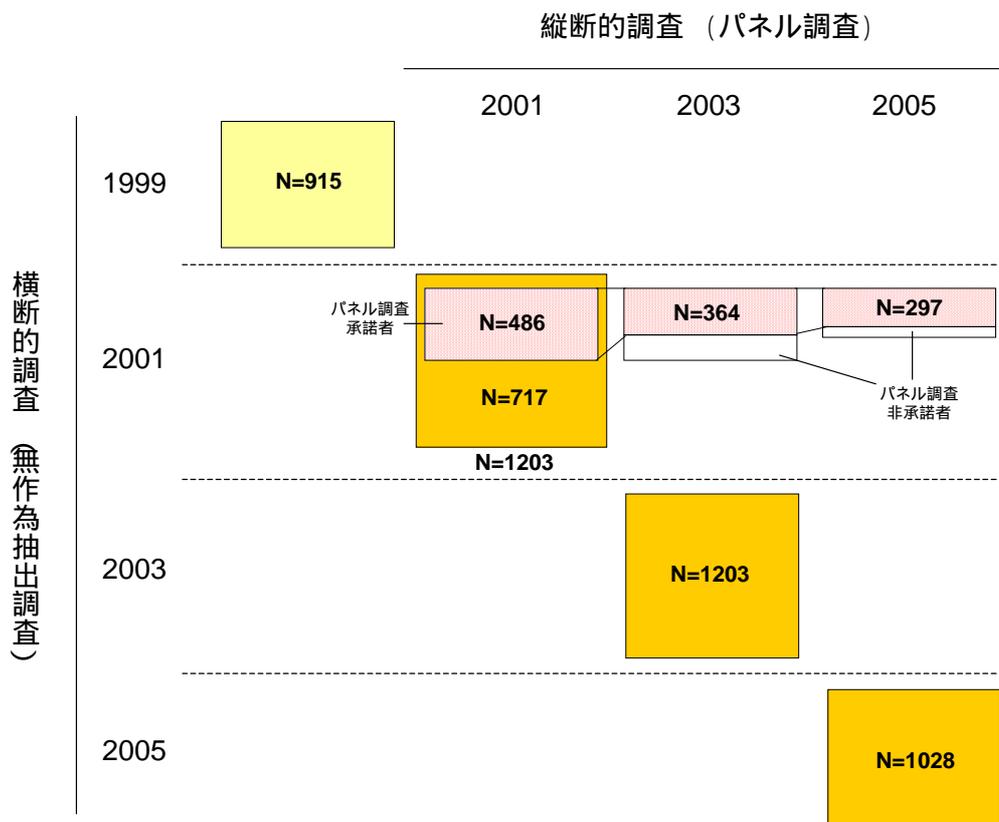


図 4-2 パネル調査の分析対象

2 . 分析フレーム

阪神・淡路大震災の発災から6年目(2001年)、8年目(2003年)、10年目(2005年)に得られたパネル回答のデータをもとに、被災者の意識や態度にどのような変化が起こったのか、また、どのような被災者の生活復興感が向上または下降したのかなどについて、縦断的な分析を行った。

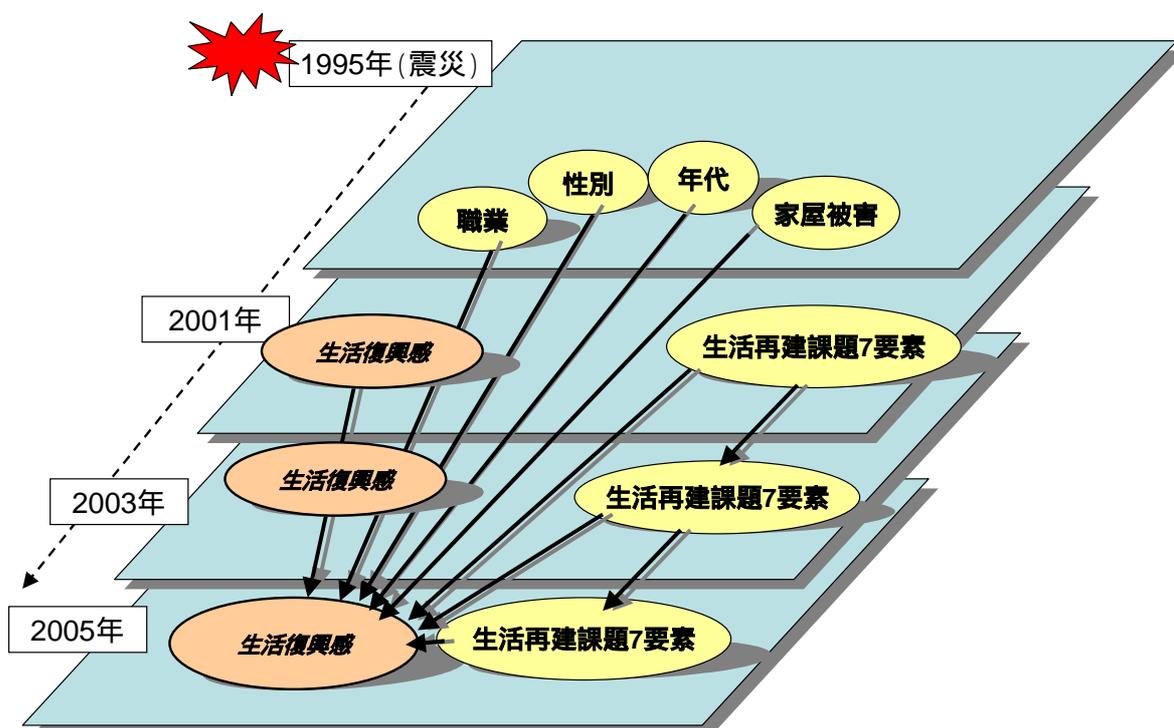


図 4-3 パネル調査の分析フレーム(イメージ図)

また、パネル分析に際しては、第1部及び第2部で行った2005年調査の一般回答者1028名(以下、「一般回答者」という。)の分析と同様に、生活再建課題7要素と生活復興感との関連を分析した。

(生活再建課題7要素と生活復興感については、「第2部 生活復興感」を参照)

第3章 分析結果

1. パネル回答者の特徴

パネル回答者と一般回答者との間の属性の差異について比較検討した（独立した回答のt検定）。比較検討項目は、性別、年代（震災時）、職業、家屋被害の4つである。

その結果、パネル回答者と一般回答者では、性別、年代、家屋被害において統計的に意味のある差があった。職業においては統計的な差がなかった。

表 4-1 パネル回答者(N=297)と一般回答者(2005年 N=1028)の比較結果

	二乗値	自由度	漸近有意確率(両側)
性別	5.152	1	0.023
年代	19.709	5	0.001
職業	11.309	9	0.255
家屋被害	12.195	3	0.007

1) 性別

- ・パネル回答者は、一般回答者に比べて、男性が多く、女性が少なかった。
性別でみると、一般回答者では、男性が44%、女性が56%であった。パネル回答者では、男性が52%、女性が48%であった。
パネル回答者は、一般回答者に比べて、男性が多く、女性が少なかった。

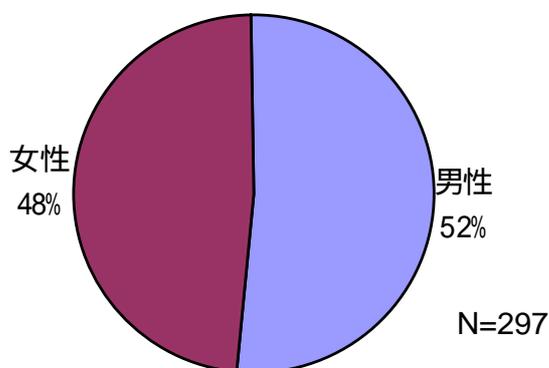


図 4-4 パネル回答者 (性別)

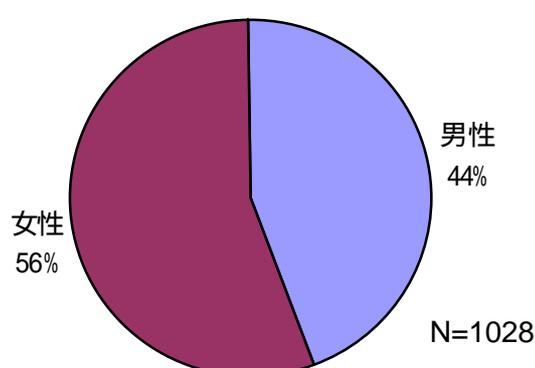
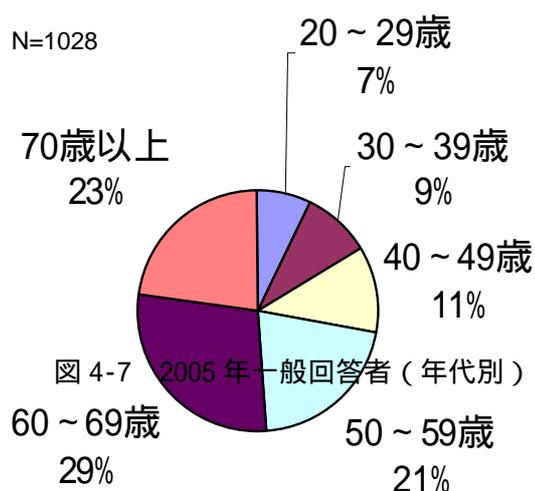
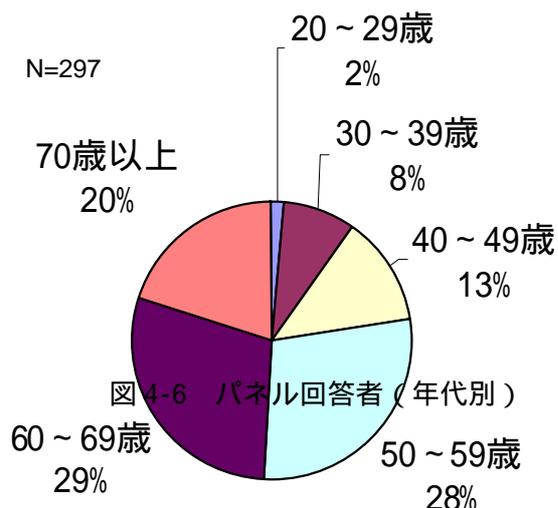


図 4-5 2005年一般回答者 (性別)

2) 年代（震災時）

- ・パネル回答者は、一般回答者に比べて、20代が少なく、50代が多かった。
- 年代（震災時）別でみると、20代は、パネル回答者では2%、一般回答者では7%であった。また、50代は、パネル回答者では28%、一般回答者では21%であった。
- パネル回答者は、一般回答者に比べて、20代の若年層が少なく、50代が多かった。



3) 家屋被害

- ・パネル回答者は、一般回答者に比べて、全壊・全焼の人が多かった。
- 家屋被害程度別にみると、全壊・全焼は、パネル回答者では23%、一般回答者では15%であった。被害なしは、パネル回答者では14%、一般回答者では19%であった。
- パネル回答者は、一般回答者に比べて、全壊・全焼の人が多かった。

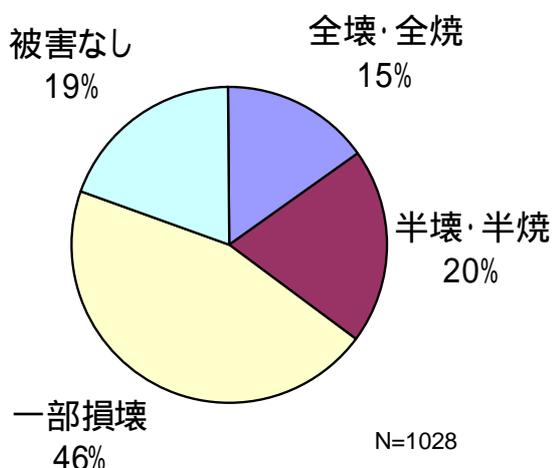
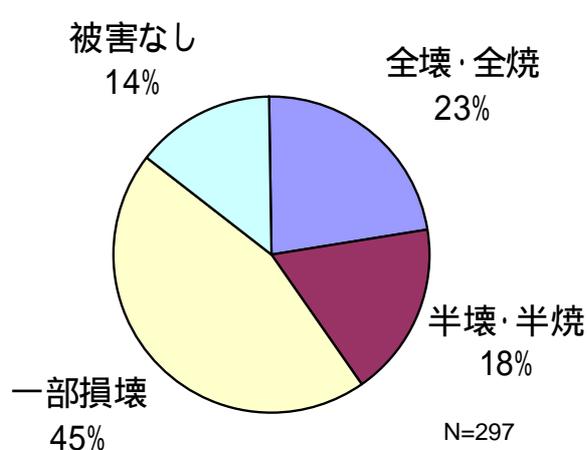


図 4-8 パネル回答者（家屋被害別）

図 4-9 2005年一般回答者（家屋被害別）

4) 職業

職業別では、パネル回答者と一般回答者の間には、統計的に意味のある差はなかった。

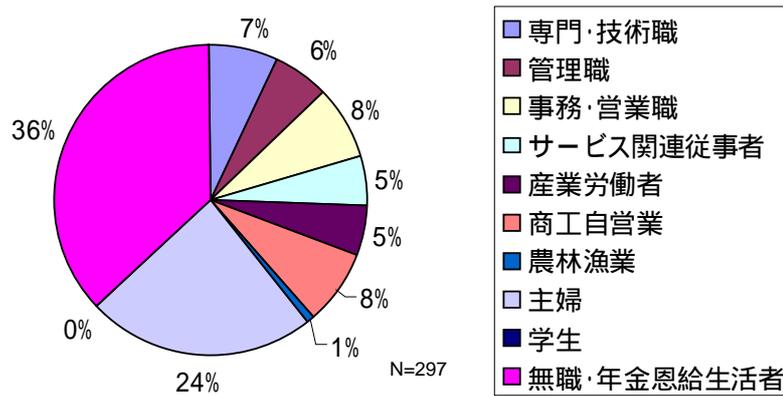


図 4-10 パネル回答者（職業別）

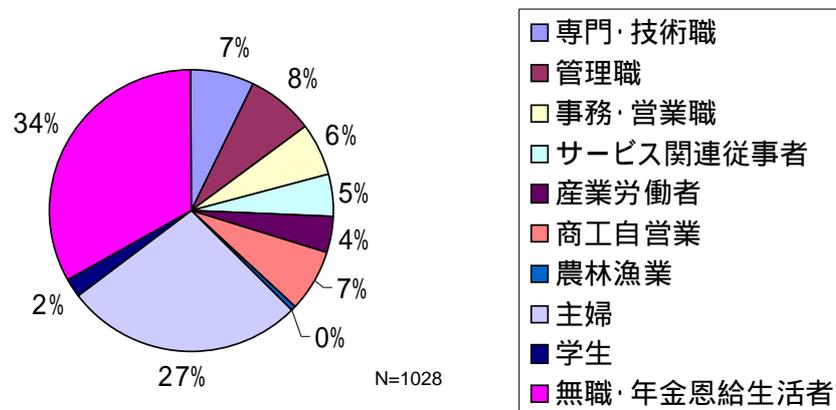


図 4-11 2005 年一般回答者（職業別）

2 . パネル回答者の生活復興感の推移

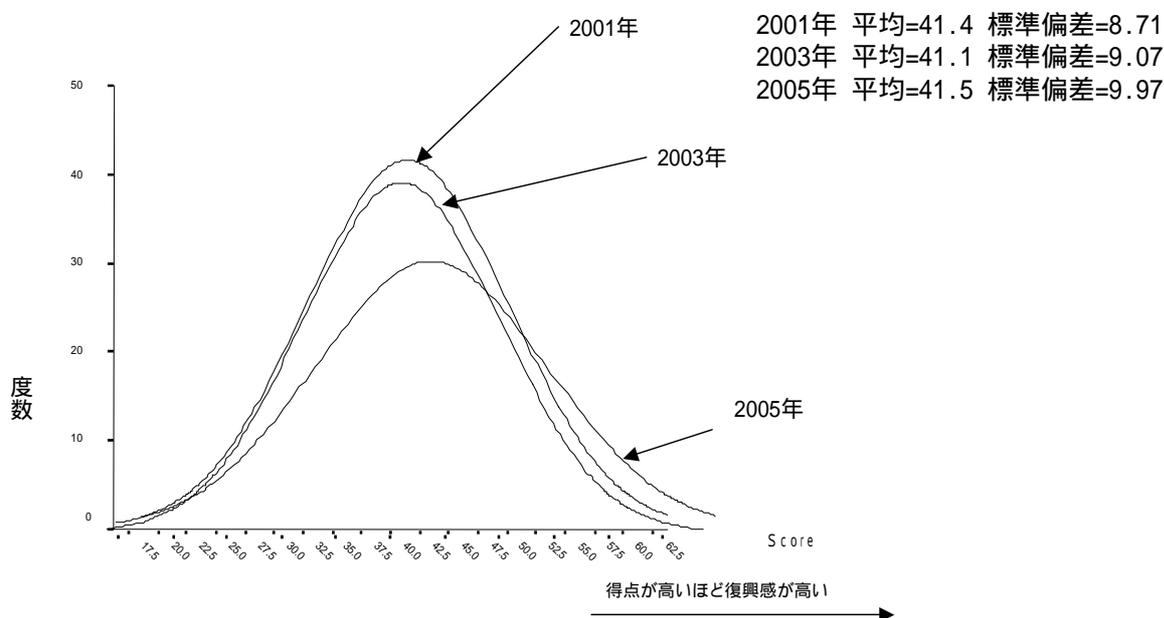
パネル回答者の生活復興感の全体傾向について把握するため、2001年、2003年、2005年調査での得点分布の比較を行った。

具体的な方法としては、それぞれの調査での生活復興感に関する14設問に対する回答を得点化して各年の生活復興感得点とし、パネル回答者の生活復興感が3時点でどのように推移したのかについて把握することを試みた。

その結果、3時点における生活復興感には、統計的に意味のある差異はみられなかった（反復測定による1元配置分散分析 $F(2,297) = 0.505, NS$ ）。

生活復興感の平均値は、2001年が41.4、2003年が41.1、2005年が41.5であり、標準偏差は2001年が8.71、2003年が9.07、2005年が9.97であった。

このことから、3時点において、生活復興感は全体としてはほとんど変化がなかったが、その分布については、2005年において特にばらつきが大きくなったといえる。すなわち、被災者の生活復興感は、全体としては安定しているが、その一方で、生活復興感が上昇している人と下降している人との差が広がっていることがうかがわれる。



反復測定による1元配置の分散分析 $F(2,297) = 0.505, n.s$

図 4-12 パネル回答(N=297)の3時点における生活復興感得点分布

3. 被災者の生活復興パターン

パネル回答者の生活復興感の推移について詳細な分析を行い、どのような人の生活復興感が2001年から2005年の間に上昇もしくは下降しているのかについて分析を試みた。

図4-13は、パネル回答者297名一人ひとりの2001年、2003年、2005年における生活復興感の得点の推移をグラフ化したものである。

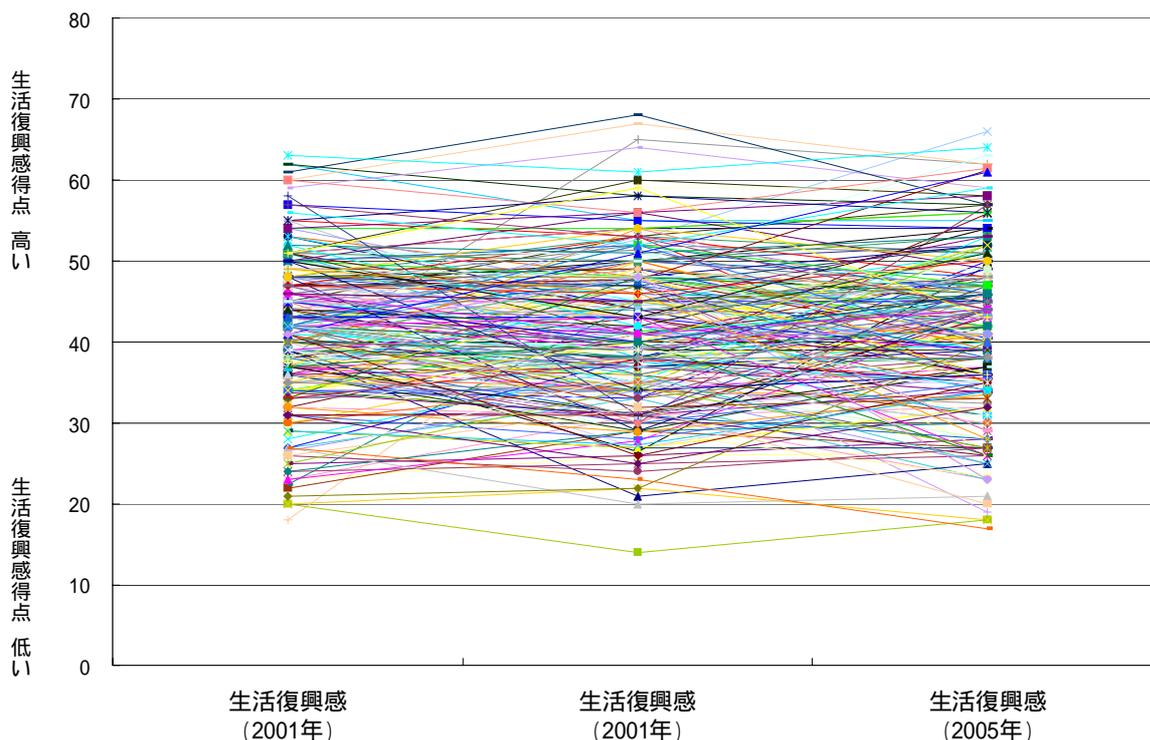


図4-13 生活復興感の得点推移 (N=297)

この生活復興感の推移をパターン化するため、パネル回答者の生活復興感の得点推移について、クラスター分析（似通った回答傾向の回答者を束ねる分析手法、Ward法、平方ユークリッド距離）を行った。

その結果、パネル回答者の生活復興感の推移は、図4-14のように「4つのパターン」に明瞭に集約された。すなわち、被災後6年が経過した2001年1月時点から被災後10年が経過した2005年1月時点にかけての4年間における被災者の生活復興感の推移は、4パターンに分類できることが明らかになった（反復測定による1元配置分散分析($F(3, 293) = 458.287, p < .001$)）。

そこで、4つの生活復興パターンについて、3時点における生活復興感の高い順に、「プラスプラス(++)タイプ」、「プラス(+)タイプ」、「マイナス(-)タイプ」、「マイナスマイナス(- -)タイプ」と名付けた。

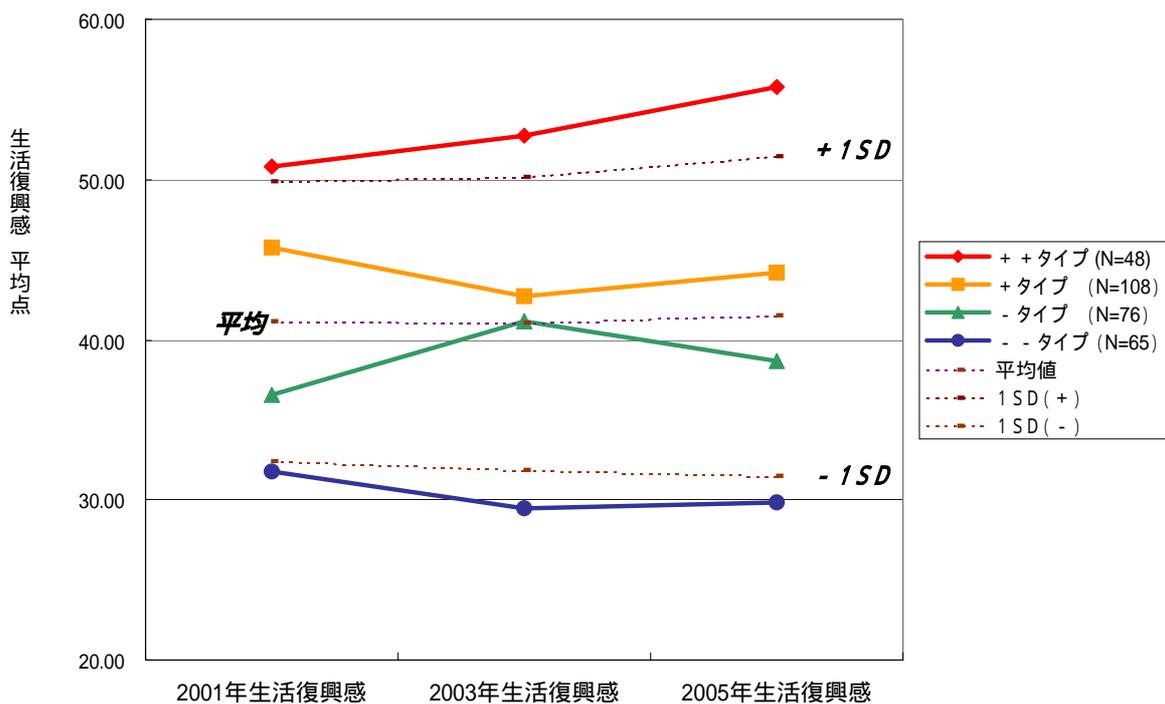


図 4-14 3 時点における、4 パターンごとの生活復興感得点の推移 (N=297)

表 4-2 生活復興 4 パターン (生活復興感の平均値の推移)

	2001年 生活復興感	2003年 生活復興感	2005年 生活復興感
++タイプ (N=48)	50.8	52.8	55.8
+タイプ (N=108)	45.7	42.7	44.2
-タイプ (N=76)	36.6	41.2	38.6
--タイプ (N=65)	31.7	29.5	29.8

4つの生活復興パターンのそれぞれの特徴は、以下のとおりである。

なお、4つのパターンは3時点の途中で交差することはなく、非常に安定した傾向を示している。

プラスプラス(++)タイプ：3時点ともに生活復興感が最も高いタイプ

プラスプラス(++)タイプは、生活復興感得点が3時点ともに+1標準偏差以上に付置しているパターンであり、4つのタイプの中で最も高い生活復興パターンである。

なお、このパターン的人是、297名のうち48名(16.1%)である。

プラス (+)タイプ：3時点ともに生活復興感が平均以上で安定しているタイプ

プラス (+)タイプは、生活復興感得点が3時点ともに平均以上+1標準偏差以下の間でずっと安定しているパターンであり、平均以上で安定的な生活復興パターンである。

なお、このパターンの人は、297名のうち108名(36.4%)である。

マイナス (-)タイプ：3時点ともに生活復興感が平均以下で安定しているタイプ

マイナス(-)タイプは、生活復興感が3時点ともに-1標準偏差以上平均点以下の間にあるタイプであり、平均以下で安定的な生活復興パターンである。

なお、このパターンの人は、297名のうち76名(25.6%)である。

マイナス、マイナス(- -)タイプ：3時点ともに生活復興感が非常に低いタイプ

マイナスマイナス(- -)タイプは、生活復興感が3時点ともに-1標準偏差以下に付置しているパターンであり、4つのタイプの中で最も低い生活復興パターンである。

なお、このパターンは、297名のうち65名(21.9%)である。

4 . 生活復興パターンと属性、被害程度、生活再建課題7要素との関連

4つの生活復興パターンと被災者の属性、被害程度、生活再建課題7要素との関連について、クロス集計による分析を行った。

表4-3は、それぞれのクロス集計結果をまとめたものである。

表 4-3 4つの生活復興パターンと関連のある要因（クロス集計結果まとめ）

			²	df	P	
属性		性別	13.87	3	0.00	***
		職業（2001年）	38.03	21	0.01	**
		職業（2005年）	38.92	24	0.03	**
被害		人的被害	6.62	3	0.09	*
		家財被害	16.36	9	0.06	**
生活再建7要素	すまい	居住形態（2005年）	37.78	21	0.01	**
	つながり	近所づきあい・地域活動参加	23.17	9	0.01	**
		社会的信頼	32.84	9	0.00	***
	まち	まちのコモンズ認知	19.78	9	0.02	**
	こころとからだ	からだのストレス	79.83	9	0.00	***
		こころのストレス	58.50	9	0.00	***
	くらしむき	世帯年収（2005）	38.48	6	0.00	***
		震災による職場被害の有無	8.58	3	0.04	**

*** = p<.01 ** = p<0.05 * = p<0.1

1) 被災者の属性、被害程度との関連

生活復興パターンと性別、被害程度との関連について調べた。

性別との関連

生活復興パターンと性別との関連をみると、++タイプは、女性が62.5%、男性が37.5%と女性が多く、--タイプの方は、男性が70.8%、女性が29.2%と男性が多かった。

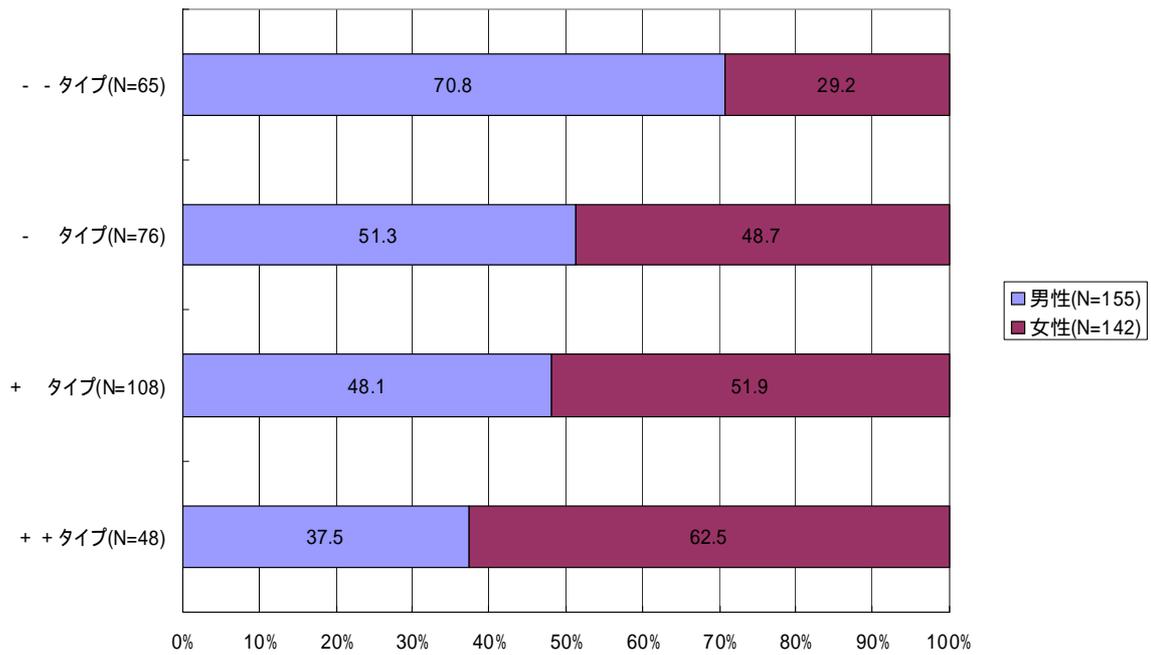


図 4-15 生活復興パターン（性別）

人的被害との関連

生活復興パターンと人的被害との関連をみると、震災で人的な被害があった人は--タイプが多く、++タイプが少なかった。

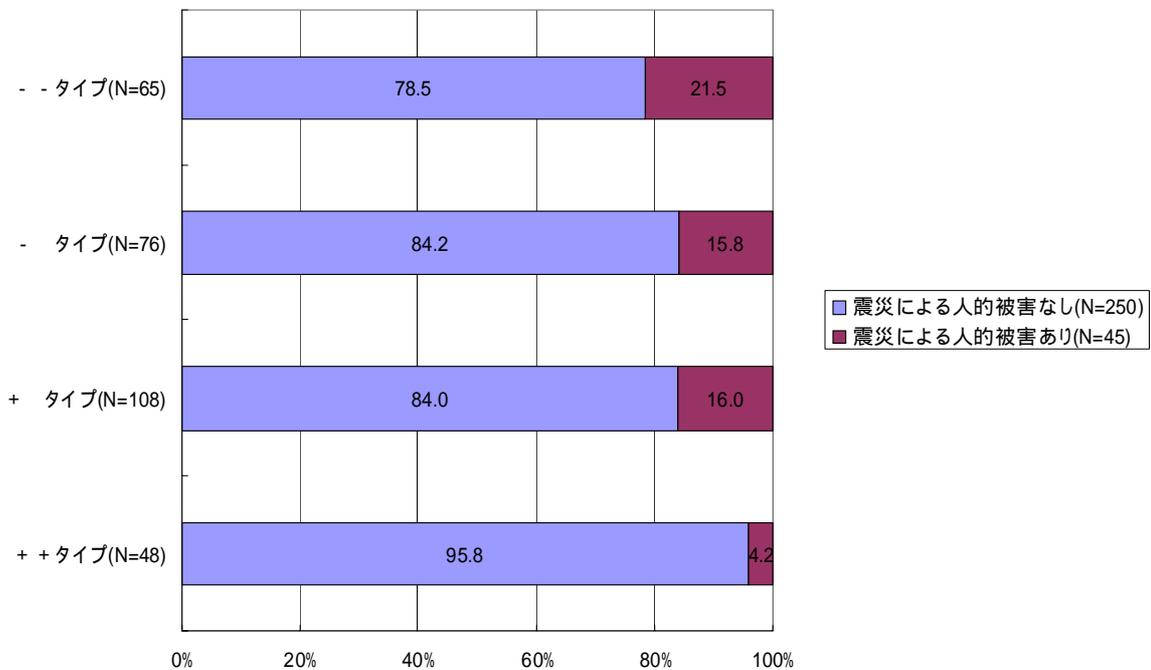


図 4-16 生活復興パターン（人的被害の有無）

家財被害との関連

生活復興パターンと震災で受けた家財被害との関連をみると、全部被害のあった人は - - タイプが多く、被害なしの人は + + タイプが多かった。

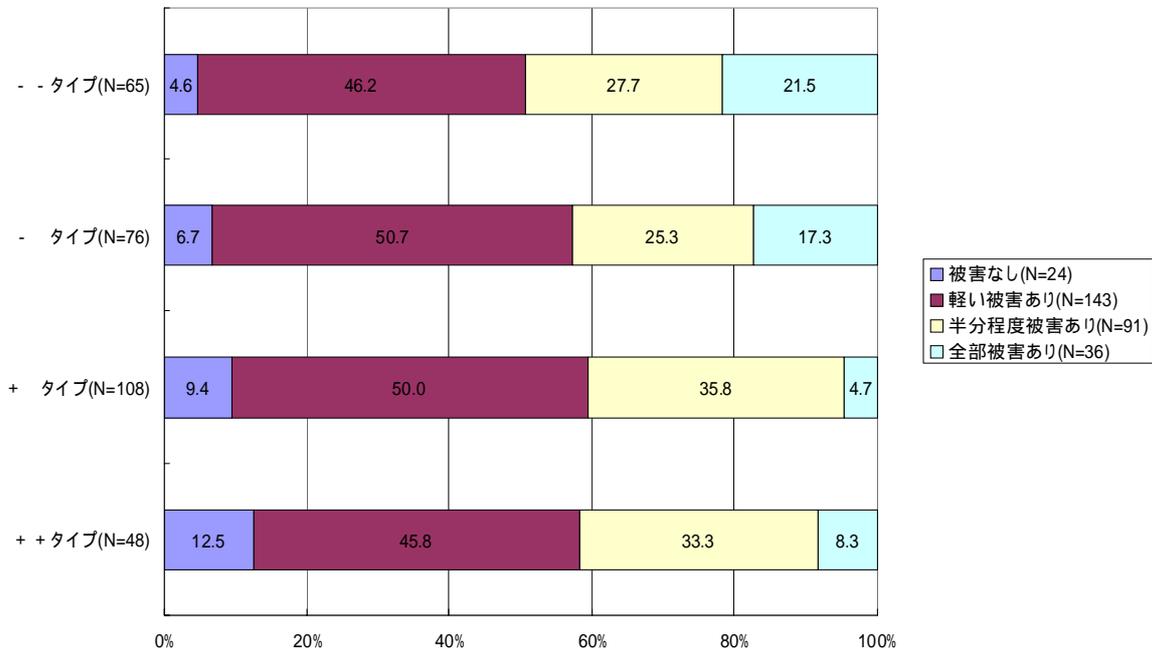


図 4-17 生活復興パターン（家財被害）

2) 生活再建課題 7 要素との関連

「すまい（居住形態）」との関連

生活復興パターンと現在の居住形態との関連をみると、公営住宅に居住している人は - - タイプが多く、持地持家に居住している人は + + タイプが多かった。

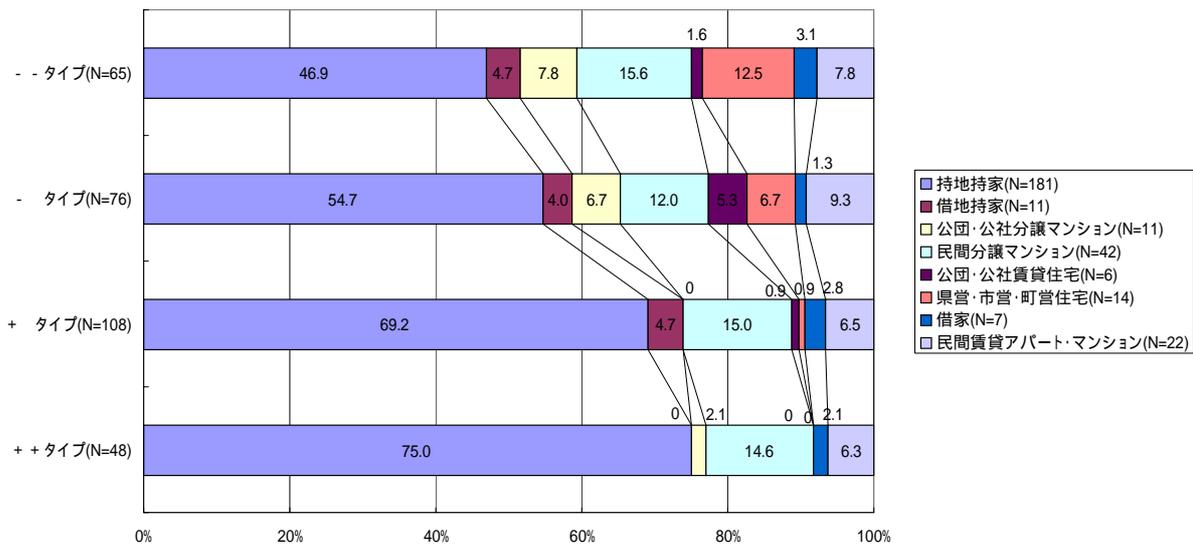


図 4-18 生活復興パターン（2005 年居住形態）

「つながり」との関連

ア．市民性との関連

生活復興パターンと市民性との関連をみると、市民性が高い（自律・連帯の意識が強い）人は++タイプが多く、市民性が低い人は--タイプが多かった。

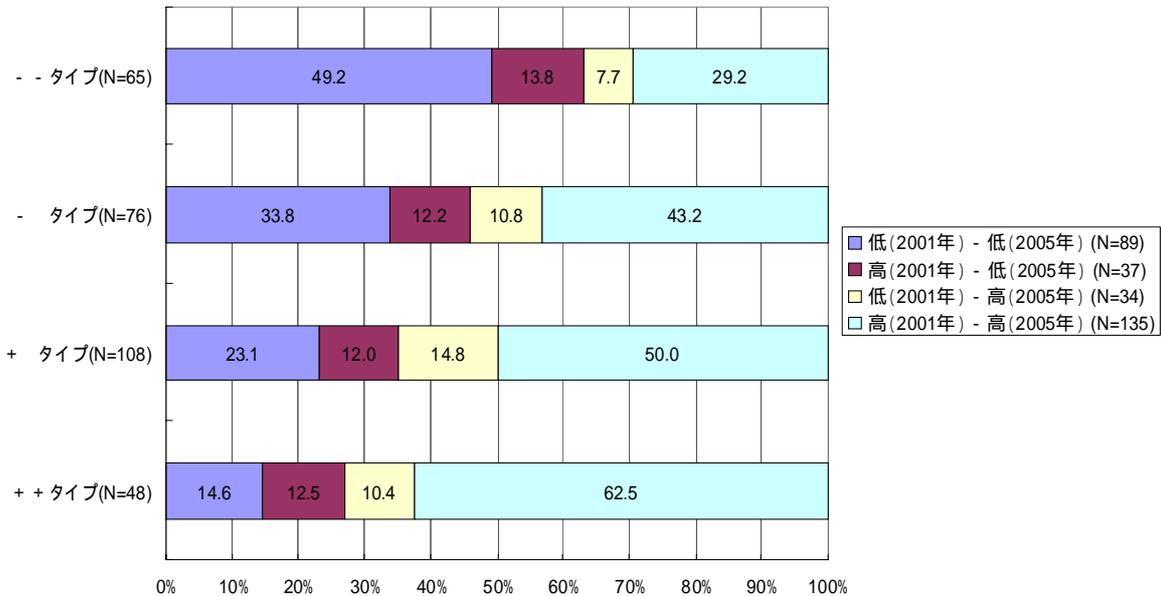


図 4-19 生活復興パターン（2001～2005年市民性変化）

イ．社会的信頼（社会に対する信頼意識）との関連

生活復興パターンと社会に対する信頼意識との関連をみると、社会に対する信頼の意識が高い（「他者は基本的に正直である」「ほとんどの人は信頼できる」と思っている）人は++タイプが多く、信頼意識の低い人は--タイプが多かった。

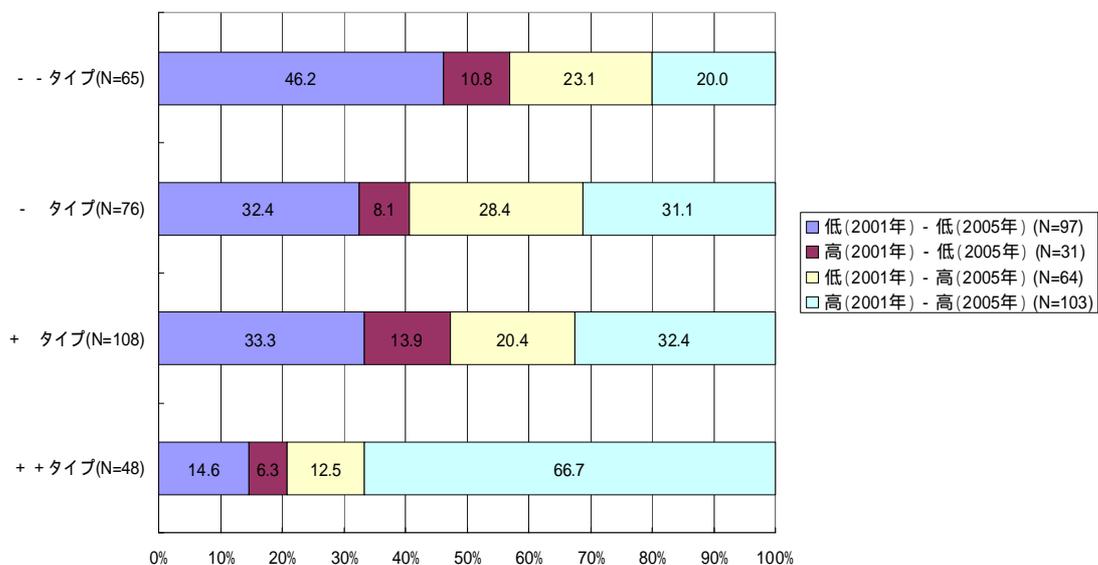


図 4-20 生活復興パターン（2001～2005年社会的信頼変化）

「まち（まちの共有物（コモンズ）の認知や愛着）」との関連

生活復興パターンとまちの共有物（公園、街並み、みんなが気軽に集まれる場所など）の認知・愛着の度合いとの関連をみると、まちの共有物の認知・愛着の意識が高い人は++タイプが多かった。

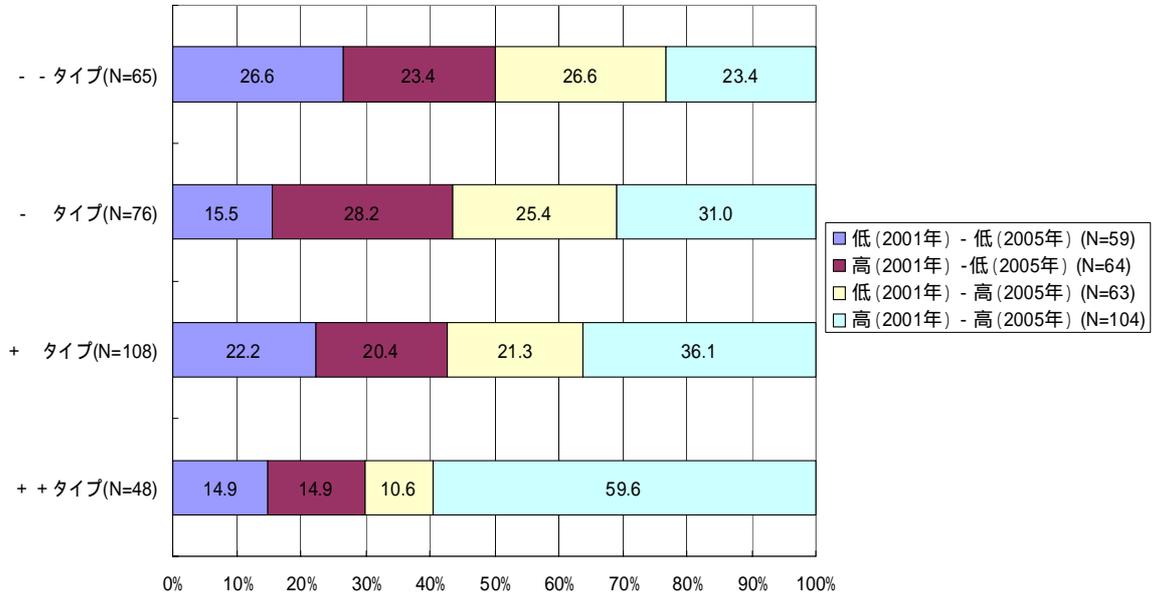


図 4-21 生活復興パターン（2001～2005年まちのコモンズ認知変化）

「こころとからだ（ストレス）」との関連

生活復興パターンとこころとからだのストレスとの関連をみると、こころとからだのストレス度合いが高い人は--タイプが多く、ストレス度合いが低い人は++タイプが多かった。

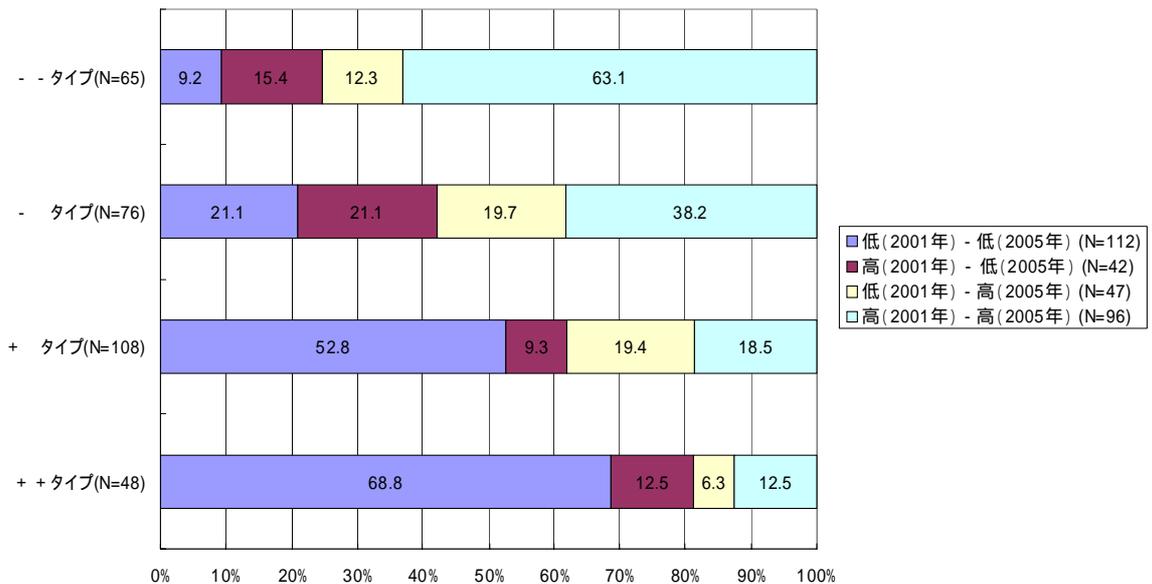


図 4-22 生活復興パターン（2001～2005年こころのストレス変化）

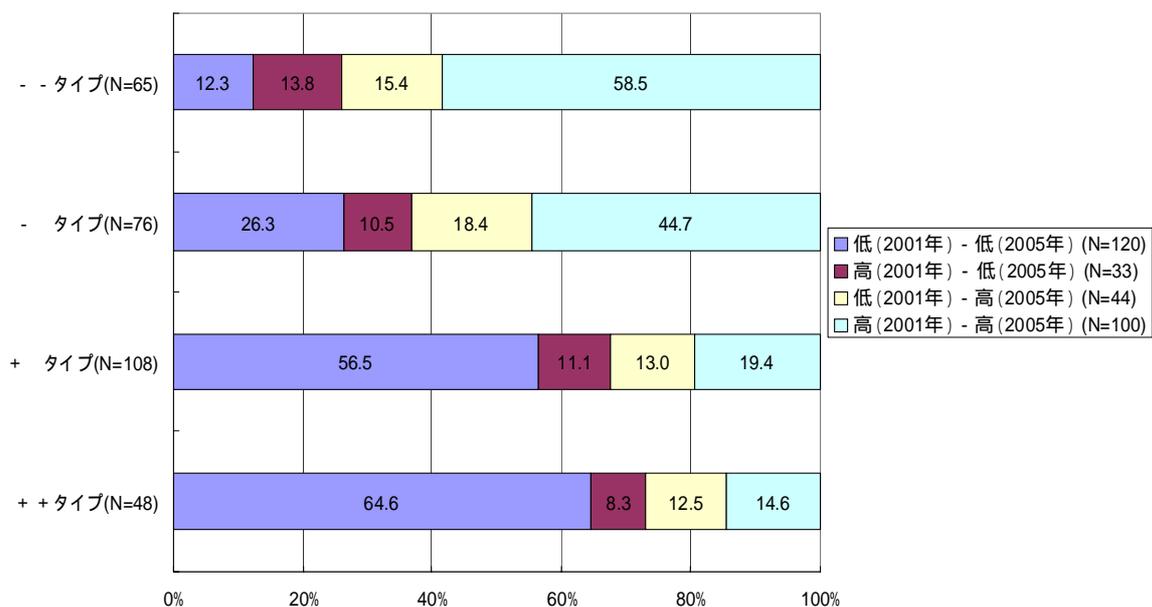


図 4-23 生活復興パターン（2001～2005年からのストレス変化）

「くらしむき」との関連

ア．職業との関連

生活復興パターンと職業（2001年調査時点）との関連をみると、主婦は++タイプ、管理職は+タイプが多かった。また、商工自営業者、サービス関連従事者、無職は--タイプが多かった。

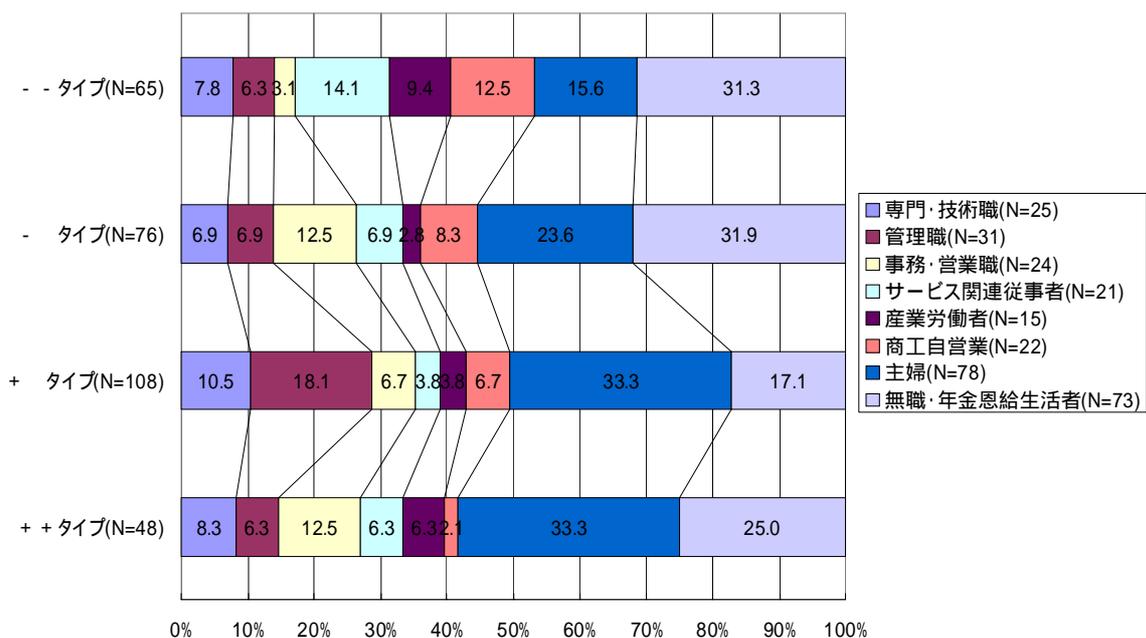


図 4-24 生活復興パターン（2001年職業）

イ．震災による職場の被害との関連

生活復興パターンと震災による職場の被害との関連をみると、職場が震災による被害を受けた人は - - タイプが多かった。

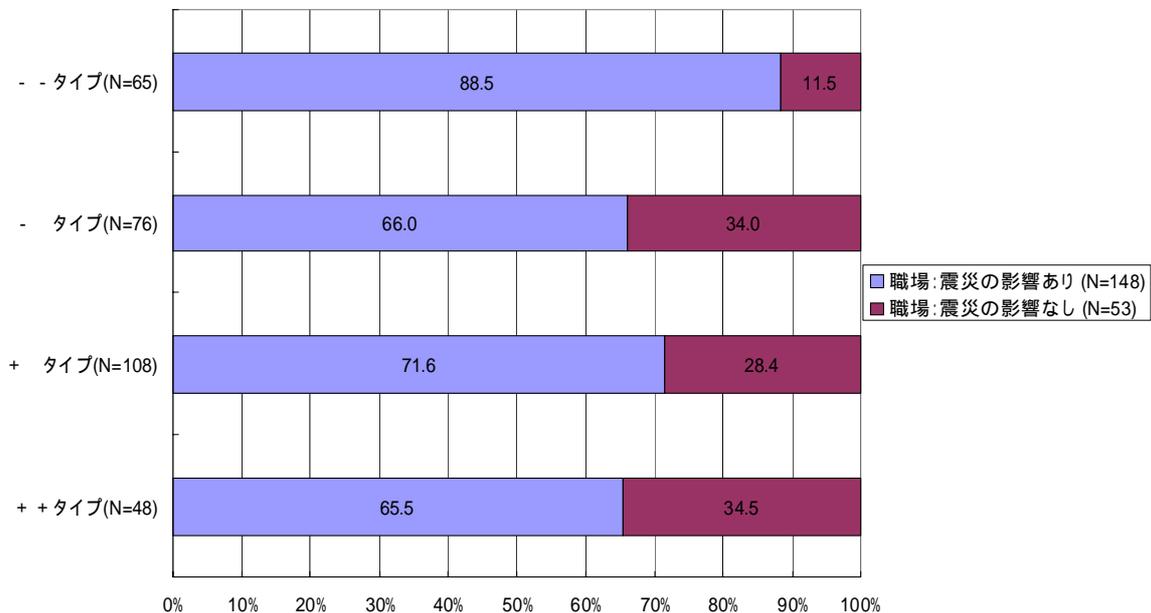


図 4-25 生活復興パターン（震災による職場被害有無）

ウ．世帯収入との関連

生活復興パターンと震災後の世帯収入の増減との関連をみると、震災後、収入が増加した人は ++ タイプが多く、収入が減少した人は - - タイプが多かった。

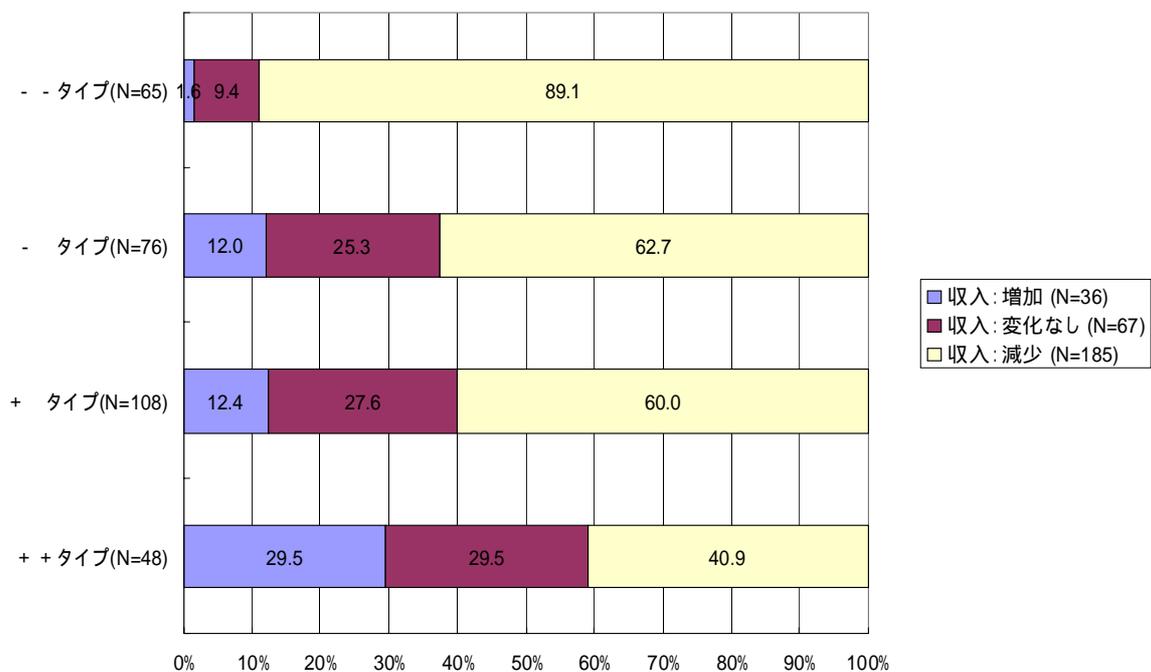


図 4-26 生活復興パターン（世帯収入変化）

基礎資料 編

1. 質問文及び単純集計

問1. あなたの年齢と性別を教えてください。n=1028

年齢 (AV . 56.95) 歳 性別 (男 44.1 453 女 55.9 575)

* 性x年齢

	TOTAL	20歳代	25歳代	30歳代	35歳代	40歳代	45歳代	50歳代	55歳代	60歳代	65歳代	70歳以上	平均年齢(歳)	男性	女性
TOTAL	100 1028	4.1 42	3.4 35	4.1 42	5 51	5.4 56	5.9 61	9 93	11.7 120	15.1 155	13.6 140	22.7 233	56.95	44.1 453	55.9 575
男性小計	100 453	3.8 17	3.5 16	3.1 14	4.6 21	5.1 23	6.4 29	6.8 31	9.9 45	14.8 67	16.3 74	25.6 116	58.32	100 453	- -
20代	100 33	51.5 17	48.5 16	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	24.52	100 33	- -
30代	100 35	- -	- -	40 14	60 21	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	34.8	100 35	- -
40代	100 52	- -	- -	- -	- -	44.2 23	55.8 29	- -	- -	- -	- -	- -	44.65	100 52	- -
50代	100 76	- -	- -	- -	- -	- -	- -	40.8 31	59.2 45	- -	- -	- -	54.88	100 76	- -
60代	100 141	- -	47.5 67	52.5 74	- -	64.75	100 141	- -							
70歳以上	100 116	- -	- -	- -	100 116	75.59	100 116	- -							
女性小計	100 575	4.3 25	3.3 19	4.9 28	5.2 30	5.7 33	5.6 32	10.8 62	13 75	15.3 88	11.5 66	20.3 117	55.87	- 100	575
20代	100 44	56.8 25	43.2 19	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	24.14	- 100	44
30代	100 58	- -	- -	48.3 28	51.7 30	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	34.4	- 100	58
40代	100 65	- -	- -	- -	- -	50.8 33	49.2 32	- -	- -	- -	- -	- -	44.25	- 100	65
50代	100 137	- -	- -	- -	- -	- -	- -	45.3 62	54.7 75	- -	- -	- -	54.71	- 100	137
60代	100 154	- -	57.1 88	42.9 66	- -	63.71	- 100	154							
70歳以上	100 117	- -	- -	- -	100 117	75.96	- 100	117							

* 現在同居家族人数

1人	100 83	1.2 1	1.2 1	4.8 4	2.4 2	1.2 1	4.8 4	9.6 8	4.8 4	12 10	15.7 13	42.2 35	64.07	28.9 24	71.1 59
2人	100 368	0.8 3	1.1 4	1.4 5	2.2 8	3 11	1.1 4	5.4 20	8.2 30	19.3 71	22 81	35.6 131	64.18	48.9 180	51.1 188
3人	100 260	2.3 6	5.4 14	5.8 15	6.2 16	5 13	5.4 14	8.5 22	19.6 51	17.7 46	10.8 28	13.5 35	54.64	43.1 112	56.9 148
4人	100 166	12.7 21	4.2 7	7.2 12	7.8 13	9 15	8.4 14	16.3 27	14.5 24	8.4 14	3.6 6	7.8 13	47.22	43.4 72	56.6 94
5人	100 89	4.5 4	9 8	4.5 4	10.1 9	10.1 9	20.2 18	12.4 11	7.9 7	7.9 5	5.6 7	7.9 7	48.1	46.1 41	53.9 48
6人以上	100 54	13 7	1.9 1	3.7 2	5.6 3	13 7	11.1 6	7.4 4	3.7 2	11.1 6	9.3 5	20.4 11	52	42.6 23	57.4 31

* 身体的被害

死亡家族あり	100 7	- -	- -	- -	14.3 1	28.6 2	- -	14.3 1	14.3 1	14.3 1	- -	14.3 1	53.57	28.6 2	71.4 5
入院病傷者あり	100 20	5 1	5 1	10 2	- -	10 2	5 1	10 2	10 2	20 4	15 3	10 2	52.7	45 9	55 11
軽病傷者あり	100 172	3.5 6	4.1 7	4.7 8	4.1 7	3.5 6	4.7 8	9.3 16	15.1 26	16.3 28	11 19	23.8 41	57.28	44.8 77	55.2 95
全員無事	100 757	4.2 32	3.3 25	4.1 31	5.4 41	5.8 44	6.6 50	9.5 72	11.5 87	15.2 115	14 106	20.3 154	56.34	45.7 346	54.3 411

* 住宅被害

全壊・全焼	100 156	2.6 4	1.3 2	3.2 5	3.2 5	4.5 7	2.6 4	7.1 11	7.7 12	18.6 29	16 25	33.3 52	62.13	42.9 67	57.1 89
半壊・半焼	100 204	2.5 5	5.4 11	6.9 14	3.4 7	3.4 7	4.4 9	9.3 19	12.3 25	12.7 26	10.8 22	28.9 59	57.53	47.5 97	52.5 107
一部損壊	100 465	4.9 23	3.7 17	3.4 16	4.9 23	7.3 34	7.5 35	9 42	12.7 59	15.3 71	14 65	17.2 80	55.27	41.9 195	58.1 270
被害なし	100 199	5 10	2.5 5	3.5 7	8 16	4 8	6 12	10.6 21	12.1 24	14.6 29	14.1 28	19.6 39	55.93	45.7 91	54.3 108

問2. 現在、(ご自分をふくめて)同居しているご家族は何人ですか。n=1028

(AV . 2 . 99) 人

付問：現在、あなたから見て、どのような方が同居していらっしゃいますか。該当する方に、
つけ、人数もお書きください。

1. 配偶者	72.5	745
2. 子ども(1.54)人	46.7	480
3. 子どもの配偶者(1.04)人	4.5	46
4. 孫(1.79)人	4.2	43
5. 祖父母	1.5	15
6. 自分の両親	13.4	138
7. 配偶者の両親	4.3	44
8. 自分のきょうだい(1.27)人	7.0	72
9. その他() (1.31)人	1.3	13
(10. 単身者	8.1	83)
カッコの中は平均値	DK / NA	0.6
		6

* 性×年齢

	TOTAL	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	不明	平均人数(人)
TOTAL	100 1028	8.1 83	35.8 368	25.3 260	16.1 166	8.7 89	5.3 54	0.8 8	2.99
男性小計	100 453	5.3 24	39.7 180	24.7 112	15.9 72	9.1 41	5.1 23	0.2 1	3
20代	100 33	-	12.1 4	21.2 7	39.4 13	18.2 6	9.1 3	-	3.94
30代	100 35	5.7 2	8.6 3	37.1 13	28.6 10	17.1 6	2.9 1	-	3.51
40代	100 52	5.8 3	15.4 8	11.5 6	23.1 12	28.8 15	13.5 7	1.9 1	4.06
50代	100 76	3.9 3	19.7 15	36.8 28	30.3 23	7.9 6	1.3 1	-	3.22
60代	100 141	5 7	53.9 76	26.2 37	6.4 9	4.3 6	4.3 6	-	2.65
70歳以上	100 116	7.8 9	63.8 74	18.1 21	4.3 5	1.7 2	4.3 5	-	2.41
女性小計	100 575	10.3 59	32.7 188	25.7 148	16.3 94	8.3 48	5.4 31	1.2 7	2.98
20代	100 44	4.5 2	6.8 3	29.5 13	34.1 15	13.6 6	11.4 5	-	3.86
30代	100 58	6.9 4	17.2 10	31 18	25.9 15	12.1 7	6.9 4	-	3.4
40代	100 65	3.1 2	10.8 7	32.3 21	26.2 17	18.5 12	9.2 6	-	3.8
50代	100 137	6.6 9	25.5 35	32.8 45	20.4 28	8.8 12	3.6 5	2.2 3	3.11
60代	100 154	10.4 16	49.4 76	24 37	7.1 11	3.9 6	3.2 5	1.9 3	2.54
70歳以上	100 117	22.2 26	48.7 57	12 14	6.8 8	4.3 5	5.1 6	0.9 1	2.39

* 身体的被害

死亡家族あり	100 7	-	42.9 3	28.6 2	28.6 2	-	-	-	2.86
入院病傷者あり	100 20	-	30 6	20 4	20 4	15 3	5 1	10 2	3.39
軽病傷者あり	100 172	6.4 11	39 67	27.9 48	14 24	7.6 13	4.1 7	1.2 2	2.92
全員無事	100 757	6.2 47	35.4 268	26.3 199	17.3 131	9.1 69	5.4 41	0.3 2	3.05

* 住宅被害

全壊・全焼	100 156	14.1 22	38.5 60	21.8 34	10.3 16	7.1 11	7.1 11	1.3 2	2.79
半壊・半焼	100 204	6.9 14	36.3 74	24.5 50	18.1 37	9.8 20	3.4 7	1 2	2.99
一部損壊	100 465	6.9 32	34.2 159	27.1 126	16.3 76	8.8 41	6 28	0.6 3	3.06
被害なし	100 199	7 14	37.2 74	25.1 50	18.1 36	8.5 17	4 8	-	2.98

震災当時のあなたのことを教えてください。

問3. 震災が起こった時、あなたは、どちらにいましたか。n=1028

1. 自宅	94.2	968
2. 勤務先	1.1	11
3. 通勤途上	0.9	9
4. 宿泊施設	0.4	4
5. その他	2.9	30
DK/NA	0.6	6

その場所は、

1. 被災地内	81.3	836
2. 被災地外	6.9	71
3. わからない	1.2	12
DK/NA	10.6	109

問3 震災発生時の居場所
* 性×年齢

問3付問震災地の内外

	TOTAL	自宅	勤務先	通勤途上	宿泊施設	その他	不明	被災地内	被災地外	わからない	不明
TOTAL	100 1028	94.2 968	1.1 11	0.9 9	0.4 4	2.9 30	0.6 6	81.3 836	6.9 71	1.2 12	10.6 109
男性小計	100 453	91.8 416	1.5 7	1.8 8	0.7 3	3.8 17	0.4 2	79 358	9.5 43	1.3 6	10.2 46
20代	100 33	93.9 31	-	-	3 1	3 1	-	87.9 29	3 1	-	9.1 3
30代	100 35	77.1 27	2.9 1	5.7 2	-	14.3 5	-	88.6 31	11.4 4	-	-
40代	100 52	94.2 49	3.8 2	-	-	-	1.9 1	80.8 42	5.8 3	3.8 2	9.6 5
50代	100 76	93.4 71	2.6 2	2.6 2	-	1.3 1	-	86.8 66	6.6 5	1.3 1	5.3 4
60代	100 141	92.2 130	0.7 1	2.8 4	0.7 1	3.5 5	-	77.3 109	11.3 16	0.7 1	10.6 15
70歳以上	100 116	93.1 108	0.9 1	-	0.9 1	4.3 5	0.9 1	69.8 81	12.1 14	1.7 2	16.4 19
女性小計	100 575	96 552	0.7 4	0.2 1	0.2 1	2.3 13	0.7 4	83.1 478	4.9 28	1 6	11 63
20代	100 44	93.2 41	-	-	2.3 1	4.5 2	-	90.9 40	4.5 2	2.3 1	2.3 1
30代	100 58	100 58	-	-	-	-	-	91.4 53	3.4 2	1.7 1	3.4 2
40代	100 65	96.9 63	-	-	-	3.1 2	-	86.2 56	7.7 5	-	6.2 4
50代	100 137	97.1 133	-	-	-	2.2 3	0.7 1	86.9 119	5.8 8	2.2 3	5.1 7
60代	100 154	94.8 146	2.6 4	-	-	1.9 3	0.6 1	79.9 123	4.5 7	0.6 1	14.9 23
70歳以上	100 117	94.9 111	-	0.9 1	-	2.6 3	1.7 2	74.4 87	3.4 4	-	22.2 26

* 現在同居家族人数

1人	100 83	91.6 76	2.4 2	1.2 1	-	3.6 3	1.2 1	84.3 70	4.8 4	-	10.8 9
2人	100 368	93.2 343	1.1 4	1.4 5	0.8 3	3.3 12	0.3 1	78.3 288	6.5 24	0.5 2	14.7 54
3人	100 260	95.8 249	0.4 1	0.8 2	-	3.1 8	-	80 208	9.2 24	1.9 5	8.8 23
4人	100 166	95.8 159	0.6 1	-	0.6 1	3 5	-	84.3 140	6 10	2.4 4	7.2 12
5人	100 89	94.4 84	3.4 3	1.1 1	-	1.1 1	-	91 81	3.4 3	1.1 1	4.5 4
6人以上	100 54	98.1 53	-	-	-	1.9 1	-	83.3 45	11.1 6	-	5.6 3

* 身体的被害

死亡家族あり	100 7	57.1 4	-	-	-	28.6 2	14.3 1	85.7 6	14.3 1	-	-
入院病傷者あり	100 20	85 17	5 1	-	-	5 1	5 1	90 18	-	-	10 2
軽病傷者あり	100 172	95.9 165	1.7 3	0.6 1	0.6 1	1.2 2	-	84.3 145	2.9 5	0.6 1	12.2 21
全員無事	100 757	94.6 716	0.9 7	0.8 6	0.4 3	3 23	0.3 2	81.2 615	7.9 60	1.3 10	9.5 72

* 住宅被害

全壊・全焼	100 156	92.9 145	1.3 2	1.3 2	0.6 1	2.6 4	1.3 2	89.1 139	1.9 3	-	9 14
半壊・半焼	100 204	94.6 193	0.5 1	1.5 3	0.5 1	2.5 5	0.5 1	84.8 173	1.5 3	0.5 1	13.2 27
一部損壊	100 465	94.2 438	1.5 7	0.9 4	0.2 1	3 14	0.2 1	84.5 393	5.4 25	1.1 5	9 42
被害なし	100 199	95 189	0.5 1	-	0.5 1	3.5 7	0.5 1	65.3 130	19.6 39	3 6	12.1 24

問4. あなたは、震災当日(1月17日) 避難しましたか。 n=1028

1. 避難した	28.6	294						
2. 避難しなかった	71.0	730	(A. 避難の必要がなかった B. 避難したくてもできなかった)					
DK/NA	0.4	4	A. 78.1	570	B. 11.8	85	DK/NA 10.1	74

問4 当日避難の有無
* 性×年齢

問4-2 付問避難しなかった状況

	TOTAL	避難した	避難しなかった	不明	TOTAL	避難の必要がなかった	避難したくてもできなかった	不明
TOTAL	100 1028	28.6 294	71 730	0.4 4	100 730	78.1 570	11.8 86	10.1 74
男性小計	100 453	26.3 119	73.1 331	0.7 3	100 331	75.5 250	15.1 50	9.4 31
20代	100 33	24.2 8	75.8 25	- -	100 25	88 22	8 2	4 1
30代	100 35	31.4 11	68.6 24	- -	100 24	83.3 20	12.5 3	4.2 1
40代	100 52	15.4 8	82.7 43	1.9 1	100 43	74.4 32	18.6 8	7 3
50代	100 76	23.7 18	76.3 58	- -	100 58	77.6 45	13.8 8	8.6 5
60代	100 141	26.2 37	73.8 104	- -	100 104	74 77	16.3 17	9.6 10
70歳以上	100 116	31.9 37	66.4 77	1.7 2	100 77	70.1 54	15.6 12	14.3 11
女性小計	100 575	30.4 175	69.4 399	0.2 1	100 399	80.2 320	9 36	10.8 43
20代	100 44	20.5 9	79.5 35	- -	100 35	91.4 32	2.9 1	5.7 2
30代	100 58	32.8 19	67.2 39	- -	100 39	92.3 36	2.6 1	5.1 2
40代	100 65	35.4 23	64.6 42	- -	100 42	88.1 37	7.1 3	4.8 2
50代	100 137	24.8 34	75.2 103	- -	100 103	83.5 86	7.8 8	8.7 9
60代	100 154	29.2 45	70.8 109	- -	100 109	78.9 86	11.9 13	9.2 10
70歳以上	100 117	38.5 45	60.7 71	0.9 1	100 71	60.6 43	14.1 10	25.4 18

* 現在同居家族人数

1人	100 83	36.1 30	63.9 53	- -	100 53	60.4 32	20.8 11	18.9 10
2人	100 368	28.8 106	70.9 261	0.3 1	100 261	77.8 203	13 34	9.2 24
3人	100 260	25.8 67	73.8 192	0.4 1	100 192	80.2 154	9.9 19	9.9 19
4人	100 166	33.1 55	66.3 110	0.6 1	100 110	80.9 89	8.2 9	10.9 12
5人	100 89	18 16	82 73	- -	100 73	82.2 60	11 8	6.8 5
6人以上	100 54	29.6 16	70.4 38	- -	100 38	76.3 29	13.2 5	10.5 4

* 身体的被害

死亡家族あり	100 7	71.4 5	28.6 2	- -	100 2	100 2	- -	- -
入院病傷者あり	100 20	45 9	55 11	- -	100 11	45.5 5	45.5 5	9.1 1
軽病傷者あり	100 172	49.4 85	50.6 87	- -	100 87	60.9 53	23 20	16.1 14
全員無事	100 757	22.3 169	77.5 587	0.1 1	100 587	82.6 485	9.4 55	8 47

* 住宅被害

全壊・全焼	100 156	74.4 116	25.6 40	- -	100 40	32.5 13	42.5 17	25 10
半壊・半焼	100 204	42.6 87	57.4 117	- -	100 117	61.5 72	21.4 25	17.1 20
一部損壊	100 465	16.1 75	83.7 389	0.2 1	100 389	82 319	10 39	8 31
被害なし	100 199	8 16	92 183	- -	100 183	90.7 166	2.7 5	6.6 12

付問：(「1. 避難した」と回答した人のみお答えください) あなたはどのように避難をしましたか。

その理由についてあてはまる番号すべてに をしてください。n=294

1. 余震がこわかったから	66.0	194
2. 建物の安全性に不安があったから	66.0	194
3. 断水していたから	63.6	187
4. ガスが使えなかったから	62.6	184
5. トイレが使えなかったから	55.8	164
6. 家族に高齢者がいたから	12.6	37
7. 家族に乳幼児がいたから	4.1	12
8. 家族の中に特別なケアを必要とする人がいたから	5.1	15
9. とにかく人のいるところに行きたかったから	18.4	54
10. 情報や物資が得られると思ったから	23.8	70
11. 行政の支援が得られると思ったから	10.9	32
12. 周囲の人に誘われたから	10.5	31
13. 避難命令が出たから	12.6	37
14. その他(具体的に:)	12.6	37
	D K / N A	16.3 48

付問：(「2. 避難しなかった」と回答した人のみお答えください) あなたはどのように避難をしなかったのですが。その理由についてあてはまる番号すべてに をしてください。n=730

1. 余震がこわかったから	8.1 12	10. 家族に乳幼児がいたから	2.9 21
2. 家の中の方が安全だったから	47.4 346	11. 家族の中に特別なケアを必要とする人がいたから	3.0 22
3. すまいを守りたかったから	13.0 9.5	12. 人が集まっているところに行きたくなかったから	3.7 27
4. 家にある財産を守りたかったから	6.2 45	13. 避難場所が遠かったから	2.2 16
5. 避難するのが面倒くさかったから	3.0 22	14. 避難場所を知らなかったから	7.4 54
6. 水道が使えたから	22.2 162	15. 避難場所までの移動手段がなかったから	1.1 8
7. ガスが使えたから	19.5 142	16. 周囲の人に誘われなかったから	4.1 30
8. トイレが使えたから	26.8 196	17. 避難命令が出なかったから	35.3 258
9. 家族に高齢者がいたから	6.3 46	18. その他(具体的に)	27.4 200
			1.6 12
			D K / N A

問5. 震災当時、(ご自分をふくめて)同居していたご家族は何人でしたか。n=1028

(AV . 3 . 50) 人

付問：震災当時、あなたから見て、どのような方が同居していらっしゃいましたか。該当する方につけ、人数もお書きください。

1. 配偶者	70.7 727	6. 自分の両親	20.1 207
2. 子ども(1.74)人	54.2 557	7. 配偶者の両親	5.1 52
3. 子どもの配偶者(1.11)人	4.4 45	8. 自分のきょうだい(1.45)人	11.0 113
4. 孫(1.96)人	4.6 47	9. その他() (2.19)人	2.0 21
5. 祖父母	4.0 41	カッコの中は平均値	DK / NA 0.9 9

* 性×年齢

	TOTAL	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	不明	平均人数(人)
TOTAL	100 1028	5.6 58	24.8 255	19.6 201	28 288	11.1 114	9.2 95	1.7 17	3.5
男性小計	100 453	5.1 23	25.6 116	22.1 100	26.9 122	10.2 46	9.1 41	1.1 5	3.44
20代	100 33	- -	6.1 2	15.2 5	30.3 10	24.2 8	24.2 8	- -	4.52
30代	100 35	11.4 4	2.9 1	40 14	37.1 13	5.7 2	2.9 1	- -	3.31
40代	100 52	11.5 6	9.6 5	17.3 9	21.2 11	17.3 9	21.2 11	1.9 1	4
50代	100 76	1.3 1	13.2 10	15.8 12	43.4 33	14.5 11	11.8 9	- -	4.04
60代	100 141	3.5 5	26.2 37	28.4 40	31.2 44	7.8 11	2.8 4	- -	3.22
70歳以上	100 116	6 7	52.6 61	17.2 20	9.5 11	4.3 5	6.9 8	3.4 4	2.77
女性小計	100 575	6.1 35	24.2 139	17.6 101	28.9 166	11.8 68	9.4 54	2.1 12	3.55
20代	100 44	- -	- -	13.6 6	36.4 16	22.7 10	27.3 12	- -	4.77
30代	100 58	10.3 6	27.6 16	24.1 14	20.7 12	10.3 6	5.2 3	1.7 1	3.12
40代	100 65	3.1 2	13.8 9	20 13	36.9 24	15.4 10	10.8 7	- -	4.05
50代	100 137	2.2 3	10.9 15	16.1 22	43.8 60	16.8 23	9.5 13	0.7 1	3.95
60代	100 154	5.8 9	22.1 34	25.3 39	29.9 46	8.4 13	4.5 7	3.9 6	3.3
70歳以上	100 117	12.8 15	55.6 65	6 7	6.8 8	5.1 6	10.3 12	3.4 4	2.82

問6. あなたや同居されていた方の中で、震災が原因で、ケガや病気をされた方はいらっしゃいますか。
あてはまるものすべての番号に をつけ、人数もお書きください。 n=1028

1. 全員、ケガも病気もしなかった。	73.6	757
2. 亡くなった(1. 14 人)	0.7	7
3. <u>ケガ</u> で入院した(1. 15 人)	1.3	13
4. <u>病気</u> で入院した(1. 11 人)	0.9	9
5. <u>ケガ</u> で受診した(1. 09 人)	4.6	47
6. <u>病気</u> で受診した(1. 03 人)	3.1	32
7. <u>ケガ</u> をしたが、受診・入院はしなかった(1. 10 人)	10.1	104
8. <u>病気</u> をしたが、受診・入院はしなかった(1. 13 人)	1.8	18
カッコの中は平均値	DK / NA	7.0
	7.0	72

問6 身体的被害
* 性×年齢

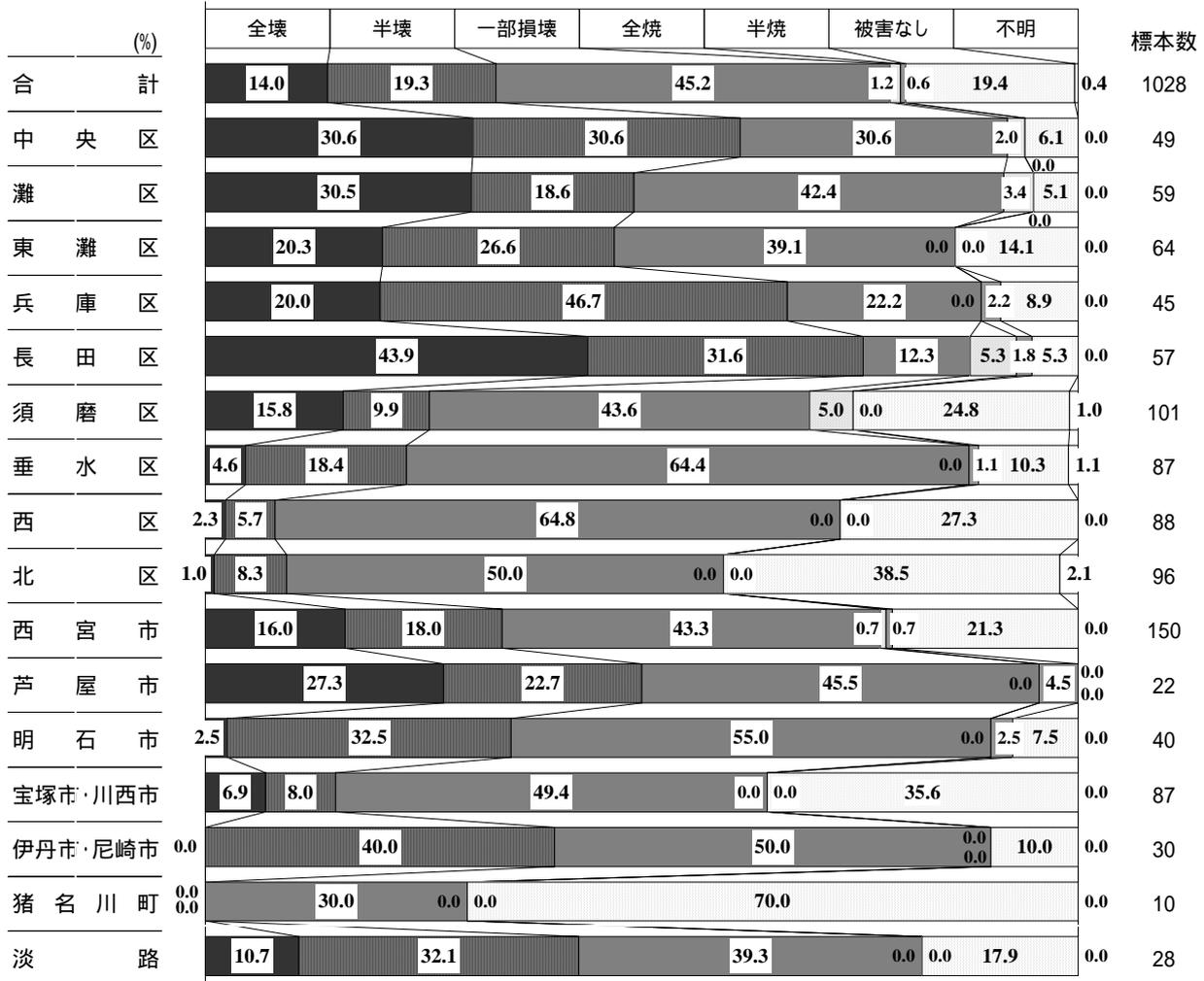
問6 身体的被害<SA>

	TOTAL	全員ケガも病気も しなかった	亡くなった	ケガで入院した	病気で入院した	ケガで受診した	病気で受診した	ケガをしたが 受診・入院はしな かった	ケガをしたが 受診・入院はしな かった	病気をした が受診・入院はし なかった	不明	TOTAL	死亡家族あり	入院病傷者あり	軽病傷者あり	全員無事	不明
TOTAL	100 1028	73.6 757	0.7 7	1.3 13	0.9 9	4.6 47	3.1 32	10.1 104	1.8 18	7 72	100 1028	0.7 7	1.9 20	16.7 172	73.6 757	7 72	
男性小計	100 453	76.4 346	0.4 2	1.5 7	0.4 2	4.2 19	3.3 15	10.2 46	1.8 8	4.2 19	100 453	0.4 2	2 9	17 77	76.4 346	4.2 19	
20代	100 33	66.7 22	- 1	3 1	3 1	9.1 3	- 3	15.2 5	3 1	3 1	100 33	- 1	6.1 2	24.2 8	66.7 22	3 1	
30代	100 35	74.3 26	2.9 1	2.9 1	- 1	2.9 1	8.6 3	11.4 4	- -	- -	100 35	2.9 1	2.9 1	20 7	74.3 26	- -	
40代	100 52	78.8 41	1.9 1	1.9 1	- -	3.8 2	3.8 2	5.8 3	- -	5.8 3	100 52	1.9 1	1.9 1	11.5 6	78.8 41	5.8 3	
50代	100 76	78.9 60	- 1	1.3 1	1.3 1	1.3 1	- -	15.8 12	2.6 2	1.3 1	100 76	- 1	2.6 2	17.1 13	78.9 60	1.3 1	
60代	100 141	78 110	- -	1.4 -	- -	5.7 8	0.7 1	9.2 13	2.1 3	5 7	100 141	- -	1.4 2	15.6 22	78 110	5 7	
70歳以上	100 116	75 87	- 1	0.9 -	- -	3.4 4	7.8 9	7.8 9	1.7 2	6 7	100 116	- -	0.9 1	18.1 21	75 87	6 7	
女性小計	100 575	71.5 411	0.9 5	1 6	1.2 7	4.9 28	3 17	10.1 58	1.7 10	9.2 53	100 575	0.9 5	1.9 11	16.5 95	71.5 411	9.2 53	
20代	100 44	79.5 35	- -	- -	- -	2.3 1	- -	9.1 4	2.3 1	9.1 4	100 44	- -	- -	11.4 5	79.5 35	9.1 5	
30代	100 58	79.3 46	- -	- -	1.7 1	1.7 1	3.4 5	8.6 5	- -	5.2 3	100 58	- -	1.7 1	13.8 8	79.3 46	5.2 3	
40代	100 65	81.5 53	1.5 1	- -	3.1 2	1.5 1	4.6 3	10.8 7	1.5 1	1.5 1	100 65	1.5 1	3.1 2	12.3 8	81.5 53	1.5 1	
50代	100 137	72.3 99	1.5 2	2.2 3	- -	6.6 9	2.2 3	14.6 20	0.7 1	3.6 5	100 137	1.5 2	1.5 2	21.2 29	72.3 99	3.6 5	
60代	100 154	72.1 111	0.6 1	1.9 3	1.9 3	4.5 7	3.9 6	10.4 16	1.9 3	7.8 12	100 154	0.6 1	3.2 5	16.2 25	72.1 111	7.8 12	
70歳以上	100 117	57.3 67	0.9 1	- -	0.9 1	7.7 9	2.6 3	5.1 6	3.4 4	23.9 28	100 117	0.9 1	0.9 1	17.1 20	57.3 67	23.9 28	
* 現在同居家族人数																	
1人	100 83	56.6 47	- -	- -	- -	7.2 6	- -	7.2 6	1.2 1	30.1 25	100 83	- -	- -	13.3 11	56.6 47	30.1 25	
2人	100 368	72.8 269	0.8 3	1.1 4	1.1 4	4.1 15	4.9 18	10.1 37	2.4 9	6.5 24	100 368	0.8 3	1.6 6	18.2 67	72.8 269	6.5 24	
3人	100 260	76.5 199	0.8 2	1.2 3	0.4 1	3.8 10	3.1 8	10.8 28	2.3 6	2.7 7	100 260	0.8 2	1.5 4	18.5 48	76.5 199	2.7 7	
4人	100 166	78.9 131	1.2 2	1.8 3	0.6 1	3.6 6	1.8 3	11.4 19	0.6 1	3 5	100 166	1.2 2	2.4 4	14.5 24	78.9 131	3 5	
5人	100 89	77.5 69	- -	- -	3.4 3	6.7 6	2.2 2	7.9 7	1.1 1	4.5 4	100 89	- -	3.4 3	14.6 13	77.5 69	4.5 4	
6人以上	100 54	75.9 41	- -	1.9 -	- -	1.9 1	1.9 1	11.1 6	- -	9.3 5	100 54	- -	1.9 1	13 7	75.9 41	9.3 5	
* 住宅被害																	
全壊・全焼	100 156	50.6 79	1.9 3	5.8 9	1.3 2	13.5 21	7.7 12	12.2 19	3.8 6	10.9 17	100 156	1.9 3	6.4 10	30.1 47	50.6 79	10.9 17	
半壊・半焼	100 204	65.7 134	1 2	1.5 3	1 2	5.4 11	2.9 6	14.7 30	1.5 3	7.8 16	100 204	1 2	2.5 5	23 47	65.7 134	7.8 16	
一部損壊	100 465	78.5 365	0.2 2	0.2 1	0.9 4	2.6 12	2.6 12	10.8 50	1.9 9	5.4 25	100 465	0.2 2	0.9 4	14.8 69	78.5 365	5.4 25	
被害なし	100 199	89.9 179	- -	- -	0.5 1	1.5 3	1 2	2.5 5	- -	5 10	100 199	- -	0.5 1	4.5 9	89.9 179	5 10	

問7. 震災の時、お住まいになっていた住宅はどのような被害を受けましたか。(〃はひとつ)

n=1028

1. 全壊	14.0	144	4. 全焼	1.2	12
2. 半壊	19.3	198	5. 半焼	0.6	6
3. 一部損壊	45.2	465	6. 被害なし	19.4	199
			DK / NA	0.4	4



* 性×年齢

	TOTAL	全壊	半壊	一部損壊	全焼	半焼	被害なし	不明	全壊・全焼	半壊・半焼	一部損壊	被害なし	不明
TOTAL	100 1028	14 144	19.3 198	45.2 465	1.2 12	0.6 6	19.4 199	0.4 4	15.2 156	19.8 204	45.2 465	19.4 199	0.4 4
男性小計	100 453	13.2 60	21.4 97	43 195	1.5 7	-	20.1 91	0.7 3	14.8 67	21.4 97	43 195	20.1 91	0.7 3
20代	100 33	12.1 4	21.2 7	42.4 14	-	-	24.2 8	-	12.1 4	21.2 7	42.4 14	24.2 8	-
30代	100 35	8.6 3	17.1 6	51.4 18	5.7 2	-	17.1 6	-	14.3 5	17.1 6	51.4 18	17.1 6	-
40代	100 52	7.7 4	15.4 8	53.8 28	1.9 1	-	19.2 10	1.9 1	9.6 5	15.4 8	53.8 28	19.2 10	1.9 1
50代	100 76	9.2 7	22.4 17	44.7 34	-	-	23.7 18	-	9.2 7	22.4 17	44.7 34	23.7 18	-
60代	100 141	19.1 27	20.6 29	42.6 60	0.7 2	-	17 24	-	19.9 28	20.6 29	42.6 60	17 24	-
70歳以上	100 116	12.9 15	25.9 30	35.3 41	2.6 3	-	21.6 25	1.7 2	15.5 18	25.9 30	35.3 41	21.6 25	1.7 2
女性小計	100 575	14.6 84	17.6 101	47 270	0.9 5	1 6	18.8 108	0.2 1	15.5 89	18.6 107	47 270	18.8 108	0.2 1
20代	100 44	4.5 2	20.5 9	59.1 26	-	-	15.9 7	-	4.5 2	20.5 9	59.1 26	15.9 7	-
30代	100 58	8.6 5	24.1 14	36.2 21	-	1.7 1	29.3 17	-	8.6 5	24.1 14	36.2 21	29.3 17	-
40代	100 65	9.2 6	12.3 8	63.1 41	-	-	15.4 10	-	9.2 6	12.3 8	63.1 41	15.4 10	-
50代	100 137	10.2 14	18.2 25	48.9 67	1.5 2	1.5 2	19.7 27	-	11.7 16	19.7 27	48.9 67	19.7 27	-
60代	100 154	15.6 24	12.3 19	49.4 76	1.3 2	-	21.4 33	-	16.9 26	12.3 19	49.4 76	21.4 33	-
70歳以上	100 117	28.2 33	22.2 26	33.3 39	0.9 1	2.6 3	12 14	0.9 1	29.1 34	24.8 29	33.3 39	12 14	0.9 1

問8. あなたの家財(家具、電気器具、食器など)の被害はどれくらいだと思われますか。ひとつだけ選んでください。n=1028

1. 被害はなかった	8.9	3. 半分被害を受けた	25.8	5. わからない	1.2
	92		265		12
2. 軽い被害を受けた	51.6	4. 全部被害を受けた	11.8	DK / NA	0.8
	530		121		8

* 性×年齢

	TOTAL	被害はなかった	軽い被害を受けた	半分被害を受けた	全部被害を受けた	わからない	不明
TOTAL	100 1028	8.9 92	51.6 530	25.8 265	11.8 121	1.2 12	0.8 8
男性小計	100 453	9.7 44	49.9 226	26.5 120	11.9 54	0.9 4	1.1 5
20代	100 33	9.1 3	51.5 17	30.3 10	6.1 2	3 1	- -
30代	100 35	5.7 2	57.1 20	14.3 5	22.9 8	- -	- -
40代	100 52	7.7 4	57.7 30	26.9 14	5.8 3	- -	1.9 1
50代	100 76	10.5 8	56.6 43	26.3 20	5.3 4	1.3 1	- -
60代	100 141	9.2 13	48.2 68	28.4 40	12.8 18	1.4 2	- -
70歳以上	100 116	12.1 14	41.4 48	26.7 31	16.4 19	- -	3.4 4
女性小計	100 575	8.3 48	52.9 304	25.2 145	11.7 67	1.4 8	0.5 3
20代	100 44	9.1 4	61.4 27	22.7 10	4.5 2	2.3 1	- -
30代	100 58	12.1 7	51.7 30	29.3 17	5.2 3	1.7 1	- -
40代	100 65	10.8 7	63.1 41	15.4 10	10.8 7	- -	- -
50代	100 137	8.8 12	58.4 80	21.2 29	10.9 15	0.7 1	- -
60代	100 154	7.1 11	52.6 81	23.4 36	13.6 21	2.6 4	0.6 1
70歳以上	100 117	6 7	38.5 45	36.8 43	16.2 19	0.9 1	1.7 2

* 身体的被害

死亡家族あり	100 7	- -	28.6 2	42.9 3	28.6 2	- -	- -
入院病傷者あり	100 20	5 1	5 1	60 12	30 6	- -	- -
軽病傷者あり	100 172	0.6 1	35.5 61	39 67	23.8 41	1.2 2	- -
全員無事	100 757	11 83	57.9 438	21.4 162	8.1 61	1.3 10	0.4 3

* 住宅被害

全壊・全焼	100 156	- -	4.5 7	36.5 57	54.5 85	3.8 6	0.6 1
半壊・半焼	100 204	0.5 1	33.8 69	55.9 114	8.3 17	1.5 3	- -
一部損壊	100 465	4.3 20	72.3 336	18.5 86	3.7 17	0.4 2	0.9 4
被害なし	100 199	35.7 71	58.8 117	4 8	1 2	0.5 1	- -

問9. あなたの住宅・家財等をすべて含んだ被害総額は、震災当時のあなたの世帯の年収の、どの程度にあたると思われますか。あてはまる番号1つを選んでをつけてください。n=1028

被害総額は震災当時の年収の...

1. 被害はなかった	9.8 101	4. 30%~50%	11.7 120	7. 同じ程度~2倍	5.3 54
2. 10%未満	26.4 271	5. 50%~70%	6.7 69	8. 2倍~3倍	3.7 38
3. 10%~30%	20.5 211	6. 70%~100%	5.0 51	9. 3倍以上	7.9 81
				D K / N A	3.1 32

* 性×年齢

	TOTAL	被害はなかった	10%未満	10%~30%	30%~50%	50%~70%	70%~100%	100%以上	同じ程度2倍	2倍~3倍	3倍以上	不明
TOTAL	100 1028	9.8 101	26.4 271	20.5 211	11.7 120	6.7 69	5 51	5.3 54	3.7 38	7.9 81	3.1 32	
男性小計	100 453	9.3 42	26 118	18.3 83	14.6 66	5.7 26	4.9 22	5.5 25	4.9 22	8.6 39	2.2 10	
20代	100 33	9.1 3	33.3 11	15.2 5	6.1 2	3 1	3 1	3 1	6.1 2	12.1 4	9.1 3	
30代	100 35	5.7 2	42.9 15	20 7	5.7 2	2.9 1	-	5.7 2	2.9 1	14.3 5	-	
40代	100 52	7.7 4	26.9 14	23.1 12	11.5 6	3.8 2	3.8 2	3.8 2	3.8 2	5.8 3	1.9 1	
50代	100 76	7.9 6	32.9 25	25 19	9.2 7	2.6 3	3.9 3	7.9 6	7.9 6	2.6 2	-	
60代	100 141	8.5 12	24.1 34	17 24	21.3 30	5 7	3.5 5	5.7 8	3.5 5	9.2 13	2.1 3	
70歳以上	100 116	12.9 15	16.4 19	13.8 16	16.4 19	7.8 9	9.5 11	5.2 6	5.2 6	10.3 12	2.6 3	
女性小計	100 575	10.3 59	26.6 153	22.3 128	9.4 54	7.5 43	5 29	5 29	2.8 16	7.3 42	3.8 22	
20代	100 44	18.2 8	29.5 13	18.2 8	9.1 4	4.5 2	-	6.8 3	2.3 1	-	11.4 5	
30代	100 58	10.3 6	36.2 21	24.1 14	8.6 5	5.2 3	-	6.9 4	-	5.2 3	3.4 2	
40代	100 65	12.3 8	40 26	24.6 16	7.7 5	1.5 1	6.2 4	4.6 3	1.5 1	1.5 1	-	
50代	100 137	10.2 14	31.4 43	23.4 32	12.4 17	8 11	1.5 2	3.6 5	3.6 5	5.8 8	-	
60代	100 154	8.4 13	23.4 36	24 37	10.4 16	6.5 10	7.1 11	3.2 5	3.2 5	8.4 13	5.2 8	
70歳以上	100 117	8.5 10	12 14	17.9 21	6 7	13.7 16	10.3 12	7.7 9	3.4 4	14.5 17	6 7	

* 現在同居家族人数

1人	100 83	12 10	15.7 13	16.9 14	15.7 13	7.2 6	12 10	2.4 2	6 5	6 5	6 5
2人	100 368	9.2 34	24.7 91	20.4 75	13.6 50	7.1 26	5.4 20	4.9 18	4.6 17	8.2 30	1.9 7
3人	100 260	9.6 25	30.4 79	21.9 57	9.6 25	6.2 16	5 13	3.5 9	3.5 9	6.9 18	3.5 9
4人	100 166	10.2 17	31.9 53	22.3 37	12 20	5.4 9	1.2 2	7.2 12	0.6 1	40 10	3 5
5人	100 89	10.1 9	24.7 22	18 16	9 8	6.7 6	1.1 1	10.1 9	5.6 5	11.2 10	3.4 3
6人以上	100 54	11.1 6	24.1 13	20.4 11	7.4 4	7.4 4	7.4 4	7.4 4	-	11.1 6	3.7 2

* 身体的被害

死亡家族あり	100 7	-	-	28.6 2	28.6 2	-	28.6 2	-	-	14.3 1	-
入院病傷者あり	100 20	5 1	10 1	10 2	10 2	-	5 1	10 2	15 3	40 8	-
軽病傷者あり	100 172	0.6 1	12.2 21	16.9 29	16.3 28	12.8 22	7.6 13	7 12	7.6 13	14.5 25	4.7 8
全員無事	100 757	12 91	31.8 241	22.1 167	10.2 77	5.4 41	3 23	4.8 36	2.6 20	5.9 45	2.1 16

* 住宅被害

全壊・全焼	100 156	0.6 1	-	2.6 4	9 14	7.7 12	12.8 20	9.6 15	13.5 21	39.1 61	5.1 8
半壊・半焼	100 204	0.5 1	6.4 13	15.7 32	22.5 46	15.2 31	9.8 20	13.2 27	6.9 14	7.8 16	2 4
一部損壊	100 465	2.8 13	35.9 167	34.2 159	12.5 58	5.2 24	2.4 11	2.6 12	0.6 3	0.6 3	3.2 15
被害なし	100 199	42.7 85	45.7 91	8 16	1 2	1 2	-	-	-	0.5 1	1 2

問 10 . 現在、あなたはどちらにお住まいですか（神戸市の方は区からお書きください）。 n=1028

〒 -

兵庫県 { 神戸市 区 }

{ 市町 }

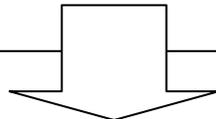
町 丁目

* 性×年齢

	TOTAL	神戸市中央区	灘区	東灘区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	西区	北区	西宮市	芦屋市	明石市	宝塚市・川西市	伊丹市・尼崎市	猪名川町	淡路	その他不明
TOTAL	100 1028	4.7 48	5.1 52	5.8 60	4.3 44	5.7 59	9.8 101	8.4 86	10.1 104	9.9 102	15.3 157	3.4 35	3.8 39	8.2 84	2.1 22	0.9 9	2.5 26	-
男性小計	100 453	5.3 24	5.1 23	6.4 29	4.9 22	4.9 22	9.3 42	8.2 37	9.9 45	9.5 43	15.5 70	4 18	3.3 15	8.2 37	2.9 13	0.9 4	2 9	-
20代	100 33	3 1	3 1	3 1	-	6.1 2	6.1 2	15.2 5	24.2 8	9.1 3	12.1 3	3 4	-	9.1 3	6.1 2	-	-	-
30代	100 35	2.9 1	-	8.6 3	11.4 4	2.9 1	11.4 4	8.6 3	8.6 3	14.3 5	17.1 6	-	2.9 1	-	5.7 2	-	5.7 2	-
40代	100 52	5.8 3	3.8 2	7.7 4	1.9 1	1.9 1	9.6 5	7.7 4	13.5 5	9.6 4	15.4 8	1.9 1	5.8 3	7.7 4	3.8 2	-	3.8 2	-
50代	100 76	10.5 8	-	5.3 4	2.6 2	9.2 7	7.9 6	5.3 4	13.2 10	10.5 8	13.2 10	3.9 3	5.3 4	9.2 7	2.6 2	-	1.3 1	-
60代	100 141	5 4	8.5 12	7.1 10	2.8 4	2.1 3	9.9 14	9.2 13	7.1 11	7.8 11	17 24	4.3 6	2.8 4	9.9 14	2.8 4	1.4 2	2.1 3	-
70歳以上	100 116	3.4 4	6.9 8	6 7	9.5 11	6.9 8	9.5 11	6.9 8	6 7	9.5 11	15.5 18	6 7	2.6 3	7.8 9	0.9 1	1.7 2	0.9 1	-
女性小計	100 575	4.2 24	5 29	5.4 31	3.8 22	6.4 37	10.3 59	8.5 49	10.3 59	10.3 87	15.1 77	3 17	4.2 24	8.2 47	1.6 9	0.9 5	3 17	-
20代	100 44	6.8 3	4.5 2	4.5 2	4.5 2	2.3 1	11.4 5	6.8 3	13.6 6	6.8 3	15.9 7	6.8 3	2.3 1	2.3 1	4.5 2	-	6.8 3	-
30代	100 58	8.6 5	5.2 3	-	8.6 5	3.4 2	6.9 3	8.6 5	12.1 5	3.4 2	15.5 9	5.2 3	3.4 2	13.8 8	-	1.7 1	3.4 2	-
40代	100 55	4.6 3	3.1 2	4.6 3	3.1 2	4.6 3	13.8 8	7.7 5	13.8 9	16.9 11	15.4 10	1.5 1	1.5 1	7.7 5	1.5 1	-	-	-
50代	100 137	-	3.6 5	8 11	5.1 7	5.1 7	11.7 16	13.1 18	13.1 16	11.7 16	10.9 15	3.6 5	3.6 5	5.1 7	2.2 3	2.2 3	0.7 1	-
60代	100 154	4.5 7	5.8 9	7.1 11	1.9 3	6.5 10	7.1 11	5.2 8	9.1 14	11.7 18	17.5 27	1.9 3	3.2 5	10.4 16	1.3 1	0.6 1	5.8 9	-
70歳以上	100 117	5.1 6	6.8 8	3.4 4	2.6 3	12 14	12 14	8.5 10	4.3 5	7.7 9	16.2 19	1.7 2	8.5 10	8.5 10	0.9 1	-	1.7 2	-

問 11 . 震災の時には、あなたはどちらにお住まいでしたか。

1 . 問 10 と同じところ 69 . 0 2 . 問 10 と違うところ 30 . 0 DK / NA 1 . 1



* 現在同居家族人数

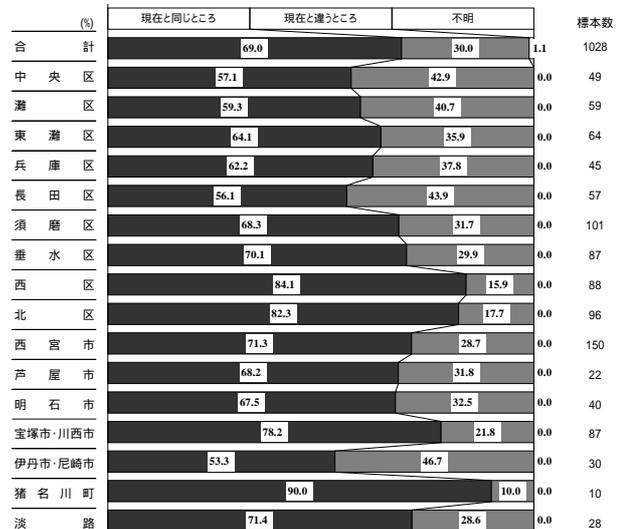
	人	100	65.1	34.9	-
1	83	54	29	-	-
2	100	69.8	28.3	1.9	-
3	368	257	104	7	-
4	100	71.5	27.7	0.8	-
5	260	186	72	2	-
6	100	57.8	42.2	-	-
7	166	96	70	-	-
8	100	74.2	24.7	1.1	-
9	89	66	22	1	-
10	100	81.5	16.7	1.9	-
11	54	44	9	1	-

* 身体的被害

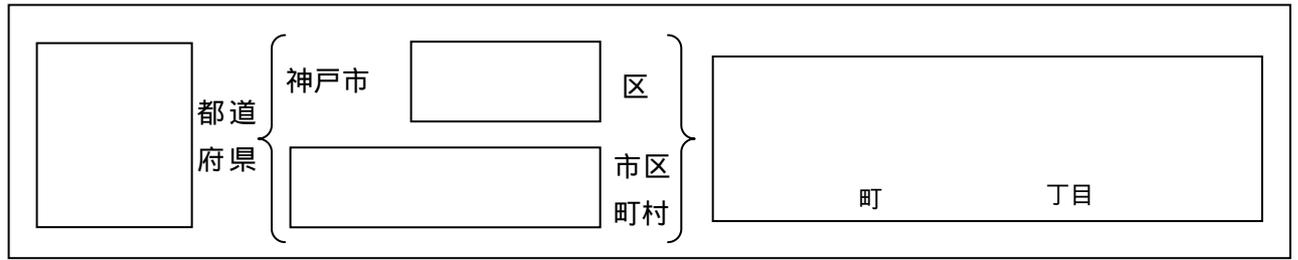
	1028	709	308	11
死亡家族あり	100	28.6	57.1	14.3
入院病傷者あり	100	7	2	1
軽病傷者あり	100	75	20	5
全員無事	100	15	4	1
	100	64	34.9	1.2
	172	110	60	2
	100	70.5	28.8	0.7
	757	534	218	5

* 住宅被害

	100	57.7	41.7	0.6
全壊・全焼	156	90	65	1
半壊・半焼	100	71.1	27.5	1.5
一部損壊	204	145	56	3
	100	70.3	28.2	1.5
	465	327	131	7
被害なし	100	72.4	27.6	-
	199	144	55	-



付問：(「2.問10と違うところ」と回答した方へ) 震災の時には、どこにお住まいでしたか。



* 性×年齢

	TOTAL	神戸市中央区	灘区	東灘区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	西区	北区	西宮市	芦屋市	明石市	宝塚市・川西市	伊丹市・尼崎市	猪名川町	淡路	その他不明	表記以外の兵庫県	兵庫以外の関西	関西以外	不明
TOTAL	100308	6.821	7.824	7.523	5.517	8.125	10.432	8.426	4.514	5.517	1443	2.313	4.213	6.219	4.514	0.31	2.68	-	-	-	-	1.34
男性小計	100134	68	9.713	7.510	68	9.713	11.215	5.27	34	68	12.717	3.717	3.717	7.510	5.27	-	2.23	-	-	-	-	0.71
20代	10091	11.11	-	11.11	11.11	11.11	11.11	-	11.11	-	-	-	-	22.22	-	-	11.11	-	-	-	-	-
30代	10026	3.81	7.72	7.72	11.53	7.72	19.22	7.72	3.81	7.72	7.72	-	3.81	3.81	7.72	-	-	-	-	-	-	-
40代	10022	-	9.12	18.22	-	-	4.51	13.63	-	4.51	13.63	-	4.51	13.63	9.12	-	9.12	-	-	-	-	-
50代	10017	11.82	-	-	5.91	5.91	11.82	-	-	17.63	23.54	-	5.91	11.82	5.91	-	-	-	-	-	-	-
60代	10035	5.72	202	5.72	2.91	11.44	11.44	2.91	5.72	-	17.12	2.91	5.72	2.91	5.72	-	-	-	-	-	-	-
70歳以上	1008	82	82	82	82	208	82	42	82	-	82	162	42	-	-	-	-	-	-	-	-	41
女性小計	100174	7.513	6.311	7.513	5.39	6.311	10.512	6.311	10.512	5.210	14.926	1.18	4.69	5.27	0.61	0.61	2.95	-	-	-	-	1.73
20代	10019	5.31	15.83	15.83	101	10.51	10.51	15.83	33	22	10.52	5.31	-	-	10.52	-	-	-	-	-	-	5.31
30代	10040	12.55	231	104	-	104	2.51	12.55	2.51	152	152	52	7.53	52	-	-	104	-	-	-	-	11
40代	10025	-	82	82	42	162	123	123	162	123	123	-	42	-	-	-	-	-	-	-	-	-
50代	10038	-	5.32	10.54	10.54	10.54	21.14	2.68	2.68	10.54	10.54	-	7.93	2.68	7.93	2.68	-	-	-	-	-	2.68
60代	10030	13.34	-	6.72	103	6.72	103	33	6.72	33	6.72	-	33	6.72	-	-	3.32	-	-	-	-	3.32
70歳以上	10022	13.63	13.63	-	-	13.63	13.63	9.12	-	4.51	9.12	-	13.63	9.12	-	-	-	-	-	-	-	-

* 身体的被害

死亡家族あり	1004	251	-	251	251	-	-	251	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
入院病傷者あり	1004	-	-	-	-	502	-	-	-	-	251	-	-	251	-	-	-	-	-	-	-	-
軽病傷者あり	10060	159	106	13.38	6.74	11.78	13.38	335	1.78	13.38	1.78	-	-	3.32	-	-	-	-	-	-	-	1.78
全員無事	100218	4.19	6.915	6.414	5.512	6.414	10.122	10.623	56.911	12.815	1.828	613	7.316	0.511	0.511	3.78	-	-	-	-	-	0.92

* 住宅被害

全壊・全焼	10065	10.87	13.89	12.38	3.12	21.514	16.911	3.12	1.51	-	10.87	3.12	1.51	-	-	-	-	-	-	-	-	-
半壊・半焼	10056	14.38	3.62	7.14	17.910	12.57	1.81	7.11	1.81	1.81	8.95	3.62	3.62	18.95	-	-	3.62	-	-	-	-	1.81
一部損壊	100131	3.813	9.212	6.18	3.85	1.52	9.214	10.710	7.610	5.319	14.519	2.33	6.114	10.714	6.114	-	1.52	-	-	-	-	1.52
被害なし	10055	1.81	125	5.513	-	3.62	14.58	10.96	3.62	14.512	21.812	3.62	5.513	1.81	1.81	7.34	-	-	-	-	-	1.81

問10 現在の住所

神戸市中央区	10019	63.212	5.33	15.83	-	-	-	-	-	15.83	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
灘区	10016	2516	62.510	6.31	-	-	-	-	-	6.31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
東灘区	10017	5.91	17.63	41.27	-	-	-	-	11.82	-	11.82	-	-	-	11.82	-	-	-	-	-	-	-
兵庫区	10016	6.31	-	-	62.53	18.83	-	6.31	-	-	-	-	-	6.31	-	-	-	-	-	-	-	-
長田区	10026	-	-	-	7.72	69.24	15.44	-	3.81	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.81
須磨区	10029	3.41	-	13.84	3.41	10.33	51.715	-	3.41	-	3.41	3.41	3.41	-	-	-	-	-	-	-	-	3.41
垂水区	10025	-	-	-	-	82	6817	41	-	-	-	41	-	82	82	-	-	-	-	-	-	-
西区	10029	-	3.41	3.41	3.41	-	24.17	20.76	27.68	-	-	-	13.84	3.41	-	-	-	-	-	-	-	-
北区	10023	-	8.72	4.38	8.74	4.34	4.31	-	4.31	52.21	-	-	-	4.31	-	-	-	-	-	-	-	8.72
西宮市	10049	21	6.13	4.12	-	-	-	21	-	-	69.434	-	-	4.12	8.24	21	-	-	-	-	-	-
芦屋市	10020	51	54	205	-	-	-	-	51	-	306	256	-	51	-	-	-	-	-	-	-	-
明石市	10011	-	9.11	-	-	-	18.22	9.11	-	-	-	-	9.11	45.55	-	-	9.11	-	-	-	-	-
宝塚市・川西市	10016	-	6.31	-	-	-	6.31	-	-	-	-	-	6.31	7512	6.31	-	-	-	-	-	-	-
伊丹市・尼崎市	1006	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16.75	83.35	-	-	-	-	-	-	-
猪名川町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
淡路	1006	-	16.71	-	-	-	-	-	-	-	-	16.71	-	-	-	-	66.74	-	-	-	-	-
その他不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

問 12 . 震災の時、お住まいになっていたのは、 n=1028

1. 持地持家 53.4 549	5. 公団・公社賃貸住宅 3.4 35	8. 借家 5.2 53
2. 借地持家 5.1 52	6. 県営・市営・町営住宅 6.7 69	9. 民間賃貸アパート・マンション 9.0 93
3. 公団・公社分譲マンション 5.0 51	7. 社宅・寮 3.1 32	10. その他 () DK / NA 0.2 2
4. 民間分譲マンション 8.8 90		

付問 1 : そのお住まいの構造は、

1. 一戸建て	55.9	575
2. 棟割式住宅 (二戸ーや三戸ー・長屋など)	8.4	86
3. 木造集合住宅 あなたの住居は (1.6) 階	2.6	27
4. 鉄筋コンクリート・鉄骨集合住宅 あなたの住居は (3.75) 階	32.2	331
カッコの中は平均値	DK / NA	0.9 9

付問 2 :
震災当時、お住まい
だった住宅の築年
数 (当時) をお答え
下さい。
築 (21.03) 年
カッコの中は平均値

* 性×年齢

	TOTAL	持 ち 家 戸 建 て	持 ち 家 連 棟 式	持 ち 家 集 合 住 宅	賃 貸 ・ 戸 建 て	賃 貸 ・ 連 棟 式	賃 貸 ・ 木 造 集 合 (文 化 等)	賃 貸 ・ 集 合 住 宅	そ の 他	不 明
TOTAL	100 1028	52.6 541	5.8 60	13.7 141	2.7 28	2.3 24	1.8 19	18.5 190	2.2 23	0.2 2
男 性 小 計	100 453	52.1 236	6.6 30	14.1 64	2.9 13	2.9 13	2.2 10	16.8 76	2.2 10	0.2 1
20 代	100 33	51.5 17	9.1 3	15.2 5	6.1 2	3 1	3 1	6.1 2	6.1 2	-
30 代	100 35	37.1 13	-	8.6 3	-	2.9 1	2.9 1	45.7 16	2.9 1	-
40 代	100 52	44.2 23	1.9 1	15.4 8	5.8 3	-	5.8 3	21.2 11	5.8 3	-
50 代	100 76	51.3 39	9.2 7	17.1 13	-	1.3 1	-	19.7 15	-	1.3 1
60 代	100 141	53.9 76	7.1 10	15.6 22	4.3 6	3.5 5	1.4 2	12.8 18	1.4 2	-
70 歳 以 上	100 116	58.6 68	7.8 9	11.2 13	1.7 2	4.3 5	2.6 3	12.1 14	1.7 2	-
女 性 小 計	100 575	53 305	5.2 30	13.4 77	2.6 15	1.9 11	1.6 9	19.8 114	2.3 13	0.2 1
20 代	100 44	54.5 24	2.3 1	18.2 8	4.5 2	2.3 1	-	13.6 6	2.3 1	2.3 1
30 代	100 58	32.8 19	-	8.6 5	1.7 1	3.4 2	1.7 1	46.6 27	5.2 3	-
40 代	100 65	43.1 28	3.1 2	18.5 12	-	1.5 1	4.6 3	29.2 19	-	-
50 代	100 137	54 74	4.4 6	16.8 23	2.2 3	1.5 2	1.5 2	17.5 24	2.2 3	-
60 代	100 154	60.4 93	5.2 8	11 17	3.2 5	2.6 4	1.3 2	15.6 24	0.6 1	-
70 歳 以 上	100 117	57.3 67	11.1 13	10.3 12	3.4 4	0.9 1	0.9 1	12 14	4.3 5	-
* 現在同居家族人数										
1 人	100 83	41 34	8.4 7	9.6 8	3.6 3	3.6 3	6 5	21.7 18	6 5	-
2 人	100 368	51.4 189	6.3 23	14.7 54	3 11	2.4 9	1.1 4	19.3 71	1.9 7	-
3 人	100 260	53.5 139	5 13	16.9 44	2.3 6	1.5 4	1.5 4	16.9 44	1.9 5	0.4 1
4 人	100 166	42.8 71	5.4 9	16.3 27	3 5	3 5	2.4 4	23.5 39	3 5	0.6 1
5 人	100 89	65.2 58	5.6 5	5.6 5	3.4 3	1.1 1	2.2 2	15.7 14	1.1 1	-
6 人 以 上	100 54	83.3 45	3.7 2	5.6 3	-	1.9 1	-	5.6 3	-	-

問 13 . (震災当時、住宅を所有されていた方 < 問 12 で 1 ~ 4 を回答された方 > にお伺いします)

あなたは、その住宅を建て直しましたか。 n=742

1. はい	15.2	2. いいえ	82.6	DK / NA	2.2
	113		613		16

性 × 年齢

	TOTAL	再 建 し た	再 建 し て い な い	不 明
TOTAL	100 742	15.2 113	82.6 613	2.2 16
男 性 小 計	100 330	14.2 47	84.5 279	1.2 4
20 代	100 25	12 3	84 21	4 1
30 代	100 16	25 4	75 12	- -
40 代	100 32	12.5 4	87.5 28	- -
50 代	100 59	10.2 6	89.8 53	- -
60 代	100 108	15.7 17	82.4 89	1.9 2
70 歳 以 上	100 90	14.4 13	84.4 76	1.1 1
女 性 小 計	100 412	16 66	81.1 334	2.9 12
20 代	100 33	6.1 2	90.9 30	3 1
30 代	100 24	16.7 4	83.3 20	- -
40 代	100 42	9.5 4	88.1 37	2.4 1
50 代	100 103	13.6 14	84.5 87	1.9 2
60 代	100 118	12.7 15	83.9 99	3.4 4
70 歳 以 上	100 92	29.3 27	66.3 61	4.3 4

付問 1 : 住宅を修理・補修しましたか n=613

1. いいえ	30.0	184	DK / NA	2.6	16
2. はい	修理・補修は()年()月ごろ	67.4	413		

付問 2 : そのまま引越しましたか n=613

1. いいえ	25.0	153	DK / NA	68.4	419
2. はい	引越しは()年()月ごろ	6.7	41		

付問 3 : 住宅を解体しましたか n=113

1. いいえ	7.1	8	DK / NA	4.4	5
2. はい	解体は()年()月ごろ	88.5	100		

付問 4 : 建て直したのはもとの場所ですか n=113

1. いいえ	4.4	5	DK / NA	3.5	4
2. はい	建て直しは()年()月ごろ	92.0	104		

性×年齢

	TOTAL	再建・同地	再建・別地	補修	非補修・引越し	何もしない	不明
TOTAL	100 742	14 104	0.7 5	55.7 413	2.6 19	9.4 70	17.7 131
男性小計	100 330	12.4 41	0.6 2	55.5 183	2.7 9	10 33	18.8 62
20代	100 25	8 2	4 1	44 11	8 2	20 5	16 4
30代	100 16	25 4	- -	50 8	- -	12.5 2	12.5 2
40代	100 32	12.5 4	- -	75 24	- -	9.4 3	3.1 1
50代	100 59	10.2 6	- -	54.2 32	3.4 2	10.2 6	22 13
60代	100 108	14.8 16	0.9 1	51.9 56	4.6 5	9.3 10	18.5 20
70歳以上	100 90	10 9	- -	57.8 52	- -	7.8 7	24.4 22
女性小計	100 412	15.3 63	0.7 3	55.8 230	2.4 10	9 37	16.7 69
20代	100 33	6.1 2	- -	63.6 21	6.1 2	6.1 2	18.2 6
30代	100 24	16.7 4	- -	58.3 14	- -	16.7 4	8.3 2
40代	100 42	9.5 4	- -	59.5 25	4.8 2	11.9 5	14.3 6
50代	100 103	13.6 14	- -	52.4 54	3.9 4	11.7 12	18.4 19
60代	100 118	12.7 15	- -	55.9 66	0.8 1	8.5 10	22 26
70歳以上	100 92	26.1 24	3.3 3	54.3 50	1.1 1	4.3 4	10.9 10

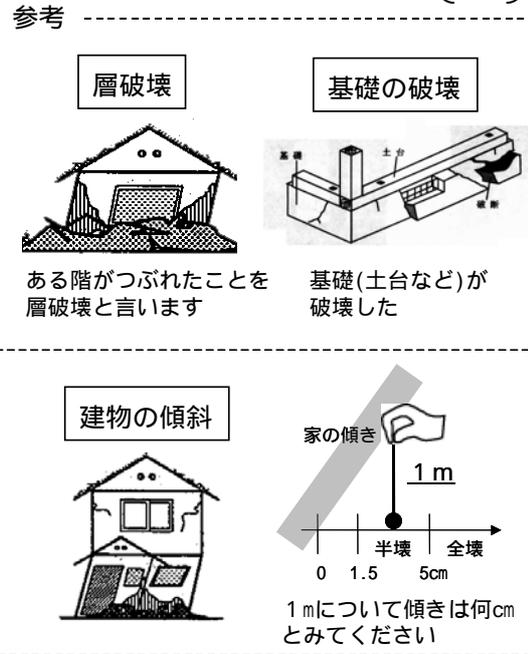
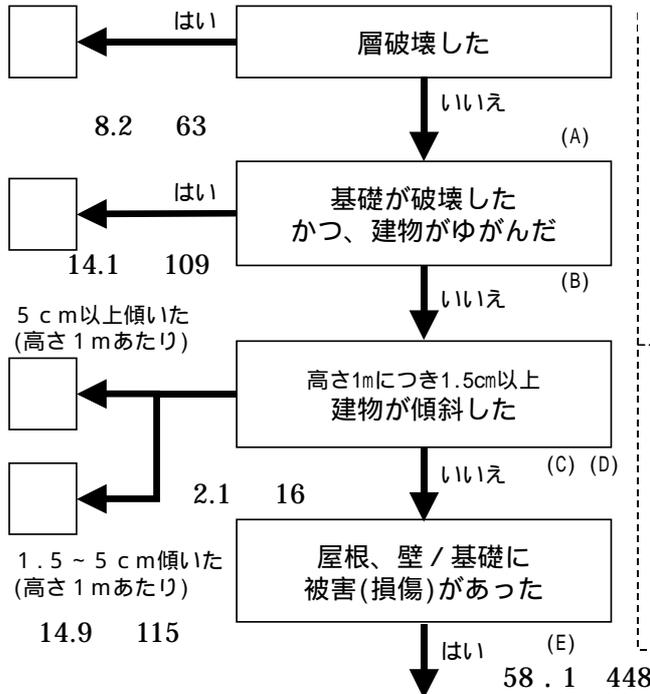
問 14 . 震災当時お住まいになっていた住宅(自己所有に限りません)に被害はありましたか。 n=1028

1 . 被害があった 75 . 0 771 2 . 被害はなかった (問 15 にお進みください) 22 . 3 229

DK / NA 2 . 7 28

(被害があった方へ) 住宅の被害のようすを、下の図を参考にしてくわしく教えてください。 最もあてはまるところの (四角) の中に をつけてください。 n=771

被害の程度があてはまるところの に をつけて下さい



屋根、壁 / 基礎の損傷割合について、あてはまるところ屋根、壁 / 基礎それぞれの中に をつけてください

屋根 損傷のようす(損傷割合)

- a 被害はなかった(0%) 22.1 99
- b 棟や軒先にずれやはがれが見られた(0-10%) 28.1 126
- c 棟や軒先のずれやはがれが著しく、瓦などの一部が落下した(10-20%) 7.8 35
- d 棟や軒先のずれやはがれが著しく、瓦などの一部が落下した(20-30%) 5.8 26
- e 棟や軒先のずれやはがれが著しく、瓦などの落下が各所で発生した(30-60%) 5.6 25
- f 屋根全体が変形し、瓦などの落下が著しかった(60%以上) 5.4 24

壁 / 基礎 損傷のようす(損傷割合)

- a 被害はなかった(0%) 2.9 13
- b ひびわれや剥離が発生した(0-10%) 49.6 222
- c ひびわれや剥離が発生した(10-20%) 18.1 81
- d ひびわれや剥離がかなり発生した(20-30%) 11.4 51
- e ひびわれや剥離が著しく発生した(30-60%) 9.2 41
- f ひびわれや剥離が全面的に発生した(60%以上) 6.3 28

損傷割合：被害を受けた部分(面積)が全体(面積)に対して何%くらいであったのかを言います
剥離：はがれること

* 性×年齢

	TOTAL	被害があった	被害はなかった	不明	TOTAL	層破壊した	基礎物が破壊したか	斜めた 高さ1m以上 傾5	高さ1m以上 傾5	高さ1m以上 傾5	高さ1m以上 傾5	被害(壁/基礎) あった	屋根・壁/基礎に	全焼・半焼	不明
TOTAL	100 1028	75 771	22.3 229	2.7 28	100 771	8.2 63	14.1 109	2.1 16	14.9 115	58.1 448	0.5 4	2.1 16			
男性小計	100 453	76.2 345	21.9 99	2 9	100 345	7.5 26	15.4 53	2 7	15.9 55	56.2 194	0.6 2	2.3 8			
20代	100 33	72.7 24	24.2 8	3 1	100 24	-	20.8 5	4.2 1	4.2 1	66.7 16	-	4.2 1			
30代	100 35	74.3 26	25.7 9	-	100 26	15.4 4	7.7 2	-	23.1 6	53.8 14	-	-			
40代	100 52	86.5 45	13.5 7	-	100 45	4.4 2	11.1 5	2.2 1	4.4 2	73.3 33	-	4.4 2			
50代	100 76	72.4 55	26.3 20	1.3 1	100 55	3.6 2	14.5 8	-	18.2 10	61.8 34	-	1.8 1			
60代	100 141	73.8 104	23.4 33	2.8 4	100 104	9.6 10	20.2 21	3.8 4	17.3 18	47.1 49	1 1	1 1			
70歳以上	100 116	78.4 91	19 22	2.6 3	100 91	8.8 8	13.2 12	1.1 1	19.8 18	52.7 48	1.1 1	3.3 3			
女性小計	100 575	74.1 426	22.6 130	3.3 19	100 426	8.7 37	13.1 56	2.1 9	14.1 60	59.6 254	0.5 2	1.9 8			
20代	100 44	70.5 31	29.5 13	-	100 31	3.2 1	9.7 3	-	9.7 3	77.4 24	-	-			
30代	100 58	72.4 42	24.1 14	3.4 2	100 42	4.8 2	14.3 6	2.4 1	16.7 7	57.1 24	-	4.8 2			
40代	100 65	70.8 46	24.6 16	4.6 3	100 46	8.7 4	13 6	2.2 1	8.7 4	65.2 30	-	2.2 1			
50代	100 137	70.8 97	25.5 35	3.6 5	100 97	5.2 5	12.4 12	1 1	18.6 18	57.7 56	1 1	4.1 4			
60代	100 154	75.3 116	23.4 36	1.3 2	100 116	9.5 11	13.8 16	2.6 3	12.1 11	61.2 71	-	0.9 1			
70歳以上	100 117	80.3 94	13.7 16	6 7	100 94	14.9 14	13.8 13	3.2 3	14.9 14	52.1 49	1.1 1	-			

問12 震災時の住居形態

持ち家戸建て	100 541	81 438	17.4 94	1.7 9	100 438	7.3 32	14.8 65	16 9	115 73	448 252	4 1	16 6
持ち家連棟式	100 60	86.7 52	13.3 8	-	100 52	9.6 5	21.2 11	1.9 1	19.2 10	44.2 23	1.9 1	1.9 1
持ち家集合住宅	100 141	66 93	31.9 45	2.1 3	100 93	1.1 1	12.9 12	1.1 1	8.6 8	73.1 68	-	3.2 3
賃貸・戸建て	100 28	89.3 25	10.7 3	-	100 25	16 4	20 5	8 2	16 4	40 10	-	-
賃貸・連棟式	100 24	75 18	16.7 4	8.3 2	100 18	38.9 7	11.1 1	5.6 1	5.6 1	38.9 7	-	-
賃貸・木造集合(文化等)	100 19	94.7 18	5.3 1	-	100 18	44.4 8	11.1 2	-	11.1 2	27.8 5	-	5.6 1
賃貸・集合住宅	100 190	57.4 109	35.8 68	6.8 13	100 109	2.8 3	9.2 10	1.8 2	13.8 15	67 73	1.8 2	3.7 4
その他	100 23	73.9 17	21.7 5	4.3 1	100 17	17.6 3	11.8 2	-	5.9 1	58.8 10	-	5.9 1

* 身体的被害

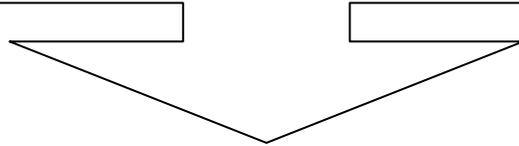
死亡家族あり	100 7	100 7	-	-	100 7	28.6 2	14.3 1	-	14.3 1	42.9 3	-	-
入院病傷者あり	100 20	95 19	-	5 1	100 19	21.1 4	15.8 3	5.3 1	15.8 3	31.6 6	5.3 1	5.3 1
軽病傷者あり	100 172	90.7 156	7 12	2.3 4	100 156	14.1 22	16.7 26	3.8 6	16.7 26	45.5 71	-	3.2 5
全員無事	100 757	70.1 531	27.2 206	2.6 20	100 531	5.8 31	12.6 67	0.9 5	14.9 79	63.3 336	0.6 3	1.9 10

* 住宅被害

全壊・全焼	100 156	97.4 152	1.3 2	1.3 2	100 152	33.6 51	24.3 37	7.2 11	10.5 11	20.4 31	2 3	2 3
半壊・半焼	100 204	95.6 195	2.5 5	2 4	100 195	5.6 11	22.6 44	2.1 4	24.1 47	44.1 86	0.5 1	1 2
一部損壊	100 465	84.3 392	12.7 59	3 14	100 392	0.3 1	6.1 24	0.3 1	12.8 50	78.1 306	-	2.6 10
被害なし	100 199	14.1 28	81.9 163	4 8	100 28	-	10.7 3	-	7.1 2	78.6 22	-	3.6 1

問 15 . 現在、お住まいになっているのは n=1028

1. 持地持家 56.4 580	5. 公団・公社賃貸住宅 3.4 35	9. 借家 2.7 28
2. 借地持家 4.3 44	6. 県営・市営・町営住宅 6.2 64	10. 民間賃貸アパート・マンション 5.8 60
3. 公団・公社分譲マンション 5.5 57	7. 災害復興公営住宅 0.2 2	11. その他 () DK / NA 0.4 4
4. 民間分譲マンション 12.7 131	8. 社宅・寮 1.1 11	1.2 12



付問 1 : そのお住まいの構造は、

1. 一戸建て	57.8	594
2. 棟割式住宅 (二戸一や三戸一・長屋など)	5.9	61
3. 木造集合住宅 あなたの住居は (1.73) 階	1.6	16
4. 鉄筋コンクリート・鉄骨集合住宅 あなたの住居は (4.27) 階	32.9	338
カッコの中は平均値	DK / NA	1.8 19

付問 2 :
現在、お住まいの住宅の築年数(現時点)をお答え下さい。
築 (21.36) 年
カッコの中は平均値

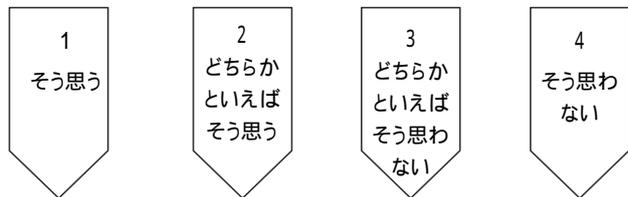
性 × 年齢

	TOTAL	持地持家	借地持家	公団・公社分譲マンション	民間分譲マンション	公団・公社賃貸住宅	住居・市営・町営	災害復興公営住宅	社宅・寮	借家	民間賃貸アパート・マンション	その他	不明	一戸建て	棟割式住宅	木造集合住宅	鉄筋コンクリート・鉄骨集合住宅	不明
TOTAL	100 1028	56.4 580	4.3 44	5.5 57	12.7 131	3.4 35	6.2 64	0.2 2	1.1 11	2.7 28	5.8 60	0.4 4	1.2 12	57.8 594	5.9 61	1.6 16	32.9 338	1.8 19
男性 小計	100 453	56.1 254	4.9 22	5.1 23	13.9 63	3.5 16	6.4 29	0.4 2	0.4 2	2.6 12	5.1 23	0.2 1	1.3 6	56.3 255	7.3 33	2.2 10	31.8 144	2.4 11
20 代	100 33	57.6 19	3 1	3 1	12.1 4	3 1	3 1	- -	3 1	3 1	12.1 4	- -	- -	54.5 18	9.1 2	6.1 2	30.3 10	- -
30 代	100 35	51.4 18	- 1	2.9 1	22.9 8	2.9 1	8.6 3	- -	- -	- -	11.4 4	- -	- -	51.4 18	2.9 2	5.7 14	40 14	- -
40 代	100 52	59.6 31	- 3	5.8 3	13.5 7	- 3	5.8 3	- -	1.9 1	1.9 1	7.7 4	- -	3.8 2	57.7 30	3.8 2	1.9 1	30.8 16	5.8 3
50 代	100 76	56.6 43	5.3 4	3.9 3	19.7 15	3.9 3	5.3 4	- -	- -	1.3 1	2.6 2	- -	1.3 1	51.3 39	10.5 8	- -	36.8 28	1.3 1
60 代	100 141	57.4 81	3.5 5	5 7	12.8 18	5.7 8	5.7 8	0.7 1	- -	2.8 4	3.5 5	0.7 1	2.1 3	58.2 82	5 7	2.1 3	30.5 43	4.3 6
70 歳以上	100 116	53.4 62	10.3 12	6.9 8	9.5 11	2.6 3	8.6 10	0.9 1	- -	4.3 5	3.4 4	- -	- -	58.6 68	10.3 12	1.7 2	28.4 33	0.9 1
女性 小計	100 575	56.7 326	3.8 22	5.9 34	11.8 68	3.3 19	6.1 35	- -	1.6 9	2.8 16	6.4 37	0.5 3	1 6	59 339	4.9 28	1 6	33.7 194	1.4 8
20 代	100 44	54.5 24	- 2	4.5 2	13.6 6	2.3 1	- -	- -	6.8 3	2.3 1	13.6 6	- -	2.3 1	54.5 24	9.1 4	- -	36.4 16	- -
30 代	100 58	41.4 24	1.7 1	5.2 3	20.7 12	1.7 1	6.9 4	- -	- -	1.7 1	17.2 10	1.7 1	1.7 1	46.6 27	- -	- -	51.7 30	1.7 1
40 代	100 65	46.2 30	4.6 3	12.3 8	10.8 7	1.5 1	10.8 7	- -	6.2 4	- -	7.7 5	- -	- -	49.2 32	1.5 1	1.5 1	47.7 31	- -
50 代	100 137	56.9 78	5.1 7	6.6 9	14.6 20	2.2 3	3.6 5	- -	1.5 2	4.4 6	3.6 5	- -	1.5 2	59.9 82	2.9 8	2.9 4	29.9 41	1.5 2
60 代	100 154	64.3 99	1.3 2	3.9 6	10.4 16	5.2 8	7.1 11	- -	- -	3.2 5	3.9 6	- -	0.6 1	64.3 99	3.9 6	0.6 1	29.2 45	1.9 3
70 歳以上	100 117	60.7 71	7.7 9	5.1 6	6 7	4.3 5	6.8 8	- -	- -	2.6 3	4.3 5	1.7 2	0.9 1	64.1 75	7.7 9	- -	26.5 31	1.7 2

現在のあなたのお住まいについて、お伺いします。

問 16 . 現在のあなたのお住まいについて、あなたの考えを教えてください。それぞれ、あてはまる番号に
を1つだけつけてください。 n=1028

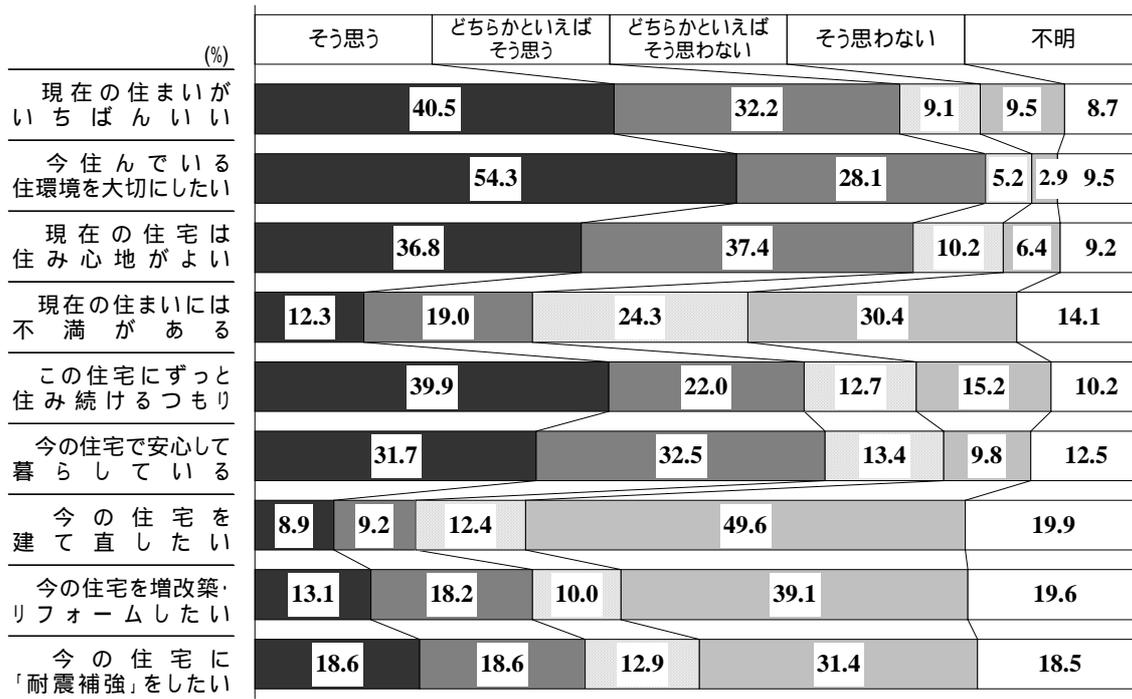
以下のことについて、どう思いますか



DK / NA

項目	1	2	3	4	DK	NA
今まで住んできたなかで、現在の住まいがいちばんいい	40.5	32.2	9.1	9.5	8.7	89
今、住んでいる住環境を大切にしたい	54.3	28.1	5.2	2.9	9.5	98
現在の住宅は住みごちがよい	36.8	37.4	10.2	6.4	9.2	95
現在の住まいには不満がある	12.3	19.0	24.3	30.4	14.1	145
この住宅にずっと住み続けるつもりだ	39.9	22.0	12.7	15.2	10.2	105
今の住宅で安心して暮らしている	31.7	32.5	13.4	9.8	12.5	129
今の住宅を建て直したい	8.9	9.2	12.4	49.6	19.9	205
今の住宅を増改築・リフォームしたい	13.1	18.2	10.0	39.1	19.6	201
今の住宅に「耐震補強」をしたい	18.6	18.6	12.9	31.4	18.5	190

* 耐震補強：柱の接合部を強くする、壁を増やす、筋交(すじかい)を入れるなどの方法で建物を地震に強くすること。



問 17. 震災直後から現在までのお住まいについて教えてください。以下の ~ の時期、あなたは仮住まいをしていましたか。仮住まいしていた方は、どちらに一番長く仮住まいしていらっしゃいましたか。それぞれの時期について、最もあてはまるもの1つに をつけてください。n=1028

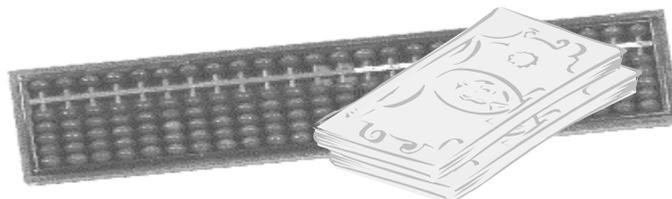
	(A) 仮住まいした							(B) 仮住まいしなかった	
	1 親 ・ 子 ・ ど も ・ 親 せ ぎ の 家	2 友 人 ・ 近 所 の 家	3 会 社 が 用 意 し た 施 設	4 自 分 で 借 り た ア パ ー ト 等	5 テ ン ト 車 の 中 ・ 避 難 所	6 仮 設 住 宅	7 公 共 の 場 所 ・ そ の 他	D K	/ N A
震災当日 (1/17)	6.8 70	0.9 9	0.1 1	0.4 4	6.0 62	0.1 1	6.6 68	67.6 695	11.5 118
震災後・2~4日 (1/18~1/20)	8.8 90	1.4 14	0.6 6	0.9 9	4.3 44	-	4.8 49	66.3 682	13.0 134
震災後・2週間 (1/21~1/31)	11.8 121	1.5 15	1.4 14	1.6 16	2.4 25	-	2.4 25	66.7 686	12.3 126
震災後・1ヶ月 (2/1~2/28)	8.3 85	1.0 10	2.4 25	2.5 26	1.4 14	0.4 4	2.1 22	68.5 704	13.4 138
震災後・2ヶ月 (3/1~3/31)	6.9 71	0.4 4	1.8 19	3.1 32	0.6 6	0.9 9	1.4 14	71.5 735	13.4 138
震災後・3~6ヶ月 (4/1~7/31)	3.3 34	0.4 4	1.5 15	3.6 37	0.1 1	2.0 21	0.8 8	73.9 760	14.4 148
震災後・7~12ヶ月 (8/1~12/31)	2.0 21	0.3 3	1.0 10	4.4 45	-	2.4 25	0.4 4	74.9 770	14.6 150
震災後・2年目 (平成8(1996)年)	0.7 7	0.1 1	0.6 6	3.4 35	-	1.8 18	0.4 4	76.8 790	16.2 167
震災後・3~6年目 (平成9(1997)年 ~平成12(2000)年)	0.6 6	0.1 1	0.3 3	1.9 20	-	0.4 4	0.8 8	78.6 808	17.3 173
震災後・7~8年目 (平成13(2001)年 ~平成14(2002)年)	0.9 9	-	-	0.9 9	0.1 1	-	1.0 10	79.2 814	18.0 185
震災後・9~10年目 (平成15(2003)年 ~平成16(2004)年)	0.6 6	-	-	0.7 7	0.1 1	-	0.8 8	79.7 819	18.2 187

震災後のくらしの変化やお仕事について、お伺いします。

問 18. 家計のやりくりには、震災後、どのような変化がありましたか。現在の家計簿を思いうかべて、各項目について、それぞれあてはまるところにをつけてください。 n=1028

震災前と比べて、現在のお宅の家計簿では...

1) 収入	(9.4 97 ・ 30.3 311 ・ 54.9 564)
2) 支出	(34.0 350 ・ 32.0 329 ・ 17.5 180)
3) 食費	(20.1 20 ・ 48.2 495 ・ 21.4 227)
4) 外食費	(13.6 140 ・ 40.2 413 ・ 35.1 361)
5) 住居・家具費	(26.8 275 ・ 43.2 444 ・ 19.6 201)
6) 光熱費	(30.2 310 ・ 47.4 487 ・ 13.4 138)
7) 日用雑貨	(16.4 169 ・ 54.3 558 ・ 18.5 189)
8) 衣服費	(11.8 121 ・ 44.3 455 ・ 33.9 349)
9) 文化・教育費	(18.4 189 ・ 43.7 449 ・ 27.3 281)
10) 交際費(冠婚葬祭費を含む)	(22.2 228 ・ 49.2 506 ・ 19.4 199)
11) レジャー費	(8.7 89 ・ 39.9 410 ・ 41.1 423)
12) 交通費	(19.2 197 ・ 50.2 516 ・ 20.7 213)
13) 医療費	(42.8 440 ・ 42.7 43 ・ 6.3 65)
14) 保険料	(33.9 349 ・ 44.0 452 ・ 12.5 63)
15) 自動車費(ある方のみ)	(20.5 211 ・ 39.3 404 ・ 6.1 63)
16) 預貯金	(6.9 71 ・ 22.4 230 ・ 57.0 586)



付問．現在のあなたの世帯の1年間の収入（年収）はどのくらいですか。n=1028

1. 300万円未満	28.3	291
2. 300 - 500万円未満	24.8	255
3. 500 - 700万円未満	13.8	142
4. 700 - 1000万円未満	12.5	129
5. 1000 - 1500万円未満	6.2	64
6. 1500万円以上	2.0	21
7. 答えたくない・わからない	8.4	86
DK / NA	3.9	40

* 性×年齢

	TOTAL	300万円未満	500万円未満	700万円未満	1000万円未満	1500万円未満	1500万円以上	01計*00万円以上	か答 えたく ない・ わか らな い	不明
TOTAL	100 1028	28.3 291	24.8 255	13.8 142	12.5 129	6.2 64	2 21	8.3 86	8.4 86	3.9 40
男性小計	100 453	27.2 123	27.6 125	15.7 71	11.5 52	7.5 34	2.2 10	9.7 44	5.3 24	3.1 14
20代	100 33	24.2 8	21.2 7	9.1 3	9.1 3	24.2 8	-	-	24.2 8	9.1 3
30代	100 35	17.1 6	28.6 10	31.4 11	17.1 6	-	-	-	-	5.7 2
40代	100 52	5.8 3	25 13	25 13	26.9 14	5.8 3	1.9 1	7.7 4	5.8 3	3.8 2
50代	100 76	10.5 8	18.4 14	17.1 13	19.7 15	15.8 12	6.6 5	22.4 17	7.9 6	3.9 3
60代	100 141	34.8 49	29.1 41	12.8 16	7.8 11	6.4 9	2.8 4	9.2 13	5 7	1.4 2
70歳以上	100 116	42.2 49	34.5 40	11.2 3	2.6 2	1.7 -	-	2 -	1.7 2.6	5.2 6
女性小計	100 575	29.2 168	22.6 130	12.3 71	13.4 77	5.2 30	1.9 11	7.1 41	10.8 82	4.5 26
20代	100 44	15.9 7	20.5 9	4.5 2	9.1 4	15.9 7	-	15.9 7	27.3 12	6.8 3
30代	100 58	12.1 7	32.8 19	25.9 15	13.8 8	3.4 2	-	3.4 7	12.1 7	-
40代	100 65	13.8 9	16.9 11	15.4 10	35.4 23	9.2 6	1.5 1	10.8 7	6.2 4	1.5 1
50代	100 137	16.1 22	20.4 28	13.9 19	22.6 31	8 11	5.8 8	13.9 19	10.2 14	2.9 4
60代	100 154	44.8 69	25.3 39	7.8 12	5.2 8	1.9 3	1.3 2	3.2 5	9.7 15	3.9 6
70歳以上	100 117	46.2 54	20.5 24	11.1 13	2.6 3	0.9 1	-	0.9 1	8.5 10	10.3 12

問 19．現在の、あなたのご職業を教えてください（は1つ）。n=1028

1. 研究・技術職	1.9	20	12. 運輸・通信の現場従業者	1.3	13
2. 教員	1.2	12	13. 製造・建設業の現場従業者	3.0	31
3. 保健医療従事者	1.7	17	14. 自営・商工経営者	6.9	71
4. 弁護士・税理士などの専門職	0.5	5	15. 農林漁業	0.5	5
5. 自由業	1.9	20	16. 年金・恩給生活者	12.1	124
6. 管理職の公務員（課長以上）	0.3	3	17. 専業主婦	17.0	175
7. 一般の公務員	2.3	24	18. パート主婦	9.9	102
8. 会社・団体等の役員	3.1	32	19. 学生	2.1	22
9. 会社・団体等の管理職（課長以上）	4.2	43	20. 無職・その他	21.0	216
10. 一般事務従業者	3.7	38			
11. 店員・外交員・その他のサービス業の従業者	4.8	49			

性×年齢

	TOTAL	研究・技術職	教員	保健医療従事者	弁護士・税理士などの専門職	自由業	管理職の公務員	一般の公務員	会社・団体等の役員	会社・団体等の管理職	一般事務従業者	サービス業従業者	運輸・通信の現場従業者	製造・建設業の現場従業者	自営・商工経営者	農林漁業	年金・恩給生活者	専業主婦	パート主婦	学生	無職・その他	不明
TOTAL	100 1028	1.9 20	1.2 12	1.7 17	0.5 5	1.9 20	0.3 3	2.3 24	3.1 32	4.2 43	3.7 38	4.8 49	1.3 13	3 31	6.9 71	0.5 5	12.1 124	17 175	9.9 102	2.1 22	21 216	0.6 6
男性小計	100 453	3.8 17	0.7 3	0.9 4	1.1 5	2 9	0.7 3	4.4 20	5.5 25	9.1 41	2.2 10	5.7 26	2.6 12	6 27	10.6 48	0.9 4	16.8 76	-	-	2.2 10	24.3 110	0.7 3
20代	100 33	3 1	-	3 1	-	-	-	6.1 2	-	3 1	24.2 8	-	18.2 6	3 1	3 1	-	-	-	-	30.3 10	6.1 2	-
30代	100 35	11.4 4	-	-	-	5.7 2	-	11.4 4	2.9 1	5.7 2	2.9 1	11.4 4	2.9 1	11.4 4	8.6 3	-	-	-	-	-	25.7 9	-
40代	100 52	3.8 2	1.9 1	-	1.9 1	-	-	13.5 7	7.7 4	25 13	1.9 4	7.7 4	9.6 5	11.5 6	9.6 5	-	-	-	-	-	3.8 2	-
50代	100 76	9.2 7	1.3 1	-	1.3 1	1.3 2	2.6 3	3.9 5	6.6 3	23.7 18	5.3 4	5.3 4	5.3 4	7.9 4	14.5 11	1.3 1	-	-	-	-	9.2 7	1.3 1
60代	100 141	1.4 2	-	2.1 3	-	2.1 3	0.7 1	4.3 6	7.8 11	3.5 4	1.4 2	4.3 6	1.4 2	2.8 4	11.3 16	1.4 2	26.2 37	-	-	-	29.1 41	-
70歳以上	100 116	0.9 1	0.9 1	-	2.6 3	1.7 2	-	-	1.7 2	2.6 3	0.9 1	-	0.9 1	10.3 12	-	-	33.6 39	-	-	-	42.2 49	1.7 2
女性小計	100 575	0.5 3	1.6 9	2.3 13	-	1.9 11	-	0.7 4	1.2 7	4.9 28	3.7 23	4.9 23	0.2 1	0.7 4	0.2 23	0.2 1	8.3 48	30.4 175	17.7 102	2.1 12	18.4 106	0.5 3
20代	100 44	-	2.3 1	9.1 4	-	2.3 1	-	-	-	13.6 6	15.9 7	-	2.3 1	-	-	-	-	9.1 4	-	27.3 12	15.9 7	2.3 1
30代	100 58	-	-	6.9 4	-	5.2 3	-	3.4 2	1.7 1	-	15.5 9	6.9 3	-	-	1.7 1	-	-	24.1 14	19 11	-	13.8 8	1.7 1
40代	100 65	1.5 4	6.2 4	1.5 1	-	-	-	1.5 1	-	1.5 1	6.2 4	1.5 1	-	-	1.5 1	-	-	36.9 24	36.9 24	-	4.6 3	-
50代	100 137	1.5 2	2.2 3	0.7 1	-	0.7 1	-	0.7 1	2.9 4	0.7 1	4.4 6	5.8 8	0.7 1	0.7 1	8 11	0.7 1	0.7 1	31.4 43	30.7 42	-	7.3 10	-
60代	100 154	-	0.6 1	1.9 3	-	1.9 3	-	0.6 1	-	0.6 1	1.9 3	-	1.3 2	3.2 5	-	-	12.3 19	42.9 66	14.3 22	-	18.2 28	-
70歳以上	100 117	-	-	-	-	2.6 3	-	-	0.9 1	-	1.7 2	-	-	4.3 5	-	-	23.9 28	20.5 24	2.6 3	-	42.7 50	0.9 1

付問：現在のお勤め先の場所は
n=485

1. 東播磨地域 2. 神戸地域 3. 阪神地域 4. 淡路地域
4.3 21 50.5 245 20.2 98 1.6 8
5. 上記以外の兵庫県 6. 兵庫県以外の都道府県 DK / NA
3.1 15 12.2 59 8.0 39

性×年齢

	T O T A L	東 播 磨 地 域	神 戸 地 域	阪 神 地 域	淡 路 地 域	左 記 以 外 の 兵 庫 県	府 兵 庫 県 以 外 の 都 道	不 明
TOTAL	100 485	4.3 21	50.5 245	20.2 98	1.6 8	3.1 15	12.2 59	8 39
男 性 小 計	100 254	5.9 15	40.9 104	23.6 60	1.2 3	2.8 7	16.9 43	8.7 22
20 代	100 21	9.5 2	42.9 9	14.3 3	- -	9.5 2	19 4	4.8 1
30 代	100 26	3.8 1	42.3 11	15.4 4	3.8 1	- -	26.9 7	7.7 2
40 代	100 50	10 5	42 21	26 13	2 1	- -	14 7	6 3
50 代	100 68	5.9 4	42.6 29	13.2 9	1.5 1	4.4 3	22.1 15	10.3 7
60 代	100 63	4.8 3	42.9 27	33.3 21	- -	1.6 1	11.1 7	6.3 4
70 歳 以 上	100 26	- -	26.9 7	38.5 10	- -	3.8 1	11.5 3	19.2 5
女 性 小 計	100 231	2.6 6	61 141	16.5 38	2.2 5	3.5 8	6.9 16	7.4 17
20 代	100 20	5 1	45 9	10 2	5 1	5 1	25 5	5 1
30 代	100 35	2.9 1	62.9 22	14.3 5	5.7 2	- -	11.4 4	2.9 1
40 代	100 38	- -	73.7 28	15.8 6	- -	2.6 1	7.9 3	- -
50 代	100 83	3.6 3	66.3 55	16.9 14	- -	4.8 4	2.4 2	6 5
60 代	100 41	2.4 1	51.2 21	24.4 10	4.9 2	- -	4.9 2	12.2 5
70 歳 以 上	100 14	- -	42.9 6	7.1 1	- -	14.3 2	- -	35.7 5

問 20 . 震災時の、あなたのご職業を教えてください (は 1 つ) n=1028

1 . 研究・技術職	2 . 4	25	12 . 運輸・通信の現場従業者	2 . 1	22
2 . 教員	1 . 5	15	13 . 製造・建設業の現場従業者	5 . 2	53
3 . 保健医療従事者	1 . 9	20	14 . 自営・商工経営者	7 . 5	77
4 . 弁護士・税理士などの専門職	0 . 5	5	15 . 農林漁業	0 . 3	3
5 . 自由業	1 . 3	13	16 . 年金・恩給生活者	4 . 0	41
6 . 管理職の公務員 (課長以上)	0 . 3	3	17 . 専業主婦	16 . 0	164
7 . 一般の公務員	3 . 7	38	18 . パート主婦	9 . 6	99
8 . 会社・団体等の役員	3 . 6	37	19 . 学生	7 . 9	81
9 . 会社・団体等の管理職 (課長以上)	7 . 1	73	20 . 無職・その他	12 . 0	123
10 . 一般事務従業者	6 . 2	64	DK / NA	1 . 3	13
11 . 店員・外交員・その他のサービス業の従業者	5 . 7	59			

性×年齢

	TOTAL	研究・技術職	教員	保健医療従事者	の弁護士・税理士などの専門職	自由業	管理職の公務員	一般の公務員	会社・団体等の役員	会社・団体等の役員	一般事務従業者	サービス業従業者	運輸・通信の現場従業者	製造・建設業の現場従業者	自営・商工経営者	農林漁業	年金・恩給生活者	専業主婦	パート主婦	学生	無職・その他	不明
TOTAL	100 1028	2.4 25	1.5 15	1.9 20	0.5 5	1.3 13	0.3 3	3.7 38	3.6 37	7.1 73	6.2 64	5.7 59	2.1 22	5.2 53	7.5 77	0.3 3	4 41	16 164	9.6 99	7.9 81	12 123	1.3 13
男性小計	100 453	4.9 22	1.5 7	0.9 4	0.9 4	1.8 8	0.7 3	6.8 31	5.7 26	15.7 71	6.2 28	7.3 33	4.6 21	10.4 47	9.9 45	0.4 2	5.7 26	-	-	6.6 30	9.1 41	0.9 4
20代	100 33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3 3	9.1 3	-	-	-	-	-	-	-	-	81.8 27	6.1 2
30代	100 35	8.6 3	-	-	-	2.9 1	-	11.4 4	2.9 1	8.6 3	2.9 1	8.6 3	8.6 3	28.6 10	2.9 1	-	-	-	-	-	8.6 3	5.7 2
40代	100 52	9.6 5	1.9 1	1.9 1	1.9 1	1.9 1	-	13.5 5	5.8 3	15.4 7	5.8 3	15.4 7	7.7 4	13.5 7	9.6 5	-	-	-	-	-	3.8 2	-
50代	100 76	7.9 6	3.9 3	-	1.3 1	-	-	6.6 5	5.3 4	32.9 25	5.3 4	5.3 4	2.6 2	13.2 10	14.5 11	-	-	-	-	-	-	1.3 1
60代	100 141	3.5 5	0.7 3	2.1 3	-	2.8 3	2.1 3	8.5 12	7.1 27	19.1 91	6.4 27	11.3 16	8.5 12	7.8 11	11.3 16	1.4 2	0.7 3	-	-	-	5.7 8	0.7 1
70歳以上	100 116	2.6 3	1.7 2	-	1.7 2	4 2	-	2.6 3	6.9 8	11.2 13	4.3 3	2.6 3	-	7.8 9	10.3 12	-	21.6 25	-	-	-	23.3 27	1.7 2
女性小計	100 575	0.5 3	1.4 8	2.8 16	0.2 1	0.9 5	-	1.2 7	1.9 11	0.3 2	6.3 36	4.5 26	0.2 1	5.6 32	2.6 15	2.6 15	28.5 164	17.2 99	8.9 51	14.3 82	1.6 9	
20代	100 44	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	97.7 43	2.3 1	
30代	100 58	1.7 1	-	6.9 4	-	1.7 1	-	3.4 2	5.2 3	-	20.7 12	8.6 5	-	-	-	-	-	12.1 7	13.8 8	12.1 8	-	
40代	100 65	1.5 1	3.1 2	3.1 2	-	-	-	-	1.5 1	7.7 5	3.1 2	3.1 2	1.5 1	1.5 1	-	-	-	50.8 33	15.4 10	-	10.8 7	
50代	100 137	0.7 1	2.2 3	2.2 3	0.7 1	-	-	1.5 2	2.2 3	-	6.6 9	5.1 7	0.7 1	10.9 15	0.7 1	-	-	33.6 46	23.4 32	-	7.3 10	
60代	100 154	-	1.3 2	3.2 5	-	1.3 2	-	1.3 2	1.9 3	0.6 1	6.2 3	6.5 10	-	2.6 4	5.8 9	-	1.9 3	32.5 50	26 40	-	10.4 16	
70歳以上	100 117	-	0.9 1	1.7 2	-	1.7 2	-	0.9 1	1.7 2	-	4.3 2	1.7 2	-	6 7	-	10.3 12	23.9 28	7.7 9	-	35 41	4.3 5	
1人	100 83	4.8 4	2.4 2	2.4 2	1.2 1	2.4 2	-	4.8 2	1.2 1	2.4 2	4.8 12	1.2 10	1.2 10	1.2 1	4.8 4	-	6 5	8.4 7	8.4 7	4.8 4	24.1 20	
2人	100 368	1.9 7	1.4 5	3 11	0.3 1	1.4 5	-	5.2 19	3.8 14	8.4 31	5.2 21	5.7 9	2.4 25	6.8 33	9 24	0.5 2	6.5 24	14.9 55	9.2 34	1.6 6	12.3 44	
3人	100 260	2.3 6	1.2 3	1.9 5	0.8 2	1.5 4	0.8 2	1.5 4	4.2 11	7.3 19	6.2 16	8.1 21	1.9 5	2.7 7	7.3 19	-	2.7 7	18.1 47	8.1 24	12.3 21	1.9 5	
4人	100 166	2.4 4	1.8 3	-	-	0.6 1	0.6 1	2.4 7	4.2 7	9.6 12	1.2 16	2.4 2	7.8 13	4.2 7	-	0.6 1	16.3 15	10.8 11	17.5 12	8.4 5	1.8 3	
5人	100 89	4.5 4	1.1 1	2.2 1	1.1 1	-	-	6.7 6	1.1 5	5.6 6	3.4 3	3.4 3	1.1 1	5.6 5	7.9 7	1.1 1	3.4 15	16.9 15	12.4 11	13.5 12	5.6 5	
6人以上	100 54	-	1.9 1	-	-	1.9 1	-	1.9 3	5.6 4	7.4 3	6.3 3	1.9 1	1.9 1	3.7 2	13 7	-	1.9 1	20.4 11	3.7 2	16.7 9	13 7	
死亡家族あり	100 7	-	-	14.3 1	-	-	-	14.3 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	42.9 3	-	14.3 1	-	
入院病傷者あり	100 20	5 1	-	5 1	-	5 1	-	5 1	5 1	5 1	-	-	-	10 2	5 1	-	-	15 3	20 3	10 2	15 3	
軽病傷者あり	100 172	0.6 1	4.1 7	1.2 2	0.6 1	1.2 2	-	2.9 5	2.9 5	8.1 14	5.2 9	9.3 16	2.9 5	4.1 7	10.5 18	-	4.1 7	14 24	11 19	5.8 10	0.6 1	
全員無事	100 757	2.9 22	1.1 8	1.5 15	0.5 4	1.2 9	0.3 2	3.8 29	3.8 29	7.4 56	5.3 40	1.7 13	5.7 43	6.6 50	0.4 3	4 30	16.6 126	9.2 70	8.2 62	11.1 84	1.2 9	
全壊・全焼	100 156	1.3 2	0.6 1	-	-	1.3 2	0.6 1	3.2 5	2.6 4	5.1 8	7.7 12	6.4 10	4.1 7	4.5 7	14.1 22	-	4.5 7	12.8 20	8.3 13	4.5 7	16 25	
半壊・半焼	100 204	2 4	2.9 6	1.5 3	-	1.5 3	-	4.4 9	3.9 8	7.4 15	3.9 8	6.4 13	2 8	8.8 19	8.8 19	0.5 1	2.9 6	12.3 25	9.8 20	9.3 19	11.8 24	
一部損壊	100 465	3.4 16	1.3 6	2.8 13	0.6 3	1.5 7	0.2 1	3.7 17	3.4 16	7.5 35	6.9 32	4.7 22	2.4 11	4.3 20	5.8 27	0.4 2	3.4 16	17.6 82	8.2 38	9 42	11.6 54	
被害なし	100 199	1.5 3	1 2	0.5 1	1 2	0.5 1	0.5 1	3.5 7	4.5 9	7.5 15	6.2 12	7 14	2 4	5 8	5 10	-	5.5 11	18.6 37	14.1 28	6.5 13	9.5 19	

付問：震災時のお勤め先の場所は
n=606

1. 東播磨地域 2. 神戸地域 3. 阪神地域 4. 淡路地域
4.0 24 46.7 283 24.1 146 2.1 13
5. 上記以外の兵庫県 6. 兵庫県以外の都道府県 DK / NA
3.8 23 14.5 88 4.8 29

性×年齢

	TOTAL	東播磨地域	神戸地域	阪神地域	淡路地域	左記以外の兵庫県	兵庫県以外の都道府県	不明
TOTAL	100 606	4 24	46.7 283	24.1 146	2.1 13	3.8 23	14.5 88	4.8 29
男性小計	100 352	2.8 10	44 155	25 88	1.7 6	3.4 12	19.3 68	3.7 13
20代	100 4	- -	50 2	25 1	- -	- -	25 1	- -
30代	100 30	3.3 1	43.3 13	13.3 4	3.3 1	3.3 1	30 9	3.3 1
40代	100 50	4 2	48 24	22 11	4 2	2 1	18 9	2 1
50代	100 75	4 3	42.7 32	17.3 13	1.3 1	5.3 4	26.7 20	2.7 2
60代	100 131	1.5 2	43.5 57	31.3 41	0.8 1	3.8 5	16 21	3.1 4
70歳以上	100 62	3.2 2	43.5 27	29 18	1.6 1	1.6 1	12.9 8	8.1 5
女性小計	100 254	5.5 14	50.4 128	22.8 58	2.8 7	4.3 11	7.9 20	6.3 16
20代	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -
30代	100 36	2.8 1	33.3 12	30.6 11	5.6 2	- -	19.4 7	8.3 3
40代	100 25	8 2	36 9	28 7	- -	8 2	20 5	- -
50代	100 79	6.3 5	63.3 50	22.8 18	- -	2.5 2	1.3 1	3.8 3
60代	100 83	4.8 4	50.6 42	20.5 17	6 5	7.2 6	4.8 4	6 5
70歳以上	100 31	6.5 2	48.4 15	16.1 5	- -	3.2 1	9.7 3	16.1 5

問 21. あなたの震災時の職業と現在の職業について、 n=1028

1. 同じ仕事を 続けている	27.1	279	2. 転職・転業した	8.9	92	3. 退職・廃業した	19.1	196
4. その他(仕事について いなかったなど)	41.0	421				DK/NA	3.9	40

(2・3の方は付問へ) n=288

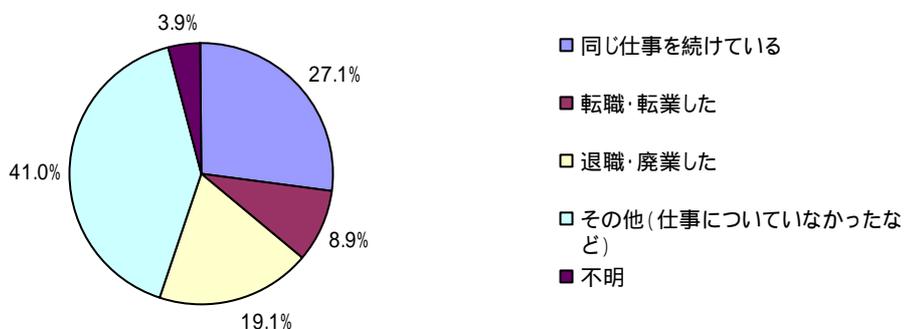
付問1：震災は、お仕事をえたり、やめたりした原因になっていますか。

1. 震災が原因である	26.0	75	2. 震災は関係ない	71.5	206
			DK/NA	2.7	7

付問2：いつごろ、お仕事をえ(やめ)ましたか(注：震災は平成7年1月)

(平成)年()月ごろ

カッコの中は平均値



性×年齢

	TOTAL	同じ仕事を 続けている	転職・ 転業した	退職・ 廃業した	その他(仕事について いなかったなど)	不明
TOTAL	100 1028	27.1 279	8.9 92	19.1 196	41.0 421	3.9 40
男性小計	100 453	40.2 182	10.2 46	22.5 102	22.7 103	4.4 20
20代	100 33	- -	9.1 3	3 1	87.9 29	- -
30代	100 35	42.9 15	22.9 8	11.4 4	14.3 5	8.6 3
40代	100 52	69.2 36	19.2 10	3.8 2	3.8 2	3.8 2
50代	100 76	75 57	17.1 13	6.6 5	1.3 1	- -
60代	100 141	36.2 51	7.1 10	40.4 57	9.9 14	6.4 9
70歳以上	100 116	19.8 23	1.7 2	28.4 33	44.8 52	5.2 6
女性小計	100 575	16.9 97	8 46	16.3 94	55.3 318	3.5 20
20代	100 44	- -	- -	- -	100 44	- -
30代	100 58	13.8 8	17.2 10	31 18	37.9 22	- -
40代	100 65	13.8 9	16.9 11	7.7 5	61.5 40	- -
50代	100 137	33.6 46	10.9 15	8.8 12	43.1 59	3.6 5
60代	100 154	15.6 24	5.8 9	29.2 45	45.5 70	3.9 6
70歳以上	100 117	8.5 10	0.9 1	12 14	70.9 83	7.7 9

問 22 . あなたが震災時にお勤めだった仕事場は、震災によって、なんらかの影響を受けましたか。 n=1208

1 . 影響を受け
た
39 . 7
408

2 . 影響を受けなかった 3 . 当時、仕事についていなかった
17 . 2 177 40 . 8 419

問 23 へ

DK / NA 2 . 3 24

性 × 年齢

	TOTAL	影響を受けた	影響を受けなかった	い な な か つ た 事 事 に つ い て	不 明
TOTAL	100 1028	39.7 408	17.2 177	40.8 419	2.3 24
男 性 小 計	100 453	51.9 235	23.8 108	22.1 100	2.2 10
20 代	100 33	9.1 3	3 1	87.9 29	-
30 代	100 35	45.7 16	37.1 13	17.1 6	-
40 代	100 52	76.9 40	19.2 10	3.8 2	-
50 代	100 76	68.4 52	28.9 22	-	2.6 2
60 代	100 141	61.7 87	28.4 40	6.4 9	3.5 5
70 歳 以 上	100 116	31.9 37	19 22	46.6 54	2.6 3
女 性 小 計	100 575	30.1 173	12 69	55.5 319	2.4 14
20 代	100 44	-	-	100 44	-
30 代	100 58	43.1 25	19 11	37.9 22	-
40 代	100 65	27.7 18	10.8 7	61.5 40	-
50 代	100 137	37.2 51	19 26	41.6 57	2.2 3
60 代	100 154	37.7 58	13 20	46.1 71	3.2 5
70 歳 以 上	100 117	17.9 21	4.3 5	72.6 85	5.1 6

付問 : (「 1 . 影響を受けた」とお答えの方に) 建物 (店舗) ・ 備品 ・ 商品等をすべて含んだ被害総額は、
いくらぐらいだと思いますか。また、年商 (1 年間の売り上げ) の何%にあたりますか。

n=408

被害総額の推定は...

1 . 3 億円以上 12 . 7 52	5 . 1000 万 ~ 3000 万円 9 . 3 38	9 . 被害はなかった 3 . 7 15
2 . 1 億 ~ 3 億円 5 . 4 22	6 . 500 万 ~ 1000 万円 7 . 4 30	10 . 年商とは関係のない仕事場 18 . 4 75
3 . 5000 万 ~ 1 億円 3 . 4 14	7 . 100 万 ~ 500 万円 10 . 0 41	DK / NA 15 . 2 62
4 . 3000 万 ~ 5000 万円 5 . 4 22	8 . 100 万円未満 9 . 1 37	

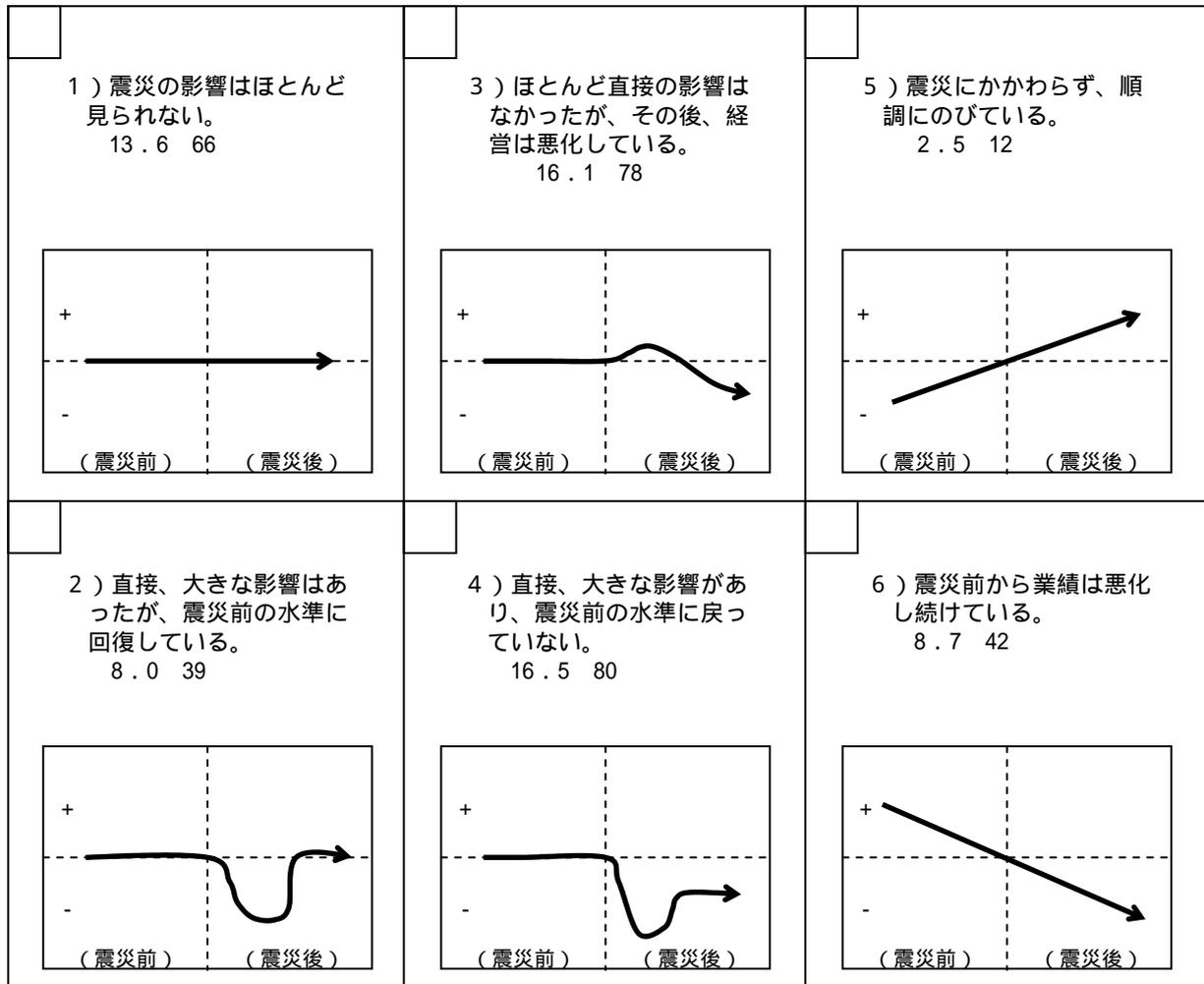
被害総額は年商の...

1 . 3 倍以上 7 . 1 29	5 . 50% ~ 70% 5 . 4 22	9 . 被害はなかった 3 . 2 13
2 . 2 倍 ~ 3 倍 3 . 2 13	6 . 30% ~ 50% 6 . 6 27	10 . 年商とは関係のない仕事場
3 . 同じ程度 ~ 2 倍 3 . 2 13	7 . 10% ~ 30% 14 . 0 57	21 . 1 86
4 . 70% ~ 99% 0 . 7 3	8 . 10%未満 16 . 9 69	DK / NA 18 . 6 76

性×年齢

	TOTAL	3億 円以上	1億 3億 円	0500 万 1億 円	03 万 5000 万 0000	0130 万 3000 万 0000	0510 万 1000 万 0000	0150 万 5000 万 0000	1000 万円未 満	被 害 は な か つ た	い 年 商 と は 関 係 の な い 仕 事 場	不 明
TOTAL	100 408	12.7 52	5.4 22	3.4 14	5.4 22	9.3 38	7.4 30	10 41	9.1 37	3.7 15	18.4 75	15.2 62
男 性 小 計	100 235	16.2 38	7.7 18	5.1 12	5.1 12	10.2 24	7.2 17	8.9 21	9.8 23	4.3 10	16.2 38	9.4 22
20 代	100 3	-	-	-	-	33.3 1	33.3 1	-	-	-	-	33.3 1
30 代	100 16	31.3 5	-	6.3 1	6.3 1	12.5 2	-	12.5 2	25 4	-	-	6.3 1
40 代	100 40	15 6	12.5 5	2.5 1	2.5 1	10 4	12.5 5	2.5 1	20 8	2.5 1	15 6	5 2
50 代	100 52	17.3 9	9.6 5	7.7 4	9.6 5	9.6 5	3.8 2	9.6 5	3.8 2	5.8 3	17.3 9	5.8 3
60 代	100 87	19.5 17	6.9 6	3.4 3	2.3 2	10.3 9	3.4 3	9.2 8	6.9 6	6.9 6	18.4 16	12.6 11
70 歳 以 上	100 37	2.7 1	5.4 2	8.1 3	8.1 3	8.1 3	16.2 6	13.5 5	8.1 3	-	18.9 7	10.8 4
女 性 小 計	100 173	8.1 14	2.3 4	1.2 2	5.8 10	8.1 14	7.5 13	11.6 20	8.1 14	2.9 5	21.4 37	23.1 40
20 代	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30 代	100 25	16 4	-	-	4 1	8 2	8 2	-	8 2	4 1	28 7	24 6
40 代	100 18	-	5.6 1	5.6 1	11.1 2	-	5.6 1	5.6 1	11.1 2	5.6 1	38.9 7	11.1 2
50 代	100 51	11.8 6	3.9 2	2 1	3.9 2	11.8 6	7.8 4	15.7 8	7.8 4	2 1	15.7 8	17.6 9
60 代	100 58	6.9 4	1.7 1	-	6.9 4	8.6 5	6.9 4	12.1 7	8.6 5	1.7 1	20.7 12	25.9 15
70 歳 以 上	100 21	-	-	-	4.8 1	4.8 1	9.5 2	19 4	4.8 1	4.8 1	14.3 3	38.1 8

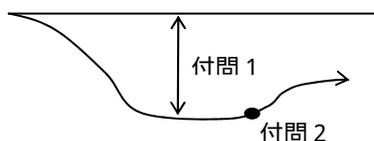
問 23 . 売上・業績における震災の仕事場への影響を、震災の前後で比較すると次のような6つのパターンがあるように思われます。あなたの仕事場・勤め先（企業全体ではなく、あなたが勤めている事業所についてお考えください）は、しいて言えばどのパターンに当てはまると思われますか。n=485



DK/NA 22.5 109

1) ~ 4) に○をつけた方

(例)



付問1 . もっとも売上げが落ちこんだ年で震災前の水準から何%くらいダウンしましたか。n=263

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1. 3倍以上 1.1 3 | 6. 30%~50% 24.0 63 |
| 2. 2~3倍 2.3 6 | 7. 10%~30% 19.4 51 |
| 3. 同じ程度~2倍 2.3 6 | 8. 10%未満 7.2 19 |
| 4. 70%~99% 3.0 8 | 9. 被害はなかった 7.2 19 |
| 5. 50%~70% 7.6 20 | 10. 年商とは関係のない仕事場 8.7 23 |
- DK/NA 17.1 45

付問2 . 売上が減った最も大きな理由をお聞かせ下さい。n=263

1. 建物や設備が破壊されて生産(商売)できなかった 16.0 42
2. 昔からの顧客が減った(商圏が変わった) 28.1 74
3. 人手が足りなかった 1.5 4
4. 資金が得られなかった 1.9 5
5. 仕入れができなかった・原料が手に入らなかった 1.1 3
6. 日本全体の不況の影響を受けた 31.9 84
7. その他 2.7 7

ご記入ください

DK/NA 15.2 40

1) ~ 4) に○をつけた方は続けて付問3と4にお答え下さい

付問3 売上げが回復基調になってきたのはいつでしたか。n=263

1. 平成7年3月迄	1.5	4	8. 平成12年	3.8	10
2. 平成7年7月迄	3.4	9	9. 平成13年	0.4	1
3. 平成7年12月迄	3.4	9	10. 平成14年	2.3	6
4. 平成8年	5.7	15	11. 平成15年	3.0	8
5. 平成9年	5.3	14	12. 平成16年	3.4	9
6. 平成10年	3.0	8	13. 回復して		
7. 平成11年	1.1	3	いない	36.9	97
			DK/NA	26.6	70

付問4 売上げが回復してきた理由についてお聞かせ下さい。(○はいくつでも) n=263

1. 震災復興関連で仕事が増えた	4.9	13
2. 景気回復に支えられて	7.6	20
3. 地震で損傷した設備・機械の機能が回復した	9.9	26
4. 得意先や本社等から支援を受けた	4.2	11
5. 顧客が戻った	10.3	27
6. 行政からの支援があった	0.8	2
7. その他	3.0	8

ご記入ください

DK/NA 27.4 72

5) に○をつけた方

付問. 影響を受けなかった・かえって売上増につながった理由をお聞かせ下さい。

6) に○をつけた方

付問 震災以外で業績を悪化させていると思われる理由をお聞かせ下さい。

問 24 . 現在の売上は震災前を (1 0 0 % とする) とくらべると何%くらいにあたりますか。 n=485

1 . 3 倍以上の増	-	5	1 割未満の減	3.5	17	9 . 7 割以上の減	3.3	16
2 . 2 倍 ~ 3 倍の増	0.8	4	6 . 1 ~ 3 割の減	14.4	70	10 . 売上の念頭は関係のない仕事場		
3 . 同じ程度 ~ 2 倍の増	3.5	17	7 . 3 ~ 5 割の減	9.7	47		9.7	47
4 . 同じ程度	8.7	42	8 . 5 ~ 7 割の減	4.9	24	11 . 仕事についていなかった	22.1	107

性 × 年齢

	TOTAL	3倍以上の増	2~3倍の増	増 同じ程度 ~ 2倍の	同じ程度	1割未満の減	1~3割の減	3~5割の減	5~7割の減	7割以上の減	い 売 上 と 場 は 関 係 の な	か つ 事 に つ い て い な
TOTAL	100 485	-	0.8 4	3.5 17	8.7 42	3.5 17	14.4 70	9.7 47	4.9 24	3.3 16	9.7 47	22.1 107
男 性 小 計	100 254	-	1.6 4	5.9 15	13.4 34	5.1 13	18.9 48	10.6 27	3.9 10	3.9 10	10.2 26	10.6 27
20 代	100 21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	85.7 18
30 代	100 26	-	-	7.7 4	15.4 4	-	26.9 7	3.8 1	3.8 1	-	15.4 4	11.5 3
40 代	100 50	-	2 1	8 4	18 9	6 3	18 9	10 5	6 3	4 2	10 5	4 2
50 代	100 68	-	1.5 1	7.4 5	17.6 12	7.4 5	17.6 12	11.8 8	2.9 2	5.9 4	16.2 11	1.5 1
60 代	100 63	-	3.2 2	4.8 3	9.5 6	7.9 5	22.2 14	12.7 8	6.3 4	-	6.3 4	1.6 1
70 歳 以 上	100 26	-	-	3.8 1	11.5 3	-	23.1 6	19.2 5	-	15.4 4	7.7 2	7.7 2
女 性 小 計	100 231	-	-	0.9 2	3.5 8	1.7 4	9.5 22	8.7 20	6.1 14	2.6 6	9.1 21	34.6 80
20 代	100 20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100 20
30 代	100 35	-	-	2.9 1	2.9 1	-	8.6 3	2.9 1	5.7 2	2.9 1	5.7 2	40 14
40 代	100 38	-	-	2.6 1	-	2.6 1	10.5 4	5.3 2	-	5.3 2	13.2 5	52.6 20
50 代	100 83	-	-	-	7.2 6	2.4 2	9.6 8	13.3 11	4.8 4	2.4 2	10.8 9	20.5 17
60 代	100 41	-	-	-	-	2.4 1	14.6 6	12.2 5	9.8 4	-	7.3 3	19.5 8
70 歳 以 上	100 14	-	-	-	7.1 1	-	7.1 1	7.1 1	28.6 4	7.1 1	14.3 2	7.1 1

問 25 . あなたのお仕事の業種を教えてください。 n=485

1. 製造業	13.2	64	7. サービス業・飲食業	19.0	92
2. 建設業	8.7	42	8. 保健・福祉・医療関連	6.0	29
3. 卸売・小売業	12.2	59	9. 教育関連	4.5	22
4. 金融・保険業	3.3	16	10. 官公庁	4.7	23
5. 運輸・通信業	5.4	26	11. 農業・漁業	0.8	4
6. IT関連	2.3	11	12. その他（具体的に： ）	2.9	14
			DK/NA	17.1	83

性×年齢

	TOTAL	製造業	建設業	卸売・小売業	金融・保険業	運輸・通信業	IT関連	サービス業・飲食業	保険・福祉・医療関連	教育関連	官公庁	農業・漁業	その他	不明
TOTAL	100 485	13.2 64	8.7 42	12.2 59	3.3 16	5.4 26	2.3 11	19 92	6 29	4.5 22	4.7 23	0.8 4	2.9 14	17.1 83
男性小計	100 254	18.9 48	13 33	11 28	3.1 8	8.7 22	2.8 7	17.3 44	3.5 9	3.5 9	6.3 16	0.8 2	2.4 6	8.7 22
20代	100 21	23.8 5	-	14.3 3	-	-	9.5 2	4.8 1	4.8 1	-	-	-	4.8 1	38.1 8
30代	100 26	11.5 3	23.1 6	7.7 2	-	7.7 2	7.7 2	15.4 4	-	-	15.4 4	-	7.7 2	3.8 1
40代	100 50	28 14	10 5	2 1	2 1	14 7	-	20 10	2 1	2 1	12 6	-	2 1	6 3
50代	100 68	19.1 13	17.6 12	13.2 9	8.8 6	8.8 6	4.4 3	13.2 9	1.5 1	5.9 4	4.4 3	-	-	2.9 2
60代	100 63	17.5 11	9.5 6	7.9 5	1.6 1	11.1 7	-	23.8 15	7.9 5	3.2 2	4.8 3	3.2 2	1.6 1	7.9 5
70歳以上	100 26	7.7 2	15.4 4	30.8 8	-	-	-	19.2 5	3.8 1	7.7 2	-	-	3.8 1	11.5 3
女性小計	100 231	6.9 16	3.9 9	13.4 31	3.5 8	1.7 4	1.7 4	20.8 48	8.7 20	5.6 13	3 7	0.9 2	3.5 8	26.4 61
20代	100 20	5 1	5 1	15 3	-	-	-	15 3	15 3	10 2	-	5 1	-	30 6
30代	100 35	8.6 3	-	11.4 4	8.6 3	-	5.7 2	17.1 6	11.4 4	-	5.7 2	-	8.6 3	22.9 8
40代	100 38	5.3 2	7.9 3	10.5 4	2.6 1	-	2.6 1	13.2 5	13.2 5	10.5 4	5.3 2	-	-	28.9 11
50代	100 83	6 5	6 5	15.7 13	4.8 4	4.8 4	1.2 1	20.5 17	6 5	3.6 3	1.2 1	-	-	24.1 20
60代	100 41	9.8 4	-	7.3 3	-	-	-	39 16	7.3 3	-	-	-	4.9 2	31.7 13
70歳以上	100 14	7.1 1	-	28.6 4	-	-	-	7.1 1	-	14.3 2	-	-	21.4 3	21.4 3

震災前と比べた、現在のくらしや、心の変化についてお伺いします。

問 26 . あなたは、現在(平成 17 年 1 月)の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。
以下のそれぞれの質問を読み、あてはまる番号に をつけてください。n=1028

あなたは、震災前と比べて、	1	2	3	4	5	D K / N A
	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	
忙しく活動的な生活を送ることは、	23.6 243	13.1 135	37.6 387	9.7 100	9.4 97	6.4 66
自分のしていることに生きがいを感じることは、	10.8 111	13.9 143	45.6 469	15.3 157	8.5 87	5.9 61
まわりの人びととうまくつきあっていくことは、	6.4 66	10.1 104	53.8 553	16.5 170	7.5 77	5.6 58
日常生活を楽しく送ることは、	9.6 99	14.1 145	47.1 484	15.0 154	9.0 93	5.2 53

自分の将来は明るいと感じることは、	19.6 202	22.4 230	40.3 414	7.6 78	4.4 45	5.7 59
元気ではつらつとしていることは、	12.8 132	20.8 214	44.8 461	10.1 104	5.5 57	5.8 60
家で過ごす時間は、	6.4 66	10.0 103	36.6 376	17.7 182	23.7 244	5.5 57
仕事の量は、	23.8 245	12.6 130	32.0 329	11.6 119	9.9 102	10.0 103

性 × 年齢

	TOTAL	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	不明	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	不明	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	不明
TOTAL	100 1028	23.6 243	13.1 135	37.6 387	9.7 100	9.4 97	6.4 66	10.8 111	13.9 143	45.6 469	15.3 157	8.5 87	5.9 61	6.4 66	10.1 104	53.8 553	16.5 170	7.5 77	5.6 58
男性 小計	100 453	28.7 130	13.9 63	36.2 164	8.4 38	5.7 26	7.1 32	11.3 51	15.5 70	48.8 221	11.9 54	6.4 29	6.2 28	7.5 34	11 50	54.3 246	16.3 74	4.9 22	6 27
20 代	100 33	9.1 3	6.1 2	39.4 13	21.2 7	12.1 4	12.1 4	6.1 2	15.2 5	33.3 11	18.2 6	18.2 6	9.1 3	12.1 4	39.4 13	24.2 8	12.1 4	9.1 3	10.0 3
30 代	100 35	11.4 4	14.3 5	54.3 19	8.6 3	11.4 4	-	5.7 2	17.1 6	54.3 19	14.3 5	8.6 3	-	11.4 4	17.1 6	37.1 13	31.4 11	2.9 1	-
40 代	100 52	9.6 5	17.3 9	51.9 27	7.7 4	13.5 7	-	5.8 3	19.2 10	51.9 27	13.5 7	9.6 5	-	3.8 2	3.8 2	65.4 34	17.3 9	9.6 5	-
50 代	100 76	25 19	14.5 11	40.8 31	13.2 10	5.3 4	1.3 1	10.5 8	18.4 14	50 38	15.8 12	3.9 3	1.3 1	6.6 5	6.6 5	57.9 44	22.4 17	5.3 4	1.3 1
60 代	100 141	43.3 61	12.8 18	29.8 42	7.1 10	3.5 5	3.5 5	15.6 22	17.7 25	47.5 67	10.6 15	5.7 8	2.8 4	9.9 14	14.2 20	58.9 83	10.6 15	3.5 5	2.8 4
70 歳以上	100 116	32.8 38	15.5 18	27.6 32	3.4 4	1.7 2	19 22	12.1 14	8.6 10	50.9 59	7.8 9	3.4 4	17.2 20	6.9 8	11.2 13	50.9 59	12.1 9	2.6 3	16.4 19
女性 小計	100 575	19.7 113	12.5 72	38.8 223	10.8 62	10.8 71	5.9 34	10.4 60	12.7 73	43.1 248	17.9 103	10.1 58	5.7 33	5.6 32	9.4 54	53.4 307	16.7 96	9.6 55	5.4 31
20 代	100 44	2.3 1	4.5 2	52.3 23	11.4 5	29.5 13	-	2.3 1	4.5 16	36.4 14	31.8 11	25 11	-	-	-	47.7 21	27.3 12	25 11	-
30 代	100 58	6.9 4	10.3 6	48.3 28	13.8 8	20.7 8	-	8.6 5	8.6 23	39.7 14	24.1 11	19 11	-	8.6 5	10.3 20	50 29	20.7 12	10.3 6	-
40 代	100 65	10.8 7	6.2 4	38.5 25	16.9 11	27.7 18	-	3.1 2	10.8 7	47.7 31	23.1 15	15.4 10	-	-	13.8 9	41.5 27	24.6 16	18.5 12	1.5 1
50 代	100 137	16.1 22	13.9 19	43.1 59	11.7 16	13.9 19	1.5 2	10.2 14	12.4 17	48.9 67	18.2 25	9.5 13	0.7 1	5.8 8	5.8 9	65.7 90	14.6 20	8 11	-
60 代	100 154	33.1 51	13 20	37.7 58	10.4 16	3.2 4	2.6 5	14.3 22	14.9 73	47.4 24	15.6 6	3.9 24	3.9 6	8.4 11	11 17	57.8 89	13.6 7	4.5 7	4.5 7
70 歳以上	100 117	23.9 28	17.9 21	25.6 30	5.1 6	3.4 4	23.9 28	13.7 16	16.2 19	32.5 38	9.4 11	6 7	22.2 26	5.1 6	12 14	43.6 51	12.8 15	6.8 8	19.7 23

問 27 . あなたは、最近 1 ヶ月の間 (平成 16 年 12 月 ~ 平成 17 年 1 月) に、つぎにあげた「こころやからだの状態」を、どのくらい体験しましたか。以下のそれぞれの質問を読み、あてはまる番号に をつけてください。n=1028

以下のようなこころやからだの状態が	1 まったく ない	2 まれに あった	3 たまに あった	4 たびたび あった	5 いつも あった	D K / N A
気持ちが落ち着かない	29.6 304	22.9 235	24.7 251	11.1 114	5.8 60	5.9 61
寂しい気持ちになる	32.1 330	22.0 226	23.4 241	10.5 108	6.4 66	5.5 57
気分が沈む	30.2 310	24.0 247	24.3 250	9.7 100	5.9 61	5.8 60
次々とよくないことを考える	31.8 327	24.6 253	20.3 209	11.1 114	5.7 59	6.4 66
集中できない	30.1 309	29.1 299	22.3 229	7.2 74	5.0 51	6.4 66
何をするのもおっくうだ	30.6 315	28.5 293	21.5 221	8.4 86	5.1 52	5.9 61
動悸 (どうき) がする	57.3 589	16.2 167	11.8 121	5.5 57	2.3 24	6.8 70
息切れがする	60.7 624	15.0 154	11.4 117	4.3 44	2.1 22	6.5 67
頭痛、頭が重い	47.9 492	22.4 230	15.8 162	5.3 54	2.1 22	6.6 68
胸がしめつけられるような痛みがある	67.7 696	13.5 139	7.5 77	3.1 32	1.2 12	7.0 72
めまいがする	62.5 642	16.7 172	9.6 99	3.6 37	1.5 15	6.1 63
のどがかわく	50.3 517	20.7 213	12.6 130	7.1 73	2.9 30	6.3 65

問 28 . あなたは、現在(平成 17 年 1 月)、つぎにあげたことがらについて、どの程度満足されていますか。
 それぞれの質問を読み、あてはまる番号に をつけてください。n=1028

以下のことについての あなたの満足度は	1 たいへん 不満 である	2 やや 不満 である	3 どちら でもない	4 やや 満足 している	5 たいへん 満足 している	D K / N A
毎日の暮らしに、	6.1 63	19.9 205	26.1 268	34.3 353	9.9 102	3.6 37
ご自分の健康に、	10.3 106	30.0 308	21.7 223	28.2 290	7.0 72	2.8 29
今の人間関係に、	3.3 34	15.1 155	35.0 360	32.2 331	10.4 107	4.0 41

今の家計の状態に、	17.3 178	28.4 292	24.5 252	19.5 200	5.4 55	5.0 51
今の家庭生活に、	5.4 55	18.7 192	29.6 304	31.5 324	11.4 117	3.5 36
ご自分の仕事に、	8.0 82	16.0 164	32.5 334	22.2 228	8.6 88	12.8 132

問 29 . 震災からこれまでの 10 年間をふり返ると、その間の体験について、あなたはどのような印象をお持ちですか。それぞれ、あてはまる番号 1 つに をつけてください。n=1028

以下のことについて、どう思いますか	1	2	3	4	5	D K / N A
	まったく そう 思う	どちらか といえば そう思う	どちら とも 言えない	どちらか といえば そう思わ ない	まったく そう 思わない	
1. 今の住まいで、どのように暮らしていけば良いのか、そのめどが立っている。	17.5 180	35.1 361	27.7 285	8.4 86	5.5 57	5.7 59
2. 毎日の生活は、震災前と同じように、決まったことのくり返しに感じられる。	15.1 155	35.9 369	22.5 231	15.2 156	6.4 66	5.0 51
3. 現在が、「ふつう」のくらしに感じられる。	20.9 215	40.2 413	19.5 200	10.2 105	4.8 49	4.5 46
4. 震災での体験は、日常生活では得られない得がたい経験だった。	48.4 498	27.8 286	10.6 109	3.1 32	5.3 54	4.8 49
5. 震災での体験は、私の過去から消し去ってしまいたい経験だった。	14.3 147	13.5 139	24.4 251	20.4 210	21.5 221	5.8 60
6. 「自分に与えられた人生の使命とは何か」を考えるようになった。	14.4 148	29.2 300	37.2 382	7.3 75	5.4 55	6.6 68
7. 震災によって精神的に成長できた。	11.5 118	31.7 326	39.9 410	6.5 67	4.5 46	5.9 61
8. 震災のことを、思い出したくない。	11.7 120	17.3 178	28.2 290	18.9 194	17.8 183	6.1 63
9. 「生きることには意味がある」と強く感じる。	35.8 368	32.0 329	21.4 220	3.5 36	2.0 21	5.3 54
10. 震災については、あまり触れてほしくない。	6.7 69	15.9 163	32.4 333	18.7 192	20.6 212	5.7 59
11. 人生には何らかの意味があると思う。	31.2 321	36.7 377	21.3 219	2.2 23	2.3 24	6.2 64
12. 震災の話は、聞きたくない。	6.1 63	11.5 118	30.0 308	22.2 228	24.1 248	6.1 63
13. 震災後、「人間も捨てたものではない」と感じるようになった。	20.8 214	35.5 365	31.1 320	4.0 41	3.1 32	5.4 56

問 30. あなたの現在住んでいるまちでの、震災後の復興状況や身近な問題についてお聞きします。それぞれの質問で、あなたの印象にあてはまるもの1つに をつけてください。n=1028

A : あなたのまちの復旧・復興状況について

1. かなり速い	23.6	243	4. やや遅い	7.9	81
2. やや速い	19.4	199	5. かなり遅い	5.5	57
3. ふつう	39.2	403	6. その他 ()	2.3	24
			DK / NA	2.0	21

B : あなたの地域の夜の明るさは震災以前と比べてどうですか。

1. 震災前より明るくなった	22.9	235	4. 震災の影響はなかった	23.7	244
2. 震災前の状態に戻った	37.1	381	5. その他 ()	4.3	44
3. 震災前より暗くなった	9.5	98	DK / NA	2.5	26

C : 1年後(2006年)のあなたを想像してください。あなたは、今よりも生活がよくなっていると思いますか、どうですか。

1. かなり良くなる	3.0	31	4. やや悪くなる	22.7	233
2. やや良くなる	12.3	126	5. かなり悪くなる	5.8	60
3. かわらない	55.1	566	DK / NA	1.2	12

性×年齢

	TOTAL	かなり速い	やや速い	ふつう	やや遅い	かなり遅い	その他	不明	震災前より明るくなった	震災前の状態に	震災前より暗くなった	震災の影響はな	その他	不明	かなり良くなる	やや良くなる	かわらない	やや悪くなる	かなり悪くなる	不明
TOTAL	100 1028	23.6 243	19.4 199	39.2 403	7.9 81	5.5 57	2.3 24	2 21	22.9 235	37.1 381	9.5 98	23.7 244	4.3 44	2.5 26	3 31	12.3 126	55.1 566	22.7 233	5.8 60	1.2 12
男性小計	100 453	23 104	19.6 89	38 172	8.4 38	7.1 32	2.2 10	1.8 8	20.3 92	39.1 177	10.4 47	23.6 107	4.2 19	2.4 11	3.1 14	12.8 58	50.3 228	25.8 117	7.1 32	0.9 4
20代	100 33	30.3 10	24.2 8	30.3 10	6.1 2	3 1	3 1	3 1	27.3 9	42.4 14	6.1 2	21.2 7	- 1	3 5	15.2 5	21.2 13	39.4 13	18.2 6	3 1	3 1
30代	100 35	31.4 11	22.9 8	34.3 12	5.7 2	5.7 2	- -	- -	25.7 9	34.3 12	14.3 5	17.1 6	5.7 2	2.9 1	25.7 9	54.3 19	14.3 5	2.9 1	- -	- -
40代	100 52	28.8 15	17.3 9	32.7 17	11.5 6	7.7 4	- -	1.9 1	15.4 8	40.4 21	17.3 9	15.4 8	3.8 2	7.7 4	3.8 2	13.5 7	55.8 29	21.2 11	3.8 2	1.9 1
50代	100 76	21.1 16	18.4 19	44.7 26	8.5 6	5.7 5	0.7 3	- 1	19.9 12	41.1 28	8.5 8	22.7 25	7.1 3	0.7 -	- 2	9.2 11	51.1 36	30.5 19	9.2 8	- -
60代	100 141	22 31	18.4 26	44.7 63	8.5 12	5.7 8	0.7 1	- 1	19.9 28	41.1 58	8.5 12	22.7 32	7.1 10	0.7 -	- 13	9.2 72	51.1 43	30.5 13	9.2 13	- -
70歳以上	100 116	18.1 21	16.4 19	37.9 44	8.6 10	10.3 12	4.3 5	4.3 5	22.4 26	37.9 44	9.5 11	25 29	1.7 4	3.4 4	3.4 11	9.5 59	50.9 33	25.8 7	6 2	1.7 2
女性小計	100 575	24.2 139	19.1 110	40.2 231	7.5 43	4.3 25	2.4 14	2.3 13	24.9 143	35.5 204	8.9 51	23.8 137	4.3 25	2.6 15	3 17	11.8 68	58.8 338	20.2 116	4.9 28	1.4 8
20代	100 44	29.5 13	18.2 8	38.6 17	6.8 3	- -	4.5 2	2.3 1	31.8 14	38.6 17	4.5 2	15.9 7	6.8 3	2.3 1	6.8 3	29.5 13	59.1 26	2.3 1	- -	2.3 1
30代	100 58	24.1 14	17.2 10	48.3 28	8.6 5	1.7 -	- -	- -	29.3 17	34.5 20	5.2 3	19 11	8.6 5	3.4 2	5.2 3	24.1 14	56.9 33	10.3 6	3.4 2	- -
40代	100 65	30.8 16	24.6 16	35.4 23	- -	3.1 2	6.2 4	- -	26.2 17	27.7 18	7.7 5	29.2 19	9.2 6	- -	6.2 4	56.9 37	21.5 14	6.2 4	- -	- -
50代	100 137	31.4 43	19 26	36.5 50	8 11	2.2 3	2.2 3	0.7 1	20.4 28	40.9 56	5.1 7	27.7 38	2.9 4	2.9 4	0.7 19	13.9 76	55.5 34	24.8 14	3.6 5	1.5 2
60代	100 154	18.2 28	22.7 35	39 60	9.7 15	3.2 5	2.6 4	4.5 7	20.8 32	35.7 55	12.3 19	24 37	3.9 6	3.2 5	1.3 9	5.8 36	59.1 91	23.4 13	8.4 3	1.9 3
70歳以上	100 117	17.9 21	12.8 15	45.3 53	7.7 9	12 14	0.9 1	3.4 4	29.9 35	32.5 38	12.8 15	21.4 25	0.9 2	2.6 3	1.7 7	7.7 47	64.1 25	21.4 8	3.4 4	1.7 2

問 31 . 以下について、あなたの体験やお考えを教えてください。

それぞれについて、あてはまる番号 1 つに をしてください。

「震災前は・・・、震災後は・・・」のように、震災を時間的な区切りとした言い方を時折耳にします。
あなた自身は、こうした言い方をされますか。n=1028

- 1 . 非常によくする 3.0 31
 2 . よくする 9.7 100
 3 . ときどきする 32.7 336
 4 . あまりしない 34.3 353
 5 . しない 18.7 192
 DK / NA 1.6 16

性×年齢

	TOTAL	非常によくする	よくする	ときどきする	あまりしない	しない	不明
TOTAL	100 1028	3 31	9.7 100	32.7 336	34.3 353	18.7 192	1.6 16
男性小計	100 453	4.2 19	9.3 42	33.1 150	34.2 155	18.1 82	1.1 5
20代	100 33	6.1 2	12.1 4	18.2 6	18.2 6	45.5 15	- -
30代	100 35	5.7 2	20 7	31.4 11	31.4 11	11.4 4	- -
40代	100 52	3.8 2	1.9 1	38.5 20	38.5 20	15.4 8	1.9 1
50代	100 76	3.9 3	9.2 7	30.3 23	35.5 27	19.7 15	1.3 1
60代	100 141	5 7	7.8 11	36.2 51	34 48	17 24	- -
70歳以上	100 116	2.6 3	10.3 12	33.6 39	37.1 43	13.8 16	2.6 3
女性小計	100 575	2.1 12	10.1 58	32.3 186	34.4 198	19.1 110	1.9 11
20代	100 44	2.3 1	4.5 2	27.3 12	25 11	40.9 18	- -
30代	100 58	5.2 3	12.1 7	31 18	24.1 14	27.6 16	- -
40代	100 65	1.5 1	3.1 2	30.8 20	43.1 28	21.5 14	- -
50代	100 137	2.9 4	12.4 17	27.7 38	36.5 50	19 26	1.5 2
60代	100 154	1.3 2	11 17	33.8 52	35.1 54	16.9 26	1.9 3
70歳以上	100 117	0.9 1	11.1 13	39.3 46	35 41	8.5 10	5.1 6

あなたは、震災前後で、「自分は変わった」とお感じになりますか。n=1028

- 1 . 強く感じる 8.0 82 2 . やや感じる 27.6 284 3 . あまり感じない 29.5 298 4 . ほとんど感じない 19.2 197 5 . まったく感じない 14.1 145
 DK / NA 1.7 17
 (1・2・3・4の方は付問へ)

付問：その変化は、よい方向への変化ですか、それとも、悪い方向への変化ですか。n=866

- 1 . よい方向 8.9 77 2 . どちらかといえばよい方向 34.4 298 3 . どちらともいえない 43.1 373
 4 . どちらかといえば悪い方向 7.9 68 5 . 悪い方向 3.1 27 DK / NA 2.7 23

あなたは、震災前後で、「自分の人生は変わった」とお感じになりますか。n=1028

- 1 . 強く感じる 11.7 120 2 . やや感じる 28.7 295 3 . あまり感じない 25.1 258 4 . ほとんど感じない 15.0 154 5 . まったく感じない 17.1 176
 DK / NA 2.4 25
 (1・2・3・4の方は付問へ)

付問：その変化は、よい方向への変化ですか、それとも、悪い方向への変化ですか。n=827

- 1 . よい方向 8.3 69 2 . どちらかといえばよい方向 29.0 240 3 . どちらともいえない 42.2 349
 4 . どちらかといえば悪い方向 14.3 118 5 . 悪い方向 5.0 41 DK / NA 1.2 10

問 32. 被災地の人たちがどのように復旧・復興するかは、ほとんど知られていません。あなたの気持ちや行動が、震災後、時間とともにどんな風に変化してきたのか、ふり返ってみてください。

A～Fのそれぞれの問いについて、カレンダーの番号に をつけてください。 n=1028

カレンダー：平成7年(1995年)1月17日～現在

月 日 曜日	できごと	A 仕事/学校が もとに戻った		B すまいの問題が 最終的に解決し た		C 家計への 震災の影響が なくなった		D 毎日の生活が 落ち着いた		E 自分が被災者た と意識しなく なった		F 地域経済が 震災の影響を 脱した	
平成7(1995)年													
1月	17 火	3.2	33	6.9	71	7.0	72	1.0	10	3.5	36	0.6	6
	18 水	3.8	39	0.6	6	0.3	3	0.3	3	0.7	7	-	-
	19 木	3.0	31	1.4	14	0.5	5	0.6	6	0.7	7	0.1	1
	20 金	1.8	19	0.7	7	0.3	3	0.5	5	0.1	1	-	-
	21 土	0.8	8	0.5	5	0.3	3	0.2	2	0.2	2	-	-
	22 日	0.3	3	0.5	5	0.7	7	0.5	5	0.4	4	0.5	5
	23~29	8.9	92	2.3	24	1.6	16	2.2	23	0.9	9	-	-
	30~2/5	2.7	28	1.7	17	1.0	10	1.9	20	0.6	6	0.4	4
	2月	9.6	99	4.8	49	3.6	37	5.4	56	3.1	32	0.8	8
	3月	5.9	61	6.3	65	3.9	40	9.0	93	3.0	31	0.7	7
	4月~6月	8.0	82	8.7	89	7.4	76	15.4	158	6.2	64	1.7	17
	7月~9月	2.9	30	4.3	44	4.0	41	5.9	61	2.7	28	0.6	6
	10月~12月	1.8	19	5.8	60	2.1	22	5.0	51	3.4	35	1.2	12
平成8(1996)年		3.1	32	9.7	100	7.4	76	10.5	108	10.0	103	5.4	56
平成9(1997)年		1.8	18	5.1	52	3.9	40	6.2	64	5.6	58	2.9	30
平成10(1998)年		0.9	9	3.3	34	2.8	29	3.6	37	4.2	43	4.4	45
平成11(1999)年		0.4	4	1.5	15	0.6	6	2.0	21	1.9	20	1.5	15
平成12(2000)年		0.1	1	1.4	14	1.4	14	1.7	17	1.6	16	4.1	42
平成13(2001)年		0.1	1	1.6	16	0.5	5	0.9	9	0.7	7	1.2	12
平成14(2002)年		-	-	1.5	15	0.8	8	0.3	3	0.8	8	1.3	13
平成15(2003)年		0.2	2	0.6	6	0.5	5	0.2	2	0.4	4	0.7	7
平成16(2004)年～現在		0.2	2	0.5	5	1.6	16	0.7	7	1.4	14	1.9	20
現在も戻っていない		3.7	38	4.5	46	15.6	160	3.8	39	16.9	174	26.8	276
覚えていない		12.5	128	8.2	84	12.8	132	7.4	76	13.0	134	21.4	220

人のつながりや家族のつながりについて、
震災の影響がどのようなものであったか、お尋ねします。

問 33 . 震災から 10 年間、人と人のつながりに、つぎのような変化や出来事がありましたか。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに をしてください。

n=1028

	1. あてはまる	2. あてはまらない
(1) 心を開いて話すことができる人との出会いがあった	(37 . 4 384	57 . 7 593)
(2) その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会いがあった	(12 . 6 130	81 . 2 835)
(3) 被災から立ち直すきっかけを与えてくれた人がいた	(18 . 0 185	76 . 2 783)
(4) その後の人生を変える出会いがあった	(17 . 2 177	76 . 5 780)
(5) 信頼していた人に裏切られたという気持ちになった	(13 . 2 136	80 . 4 827)
(6) 年上の人、年下の人とのつきあいや交流が増えた	(38 . 0 391	56 . 4 580)
(7) ボランティアのありがたさを知った	(47 . 4 487	46 . 4 477)
(8) 友人のありがたさを知った	(63 . 0 648	31 . 6 325)
(9) 震災をきっかけに同志的なつながりができた	(27 . 6 284	65 . 7 675)
(10) 自分だけが頼りという気持ちが増した	(32 . 5 334	61 . 7 634)
(11) 行政への頼もしさが増した	(14 . 9 153	78 . 5 807)
(12) 近所づきあいの大切さを知った	(69 . 7 717	26 . 2 269)
(13) 家族のありがたさが身にしみた	(82 . 0 843	13 . 3 137)
(14) 親戚や血縁の大切さを見直した	(70 . 8 728	24 . 4 251)
(15) ひとりである方が性に合っている	(13 . 1 135	81 . 2 835)

問 34 . 同居・別居にかかわらず、あなたのご家族の、現在のようすについておうかがいします。

(1) あなたのご家族に最もあてはまるものを 1 つ選んで、[] の中に をつけてください。

家族の中でのそれぞれの役割やふるまいについて (あてはまるもの 1 つに) n=1028

1[]	問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	23.2	239
2[]	家でそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおきないあうこともある	35.3	363
3[]	困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	3.5	36
4[]	わか家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	10.1	104
5[]	家の決まりは皆が守るようにしている	16.1	165
6[]	わか家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	2.2	23
7[]	問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる	11.5	118
8[]	わか家では家族で何か決めても、守られたためしがない	3.3	34
		DK/NA	5.8 60

(2) あなたのご家族に最もあてはまるものを 1 つ選んで、[] の中に をつけてください。

一緒に過ごす時間について (あてはまるもの 1 つに) n=1028

1[]	たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	41.3	425
2[]	子どもが落ち込んでいる時はこちらも心配になるが、あまり聞いたりしない	2.0	21
3[]	悩みを家族に相談することがある	18.7	192
4[]	家族はお互いの体によくふれあう	7.9	81
5[]	家族の間で、用事以外の関係は全くない	1.9	20
6[]	家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がなない	8.6	88
7[]	休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	15.7	161
8[]	誰かの帰りが遅い時は、その人が帰るまでみんな起きて待っている	7.2	74
	・一人ぐらしである	3.6	37
		DK/NA	5.0 51

生活復興のとらえ方にも、大きな個人差があるといわれています。
 処世の知恵、人生訓、人とのつきあい方について、あなたご自身の考え方をお教えてください。

問 35. ~ のそれぞれについてあなたのお考えに近いのは1、2のどちらですか。

これらはどちらかが正解というものではありません。気楽な気持ちであなたのお考えに近いほうに
 を1つおつけください。 n=1028

苦勞は、

- | | | |
|------------------|---------|--------|
| 1. 将来役に立つ試練と考える。 | 75.1 | 772 |
| 2. なるだけ避けて通る。 | 22.8 | 234 |
| | DK / NA | 2.1 22 |

わたしは、

- | | | |
|----------------------------|---------|--------|
| 1. 自分がしてほしくないことは、他人にもしない。 | 92.7 | 953 |
| 2. 他人がどういおうと、自分のしたいことが一番だ。 | 5.9 | 61 |
| | DK / NA | 1.4 14 |

わたしは、

- | | | |
|------------------------------|---------|--------|
| 1. 自分で決めたことは、最後まで守る方だ | 70.0 | 720 |
| 2. 自分できめたことでも、守らないことが(よく)ある。 | 23.4 | 241 |
| | DK / NA | 1.8 18 |

地域で困っていることがある時、

- | | | |
|----------------------------|---------|--------|
| 1. みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う。 | 74.6 | 767 |
| 2. 誰かがうまく解決してくれると思う。 | 23.4 | 290 |
| | DK / NA | 1.9 20 |

わたしは、

- | | | |
|----------------------------|---------|--------|
| 1. たとえ方便でも人にうそをつくのはいやだ。 | 36.5 | 375 |
| 2. 必要であれば、方便としてうそも許されると思う。 | 61.8 | 635 |
| | DK / NA | 1.8 18 |

講演会や地域の集まりに参加したとき、

- | | | |
|------------------------------------|---------|--------|
| 1. 友だちとついおしゃべりに夢中になって、話を聞かないことがある。 | 3.3 | 34 |
| 2. 話し手に耳を傾けるのが礼儀だと思う。 | 95.3 | 635 |
| | DK / NA | 1.4 14 |

わたしは

- | | | |
|-----------------------------|---------|--------|
| 1. いつ子どもに見られても、誇れる自分がある。 | 77.1 | 793 |
| 2. 私の日頃の行いは、できれば子どもに見せたくない。 | 15.6 | 160 |
| | DK / NA | 7.3 75 |

わたしは、

- | | | |
|---------------------------------------|---------|--------|
| 1. 用事があっても、近所の人には、自分から話しかけたりはしない方だ。 | 19.1 | 196 |
| 2. 用事があれば、近所の人にも、自分からきっかけを作って話しかける方だ。 | 79.2 | 814 |
| | DK / NA | 1.8 18 |

(次のページへ進んでください)

(前ページからのつづき、1、2のどちらかに○をつけてください)

わたしは、

- | | | |
|----------------------------|---------|--------|
| 1. 年齢を問わず誰もが対等な関係であると思う。 | 30.3 | 311 |
| 2. 年齢を考えて、目上の人をうやまうべきだと思う。 | 68.2 | 701 |
| | DK / NA | 1.6 16 |

成人した子どもと親との関係は、

- | | | |
|-------------------------------|---------|--------|
| 1. 子どもがいくつになっても親にはある程度の責任がある。 | 56.7 | 583 |
| 2. 親は親、子は子として考えるほうがよい。 | 40.8 | 419 |
| | DK / NA | 2.5 26 |

子どもの七五三は

- | | | |
|--------------------|---------|--------|
| 1. 特に祝わなくともよいと思う。 | 36.3 | 373 |
| 2. お祝いは必ずするものだと思う。 | 59.9 | 616 |
| | DK / NA | 3.8 39 |

お歳暮やお中元を送りあう行事は、

- | | | |
|----------------------|---------|--------|
| 1. 季節の挨拶なのであったほうがよい。 | 41.1 | 423 |
| 2. なくともよい慣例だ。 | 57.5 | 591 |
| | DK / NA | 1.4 14 |

お葬式や結婚式は、

- | | | |
|-------------------------|---------|--------|
| 1. それなりの形式をととのえることが大切だ。 | 37.0 | 380 |
| 2. できるだけ簡略化するのがよい。 | 61.6 | 633 |
| | DK / NA | 1.5 15 |

外食するときは、

- | | | |
|--------------------|---------|--------|
| 1. 周りの人にあわせて注文する。 | 35.2 | 362 |
| 2. 自分が食べたいものを注文する。 | 63.4 | 652 |
| | DK / NA | 1.4 14 |

思いがけず意見を求められた時は、

- | | | |
|------------------------|---------|--------|
| 1. 自分の思った意見を述べる。 | 40.7 | 418 |
| 2. ある程度場の空気を読んで意見を述べる。 | 57.6 | 592 |
| | DK / NA | 1.8 18 |

あなたが住んでいるまちやご近所のことについて、お聞かせください。

問 36 . あなたのご近所づきあいについてお聞きします。以下について、あてはまる人数をお答え下さい。

n=1028

世間話をする近所の方は、何人くらいいますか。

- 1 . 約 (3 . 98) 人いる 68 . 5 704 2 . とくにいない 30 . 0 308
DK / NA 1 . 6 16

おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもらったりする

近所の家は、何軒くらいありますか。

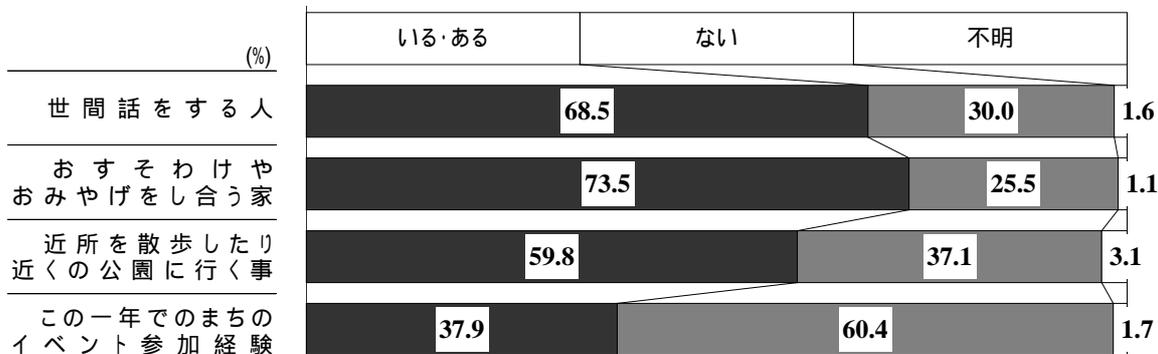
- 1 . 約 (2 . 48) 軒ある 73 . 5 755 2 . とくにいない 25 . 5 262
DK / NA 1 . 1 11

月に何回くらい、近所を散歩したり、近くの公園に出かけますか。

- 1 . 約 (7 . 23) 回する 59 . 8 615 2 . しない 37 . 1 381
DK / NA 3 . 1 32

この1年くらいの間では、まちのイベント(お祭り、運動会、盆踊りなど)に参加したことはありますか。

- 1 . 約 (1 . 24) 回くらい参加した 37 . 9 390 2 . とくに参加していない 60 . 4 621
DK / NA 1 . 7 17



問 37 . あなたが、今のまちに住むようになってから、現在で何年目ですか。 n=1028

現在で (AV 23 . 86) 年目

問 38 . あなたの住んでいるまちには、いろいろな活動やイベント、また、近所づきあいがあると思います。
震災後 10 年ほどの間で、以下のような活動にどの程度参加なさっているでしょうか。

n=1028

A . まちのイベントに、お世話をする立場で参加したことがありますか。

1 . ない 69 . 9 719 2 . ある 28 . 3 291 平均して 年 (1 . 10) 回 くらい
DK / NA 1 . 8 18

B . 趣味やスポーツのサークルに参加したことはありますか。

1 . ない 69 . 2 711 2 . ある 29 . 1 299 平均して 年 (5 . 27) 回 くらい
DK / NA 1 . 8 18

C . 自治会の仕事をしたことがありますか。

1 . ない 52 . 7 542 2 . ある 46 . 2 475 平均して 年 (2 . 24) 回 くらい
DK / NA 1 . 1 11

D . 地域でボランティア活動をしたことはありますか。

1 . ない 75 . 7 778 2 . ある 23 . 1 237 平均して 年 (2 . 03) 回 くらい
DK / NA 1 . 3 13

問 39 . あなたにとっての「まちのイメージ」をおたずねします。

あなたにとって「自分のまちのイメージ」は、以下の5つのうち、どれに一番当てはまりますか。

あてはまるもの1つをお選びください(の中に をつけてください) 。n=1028



A .近所

30.1

309



B 小学校区

23.3

240



C 中学校区

23.4

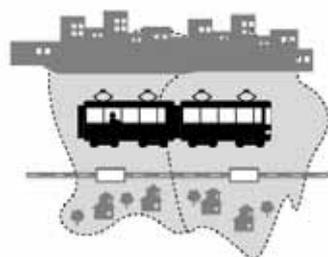
241



D 市・区レベル

15.3

157

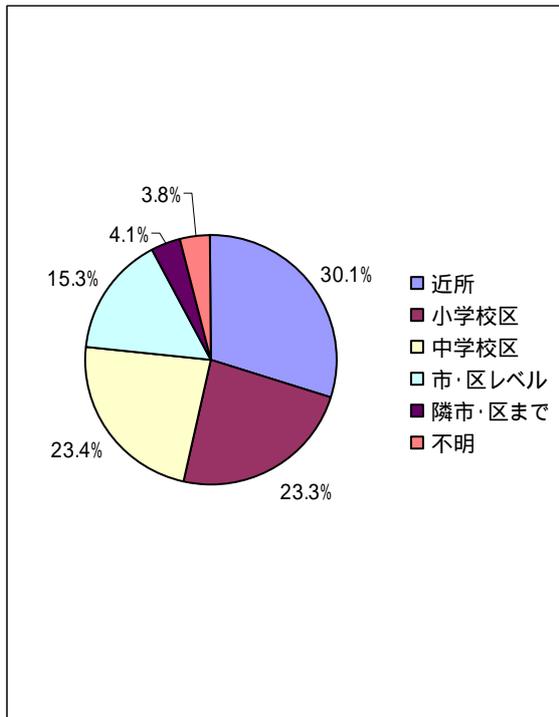


E 隣市・区まで

4.1

42





* 性×年齢

	TOTAL	近所	小学校区	中学校区	市・区レベル	隣市・区まで	不明
TOTAL	100 1028	30.1 309	23.3 240	23.4 241	15.3 157	4.1 42	3.8 39
男性小計	100 453	30.5 138	24.5 111	21.9 99	16.6 75	4.9 22	1.8 8
20代	100 33	30.3 10	12.1 4	30.3 10	15.2 5	9.1 3	3 1
30代	100 35	22.9 8	28.6 10	34.3 12	11.4 4	2.9 1	- -
40代	100 52	25 13	15.4 8	36.5 19	19.2 10	3.8 2	- -
50代	100 76	28.9 22	23.7 18	21.1 16	21.1 16	3.9 3	1.3 1
60代	100 141	31.2 44	24.8 35	18.4 26	18.4 26	5.7 8	1.4 2
70歳以上	100 116	35.3 41	31 36	13.8 16	12.1 14	4.3 5	3.4 4
女性小計	100 575	29.7 171	22.4 129	24.7 142	14.3 82	3.5 20	5.4 31
20代	100 44	22.7 10	27.3 12	27.3 12	20.5 9	2.3 1	- -
30代	100 58	15.5 9	22.4 13	39.7 23	17.2 10	3.4 2	1.7 1
40代	100 65	15.4 10	33.8 22	29.2 19	18.5 12	1.5 1	1.5 1
50代	100 137	24.8 34	34.3 47	23.4 32	13.9 19	2.2 3	1.5 2
60代	100 154	37 57	11.7 18	26.6 41	11 17	5.2 8	8.4 13
70歳以上	100 117	43.6 51	14.5 17	12.8 15	12.8 15	4.3 5	12 14

* 現在同居家族人数

	人	TOTAL	近所	小学校区	中学校区	市・区レベル	隣市・区まで	不明
1	100 83	32.5 27	16.9 14	19.3 16	16.9 14	7.2 6	7.2 6	
2	100 368	32.1 118	21.2 78	21.7 80	14.9 55	4.3 16	5.7 21	
3	100 260	30 78	24.6 64	21.9 57	15.8 41	5 13	2.7 7	
4	100 166	25.9 43	28.3 47	27.1 45	14.5 24	2.4 4	1.8 3	
5	100 89	24.7 22	22.5 20	29.2 26	19.1 17	3.4 3	1.1 1	
6人以上	100 54	31.5 17	25.9 14	29.6 16	11.1 6	- -	1.9 1	

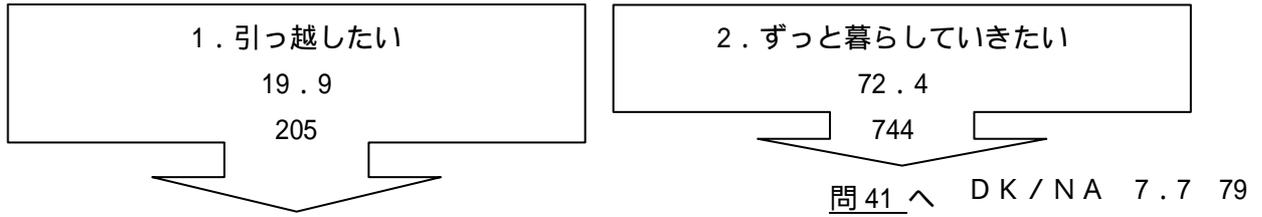
* 身体的被害

	TOTAL	近所	小学校区	中学校区	市・区レベル	隣市・区まで	不明
死亡家族あり	100 7	57.1 4	14.3 1	14.3 1	- -	- -	14.3 1
入院病傷者あり	100 20	25 5	20 4	30 6	25 5	- -	- -
軽病傷者あり	100 172	27.3 47	22.7 39	22.1 38	19.8 34	5.8 10	2.3 4
全員無事	100 757	30 227	24.3 184	23.9 181	14.7 111	3.7 28	3.4 26

* 住宅被害

	TOTAL	近所	小学校区	中学校区	市・区レベル	隣市・区まで	不明
全壊・全焼	100 156	30.1 47	20.5 32	21.2 33	15.4 24	6.4 10	6.4 10
半壊・半焼	100 204	28.9 59	26.5 54	22.1 45	17.2 35	2 4	3.4 7
一部損壊	100 465	29.7 138	22.8 106	24.9 116	15.5 72	4.1 19	3 14
被害なし	100 199	31.7 63	23.6 47	23.1 46	13.1 26	4.5 9	4 8

問 40 . あなたはこれからもこの場所で、ずっと暮らしていきたいと思いませんか、それとも引っ越したいと思いませんか。n=1028



付問 1 : どこに引っ越したいと思われますか。以下から 1 つ選んでください。n=205

1. 震災前に住んでいたのと同じ地域	23.4	48	4. 兵庫県以外の関西	10.2	21
2. 震災の被害があった兵庫県南部地域	20.5	42	5. 関西以外	11.2	23
3. 震災の被害がなかった兵庫県地域	17.1	35	6. その他(場所: DK / NA	2.0	4

問 41 . あなたのまちには、次のようなものがありますか。または次のような人たちがいますか。それぞれについて、あてはまる番号 1 つに をしてください。n=1028

DK / NA は省略

- | | | | |
|------------------------|-----------------|----------------|-------------------|
| 1. 豊かな緑 | (1. ある 76.6 787 | 2. ない 15.8 162 | 3. 知らない 1.8 19) |
| 2. 愛着のある公園 | (1. ある 60.9 626 | 2. ない 27.8 286 | 3. 知らない 14.6 47) |
| 3. あなたが好きだと思ふまちなみ(街並み) | (1. ある 57.5 591 | 2. ない 28.3 291 | 3. 知らない 16.5 67) |
| 4. みんなが気軽に集まれる場所 | (1. ある 47.6 489 | 2. ない 26.6 273 | 3. 知らない 19.3 198) |
| 5. 地域の行事(祭り、運動会など) | (1. ある 74.1 762 | 2. ない 10.3 106 | 3. 知らない 10.0 103) |
| ----- | | | |
| 6. 立ち話ができそうなみちばた・路地 | (1. ある 75.3 774 | 2. ない 13.0 134 | 3. 知らない 5.4 55) |
| 7. 自治会や市民活動を行っているグループ | (1. ある 72.4 744 | 2. ない 6.5 67 | 3. 知らない 14.9 153) |
| 8. ほかのまちとは違う独自の雰囲気 | (1. ある 37.1 381 | 2. ない 28.0 288 | 3. 知らない 26.5 272) |
| 9. 震災を後世に伝える「もの」 | (1. ある 22.5 231 | 2. ない 44.1 453 | 3. 知らない 25.7 264) |
| 10. 歴史を感じさせる建物や言い伝え | (1. ある 38.7 398 | 2. ない 33.2 341 | 3. 知らない 20.2 208) |
| 11. お地蔵さん・小さな祠(ほこら) | (1. ある 55.5 571 | 2. ない 23.5 242 | 3. 知らない 14.0 144) |

問 42. あなたの住んでいるまちには、みんなで維持していくべきさまざまなものがあります。そのために必要な費用や労働の提供を求められたら、あなたはどの程度、協力しようと思いますか。費用が負担できるなら負担額を、労働提供できる場合は時間をお答えください。n=1028

近所の公園の維持管理年間 1825.08 円 + 年間 16.27 時間
 地域の行事(祭り・運動会など).....年間 2178.68 円 + 年間 12.53 時間
 地域活動や市民活動年間 1907.15 円 + 年間 16.03 時間

性×年齢

	TOTAL	100円以上0	500円以上010	200円以上050	200円未満	不明	平均金額(円)	10時間以上	6時間以上10時	3時間以上6時間	3時間未満	不明	平均時間(時間)
TOTAL	1001028	46.5478	551	0.77	6.870	41.1422	1825.08	33.4343	3.132	8.890	13.8142	41421	16.27
男性小計	100453	48.8221	3.315	0.21	8.237	39.5179	2123.36	38172	3.516	9.141	11.552	38172	20.01
20代	10033	60.620	-	-	6.12	33.311	1809.09	27.39	37	21.27	15.25	33.311	8.64
30代	10035	6021	-	-	8.63	31.411	1625	37.113	8.63	5.72	11.44	37.113	11.95
40代	10052	48.125	7.74	-	11.56	32.717	1605.71	36.519	7.74	13.57	11.56	30.816	10
50代	10076	56.643	2.62	-	7.96	32.925	2215.69	40.831	3.93	6.65	11.89	36.828	17
60代	100141	49.670	5.78	-	7.811	36.952	2660.67	46.866	2.84	6.49	14.220	29.842	25.49
70歳以上	100116	36.242	0.91	0.91	7.89	54.363	1830.19	29.334	0.91	9.511	6.98	53.462	27.22
女性小計	100575	44.7257	6.336	16	5.733	42.3243	1578.92	29.7171	2.816	8.549	15.790	43.3249	13.05
20代	10044	38.617	9.14	-	6.83	45.520	1670.83	29.513	-	4.52	18.28	47.721	12.96
30代	10058	44.826	15.59	1.71	13.88	24.114	1202.27	32.819	5.23	12.17	25.915	24.114	13.7
40代	10065	50.833	10.87	-	9.26	29.219	1321.74	32.321	4.63	16.911	18.512	27.718	10.38
50代	100137	53.373	4.46	2.23	6.69	33.646	1610.99	29.941	5.17	9.513	18.225	37.251	13.06
60代	100154	46.872	5.28	0.61	1.93	45.570	1650	3757	1.93	7.111	12.319	41.664	14.78
70歳以上	100117	30.836	1.72	0.91	3.44	63.274	1981.4	17.120	-	4.35	9.411	69.281	11.42
1人	10083	37.331	1.21	1.21	7.26	5344	1861.54	18.115	1.21	3.63	10.89	66.355	22.68
2人	100368	45.9169	311	0.52	6.323	44.3163	2029.76	33.2122	1.97	8.230	12.847	44162	15.49
3人	100260	49.6129	6.918	0.82	5.815	36.996	1693.29	35.492	4.612	1026	17.345	32.785	16.31
4人	100166	48.881	6.611	0.61	9.616	34.357	1516.51	32.554	4.27	8.414	16.327	38.664	17.51
5人	10089	43.839	6.76	1.11	98	39.335	1911.11	39.335	4.54	11.210	10.19	34.831	12.26
6人以上	10054	44.424	5.63	-	3.72	46.325	2158.62	38.921	1.91	137	7.44	38.921	18.73
死亡家族あり	1007	28.62	-	-	14.31	57.14	1000	28.62	-	28.62	14.31	28.62	6.4
入院病傷者あり	10020	6012	51	-	51	306	2421.43	357	-	153	204	306	14.29
軽病傷者あり	100172	48.884	4.17	1.22	6.411	39.568	1767.31	30.853	1.22	8.715	1831	41.371	16.22
全員無事	100757	48.2365	5.542	0.75	6.751	38.8294	1818.36	35.7270	3.728	968	12.998	38.7293	16.79
全壊・全焼	100156	44.970	3.86	-	6.410	44.970	2052.33	27.643	1.93	3.86	18.629	48.175	10.88
半壊・半焼	100204	42.687	6.914	1.53	6.914	42.286	1762.71	30.963	2.96	6.914	13.227	46.194	23.33
一部損壊	100465	49228	5.827	0.42	7.133	37.6175	1813.79	34.8162	3.717	12.357	12.558	36.8171	15.84
被害なし	100199	46.292	24	12	612	44.789	1758.18	36.773	36	6.513	14.128	39.779	14.61

問 43 . 震災以来、市民と行政の関係が注目されるようになりました。あなたは、どのような市民と行政のかかわりが良いとお考えですか。n=1028

(それぞれについて、1、2、3の中であなたのお考えに一番近いものに をしてください)

ゴミ出しのルールについて、

- | | | |
|----------------------------------|--------|-----|
| 1 . 行政がもっと指導してほしい。 | 31 . 8 | 327 |
| 2 . ルールを守るか否かは、各自の自覚にまかせるべきだ。 | 51 . 4 | 528 |
| 3 . ルールが守られるように、当番を決めて立会人をおくべきだ。 | 14 . 2 | 146 |
| D K / N A | 2 . 6 | 27 |

地域活動（自治会活動・婦人会活動）について、

- | | | |
|----------------------------|--------|-----|
| 1 . 地域活動に参加する・しないは、本人の自由だ。 | 51 . 6 | 530 |
| 2 . 行政の支援や指導がなければ、続かない。 | 11 . 6 | 119 |
| 3 . そこに住む人々の基本的な義務だ。 | 34 . 7 | 357 |
| D K / N A | 2 . 1 | 22 |

大災害の時に、市民の命を守るのは、

- | | | |
|----------------|--------|-----|
| 1 . それぞれの努力だ。 | 10 . 1 | 104 |
| 2 . みんなの助け合いだ。 | 75 . 9 | 780 |
| 3 . 行政の仕事だ。 | 10 . 7 | 110 |
| D K / N A | 3 . 3 | 34 |

まちづくりについて、

- | | | |
|----------------------------------|--------|-----|
| 1 . 自分の住むまちの将来を決める主役は、自分たちだ。 | 59 . 6 | 613 |
| 2 . いいまちだから住んでいるので、悪くなれば出て行くだけだ。 | 5 . 1 | 52 |
| 3 . まちづくりには、行政の指導が不可欠だ。 | 32 . 2 | 331 |
| D K / N A | 3 . 1 | 32 |

震災の受けとめ方は、その人のものの見方や考え方によってまちまちです。
 次の質問は、あなたがどのようなタイプの人に当てはまるのかを調べるものです。

問 44 . ここには人間の意識・行動に関する様々な内容の文章があります。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに をつけてください。n=1028

DK / NAは省略

	1. あてはまる	2. あてはまらない
体の調子が良くないと気むずかしくなるとき がある	(67 . 8 697)	(28 . 2 290)
知っている人全部が好きではない	(79 . 7 819)	(17 . 4 179)
もう一度、こどもになりたい	(26 . 3 270)	(69 . 7 717)
家の人たちとめったにけんかしない	(64 . 8 666)	(31 . 5 324)

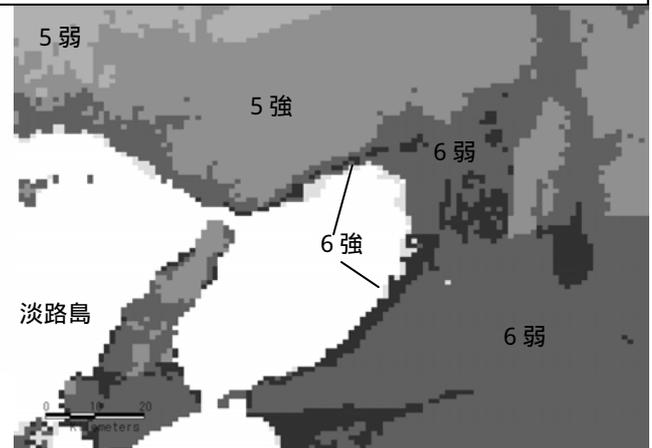
自分の立場を進んでひとにわからせたい	(18 . 5 190)	(77 . 7 799)
いつもほんとうのことを言うとはかぎらない	(56 . 1 577)	(39 . 6 407)
批評されたり小言をいわれると腹が立つ	(66 . 0 678)	(30 . 6 315)
人に失望するときが多い	(38 . 8 399)	(57 . 2 588)

その日のうちにすべきことを翌日までのばす ことがある	(58 . 8 604)	(38 . 2 393)
時々腹を立てる	(79 . 0 812)	(17 . 6 181)
ほとんどの人は基本的に正直である	(54 . 5 560)	(42 . 0 432)
ほとんどの人は信頼できる	(46 . 3 476)	(50 . 3 517)
ほとんどの人は基本的に善良で親切である	(58 . 4 600)	(38 . 2 393)

京都大学防災研究所・巨大災害研究センターでは、阪神・淡路大震災以降、西日本は地震の活動期に入り、2020年～2040年ごろに、静岡から四国沖にかけて「南海・東南海地震」が起こると予想しています。マグニチュード8クラスのこの地震は、全国的に被害をもたらす可能性があり、その時、兵庫県内でも、震度5弱から6強というゆれが予想されています。

次の「南海・東南海地震」で、どのような被害が出るのか、どのような対策が必要なのかについて、あなたのお考えをお聞かせください。

地震想定システムによる
南海・東南海地震の震度予想図



- 震度6強：人は立つことができない。家具のほとんどが移動。弱い木造建物の多くが倒壊、耐震性の高い建物でも壁や柱が破壊。
- 震度6弱：人は立つことが難しい。家具の多くが移動。開かなくなるドアが多く、耐震性の弱い建物では倒壊するものもある。
- 震度5強：非常な恐怖を感じる。食器・書籍の多くが落ちる。補強されていないブロック塀が崩れたり、壁・柱が破損する。
- 震度5弱：一部の人が行動に支障を感じる。窓ガラスが割れて落ちることもある。安全装置が作動しガスが遮断される家もある。

問 45.「南海・東南海地震」が起きた場合に、以下のような被害が出るとあなたは思いますか。各項目についてあてはまる番号に をしてください。n=1028

以下のような被害が出る可能性について	1 可能性が まったく ない	2 可能性が 低い	3 どちら でもない	4 可能性が 高い	5 可能性が 非常に 高い	D K / N A
あなたやあなたの身近な誰かが亡くなったり、入院が必要なほどの病気・ケガをする。	1.7 17	19.0 195	20.5 211	43.7 449	10.1 104	5.1 52
あなたのお住まいが、住めなくなるほどの大きな被害を受ける。	2.5 26	26.5 272	22.7 233	35.2 362	8.2 84	5.0 51
あなたやご家族の、収入や財産に大きな被害がでる。	1.6 16	17.1 176	21.4 220	42.9 441	11.9 122	5.2 53
ふだんの生活が戻ってくるまで、長い時間がかかる。	1.4 14	12.5 128	16.8 173	46.8 481	17.4 179	5.2 53
あなたのまちの建物・施設が、広範囲にわたって大きな被害を受ける。	1.5 15	15.3 157	22.0 226	44.4 456	11.8 121	5.2 53
人々のつながりや、つきあいに大きな変化を受ける。	2.2 23	14.6 150	33.0 339	37.2 382	7.0 72	6.0 62
津波によって、海岸部や河川沿いに被害がでる。	6.6 68	13.5 139	15.9 163	41.2 424	17.0 175	5.7 59
被害によって家に帰れない人(帰宅困難者)がでる。	1.4 14	8.1 83	13.2 136	49.9 513	22.1 227	5.4 55

問 46 . 以下のことがらについて、すでに「やっている」、または「生活の不便・自分自身の経済的な負担が、ある程度あっても、やらなければならない」と思うようになったことがあれば教えてください。それぞれについて、あてはまる番号1つに をしてください。n=1028

	1 やっ て い る	2 や る べ き だ	3 や っ た ほ う が よ い	4 や る 必 要 が な い	D K / N A
消火器や三角バケツを準備している	34 . 9 359	17 . 1 176	40 . 7 418	1 . 9 20	5 . 4 55
いつも風呂に水をためおきしている	39 . 5 406	13 . 1 135	37 . 4 384	5 . 9 61	4 . 1 42
家具や冷蔵庫などを固定し、転倒を防止している	13 . 7 141	32 . 9 338	45 . 3 466	1 . 9 20	6 . 1 63
ブロック塀を点検し、倒壊を防止している	9 . 9 102	28 . 9 297	43 . 6 448	9 . 1 94	8 . 5 87
自分の家の耐震性を高くしている	17 . 0 175	26 . 7 274	43 . 9 451	5 . 4 55	7 . 1 73
食料や飲料水を準備している	29 . 1 299	25 . 8 265	38 . 7 398	1 . 9 20	4 . 5 46
携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している	51 . 9 534	21 . 5 221	21 . 9 225	0 . 9 9	3 . 8 39
非常持ち出し用衣類、毛布などを準備している	12 . 1 124	33 . 7 346	46 . 7 480	2 . 2 23	5 . 4 55
貴重品などをすぐ持ち出せるように準備している	26 . 8 275	30 . 9 318	37 . 3 383	1 . 3 13	3 . 8 39
家族との連絡方法などを決めている	24 . 4 251	36 . 3 373	33 . 8 347	1 . 0 10	4 . 6 47
近くの学校や公園など、避難する場所を決めている	42 . 0 432	23 . 3 240	28 . 1 289	1 . 8 18	4 . 8 49
防災訓練に積極的に参加している	9 . 6 99	25 . 6 263	54 . 1 556	4 . 9 50	5 . 8 60
近所の高齢者・弱者の存在をふだんから把握する	13 . 2 136	28 . 6 294	49 . 0 504	2 . 9 30	6 . 2 64
避難路にものを置いたり、車をとめたりしない	29 . 2 300	37 . 9 390	26 . 2 269	1 . 4 14	5 . 4 55
地域の避難場所を知っておく	45 . 9 472	27 . 5 283	20 . 9 215	1 . 4 14	4 . 3 44
自治会との連絡をひんばんにする	8 . 9 91	26 . 3 270	51 . 8 533	8 . 4 86	4 . 7 48
地域の危険な場所の見回りを共同で行う	3 . 9 40	26 . 9 277	58 . 1 597	5 . 9 61	5 . 2 53
近所でいざという時のことを話し合う	4 . 0 41	26 . 3 270	59 . 3 610	6 . 2 64	4 . 2 43

問 47 . 2020 年～2040 年ごろに発生が予想される「南海・東南海地震」に関して、国や地方公共団体に力を入れてもらいたい対策はどのようなことですか。この中のそれぞれについて、あてはまる番号 1 つにしてください。n=1028

	1 やるべきだ	2 やったほうがよい	3 やる必要がない	DK / NA
避難経路や避難場所の整備	65.5 673	27.7 285	1.8 18	5.1 52
迅速な救助活動を行うための災害救助体制の充実	68.3 702	26.3 270	0.6 6	4.9 50
緊急時の通信網の整備	71.7 737	23.2 238	0.7 7	4.5 46
電気・ガス・水道・電話などのライフライン施設の耐震性の向上	75.9 780	19.7 203	0.5 5	3.9 40
災害時における被害状況の把握と迅速な情報提供	74.2 763	20.6 212	0.6 6	4.6 47
応急仮設住宅の速やかな供給	69.1 710	25.2 259	0.9 9	4.9 50
食料・飲料水・医薬品の備蓄	70.7 727	24.1 248	1.0 10	4.2 43
老朽木造住宅の密集した市街地の建て替えなどを図る	34.8 358	55.2 567	4.3 44	5.7 59
学校・医療機関などの公共施設の耐震性を強化する	65.8 676	27.8 286	1.1 11	5.4 55
建築物の落下物対策・ブロック塀等の安全化を図る	50.4 518	43.0 442	1.4 14	5.3 54
避難場所としての、公園・河川敷などを整備する	51.8 532	41.0 421	2.0 21	5.3 54
避難や延焼防止・物資輸送のため、幅の広い道路網を整備する	50.1 515	42.4 436	2.5 26	5.0 51
津波に対する避難勧告情報などの伝達技術	69.8 718	23.9 246	1.8 18	4.5 46
津波時の防潮扉の閉鎖	66.7 686	25.8 265	1.9 20	5.5 57

問 48 . 2020 年～2040 年ごろに発生が予想される「南海・東南海地震」に対する防災について「自助」(個人や家庭でのとりくみ)、「共助」(自治会や地域社会でのとりくみ)、「公助」(行政のとりくみ)という3つのとりくみがありうると言われています。次にあげる活動をおこなう場合、「自助」、「共助」、「公助」をそれぞれ、どのような役割分担でおこなうことが適切と思いますか。例にならって、合計 10 割になるように、「自助」、「共助」、「公助」、それぞれの割合をお答えください。

n=1028

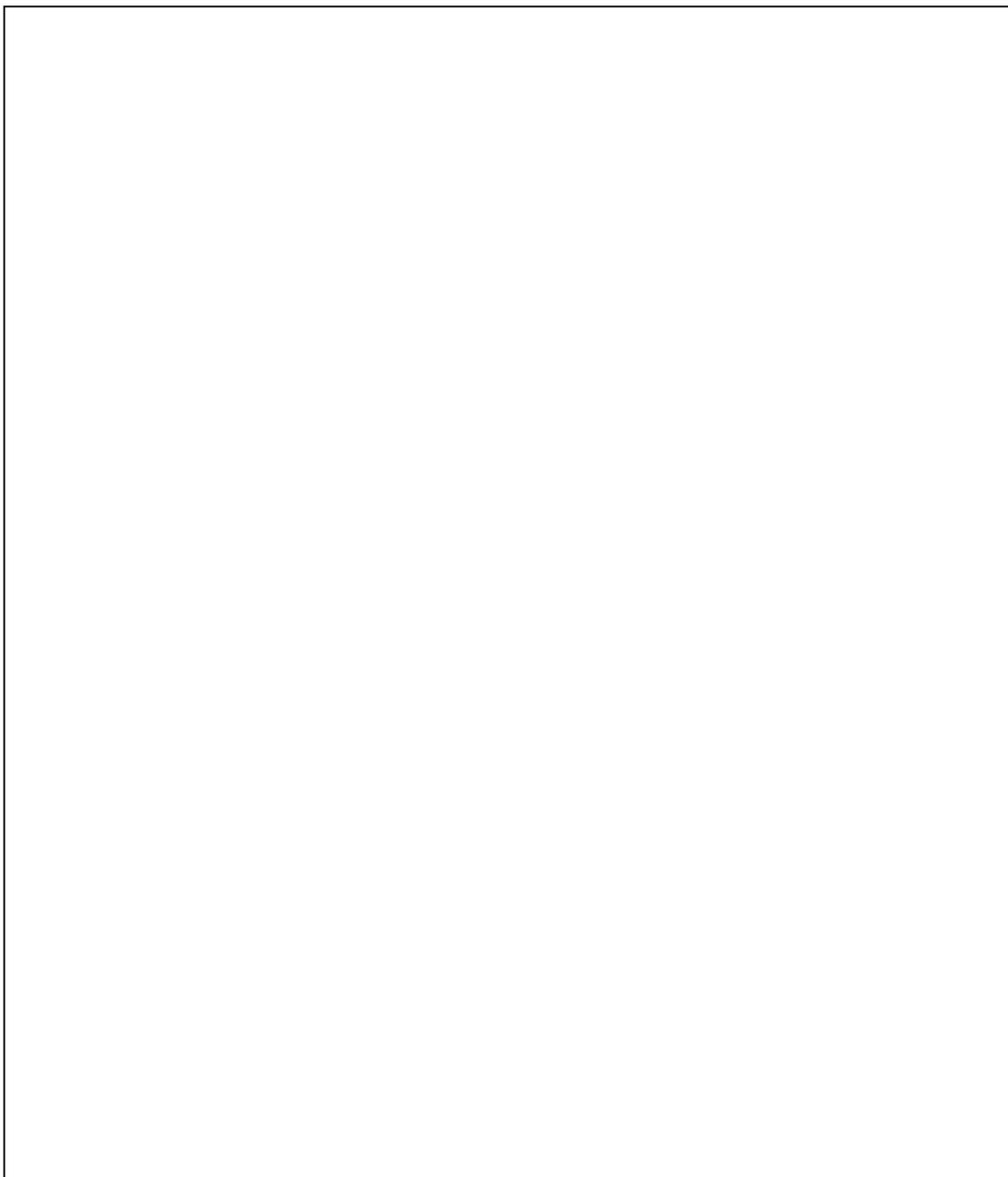
	公助(行政)	共助(地域)	自助(個人)	合計 10 割
(例) 地震計や雨量計の設置	6(割)	3(割)	1(割)	= 10
(1) 家具などの転倒防止 n=949	0.72	0.62	8.66	= 10
(2) 個人住宅の耐震化 n=941	2.15	0.97	6.88	= 10
(3) 食料、飲料水の備蓄・確保 n=945	3.38	2.00	4.62	= 10
(4) 安否確認の手段の確保 n=944	4.04	2.68	3.28	= 10
(5) 防災訓練の実施 n=940	4.44	4.10	1.45	= 10
(6) 高齢者など災害弱者の把握 n=946	4.29	4.26	1.45	= 10
(7) 地域の危険地域の見回り n=943	3.83	4.70	1.47	= 10
(8) 避難所の運営 n=944	5.17	4.07	0.76	= 10
(9) 広域避難場所の確保・整備 n=944	6.29	3.18	0.53	= 10
(10) 子どもに対する防災教育 n=945	4.59	2.85	2.56	= 10
(11) 津波注意報・警報の伝達 n=943	6.86	2.60	0.54	= 10
(12) 津波時の防潮扉の閉鎖 n=941	7.03	2.65	0.31	= 10

「自助」、「共助」、「公助」の3つの割合の合計が 10 割になっているか、再度ご確認ください。

長い間、ご回答いただき
ありがとうございました

次のページの質問で最後です
お疲れさまでした

最後に、この10年を総括すると、「あなたにとって震災とは何でしたか」。みなさんのご意見をお聞かせください。



質問はこれで終わりです。ありがとうございました。

おそれいりますが、回答の終わった質問用紙を同封してある返信用封筒（切手不要）にてご投函していただきますようよろしくお願いいたします。

2 . 用語説明

* 統計的に有意な差（統計的有意）

統計的検定とは、母集団に関する仮説を標本から得られた情報に基づいて検証することである。社会調査にあっても、標本調査、全数調査を問わず、データには偶然的誤差が含まれているから、ある結論を断定するためには、それが偶然的要因によるものではないことを、統計的検定によってテストしなければならない。この統計的仮説検定の手順において、調査結果が統計的に意味を持つかどうか判断する検定のことであり、通常危険率を5%（ $\alpha = 0.05$ という）に許容している。ある標本結果に基づく危険率を有意水準といい、これが5%以下の場合、統計的に有意な差があったと判断される。

* カイ2乗検定

統計的検定の手法のうち、カイ2乗分布（あるものの集団において、特定の変数の値がどのようになっているのかの総体的様相の代表的一種）を用いる検定法の総称。度数同士を比較する検定に用いられる。

* 因子分析

観測された多数の量的データを、比較的少数の共通な「因子」（観測することのできない特定の属性を示す仮説的な概念）で説明しようとするときに用いられる統計モデル。

* 主因子法

因子分析における直交解を与える方法の一つで、相関行列から直接求められる因子解として最も重要なもの。

* バリマックス回転

因子分析において、単純構造を求めるための直交回転解の一つで、最もよく利用されているもの。単純構造の指標として、バリマックス基準をとり、これを最大化するように因子軸の直交回転をおこなって解を求める。

* 共通性

因子分析を行った結果得られた因子で説明される分散（分布のばらつきの程度を示す量）の比率のことで、0から1の値をとる。1に近い共通性の値を持つ変数ほど、因子に対する影響力が強い。

* 寄与率

因子分析の結果、求められた因子の中から因子数を決定する際、固有値と呼ばれる数値を手がかりとするが、この各因子ごとに示される値が大きければ大きいほど、因子と変数（設問）の強い関係があることを示す。この固有値をもとにして、各因子と変数との関係を%で表したものが寄与率である。寄与率が大きければ大きいほど、その因子と変数の関係は強い。

* 等質性分析（HOMALS：ホマルス）

カテゴリカルデータの分析手法の一種。回答データからの情報を損なわない形で、回答傾向により、質問項目の似ているカテゴリーを探し出し、似通った反応を示す調査対象者を見つけ出す統計的分析手法として有効である。

この分析は、さまざまな要因成分を縦軸と横軸の中に表す分析手法である。関連の強いカテゴリーは近くに、弱いカテゴリーは遠くにプロット（布置）されるので、データの傾向を視覚的・直感的に把握できるのが特徴である。また、軸の意味をプロットされたカテゴリーのウェイト値によって解釈することも可能である。

* クラスター分析

全対象者をいくつかの量的または質的データを用いて、グループに分割し、似たもの同士がなるべく同じグループに含まれるように、また異なるグループはなるべく離れるようにする分析手法である。

* 多次元尺度法

ばらつきのある変量間の関係を見るために、対象間の距離尺度を測定したデータを入力し、指定した次元（通常は2次元平面）における座標を推定する手法。距離は、非類似性と呼ばれることも多く、似ているほど近く、似ていないほど遠い測度である。

< 参考文献 >

- ・ 飽戸弘「社会調査ハンドブック」、日本経済新聞社、1987
- ・ 新井喜美夫「マーケティングの用語辞典」、東洋経済新報社、1986
- ・ 朝野熙彦「入門 多変量解析の実際」、講談社サイエンティフィック、1996
- ・ 後藤秀夫「市場調査ケーススタディ」、みき書房、1996
- ・ 猪俣清二「統計学ハンドブック」、聖文社、1990
- ・ 岩淵千明「あなたもできる データの処理と解析」福村出版、1997
- ・ 小川一夫監修「改訂新版 社会心理学用語辞典」、北大路書房、1995
- ・ 芝祐順・渡辺洋・石塚智一編「統計用語辞典」、新曜社、1984
- ・ 安田三郎・原純輔「社会調査ハンドブック（第3版）」、有斐閣双書、1982

